

The iDOLM@STER
Cinderella Girls ~Two
Irregulars~

せいけー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その「異分子」は「イレギュラー」と出会った。

346プロダクションで始まる、仲間と、友情と、愛と、勇気と、ちよつぱり魔法の物語。

シンデレラガール達とアイドルの卵達が、交差していく。

目次

第6話	49	What's the matter	er (2)	37
第5話		When is it your chance	er (1)	25
第4話		Is she a monster		
第3話		Is she a monster		
第2話		How did they see		
第1話		How did they see		

第12話	134	How about the	stage (2)	122
第11話		How about our	stage (1)	110
第10話		How about our		
第9話		Why catch girl	stage (2)	98
第8話		Why catch girl		
第7話		How does she		
第6話		How does she		
第5話		How does she		
第4話		How does she		
第3話		How does she		
第2話		How does she		
第1話		How does she		

(1)
 —————
 206

wer this question
 第18話 Could you answer
 rimoire (2)
 195

第17話 How to read
 rimoire (1)
 183

第16話 How to read
 your door (2)
 171

第15話 Can you open
 your door (1)
 158

第14話 Can you open
 ir stage (2)
 146

第13話 How about the

第24話 Which do you
 267

第23話 Where are the
 255

第22話 Where are the
 243

第21話 Where are the
 (3)
 232

wer this question
 第20話 Could you answer
 (2)
 219

wer this question
 第19話 Could you answer

第29話	ur way (2)	第28話	ur way (1)	第27話	(3)	like,	第26話	(2)	like,	第25話	(1)	like,
Now,		Now,		Now,		cat	Which		cat	Which		cat
I		I		I		or	do		or	do		or
find		find		find		rock	you		rock	you		rock
o	326	o	314	o	302	k		291	k		279	k
第35話	e behind us (1)	第34話	e	第33話	dy in the	s red hair	第32話	e like a doll	第31話	ur way (4)	第30話	ur way (3)
The		The		The			The		Her		Now,	
silhouett		silhouett		gentle			fan		start		I	
t	397	t	384	la			who		lin		find	
				or	372	i	i	361	n	350	o	338

第40話	The distres	stadio	454	第39話	The little C	nderella	talk in	443	as walk barefoot	第38話	The Cinderell	Cinderella	432	第37話	The dance of	ff shoes	421	as who was taken o	第36話	The Cinderell	e behind us (2)	409
as meet	Krone prin	第44話	The Cinderell	500	ellas put on	Krone	第43話	Dothe Cinder	488	g quietly	第42話	The Cinderell	476	ain	ster hold hands ag	第41話	Cinderella si	465	of Cinderella gal			

第 4 9 話	r w a y	第 4 8 話	546	a s w a l k t h e i r w a y	第 4 7 話	a y	534	a s e x p l o r e t h e i r	第 4 6 話	523	h e i r	第 4 5 話	c e s s
H e v i s i t s g i r		S h e d e c i d e h e			T h e C i n d e r e l l			w	T h e C i n d e r e l l		d o r a m a, t o o	K r o n e s h a v e	
	557											t	512

	e	第 5 0 話	n	l s
		T h e C i n d e r e l l		p u t o n t h e c r o w
581		K r o n	569	
		a s w h o p u t o n		

第1話 How did they encounter

r (1)

——マズい。非常にマズい。俺は頭を抱えて、机に突つ伏していた。

「あー、疲れた。……で、どうしたのよプロデューサー？」

「いや、何でも」

がちやりとドアを開けて入ってきたのは、ハーマイオニー・グレンジャー。愛称はハーミー。担当しているアイドル……の卵だ。

そう、ハーマイオニー・グレンジャー。あの有名な海外ファンタジーのキャラクターと同じ名前なのだ。しかも、その見た目はそのまま幼い頃のエマ・ワトソン。そのハーマイオニーが、今、日本語で、俺と会話しているのだ。

ゆつくりと顔を上げながら、その辺に置いてあつた割り箸を袋から取り出し、ハーミーに手渡す。コンビニで弁当を買ったら、もう一つ余分に付いてきてしまったやつだ。

「ん？ 何よ？」

ハーミーは割り箸を受け取ると、訝しむように俺を見る。

「ハーミー、『エクスペクト・パトローナム』って唱えてみてくれ」

「え？ 何で？」

「いいから」

訝しむ視線はそのままに、ハーミーはまるで交響楽団を指揮するかのよう^に割り箸を振る。

「エクスペクト・パトローナム！」

……辺りを静寂が包んだ。

「はい、どうも」

「一体何なのよ！ なんの呪文なのよ！」

ぶんぶん^と怒りながら、ハーミーはバキンと割り箸を二つに割った。おいおい、横に割ったら使えなくなるだろうが。

この世界には『ハリー・ポッター』が存在しない。その為、さつきハーミーに唱えてもらった有名な「守護霊の呪文」も誰一人知らない。……まあ、取り敢えず俺に関わってくる所^で言えば、大阪のテーマパークからあのホグワーツ城が無くなっている所^だろうか。前世では行けなかったし、軽くシヨックだ。

「あらハーミー、またプロデューサーさんからかわれていたの？」

遅れて部屋に入ってきたのは、ダフネ・グリーングラス。未だにぶんすか怒っている

ハーミーを見て、「ふふっ」と大人の微笑を見せる。

「ダフネ！ だって、プロデューサーがよく分からない事をやれって言って——」
「素直にやったのね」

うぐつ、と言葉に詰まるハーミー。ダフネはまるで妹を揶揄うかのようにくすくすと笑う。

……ダフネは二三歳でハーミーは一二歳。学年も年齢も一つしか違わないのに、ダフネが見せるこの大人の余裕は一体何なのか。体つきも下手すると大学生に見えるし。俺の一回目の一三歳など……まあ、推して知るべし、というやつである。あの頃は若かった。

「プロデューサーさん、あと一人は見つかったかしら？」

「うっ」

ハーミーに続き、今度は俺が言葉に詰まる番となった。そんな俺の様子を見て「何よ」とハーミーは詰め寄ってきた。両手の折れた割り箸がむつちや怖い。頼むから刺さないでくれよ。

「わたし達二人じゃ不満なの？」

「ちよつと足りないというか、しつくり来なくてな」

少し前の事になるが、事務所の先輩である武内さんがプロデュースする「シンデレラ

プロジェクト」のメンバーが揃った。その人数は一四人。ここの七倍である。イギリス人の新人ジュニアアイドル二人のユニットでは、どうしてもインパクトに負ける。せめてあと一人は欲しいところだ。

諦めて二人で売り出す方向も考えたが、今西部長から「もう一人ぐらいいたら良さそうだね」と言葉をかけられてしまった。……いやあ、あの笑顔が怖い怖い。

勿論、部長の言いたい事も分かる。今彼女達に用意された曲は、一二歳と一三歳が歌うにしてはいささかクール過ぎるのだ。

「養成所にもじっくり来る子がいなかったしな」

「じっくり来たのがあたし達、でしょ?」

ダフネの言う通り、武内さんの引き抜きが終わった時点でじっくりと来たのが、この二人だったのだ。——二人で完結してしまっている、と言えば完結しているのだが、やっぱり足りない。心のどこかで、何かがつつかえてしまっている。

とは言え、たまたま空いていた資料室をプロジェクトルームとして使わせて貰っている分、結論は早めに出さないといけないのには違いない。

「つと、もうこんな時間か。二人ともそろそろ帰ってたらどうだ」

二人の基礎レッススが少々長引いたからか、中学生はもう帰路に着いた方が良好頃合이었다。

「……分かったわよ。今日は帰るわ。明日からは、覚えておきなさい」

ハーミーは折った割り箸をゴミ箱の中に突っ込むと、むすりとした顔のまま帰り支度を始める。おう、今日に限らず明日も明後日も普通に帰ってくれよ。

「あたしも帰るわね。それじゃ、お仕事頑張って」

ダフネは微笑みながら手を振ると、鞆を持って部屋から出ていった。育ちの良さが出ているなあ。それを受けてハーミーは「ちよつと、待ってなさいよ！」とぼたぼた忙しなく出ていった。

うーむ、平和だ。

やはり平和だ。コンビニで買い物をした後の帰り道、公園のベンチに座りながら、辺りの風景を眺める。この後？ 残業だよ。

「異世界転生」と聞いて、普通ならばどのような世界に、どのように飛ばされると思うだろうか。……よくあるライトノベルだと、「ファンタジー色が強い世界に、何らかの力を持った状態」で飛ばされるものだろう。

ただ、俺の場合はそうでもない。前世に似通った世界で、特に特殊能力を持っているわけでもなく、のうのと再びサラリーマンを始めている。特に不満がある訳じゃないが、まあ拍子抜けだ。じゃあ何か陰謀が渦巻いているのかとも思えば、世界情勢は前世

に比べると幾分かマイルドになっているような気もするし、不穏な空気も感じられない。紛争の「ふ」の字もないぐらいだ。平和ボケしてねえかこの世界。いや、平和ならそれに越したことはないんだけど。

さて、このように物思いに耽っているのも、何を隠そう、ユニットのもう一人が見つからないからだ。……所謂、現実逃避というやつでしかなく。

「はああああマジでどうしよう……」

夕暮れの公園は、若干閑散としていた。ため息をつきながら黄昏れるには丁度いいだろう。——黄昏れてる場合じゃないけど。

この世界の人々の容姿水準は、前世のそれに比べて無茶苦茶高い。それに加えて、まるでマンガやアニメのような派手な髪の色や目の色でも、この世界にとっては日常らしい。上の方の従妹の時なんざびっくりした。ピンク色の地毛にカラコン無しの金色の瞳なんて、前世じゃ見ねーぞそんなの。

まあ兎に角何が言いたいかというと、見た目だけで一般人をスカウトするのは難しい、という事だ。俺からしてみれば、皆が美男美女である故に、である。……普通の仕事なら特に問題がある訳じゃないが、如何せん今の仕事は芸能関係である。

玉石混交の中から玉を見つけるのは容易いが、玉しかない袋の中からより良い玉を手探りで見つけるのは至難の業なのだ。

赤羽根さんは確か、「ウチの社長風に言えば、『ティンと来る』んだよ」と話していた。いや、言いたい事は分かる。分かるが、つまりそれは「人事尽くして天命を待つ」という事に他ならない。人事は尽くしたとは言え、待つてる場合ではないのだが。

「どうしたもんかなあ……」

春には似つかわしくない、冷たい風がよぎった。

緑色——、目の——。その途端、——暗くなっていく。

——聞こえてくるのは、——叫び声。まるで、——
 だった。

「……………」

——視界。そのまま——のように、——も、自分を置いていく。

しかし、その時に、しかと聞いて、見たのだ。

「……………」

まるで——。

「おい、ちよっ……………、大丈……………!?!」

——。

「おい、大丈夫か!? ちょっと、おい!」

——声が聞こえてくると同時に、激しい頭痛が徐々に消えていく。まるで、長い長い悪夢を見ていたかのように。

ベンチに座らせた少女に、自販機で買った、小さめの温かい紅茶のペットボトルを手渡す。

「ありがとうございます」

真つ青だった少女の顔も、今は幾らか生氣を取り戻しているようだ。

「どう? 少しは落ち着いた?」

俺の言葉に「はい」と短く答え、少女はペットボトルの蓋を開ける。彼女が中身を口に含んだのを見届けた後、俺も立ったまま缶コーヒーのプルタブを開け、中身を呷った。ブラツクの苦味が口内に広がる。

「わざわざすみません」

「いいって。気にする事ないって」

ふらふらと公園の中に入ってきかと思えば、突然頭を抱えて座り込んだのだ。助けない訳にはいかない。救急車を呼ぶ事態ではなかった事が幸いか。あと、武内さんみたいに警察を呼ばれるような事態にもならなくて良かった。

しかしまあ、この子もこの子でこの世界の例に漏れず美少女だ。茶色がかった赤い髪は肩の辺りまで伸ばしており、夕日に照らされてオレンジ色に輝いていた。

黒縁でラウンド型のシンプルな眼鏡を掛けているが、それでは隠しきれないぐらいに優れた容姿をしている。その眼鏡の奥では薄い茶色の瞳が揺れており、白い肌も相まって儂い印象が何処と無く感じられる。制服を着ていることから、女子高生である事は何となく察することが出来た。

——おそらく外国人だろう。しかしそれにしては、日本語が上手い……と言うのは少しアレか。日本語の上手い外国人の知り合いが多すぎる。この世界では、日本語は標準語なのだろうか。……いや、やっぱりそんな事ないな。

(……どうしようか)

直感では「ティンと来た」。本能が「この子をスカウトしろ」とやかましい。それを押さえつける理性は「穏便にスカウトの話を切り出せ」と諭し……あれ？ スカウトする流れになってね？

「——あの」

一人で悶々と考えている時間は、少女の一声で一旦休止する事にしよう。

「お仕事は、何をされているんですか」

お見合いかよ。女子高生とお見合いとか、犯罪もいい所じゃねーか。

「ペーペーのサラリーマンだよ。ほら、スーツ着てるから分かると思うけど」

「えっ、だったら会社に戻らなくていいんですか!? あ、でも定時って事も……」

直球が過ぎる。確かにそうだけでもさ。

「今は、まあ、スカウトの途中だからね」

嘘は言っていない。良さそうな子がいたらスカウトするつもりだったし。ホントだよ。

「スカ、ウト……?」

うーむ、やはり警戒するような目付きになってしまった。——名刺を持つてて正解だったな。スーツから名刺入れを取り出し、少女に名刺を手渡す。

「346プロダクション、アイドル事業部でプロデューサーをやっている、城戸進ノ介です」

少女は目を白黒させながら、俺の名刺をおずおずと受け取った。

「346プロって、あの?」

「その346プロだよ」

346プロの知名度は、アイドル事業部が出来てから急速に高まりつつある。元から俳優やモデルに音楽、映画など大手芸能事務所として手広い事業を行っていたのだが、アイドル事業部だけは——アイドルが芸能界で重宝されているこの世界にしては——不思議となかった。意外にも、アイドル事業部ができる前の346プロの評価は「縁

の下の力持ち」だった。

今となつては「高垣楓が所属している」とか言えば、普段テレビを見ないような女子高生でも、ほぼ全員が分かるような知名度ではあるが。

少女は名刺の裏を凝視したり、橙色が強くなつた夕日に透かしたりしている。……そんな事しても何も起きないんだけどな。やがて、俺が見ている事に気付いた彼女は、慌てて名刺をブレザーのポケットにしまう。

「す、すみません、お時間を取らせて」

「いいっていいって。——さて、本題に入っちゃうけど、いいかな？」

——賭けるぜ、俺は。

「アイドルに、興味ない？」

第2話 How did they encounter

r (2)

俺の話を聞いていたダフネは、開口一番に言った。

「事案ね」

「えっ何が」

解せぬ。我らがマスコットのハーミーは、ガチャンとティーカップを乱暴にテーブルに置いてまくし立てる。

「逮捕よ、逮捕！ プロデューサーがそんな男だとは思わなかったわー！」

「二人とも俺に対する当たりが強くない？ ちゃんと本人の承諾も貰って、資料のデータもメールで渡したのに？」

眼鏡の少女をスカウトした次の日である土曜日、事情を説明していたらこれである。都会は冷たい。キンキンに冷えてやがる。

「それで？ プロデューサーさんが花の女子高生に声かけしたり、メールを送ったりする変態って事は分かったけど」

「ダフネさん？ 全然分かってないよ？」

武内さんなんてマジでお縄につく寸前だったんだから、笑い話にもならんぞ。

「その子は『アリ』だったの？ 『ナシ』だったの？」

ダフネはじつと俺を見る。

「『アリ』だと思うぜ、俺は」

直感、本能、理性。俺の内面の全てが、諸手を挙げて「アリ」だと告げたのだ。今日の朝に送られたエントリーシートデータの部長を見せても、「やるじゃないか」って褒められたし。前世じゃ仕事で褒められたことは無かったから、意外にジンときた。

「変態」

「うっせえハーミー。変態じゃねえからな」

「あたし達中学生の女の子を二人も侍らせて？」

「ダフネ、仕事だよ仕事。そんな趣味はねえし」

「やっぱり変態じゃない！」

「どうしてそうなるんだよ！」

俺にその手の趣味はないからな。多分、世の中には罵倒されて興奮する奴もいるとは思うけど、俺はそんな奴じゃない。

予めプリントアウトしてあったエントリーシートを、二人の目の前に出す。

「ほら、これだこれ。行動が早い子で助かってんだからな」

二人はじつとエントリースートを眺める。

「ハリエット・エバンス、一五歳」

「高校一年生……わたし達の中じや一番年上なのね」

確かに、今回スカウトした子——エバンスさんは、三人の中では一番年上である。とは言つても、二人とは歳も近いしいいお姉さん役になるんじゃないかな。……見た目だけならダフネが一番年上に見えるが、まあそこはご愛嬌という事で。

「眼鏡かけてるのね。踊る時とかどうするのかしら」

ハーミーが、A4紙の右上をつんつんと指でつつく。その位置にある顔写真には、昨日と同じようなラウンド型の眼鏡が掛けられていた。

「意外と、掛けたままだったりするんじゃない？ ほら、上条さんみたいに」

「他にいい例はなかったの、ダフネ？ あの人はちよつと特殊じゃない？」

あの子は眼鏡に取り憑かれているからな。誰彼構わず眼鏡を勧めるその姿は、まさに狂信者だ。眼鏡教の。

「……つて、エバンスつてやつぱり！ ジェームズ・エバンスの一人娘じゃない！」

突然ハーミーが大声を上げる。

「——もう、ハーミー。いきなり大声を出さないで」

「ダフネ、知らない？ あの『夜の鏡と緋色のドラゴン』のジェームズ・エバンスよ！」

「知らないわ」

ハーミーは強めの視線で俺を見る。

「知らん。なんだよそれ」

「有名な小説よ！　欧米じゃ凄い人気で、ハリウッドが今映画化の交渉をしてるって噂の！」

なんで知らないのよ、とハーミーは悔しがるようにテーブルをバンバン叩く。多少ガタが来ているそれは、ボールか何かのようにバインバインと大袈裟に揺れた。ガチャガチャとティーカップが音を立て、波打った紅茶が少し零れる。ああもう、後で拭いとかないと。

しかし、変な話だ。欧米で人気があり、作品もハリウッド化間違いないの小説家が何故日本にいるのやら。それに、そんな名前の小説は日本で聞いた事もない。日本に滞在しているならば、日本語訳されたものも出てそうなものだが――。

ふと疑問に思い、手元のパソコンで検索してみる。……ああ、まだ出てなかっただけか。出版社の特設サイトには「日本初上陸!!」と大々的に銘打たれている。道理で、名前を聞かなかった訳だ。余程の本の虫でもなければ、知らないのも当然である。

「ハーミー、今度日本語版が出るらしいぞ」

「嘘?!　いつ?!」

「三ヶ月後、つて所だな」

「読まなきや……」

「あら？ ハーミー、英語版は読んだんじゃないの？」

「気持ちの問題なのよダフネ！」

等ときやいぎやい騒いでいる二人を尻目に、次はジェームズ・エバンス自体の検索を試してみる。……こちらの方は、海外の記事でも芳しい結果が出てこない。精々、イギリス生まれの小説家であるという事しか分からなかった。そもそも、彼が引越して拠点を日本に移した、なんて事も書かれていない。となると、父親が向こうにいて、妻子が日本にいるってパターンか？ いや、別の記事に出ていた「彼は愛妻家であり」という記述から考えると、微妙に違う気がする。うーむ、分からん。……まあ、無理して知ろうとしなくてもいいか。

ブラウザを閉じると同時に、内線が掛かってくる。

「はい、アイドル事業部、城戸です」

『千川です』

電話の相手は、アイドル事業部の事務員の一人だった。

『城戸さんに用事がある、という子がいるみたいなのですが、心当たりはありますか？』
ある。めつっちゃある。絶対にある。噂をすればなんとやら、つてやつか。

「あります。総合受付に向かえばいいですか？」

『こちらの方で案内します』

「いいんですか？」

『グリーングラスさんとグリーンジャーさんもいますからね』

三人でバタバタ向かうよりかは、部屋で構えて待つて欲しいのだろうか。

「分かりました。お願いします」

『はい、任せてくださいね』

内線はそこで切れた。千川さんはシンデレラプロジェクトのサポートでんやわんやのはずなのに、こうして他のプロデューサーの仕事にも気をかけてくれる。いつ休んでいるのか分からないが、何か秘密でもあるのだろうか。……今度訊いてみるかな。

「プロデューサー、なんの電話だったの？」

「噂をすればなんとやらってやつだ。エバンスさんがここに向かっているらしい」

ハーミーは、突然目を輝かせる。

「だったら、ジエームズ・エバンスの事を聞かないと！ 謎が多い小説家として有名なの

よー」

「ハーミー、違うでしょ？ 本人の意志を確認しないといけないんだから。『やっぱり辞

める』なんて言われたらどうしようもないもの」

「大丈夫だと思ってるんだけどな、俺は。そうじゃなけりや、エントリーシートなんてすぐ送ったりしないし」

「あらプロデューサーさん。女の心は変わりやすいのよ?」

「まさに秋の空、つてことわざね!」

今は春なんだが。

「……やつと見つけた原石だ。逃げ出さないように頼む」

飯に辞めると言い出したならば、少し歳の離れた俺が追いつけるよりかは、歳の近い二人が引き止める方が確実な気もする。ここまで来たんだ、急な心変わりには困る。

そう時間を置かずに、扉が外からノックされた。事務員とはいえ、千川さんは俺にとつて先輩にあたる。こちら側から扉を開ける事にした。

「千川さん、わざわざすみません」

扉を開けた先にいた、ライムグリーンのジャケットを着ている女性に声をかける。

……芸能事務所とはいえ、事務員に派手な制服を作る理由は何なのだろうか。

「いえ、気にしないでください」

「し、失礼します」

千川さんの後ろからひよこひよここと前に出てきたのは、エバンスさんだ。眼鏡の奥の瞳は不安げに揺れているが、俺で陰になっている部屋のなかを覗き込もうとしている。

「では、私は行きますね」

「はい、ありがとうございます」

急遽動き出したシンデレラプロジェクトのスケジュール調整もあり、千川さんとはとても忙しいはずである。プロジェクトがお互いに落ち着いてきたら、武内さんと千川さんを飲み誘うか。

エバンスさんはダフネとハーミーを見ると、背筋をピンと伸ばした。

「は、ハリエツト・エバンスです！ よろしくお願ひします！」

そのままエバンスさんは勢い良く頭を下げる。その勢いに負けたのか、眼鏡がカツーンと音を立てて落ちてしまった。

「うわあ、め、眼鏡、眼鏡……！」

うーん、こう言っては悪いかもしれないが、若干鈍臭いのかも。床を這いずり回っている姿も、正直滑稽に見える。

「はい、どうぞ」

「うあ、ありがとうございます……」

ダフネが拾い上げた眼鏡を掛けた後、エバンスさんは「ほわあ……」と感心したような声を上げた。おそらく、ダフネの大人っぽい雰囲気に見とれていたのだろう。

「あたしはダフネ・グリーングラスよ。よろしくね、エバンスさん」

「は、はい、よろしくお願いします」

「わたしはハーマイオニー・グレンジャーよ！ ハーミーでいいわ！」

「うん、よろしくねハーミー」

エバンスさんは二人から自己紹介された後に、じつと俺を見る。

「……改めて、プロデューサーの城戸進ノ介だ。——エバンスさん、ここに来たって事はつまり、アイドルになるって事でいいんだね？」

俺が訊くや否や、エバンスさんはこくりと小さく頷き、静かに返事をした。

「はい。——これからお願いします」

良かった。直前で「やっぱ辞め」はないらしい。ハーミーは感極まったように破顔し、がばりとエバンスさんに抱き着く。

「ほんつ、とーに良かったー！ 馬鹿プロデューサーがずっと駄々こねてたから、いつデビュー出来るか分からなかったのよー！」

「えっ？ ……えっ？」

突然のカミングアウトに、エバンスさんは困惑しきりだ。……へいへい、悪かったな駄々こねてて。

「ハーミー、文句を言うのは後にしましょう？ ——そんな事よりも、これから忙しくなるんじゃない？」

ダフネの言う通りだ。武内さんのシンデレラプロジェクトに次いで、こちらも本腰を入れていかなければならない。

「そうだな。エバンスさんにはこれから、デビュー曲の方をきつちりとやっていつて欲しい。目標は来月のデビューライブ、正直に言つて時間が無い。ダフネとハーミーは二人は彼女の素質を見て、サポートしてやってくれ。俺は調整をしていくから」

「分かったわ、プロデューサーさん」

「エバンスさんはわたし達に任せて、プロデューサーは自分の仕事をしてー」

正直、シンデレラプロジェクトの影響力が計り知れないが、こちらはこちらで出来ることをやっていくのみだ。

「しばらくは休日返上かな……」

気が重い、これも全て三人のためだ。さてさて、踏ん張っていきますかね。

「あのー」

それは、エバンスさんの声だった。

「ユニット名とかは、ないんですか？」

……あ。

「あああああ!!」

「そうよ！ そうよそれ！ 何か足りないと思つてたらー！」

完ッ全に忘れてた!! 最後の一人を探すのに躍起になり過ぎてた!

「あら、どうする?」

「のんびり紅茶飲んでる場合じゃないだろダフネえええ!」

ああもう、どうしようか。こういう時に限って、いいアイディアが思いつかない!

「ハーミー、読書家ならいいアイディアあるんじゃないか!」

「無茶振りが過ぎるわプロデューサー! ダフネ、一人だけ落ち着いているんだから、いいアイディアがあるんでしょね?」

「あら、ないわよ?」

「ダフネ!!」

「え、ええとええと、ぼくはどうすれば……!」

「エバンスさんも何かいいアイディアがあつたら言ってくれ! 頼む!」

「えつ、と、『龍の騎士』……」

「それはジェームズ・エバンスの小説の邦題だつてば、エバンスさん!」

もう何だか、適当でいいような気もして来た。

「……いつそさ、イニシャルを適当に組み合わせりや良くね?」

「はあ?! プロデューサー、真面目に考えてよ! わたし達のユニットなのよ!」

「そうね。順序立てて考えていったほうがいいわ」

不満を漏らす二人を尻目に、エバンスさんは一人考え込んでいる。突如、何かに気付いたかのように「ああっ！」と大声を出した。

「あの、むしろ、イニシャルを組み合わせてみたらどうですか？」

「ちよつとエバンスさん、馬鹿プロデューサーの言う事に取り合わなくても——」

ハーミーの愚痴を聞き流すかのように、エバンスさんはホワイトボードに名前を書く。「Evans」、「Granger」、「Greengrass」と黒いペンで書かれたそれに、彼女は赤いペンで大文字に丸を付けていく。

「これで、『E G G』です」

……驚いた。確かに、ユニット名として問題がない。出来過ぎている。

「アイドルの卵、三人揃って『E・G・G・S』なんてどうかしら」

ダフネがそう言いながら、ホワイトボードに青いペンで「E・G・G・S」と書く。成程、悪くない。

「ハーミー、どうだこれ」

「アリよ！ 最っ高じゃない！」

「イニシャルを組み合わせる」という適当なアイデアに難色を示していた二人も、乗り気のようにだ。

「それじゃあ気を取り直して、『E・G・G・S』始動だ！」

おー！
と少女三人の声が部屋に響いた。

第3話 I s s h e a M o n s t e r (1)

青天の霹靂、とはこのような事をいうのだろうか。

月曜日、ユニット名が決まったこともあつて上機嫌だった俺は、従妹と遭遇してまった。

「うげ、進兄」

「うげ、とはなんだうげとは」

失礼なやつである。小さい頃はあんなに「しんにいさん」って慕っていたのに。時の流れは残酷なものである。娘が出来たらこんな感じの反抗期が来るのだろうか。

「なんて言うか、慣れないっていうか……」

「従兄が入社してきた事にか？」

「そうだけどさあ！ もつとこう、シゴトって感じで会話した方がいいじゃん?!」

「美嘉は相変わらず真面目だな」

「進兄に言われても嬉しくないんだけどー」

そう言うのと、俺の従妹——城ヶ崎美嘉はわざとらしくため息をついた。……確か読モをしていたはずなんだが、気がついたらアイドルをやっていた。何を言っているか分か

らないと思うが。

入社して間もない頃に遭遇した時はヤバかった。無言で近付いてきたかと思うと、そのまま俺の脛を蹴り続けたし。どういふつもりだったのやら。普通に痛かったぞ。ヒールで蹴るのは頂けないな。

「それよりも、担当アイドルの方はどうなったの？ あと一人足りないって話だったじゃん」

「おう、見つかったんだよ。今は絶賛調整中だ」

346の中では比較的耳が早い方の美嘉も、流石に知らなかったらしい。「へー」と意外そうに声を上げる。

「進兄の事だから、見つからないと思ってたけど」

「何か評価低くない？ 俺何かしたかな？」

「当たりがキツすぎる。お兄さん泣いちゃうよ。」

「そういう訳じゃなくて、武内プロデューサーが大体スカウトしちやっただかなーって」

「ああ、そういう事か……」

武内さんが346プロの中で評価されている理由の一つに、スカウトの手腕もあるくらいである。めぼしい有望株は、シンデレラプロジェクトにほとんど引き抜かれていると考えていいかもしれない。

——それを考えると、「E. G. G. S」の三人を確保出来たのは奇跡に近い。きつちり売り出していかないと。

スマホをちらりと見た美嘉が「やっぱ」と声を出す。

「ゴメン進兄、遅れちゃいそうだから」

「おう、打ち合わせか？」

にししつ、と美嘉は悪戯っぽく笑う。……昔つからこういう笑い方する時って、大體碌でもない事なんだよな、こいつ。

「実は——」

俺は頭を抱えて、机に突っ伏していた。

「次は何よ」

半ば呆れたような声でハーミーが訊く。

「春の定例ライブ、シンデレラプロジェクトの子がバックダンサーとして出るらしい」

美嘉が別れ際に言ったのは、「自身のステージで新人の子を参加させる」という話だった。

「えっ、でも」

「ああ、もう時間がないはずなんだけどな」

ライブはゴールデンウィークに行なわれる。今は四月も下旬、相当頑張らないと間に合わない。

「346プロも未恐ろしいわね。新人にそんな事させるなんて」

ダフネも困惑しきりである。まあ今回は346プロもそうだが、言い出しつぺの美嘉も未恐ろしい。バックダンサーをする予定の三人の子の名前を聞いてもピンと来ないことから、新しく所属した子に違いない。——確か、欠員の補充をしたんだっけか。

新人どころか、素人に無茶振りを行なっている。無茶苦茶過ぎる事この上ない。

「えっと、ぼく達はどうすれば」

恐る恐る訊いてきたのはエバンスさんだ。困惑している俺達の空気に困惑しているようだ。

「どうにもこうにも出来ないさ。せいぜい、成功を祈るしかないってとこか」

それに、と俺はエバンスさんを見て言葉を続ける。

「人様の心配をしている暇があったら、自分達の心配をしないと」

定例ライブが終われば、その次はE・G・G・Sのデビューライブだ。五月中旬頃を予定しているの、一先ずエバンスさんには曲をマスターしてもらいたいのだ。

今立っているプランは二つある。一つは、ハーミーとダフネが踊りながら歌い、エバンスさんは歌に集中するというプランだ。二人は前もってデビュー曲のレッスンをし

ており、二人だけでの振り付けならば粗方仕上がっている。しかし、エバンスさんは素人だ。いきなり振り付けと歌を両方覚え、二人に合わせるのは至難の業だろう。そこで、デビューライブ時には歌の方に集中してもらい、振り付けやMVは後に回す方法である。今回は物販もないからこそ出来るのだが。

もう一つの方法は——まあ、考えない方針でいこう。

「ダンスレッツスンだろ？ 俺もついていくよ」

「プロデューサー、暇なの？」

「暇じゃねえって」

わざわざ時間を作ったんだっての。

ダンスレッツスンを行なう部屋には、トレーナーがいた。髪を脱色し、ピンク色に染めた若い外国人の女性である。

「城戸プロデューサーさん？ その子が新しく入った？」

トレーナーの女性がエバンスさんを見て、俺に訊いてくる。

「はい、そうです」

「ハリエット・エバンスです！ よろしくお願いします！」

エバンスさんの自己紹介を受けて、トレーナーはにこりと微笑む。

「私はトックス。よろしくね、エバンスさん」

はい、と勢い良く返事をしたエバンスさんを見て、一旦俺は部屋の外に出た。……通りすがりに、気になる曲が流れていたのだ。

「……城戸さん」

低く、落ち着いた声で呼びかけられる。

「武内さん」

俺が軽く会釈をすると、彼もそれに応じて頭を下げた。——武内駿輔。シンデレラプロジェクトの担当プロデューサーであり、俺の先輩にあたる。背が高く、ガッチリとした体格は中々に迫力があるが、その実真面目で物静かな、仕事のできる男である。

「聞きましたよ、シンデレラプロジェクトの子がバックダンサーをする」と

ええ、と武内さんは返事しながら、首筋に右手を添える。彼の近くの扉からは、「TOKIMEKIEスカレート」——美嘉の曲が僅かに漏れ出ていた。

「城戸さんは、どう思いますか?」

「……そうですね。正直、無茶苦茶だと思います」

ふう、と武内さんが小さくため息を漏らす。どうやら、彼も見解は同じらしい。

「全く、美嘉は何を考えているのか……」

「最終的なGOサインを出したのは、今西部長です」

「……あの人は誰ですか」

俺の時もそうだが、あの人は突拍子もない事を突然言うからな。部下の身からしてみたらとても怖い。

「武内さん、あなたはどう思いますか？」

武内さんは俺に向けていた視線を下に外し、しばし黙り込んだ。

「信じています。彼女達を」

視線を外したまま、武内さんは絞り出すように答えた。……現状、そのように答えるのが精一杯だろう。

「——成功すると思いますね」

「……はい。城戸さんも、調整頑張ってください」

「ええ、勿論ですよ」

微笑みながら別れの会釈をすると、彼も仏頂面のままそれに応じた。さて、エバンスさんの実力はどのようなやら。

三人の元に戻る。どうやら柔軟のための、準備運動の途中だったらしい。俺の帰還に真っ先に気付いたハーミーが、ダフネに背中を伸ばされながら声を上げる。

「あつ、プロデューサー！ どこに行ってたの？」

「悪い悪い。トイレ行ってた」

武内さんと話していたことは、特に言う必要もないかな。

「城戸プロデューサーさん」

エバンスさんの背中を伸ばしていたトレーナーが、ゆつくりと上体を起こして俺に声を掛ける。

「今日の予定ですが、エバンスさんの实力を見る……ということでもいいですよね」

「そうですね。今後の為にも把握しておきたいので」

ハーミーとダフネには悪いことをしたが、二人には「デュオユニット」と「トリオユニット」、両方のパターンの振り付けをレッスンさせた。トレーナーをもう一人のメンバーに見立てて、三人になった場合に備えられるようにしたのだ。

今回はまずトレーナーの動きを見てもらい、その振り付けがある程度出来るかどうかを見ていく。——つまり一言で言えば、エバンスさんに「筋があるかないか」を知るのが目的である。

「まさか、三人バージョンが無駄にならなかったなんて」

ハーミーが愚痴を漏らすように言う。

「賭けはあたしの勝ちよ？ ハーミー、後でジュース一本ね？」

「……分かってるわよ！」

「俺の仕事で賭け事しないでくれるかなあ……」

君らはジューズ一本で済むんだろうが、俺の場合は自分の首がかかってんだぞ。

「それでは、始めましょうか。エバンスさん、まずは私の動きを見ていてね」

ハーミーとダフネが決められた位置に立ち、顔を下げる。トレーナーはその事を確認すると、オーディオ機器の再生ボタンを押した。

エバンスさん以外にとっては、聞き慣れたイントロが流れ始める。E・G・G・Sのデビュー曲である「Union—Jack」だ。イントロが流れた瞬間から、振り付けは始まっている。アツプテンポの曲調に合わせた、元気あふれる振り付けである。

——耳を塞がないで わたしの声を聴いて

ダフネが歌い出す。後ろを向いていたハーミーは、ぱつと振り向き、ダフネに続いて歌い出した。

——繰り返し返してく日々 綺麗事だけじゃ打ち勝てない

……確か振り付けを見せるだけだから、歌うまでは求めていないはずだ。これは、ついつい歌いだしてしまったダフネに、ハーミーが乗っかってしまった流れか？ 意外と、二人とも気合いが入っているようだ。

Bメロに入ってきた所で、エバンスさんをちらりと見る。彼女は無表情だった。無表情で、踊っている三人をじっと見つめている。薄い茶色の瞳で瞬きもせず見ている様子は、丸い眼鏡の事もあってビデオカメラを連想してしまった。

——さあ 限界振り切って！

サビに入り、三人が同時に右腕を頭上に掲げ……若干ハーミーの動きが遅れたか。そこで動揺した様子を見せないのは意地だろう。

——ユニオンジャック 釘付けにする

——わたし達の 声で

サビの間は三人の動きを揃えたダンスだ。メロデイのキーも揃っている。練習の賜物だろう。少しでもズレると大きく目立つのだが、ズレたと感じるような事は無い。フォローが効かない分、練習を重ねたに違いない。

サビが終わり再びAメロになるという所で、トレーナーはオーディオ機器の再生を止める。

「どう、エバンスさん？」

トレーナーはエバンスさんの方を向いて訊く。音楽が終わるや否やその場にへたり込むハーミーとダフネは、今は見なかったことにしよう。後でこっそり、トレーナーに基礎体力を付けさせるように言っておくとして。

「……その、凄かったです。やっぱり、二人ともアイドルなんだなって思いました」

「……ぜえ、当たり前前よ。はあ、わたし達も、ふう、練習を、してきたんだから、はあ」

「……ハーミー、息、整えてから、話をしましょう？」

褒められたハーミーとダフネは、疲労困憊ながらもご満悦のようだ。……じゃなくて。

「いやいやエバンスさん、感想じゃないよ」

俺の言葉によつてエバンスさんは気付いたようで、「えっ、あっ！」と恥ずかしそうに頬をかく。今求めているのは感想ではなく、「いけそうかどうか」である。

とは言え、緩急が激しい振り付けだ。養成所である程度基礎を積んだ二人でさえ、踊れるようになるまで時間がかかった。それに、細かいところのブラッシュアップや基礎体力の事も考えると、まだ粗削りにもほどがある。そこに経験ゼロのエバンスさんを放り込めば、しつちやかめつちかになる事は容易に想像出来る。

「……はい、覚えました！」

エバンスさんにはにっこりと笑いながら頷いた。

「おっ、そうかそうか」

オドオドとした様子もないし、問題ないんだろう。

——いや、待て。何かがおかしい。

「……エバンスさん？ さっき何て言ったの？」

「はい？」

トレーナーも、俺と同じ違和感を覚えたらしい。一転して困惑した表情を見せたエバ

ンスさんは、俺の方を見る。

「えっと、覚えた、んですけど」

——どうやら、聞き間違いではなかったらしい。

第4話 I s s h e a M o n s t e r (2)

頭が働かない。振り付けに気合いを入れすぎた上、ダフネに釣られて歌ったからだろうか。体の疲労以上に、思考がまとまらない状態だった。

「ダフネ、どういう事か分かる？」

ハリエツトが「覚えた」と言った途端に、プロデューサーとトレーナーが驚愕したような表情を見せたのだ。ハーマイオニーには、それが何故なのか見当も付かなかった。「ハーミー。あなたは、ワンフリーズの振り付けをすぐに覚える事が出来るかしら？」

「覚えられるわ。余程じゃなかったら」

質問を質問で返してきたダフネに、ハーマイオニーは訝しみながらも返答する。

「じゃあ、曲の一番目の振り付けを丸々覚える事になったら？」

「……ちよつと、確認が必要、かしら」

イントロからサビの終わりまで、おおよそ一分半から二分ほど。とは言え、その間の情報量はとても多い。大まかな流れを掴む事が出来ても、細かいところまで習得するのは至難の業である。

そこで、ハーマイオニーはやつと気付いた。

「……エバンスさん、『覚えた』って言ったわよね？」

ハーマイオニーの質問に、ダフネは頷く。

「ええ。ただでさえ、動きが速いこの曲の振り付けを」

「それって——」

「まるで化け物じゃない」という言葉を、ハーマイオニーはすんでのところで飲み込んだ。

いそいそと立ち位置を確認するエバンスさんを見て、トレーナーは困惑したように俺を見る。おそらく、曲を流すべきかどうかの判断を俺に任せているらしい。

「エバンスさん、準備出来た？」

俺が訊くと、エバンスさんは視線を足元から俺の方に上げ、こくりと頷く。

「はい、大丈夫です」

「……眼鏡は？ 掛けたままで大丈夫？」

この子には、お辞儀で眼鏡を落とした実績がある。何かの拍子に落とし、踏んづけたりして壊したり怪我をしようものなら目も当てられない。

「はい、問題ない……と思います」

「……落ちたら音楽を止めるから」

トレーナーの方を見る。特に困惑した様子も見せない。眼鏡をかけたままのアイドルは、世の中にもある程度いる。有名どころで言うならば、765プロの秋月律子だろうか。その為、眼鏡を掛けたままでも「そういったキャラクター」だと認識される……ものらしい。しかし、彼女達は眼鏡をずらす事なく踊り切る。どんな種があるのやら。機会があれば聞いてみたいものだ。

「じゃあ、さっきの曲を流すからね」

——イントロが流れた瞬間、エバンスさんの空気が変わった。

余りの変貌ぶりに、俺以外の面々も息を呑むのが聞こえる。

先程の二人とは違い、歌ってはいない。歌ってはいないのだが、こちらから声を出すことが出来ない。

「すつゝ……」

やつとの事で絞り出したような、ハーミーの感嘆が聞こえた。それだけ、エバンスさんの振り付けは完璧だった。

たった一回、通して見ただけなのに。

トレーナーの動きをそっくりそのまま再現しているかと思えば、そういう訳でもないらしい。所々、エバンスさんに合うように調整されている。いつそんな事を考える暇があったのか——もしかして本能的にか!?

二人の時と同じタイミングで、音楽が終わる。長かったような、短かったような、時が止まっていたかのような。

「どうでした？」

エバンスさんは、元のエバンスさんに戻っていた。自信がなさそうな、普通の少女に。「えっ、と、トंकクスさん？」

返答に困り、トレーナーの方を見る。彼女は満足気に頷いていた。

「ダンスの経験があるのね！ 文句なしよ！」

……いや、エバンスさんにダンスの経験があるとは聞いていない。仮にあるのならば俺も聞いているだろうし、現にこうして、本人が困惑する様子も見せない。

「すっごいじゃない！ エバンスさん、これなら問題ないわー！」

「プロデューサーさんも、凄い子見つけたじゃない！」

ハーミーとダフネも、各々感嘆している。

「——との事だ。やるじゃないか、エバンスさん」

これは、プランの見直しが必要みたいだ。

プランその二、三人でダンスと歌を同時に披露する。理想の形が今、現実になりそう
だ。

休憩後に三人で振り付けを合わせようと話し合った時に、部屋のドアが勢いよく開かれる。

「おはようございまーす！」

同時に、元気が良い挨拶が飛び出てきた。

「ちよつと、未央ちゃん、迷惑ですよ」

「いいじゃんいいじゃん、向こうも休憩中みたいだからさ」

入ってきたのは見慣れない少女三人組と、武内さんだった。何だか賑やかだな。

「……申し訳ありません、城戸さん」

入ってくるなり、武内さんは深々と頭を下げる。

「いえ、謝られるほどでは。……どうしました？」

武内さんに向けた俺の疑問に、長い黒髪の少女が答える。

「ごめんなさい。私達と同じ、デビュー前の新人がレッスンしていると聞いて、未央が——」

「固いこと言うなよ、しぶりん！ 新人同士、仲良くなるチャンスじゃん！」

「どうやら、未央とは茶髪ショートの少女の事らしい。黒髪の少女を「しぶりん」と呼ぶその少女は、三人を見て笑顔で近付いてくる。」

「うわー！ 可愛いー！ 外国人!? えーと、ハロー、ボンジュール、ボンジュール……」

全部意味一緒じゃん。それにしても、やけに活発な子だな。武内さんとは正反対な印象である。

「……あの、放っておいていいんですか？」

ウエーブが緩やかにかかった髪の子が、おそろおそろ俺に尋ねる。

「アイドル同士、仲良くするんだろ？ 俺達が割って入る理由はないさ」

ですよね、と武内さんの方を向くと、彼は右手を首筋に当てながらもこくりと頷いた。

「島村さんと渋谷さんも、いい機会ですのお話してみてもどうでしょうか」

武内さんが言うや否や、活発な少女が「しまむー！ しぶりーん！」と二人を呼ぶ。いいタイミングじゃないか、未央とやら。

「……どうだったでしょうか」

島村さんと渋谷さんが俺達の元を離れてすぐ、武内さんは小声で俺に訊いてきた。おそらく、エバンスさんの事について訊いているのだろう。

「ダンスに問題はなかったですね。それどころか、天才と言っても過言じゃないです」

「天才、ですか」

——まあ、いきなりそんな事を言われても分からないだろうな。俺は、エバンスさんが通しで見ただけで振り付けを覚えた事を話した。

「彼女に、ダンスの経験は？」

「ないみたいですね。ズブの素人そのものです」

「それが、突然？」

「ええ。さつきも話しましたが、『覚えた』とだけ言つて」

武内さんは、考えあぐねるようにエバンスさんを遠目に見た。彼女は他の新人アイドル達に混ざつて談笑している。

「彼女は——」

武内さんは、エバンスさんから視線を逸らさずに、俺に訊いてくる。

「彼女は、何者ですか？」

「彼女は……」

武内さんに釣られるような形で、俺もエバンスさんの方を眺める。振り付けを通した時に見せた、あの凍り付くような感じは既になりを潜めていた。

「彼女は、俺の担当アイドルですよ」

その少女は、躊躇する様子も見せずハリエツト達の元に近付いてきた。

「うわー！ 可愛いー！ 外国人!? えーと、ハロー、ボンジュール、ボンジュール……」

ハーマイオニーは、その様子に顔をしかめた。

「こんにちはでいいわよ」

「うわっ、日本語オーケー!? 良かったー、英会話に自信がなかったんだよね」
「英語以外の挨拶も混じっていたけどね」

ダフネの指摘に、少女は「たはは」と申し訳なさそうに笑った。

「私、本田未央っていうの。よろしく!」

「は、ハリエツト・エバンスです」

少女——本田未央の自己紹介を受け、ハリエツトも釣られて自己紹介をした。

「ハーマイオニー・グレンジャーよ。ハーミーでいいわ」

「ダフネ・グリーングラス。気軽にダフネって呼んで」

他の二人も、それぞれ本田に自己紹介をした。

「うんうん、よろしくね! えっちゃん、はみはみ、フナちゃん!」

「えっちゃん……?」

「はみはみ……?」

「フナ、ちゃん?」

本田から突如飛び出た呼び名に、ハリエツト達は首を傾げる。

「しまむー! しぶりーん! 三人とも日本語大丈夫みたい! 来て来て!」

三人が困惑しているのを尻目に、本田はプロデューサー達と話していた他の少女達を呼んだ。ウェーブが緩く掛かった髪の少女は小走りで近付いてきたのに対し、長い黒髪

の少女は「やれやれ」とでも言うように首を横にゆっくりと振りながら歩み寄ってきた。「島村卯月です！ よろしくお願ひします！」

ウエーブの掛かった髪 of 少女は、明らかに年下であろうハリエツト達にも丁寧な口調で挨拶した。

「渋谷凜。これからよろしく」

黒髪の少女は、落ち着いた雰囲気だ。

「しまむー、しぶりん、眼鏡掛けてるのがえっちゃやんで、茶髪の子がはみはみ、大人っぽい人がフナちゃん！」

ハリエツト達が自己紹介するよりも先に、本田が紹介した。だが、彼女が先程付けたニックネームで紹介したのもあり、今やって来た二人も困惑しているようだった。

「未央、ちゃんと名前が知りたいんだけど」

「外国の人ですよね？ 何だか日本人っぽいあだ名でしたけど……」

ダフネは、「ふふつ」と度々ハリエツトに見せてきたような微笑を顔にたたえながら答える。

「あたしはフナちゃんでもいいわよ？ そんなニックネームを付けられるの、初めてだから」

「ほうほう」と本田は感心したように頷く。

「フナちゃん、オトナのオンナって感じ!」

その言葉に真つ先に反応したのは、ダフネ本人ではなくハーマイオニーだった。

「そんな事ないわよ! わたしと同じくらいの年齢だし!」

えっ、と声を漏らしたのは誰だろうか。三人の目が、ダフネとハーマイオニーを交互に行き来した。

「……妹とお姉さん、って感じだったけど」

渋谷の言葉に、ハーマイオニーは薄い胸を張りながら答える。

「わたしが中一で、ダフネが中二。一歳しか違わないんだから」

その様子を見た本田は、にたりと笑う。

「ほうほう、そちらのプロデューサーもやり手のようですね」

他の少女達は、自然とスーツ姿の男性二人を見る。一方は大柄で仏頂面の武内。もう一方は、話題に上がってきた若々しい青年の城戸。ふと、向こうもこちらを見る。武内はじつと表情を変えずにハリエツト達を見ているが、城戸はこちらが見ていたことに気付くと、にっと頬を緩ませた。

「武内プロデューサーみたいな人ばかりかと思ってたけど、あんな人もいるんだね」

渋谷が意外そうに言う。

「ん? しぶりんもしかして、ああいうのがタイプ? 確かに、そこそこイケメンだし」

「？」

「そうじゃないって。何だか、近所のお兄さんって感じ」

「実際にそんな感じよ？ 本当に、近所の仲がいいお兄さんって感じ」

「そうかしらダフネ。近所の変な人って感じよ、わたしからしてみたら」

「あら？ 傍目に見たら、仲のいい兄妹みたいだけど。ね、エバンスさん？」

「そうですね、少なくとも仲が悪いようには見えません」

「あ、あはは、全然違いますね。同じプロデューサーなのに」

島村の言う通り、ハリエツトから見ても武内と城戸は対照的に見えた。——しかし同時に、似た者同士のような気がしないでもなかった。

壁掛けの時計をちらりと見る。……そろそろいい時間か。

「武内さん、休憩時間の方は大丈夫ですか？」

武内さんはふと気付いたように、時計をじつと見る。

「……そろそろ終わりですね。急に押しかけるような形になり、申し訳ありません」

「いえ、武内さんが気にするような事ではありませんよ。彼女達にとつても、良い刺激になつたはずですよ」

E. G. G. Sの三人にとって、アイドル同士の親交を深めるのはプラスの働きにな

る筈だ。それに、大型のプロジェクトであるシンデレラプロジェクトには、ある程度媚びを売っておいた方がいい気もする。——打算的な考え方もしれないが。

「では、戻ります。城戸さん、ありがとうございます」

武内さんは少女達の集まりに近付くと、こちらからは聞こえないような小声で何かを諭す。その瞬間、思い出したかのようにわたわたとし出したシンデレラプロジェクトの三人は、各々エバンスさん達に手を振って挨拶し、俺の元へと駆け寄ってくる。

「ありがとうございます！」

「それじゃあね、城戸プロデューサー」

「これからよろしくお願いします、シロちゃん！」

急かす武内さんに連れられて、三人は部屋を去っていった。

……シロちゃんって呼び方はあれじゃねえかなあ。

第5話 When is it your shutt
er chance

エバンスさんの得手不得手が若干見えてきた。ダンスは得意らしいのだが、どうも歌は並のようである。

「だから、こう、自信を持って声を出すのよ。音程には問題がないから、後は気持ちの問題よ！」

歌のレッスンを終えて合流した三人は、そのような話をしていた。

「自信……」

「そうね。歌に関して言えば、ハーミーの方が上だから。アドバイスは聞いておいて損は無いわ」

「ダフネさんがそう言うなんて、ちよつと意外だね」

「ちよつと、どういう事よそれ！」

……まあ、ダンスも出来て歌もべらぼうに上手い完璧超人ではなかったという訳か。逆に、一つ目の「歌に専念させる」プランだと少し苦しい展開になっていたかもな。

「さて、ハーミー先生の講座は後に回すとして、次はアー写を撮るぞ」

アー写、アーティスト写真と言われるそれは、アイドルを始める三人にとつて最初の得物になる。未だ実績がない彼女達を選ばせるには、写真の第一印象しかない。

「それで、学校の制服って訊ね」

「如何わしいわね、プロデューサーさん」

「俺の趣味じゃねーよ」

「たまたま今日が平日だっただけだったの。」

「どういう人が、そのアー写つてものを見るんですか？」

「エバンスさんが右腕をすつと挙げて訊く。」

「ん、主に番組だったりの制作会社の人とかが多い。トーク系の特番で雑壇を埋めるアイドルも、まずそれで決める場合があるしな」

「それが理由でバカ売れしたいいい例が輿水幸子だ。他のアイドルもいる中で見事ないじられ芸を見せたことにより、バラエティー番組で引つ張りだこのアイドルとなった。……最近はりアクション芸人みたいな仕事が増えてる気がするが、そこに関しては向こうのプロデューサーの手腕だろう。」

「分かっていると思うが、アイドルとして初めての仕事になる。ただの写真撮影と侮るなよ」

「昨日の三人組もアー写撮影には若干苦勞した、という話を千川さんから聞いてい

る。

「分かってるわよ！ 気合い入れていくわ！」

「あらハーミー、力を入れすぎたらダメよ。自然体でいかないと」

「……しよ、証明写真みたいな感じじゃダメでしょうか」

「それは絶対ダメ」

大丈夫だよな？

スタジオでは、既に撮影スタッフが準備をしていた。

「おはようございます。プロデューサーの城戸です。今日は、よろしくお願いします」

俺がスタッフ一同にお辞儀をすると、三人も後に続くような形で会釈した。

「はい、よろしくお願いします」

落ち着いた雰囲気、長い黒髪の女性が応えた。

「今回撮影してくれる、チョウ・チャンさんだ。後たちよくちよくジャケット写とかも撮ってもらいかもれないから、きっちり挨拶しておけ」

『ハリー・ポッター』シリーズにも同じような名前の登場人物がいたような気がするが、イマイチ思い出せないなあ。

三人が挨拶をしている時に、一人の金髪の青年がぼそぼそとチョウさんに何かを伝え

る。

『……分かったわコリン。直ぐに準備しておいて』

『はい、用意しておきます』

おっと、英語か。新しいアシスタントだろうか。少なくとも、俺は見たことがない人物だ。

「……ああ、彼？ そう、新しいアシスタントのコリンよ。写真で食べていきたい、つて私の所に転がり込んだの」

「へえ、凄いですね」

俺の返答に、チヨウさんは肩を竦めた。

「まだダメダメだけどね。——さて、メイクが終わったら始めていきましょう」

パンパン、とチヨウさんが手を叩きながら言うと、三人は顔を見合わせ、意を決したように頷いた。

「わたしから行くわ。ハリエツト、ちゃんと見てなさい」

名乗りを上げたのは、やる気充分のハーミーだ。颯爽と白い背景布の元に行くと、カメラに向かつて腕を組む。自信ありげな微笑を顔にたたえていた。パシャリ、とシャッターを切った後のチヨウさんは、ハーミーとは対照的に微妙な顔だ。

「ちよつと違うかな」

「おいハーミー、『ラーメン屋の店主みたい』だつてさ」

「誰も言つてないじゃないそんな事！」

そうだけどき。紺色のセーラー服を黒いTシャツにして頭にタオル巻けば、それっぽくなるし。

「グレンジャーさん、もつと雰囲気を柔らかく出来ない？」

チヨウさんの言葉にハーミーはうんうんうなり、その後にカメラに向かつて首を傾げるような、いわゆる「あざとい」ポーズをする。お前普段そんなポーズしないだろ。

「……ごめん、やつぱり前の方向性でいいかな」

「え、ダメかしら？」

「少なくとも、ハーミーらしくはなかったわよ？」

ダフネの言う通り、わざとらしいあざとさだとハーミーの持ち味が殺されてしまう気がする。自信満々で少し小生意気なくらいがハーミーらしいのだ。

「ラーメン屋の店主つてプロデューサーに言われたんだけど」

「悪かつたつて。普段と同じような感じでやってくれ」

むう、と不機嫌そうに頬を膨らませて腰に手を当てたハーミーに、突如フラッシュが浴びせられた。

「城戸さん、これはどう?」

チヨウウさんに訊かれ、撮影データを映し出すモニタを覗き込む。普通ならば威圧感があるポーズなのだが、小動物感があるハーミーがする事により、威圧感は抜け落ちていた。

「あら、いいんじゃない?」

俺の後ろからモニタを覗き込んでいたダフネも、ご満悦のようである。チヨウウさんは新人アシスタントに何かを英語でぼそぼそと言っている。……『常に』とか『気を抜かずに』とか言っているし、アドバイスが何かをしているのだろう。

「……え? 終わったの?」

「みたい、だね」

エバンスさんに言われ、ハーミーは納得しかねる様子で戻ってきた。モニタに映っている画像を見て、ハーミーは眉をしかめる。

「ホントにこれでいいの? 笑ってないけど」

「私がいいと思ってるわ。城戸さんは?」

「ハーミーらしいから、俺もこれでいいと思いますよ」

アー写において必須であるのが「その人らしさ」である。「人は見た目が九割」と言われるような世の中、逆に言う一枚でその九割を相手に伝える必要があるのだ。作った

ような表情の写真だと、「らしさ」が伝えられずにそのまま埋もれてしまう事も有り得る。

今回のハーミーの写真はその点で言うならば、「自信満々で少し小生意気な感じ」が伝わるのでいいアー写と言えるのだ。

「納得いかないんだけど」

『いい』って言われてるんだから胸を張りな。——次は誰にするんだ？」

俺が訊くと、ダフネが悠々と背景布に向かう。

「次はあたしでいいかしら？」

ハーミーの撮影を見て要領を掴んだらしい。ハーミーと同じく、紺色のセーラー服——学校が同じだから当然だが——を着ているダフネは、上体を少し下ろし、口元に右手の人差し指を添える。目線はカメラを向いているので、自然と上目遣いになっている形だ。

「いいわね、もう少し笑えるかしら？」

チョウウさんの指示に応じ、妖しい微笑をたたえるダフネ。撮影の筋がとても良いみたいだ。一三歳にしては成熟している体つきなので、撮影前にダフネ自身が言っていた「如何わしい」の意味が何となく分かった。これじゃそういう店のやつじゃないか。——いや、余計な事を考えるな俺。今は仕事に集中していかないと。

モニタに並んだ画像データのどれをとっても、文句無しの出来栄えだ。ポーズも数種類ほどあるが、最初のポーズから選ぼうか。別のやつは何だか如何わしいし。

「これとかどうです？」

チヨウウさんが指さしてきたのは、最初のポーズで微笑を見せ、ウインクしている写真だ。

「うん、良いですね」

年齢不相応な、大人の色気。ダフネらしきが出ている気がする。

「……プロデューサーは、そういう女性が好みなんですか？」

エバンスさん、どうして睨んでいるんですか。

「変態」

「どうしてそうなるんだハーミー」

俺は仕事を全うしているだけだ。罵られる覚えはない。

「はいはい、最後はエバンスさんね」

チヨウウさんが助け舟を出してくれたお陰で、俺への追及は一先ず中断された。流石、デキるオトナは違う。

エバンスさんは背景布を背にして立つ。「気をつけ」の姿勢で、微動だにしない。これじゃ証明写真じゃないか。

「ハリエツト、もつと動いて！」

ハーミーのアドバイスを聞き、慌ててくるりと一回転したりジャンプしたりするエバンスさん。しかし、その表情は固い。

「うーん……」

シャッターを切るものの、チョウウさんもしつくり来ないようで首を傾げる。すると、突然新人アシスタントの方を向き、英語で指示を飛ばす。

『コリン、準備していたもの出しておいて』

新人アシスタントは『はい』と威勢よく返事をする、何処かへと去っていった。

『準備していたもの』って何かしら

「何かしらね」

ハーミーが俺に尋ねる。そうか、ハーミーもダフネもバイリンガルだったな。

「知らんな。ただ、あの新人くんも『用意しておく』とだけ言ってたし」

予想がつかない訳ではない。シンデレラプロジェクトの時はボール遊びで緊張を解きほぐしたらしいから、エバンスさんにも同じようにボールが渡されるのだろう。

気付くと、ハーミーとダフネは、意外そうな表情で俺を見ていた。

「……プロデューサー、英語出来るの？」

「ここにきて意外な特技発見、って所かしら」

「あのなあ、どうして二人に俺が付けられたと思つてたんだ？」

「英語圏出身の子達だから、君なら何とかなるでしょ」という空気で、まだ入社間もない俺が担当する事になったのだ。——実際には二人とも、更には後に加入したエバンスさん全員日本語が達者だったので、ほとんど意味を成していないが。そもそも、346プロにやって来る外国人はほぼ全員、日本語が達者だし。

「つと、新人くんが戻つてきたみたいだ」

彼の手に収まっているのは、蛍光色の小さいボールだ。予想通りである。彼は、チヨウさんにボールを手渡す。

「エバンスさん、少し息抜きしましょう？」

チヨウさんはそう言うと、エバンスさんに向かってボールを投げる。不意に投げられたボールをエバンスさんは……おお、しっかりキャッチしたか。

「息抜きですか？」

チヨウさんは頷くと、俺に向かって目を合わせ、ウィンクする。……分かりましたよ、チヨウさん。

「ほら二人とも。少しエバンスさんの相手をしてやれ」

「えつ、でも」

「いいじゃない、ハーミー。行きましょ？」

少し渋ったハーミーの腕を引っ張り、ダフネはエバンスさんの元に行った。
「……タイヘン、ですネ」

三人の様子を見てみると、新人アシスタントが急に話しかけてきた。片言の日本語である。

『ええ、そうですね。中々骨が折れますよ』

新人くんは、驚いたような顔をしてにっこりと微笑む。

『英語出来るんですね！ いやあ良かった、日本語は難しくて！ ……あ、コリン・クリビーって言います！ よろしくお願いします、プロデューサーさん！』

俺が英語で応えるや否や、青年は饒舌になる。本来の性格は気さくらしい。

『勉強中なんですよね？』

『はい、もう死ぬ気でやっていますよ。日本人は凄いですね。あんなに文字の種類があるなんて、予想していませんでしたよ』

何気なく三人の方を見る。バレーボールのようなトスが続いていた。この三人も、死ぬ気で日本語を習得したのだろうか。

『……チヨウウさんに弟子入りしたと聞きましたけど、やっぱり写真関係の仕事に？』
『ええ。モデル関係やアイドル関係の撮影をやって行きたくて』

成程、アイドル関係の仕事をしていくならば、日本が何かと都合がいい。国全体が激

戦区みたいなものだし、需要も多い。その分、ライバルも多いのだが。

『そうは言うけど、私も本当は自然写真家志望よ。日本の滝に魅せられて来日したし』
チヨウさんはトス合戦をしている三人をじっと見ながら、こちらに口を挟んできた。

『え？ そうなんですか』

『バイトが本職になった感じね』

へえ、そういうパターンか。

「うわっ、プロデューサー危ない！」

ハーミーの警告が飛ぶと同時に、右の横つ腹に衝撃が走る。

「うっ、ぶ……?!」

めっちゃくちゃや痛え！ 一体なんなんだよ！ 待って、立てねえんだけど！

「ごめんなさいごめんなさい！ スパイクの狙いが狂って！」

エバンズさんがしきりにぺこぺこ頭を下げる。やべえぞこの眼鏡っ子。バレーで人を殺せるんじゃないの？

「ハーミー、避けちゃダメよ？」

「無理よ！ すっごい怖かったもん！」

「うわああ大丈夫ですかプロデューサー！ 返事をして下さい、プロデューサー！」

「だ、大丈夫、夫……生きてる……」

『めり込んでましたよ!』

『落ち着きなさい、コリン、えっと、湿布! 湿布は!』

『大丈夫ですチョウウさん……つつう……痛みが引いてきたんで……』

機材一式に飛んでこなかったのが不幸中の幸いか。俺のあざなら湿布一枚で済むが、カメラを壊したらどれだけ弁償しなきゃいけないのやら。

「緊張は……とれた? エバンスさん……いたた」

「取れました! 取れましたからじっとして!」

「ハリエツト、泣いちゃダメよ! プロデューサーの犠牲を無駄にしないで!」

「勝手に殺すなハーミー……」

よろよろと何とか立ち上がり、コリンが用意してくれたパイプ椅子に座る。ふう、落ち着いてきた。

「あんな事があつた直後で悪いけど……どう? エバンスさん、いけそう?」

チョウウさんが声を掛けると、エバンスさんはズレていた眼鏡を両手で直し、決意したように言う。

「……プロデューサーの遺志を無駄にはしない。チョウウさん、やります。やらせて下さい」

「だから勝手に殺さないで」

生きてますよー、ボロボロだけど生きてますよー。

「……エバンスさん、もう一回眼鏡の位置を直してくれるかしら?」

チヨウさんが人差し指を一本、ピンと立てながらエバンスさんに言う。

「……へ? こうですか?」

チヨウさん——正確にはカメラの方を向きながら、エバンスさんは眼鏡の位置を再び直す。その瞬間、チヨウさんはシャッターを切った。パシャパシャパシャ、と何回も音が鳴っている。

「これでどうです?」

モニタには、眼鏡に手をかけたエバンスさんの画像データが並んでいた。確かに、眼鏡の弦を両手の指で抑えている様は、写真集の一ページに載っているようなポーズだ。彼女は今日、ブレザーではなく白いカーディガンを着ているので、袖が若干余っているのも絵になる。

「いいじゃない! ね、プロデューサー!」

「ああ、いいと思う」

興奮しきりのハーミーに賛同する。

「普段からそうやって眼鏡を?」

ダフネがエバンスさんに訊くと、彼女はこくりと頷く。

「はい。……直した方がいいですか？」

「まさか。直す必要はないよ」

俺の脇腹という犠牲はあつたが、無事に終わったみたいだ。チヨウさんは、俺の方を向いて訊く。

「……労災とか降りるの？」

降りなさそうだなあ。

第6話 What's the matter of her

デビューライブ、とは言えども、その正体は「先輩アイドルユニットの前座」である。その実、E・G・G・Sはそこまで期待されているユニットである、とは言えない。765プロが進めている「三九人の新人アイドルを発掘しよう」と言うような、余りにも大型なプロジェクトなら予算が降りるかもしれないが、「新人アイドルのためにステージを用意しよう」とは中々ならないのだ。

そこで、最初は先輩アイドルのライブの前座として出演する所から始めていく。ステージに立つ経験やメディアの露出を徐々に増やしていき、知名度が上がれば無事346プロダクションの定例ライブに出演する、という流れだ。

「正直、いきなり単独ステージっていうのも気が重いから、それぐらいが丁度いいわね」
ハーミーの言う通り新人にいきなり単独ステージというのもハードルが高いし、それぐらいが丁度いいのだろう。それ故に、あの三人の参加はイレギュラーだし、提案をした美嘉も常軌を逸しているのだ。所属して一か月も経っていない新人を、バックダンサーとはいえ数千人規模のステージに立たせるのだから。本番で足が竦んでしまわな

いか心配である。

「先輩アイドル、ということはやっぱり、挨拶をしつかりしていないと芸能界から干されたりするんですか……？」

「大丈夫よエバンスさん。そこまで厳しい人は346にいないから」

「とは言っても、あまりに失礼だと駄目だからな。まあ、三人とも分かつてはいると思うが」

それに、あくまで「346にいない」だけであり、外部の人間はまた別問題である。「346の中だから」で気を抜いてしまうと、噂が社外に漏れてしまった時に大きなディスプレイアドバンテージになってしまう。外聞を気にするならば、内輪の時にも気をつけなければいけない。

「それで、今日のボーカルレッスンの調子はどうだった？ 特にエバンスさん」

俺が話題を変えると、エバンスさんの顔が露骨に曇った。そこまで嫌味な質問をした記憶はないんだけど。

「まあ、前よりは良くなつてはいるわ、うん」

「……そうね。上手くなつてはいるわよ、プロデューサーさん」

どこことなく、二人の反応もよろしくない。

「……ちよつと、芳しくない感じか」

困ったな。CDの収録を少し遅らせなきゃいけないのだろうか。振付についてはほとんど心配がないので、どうも不安が残るボーカルレッスンの方を優先してはいるのだが。デビューライブに間に合わない、なんて事態になってしまつては万事休すである。

「ごめんなさい、プロデューサー。ぼくがもう少し、歌が上手ければ」

エバンスさんはしよんぼりとした表情で、俺に謝つてきた。

「何、気にするほどじゃないって。エバンスさんにはダンスがあるんだから」

俺がそこまで言つたところで、内線が鳴る。子機をすぐに手に取つた。

「はい、アイドル事業部、城戸です……。はい、はい……。え？」

……。新しい問題が出てきたみたいだ。

人に対して親切心で行なつた行動が、回りまわつて迷惑になる場合がある。家族の部屋を掃除してあげたら、「置き場所が決まっているものが何処かにいった」だの、洗濯機を回してあげたら「お気に入りの服が縮んでしまった」だの。——今回の話も、下手をするといわゆる「ありがた迷惑」というものになりそうだった。

「……最後に全体曲を、先輩アイドルと一緒に歌う!？」

真つ先に食いついてきたのはハーミーだ。

「でも、どうして?」

「向こうの気遣いだ。『せっかく出るんだから、前座だけというのも寂しいだろう』とき」
本来ならば、顔見せをして「Union Jack」を披露して終わり、という流れだった。しかし、シンデレラプロジェクトも控えている中、それだけではインパクトが弱いと向こうのプロデューサーが考えたのだろう。そこで、最後に全体曲を追加、E・G・G・Sもステージに再び上がって共演する流れとなったのだ。

「歌う全体曲はなにかしら？ やっぱり『お願いシンデレラ』？」
「概ねそんな感じだ。二人はいけるだろうが……」

エバンスさんの方を見る。彼女は、顔を真っ青にしてわなわなと震えていた。

「……踊るだけじゃ、ダメですか？」

「駄目だな」

「お願いシンデレラ」は、どちらかというとボーカル寄りの曲である。激しいダンスでごまかす、といったような技は通用しない。そもそも、そんなことをしても観客には直ぐにばれる。

「急ピッチで振付の確認をしてくれ。あと、エバンスさんのボーカルレッスンもできる限りサポートしてほしい」

養成所にいたハーミーとダフネに関しては、この曲の心配はないだろう。エバンスさんも、振付に関しては問題がないと考えていい。つまり、目下の問題はエバンスさんの

歌だ。

「分かったわ。任せてプロデューサー!」

「エバンスさん、何か分からない事があつたら、あたし達に訊いてね」

「はい、二人ともお願いします!」

……ゴールデンウィークは返上だな。

今日は346プロの定例ライブ当日……なのだが、E. G. G. S一同はボーカル
レッスンである。今西部長からも「担当アイドルに付き合つてあげたらどうだ」と言わ
れ、俺も様子を見る事にした。……ボーカルレッスンを見学するのは初めてだ。今まで
は打ち合わせや会議が重なり、顔を出すことすら出来なかつた。とは言え、顔を合わせ
たら様子を尋ねるぐらいいはしていたのだが。

「おはようございます。よろしくお願いしますね」

入ってきたのは、緑色っぽいTシャツにダークグレーのトレーニングパンツを履い
た、柔和そうな女性トレーナーだ。この人は三女だつただろうか。四姉妹全員、そつく
りな顔に似通つた格好をしているせいで、あまり見分けがつかない。

よろしくお願いします、と三人の挨拶が聞こえたところでレッスンが始まる。さて、
エバンスさんの実力はどんなものなのやら。

「……エバンスさん、もう少し声を大きく、お腹から声を出す感覚で」

「は、はい！」

……二人と比較すると、声が小さいらしい。聞いている感じ、音程が大きくズレている訳でもないようだ。問題は音量だけなのか。だったら、まだどうにかなるだろう――

「じゃあ、次は全体曲です」

トレーナーがそう言った途端、エバンスさんの表情がぴきりと固まる。

「……ん？ ダフネ、エバンスさん一体どうしたんだ」

俺が訊くと、ダフネは肩を落としながら言った。

「エバンスさん、まだ歌詞を覚えていないみたいなの」

「……えっ」

マジですか。

346プロのみならず、世間的に見ても「お願いシンデレラ」は有名な曲である。定例ライブにおいて、セットリストの一番上に位置し、それに故にメディアでの露出も非常に多い。「Union-Jack」がE. G. G. Sの看板と言えるならば、「お願いシンデレラ」は正に346プロダクションの看板曲なのだ。実際、カラオケで歌われる346プロの楽曲の中ではダントツの一位だし、テレビ番組で所属アイドルが紹介され

る時もオンボーカルでBGMに使われる事が多い——仮に、ライブで一度も歌った事がなかったとしても。

それだけ聞く機会が多く、下手をすると「346プロは知らないが、その曲は知っている」とまで言わせるぐらいにはしきりに流れている。その歌詞を、この子は覚えていないと言うのか。

「ごめんなさい！ 聞き覚えはあるんですけど、歌詞まではしつかり出て来なくて」

エバンスさんは、俺に向かって頭を下げる。いわゆる、うる覚えというやつか。

「えっと、歌詞の確認とかはちゃんとして来たんだよね？」

エバンスさんが答えるよりも先に、ハーミーが口を挟んできた。

「サボっている訳じゃないわ。休憩中は何回も確認しているし、カラオケで練習もしたし」

ハーミーの証言に、ダフネもこくこくと頷く。——別に疑っていた訳ではないのだが。ただ一人、エバンスさん本人だけが申し訳なさそうに顔を下げ、じつとしていた。「問題点が分かっただけいいって。……しかしどうしようかな」

歌詞の覚えが悪いという問題は、レッスンを重ねたからどうにかなるという話ではない。まだ今は二曲だからいいものの、ユニットの曲が増えたり、全体曲をもっと習得していくといった段階になると無視ができない問題に発展していく。

出来れば、早いうちから対処をしておきたい問題だ。

「……ごめんなさい。ぼくが、ぼくがもつと、要領良く覚えることが、出来たら……」
エバンスさんの目は、涙が零れ落ちそうなくらいに潤んでいた。

「……プロデューサー、ハリエツトを泣かせたわね？」

「ち、ちがつ、違うってば！ ああもう、エバンスさんも泣かないで！」

ハーミーがじつと俺を睨む。ダフネはだんまりを決め込んでいるし、これじゃ俺が泣かせたみたいじゃないか！

「ごめつ、ごめんなさい、そんなつもりじゃ」

「いいから落ち着いてエバンスさん！ えつと、えーと……あつた、ティツシュ！ トレーナーさん、すみません、すみませーん！ 一旦休憩で！ 十分ほど休憩でお願いしまーす！」

わたわたとポケットティッシュを取り出してエバンスさんに渡しながら、トレーナーさんに声をかける。

「プロデューサーさん、大慌てね」

「昔っから慣れないんだよ。女の子が泣いているのは」

十五年ほど前は、従妹の喧嘩を収めるのは俺の役目だった。両方とも話を聞いていたらぴーぴー泣くものだから、こちらとしてはたまったものじゃない。俺が泣かせたみた

いな空気になっちゃやし。

「ちよつと、一体どういう事？ プロデューサーがアイドルを泣かせるなんて」

「そうそう、こんな感じに——。」

「……へ？」

少なくとも、E・G・G・Sのメンバーやトレーナーの声ではないことは確かだった。ゆつくりと振り向くと、そこには三人の女性の姿があった。

「ムムム、サイキック事案ですか？」

ポニーテールの少女が、スプーン越しに俺を睨みつける。

「何かあったのかしら〜」

間延びするような喋り方をしているのは、胸がデカイ女性だ。……滅茶苦茶デカイ。

えっ、めっちゃでけえな。

「逮捕ね。女の子を泣かして、胸をジロジロ見るなんて、逮捕よ！」

「ずんずん俺の元に向かってくるのは、背が小さめで童顔の女性である。……この人も胸は大きめだが、先の爆乳のせいで普通のサイズに錯覚してまう。——じゃなくて。」

「待ってくれ、これには事情が」

「ふふ、犯人は皆そう言うのよ」

童顔の女性にはつこりと微笑みながら俺の右腕を掴む。

「現行犯逮捕ー!!」

視界が逆転したかと思うと、背中に衝撃が走った。

未だに背中が痛い。

「なるほど、そんな事があったのね」

俺を投げ飛ばした女性——片桐早苗はエバンスさんの話を聞きながら、うむうむと頷いた。

「大変ですね。その気持ち、私も分かります」

爆乳アイドルとして有名な及川雫も、エバンスさんに同情するように頷く。

「あの、俺への謝罪は」

「黙ってなさいよ前科一犯!」

「ハーミーさん当たりキツくない!? 俺悪くないよ!」

「胸を見ていたのはホントでしょ? プロデューサーさん」

ダフネですら俺に冷たい。しょうがないじゃん、胸デカいなら見ちやうだろ。

「それで、泣きそうになつてたのね」

「はい……」

エバンスさんはさめざめと泣きながら片桐さんに答えた。俺が投げ飛ばされた時に

心配してくれたの、君一人だけだよ。

「堀さんはどうやって覚えてるとか、そういうコツあつたりする？ 出来ればエバンスさんに教えてあげて欲しいんだけど」

俺の言葉に、ポニーテールの少女——堀裕子は「むむむ」と声を漏らしながら考え込む。

「もちろん、サイキック暗記です！」

話にならねえ。

「……待つてプロデューサー。どうして、『セクシーギルティ』が来たのか分からないわ」
片桐早苗、及川雫、堀裕子。この三人は「セクシーギルティ」というユニットで、そこそこに人気が出つつある。どちらかと言えばバラエティー番組の需要が高い気もするが、ある意味独特な世界観を持つ楽曲も人気を支える要因である。

「さあ、分からないな。デビューライブの時に世話になるが」

「えっ!? 聞いてないわよ!」

……あれ? 待つてなかった?

「初耳よ、プロデューサーさん」

……待つてなかったか。

第7話 How does she become a

diva

確かに、記憶を探っていくと言った記憶がなかった。

「紹介が遅れたわね。私は片桐早苗よ」

「及川雫です」

「サイキックアイドル、堀裕子です！」

いや、知っているわ、とハーミーが言葉を濁す。

「……えっと、プロデューサー。ぼく達はこの人達の前座なんですかね？」

エバンスさんが確認を取ってくる。既に涙は引っ込んでいた。

「ああ、そうだ。今注目されているユニットの一つでもある」

「いやあ、言ってくれるじゃない！」

照れ隠しかどうか知らないが、片桐さんが俺の背中をばしばし叩く。止めてくれ、投げられた痛みはまだ引いていない。

「……じゃあ、『お願いシンデレラ』も一緒に？」

ハーミーは及川さんの胸を見ながら、絞り出すように言う。

「そうね。どんな子達なのかなーって思ってた来たら、そのプロデューサーがエバンスさんを泣かしているように見えて、ね」

ね、じゃないよ。

「そう、でした……。歌詞、まだ……」

落ち着いてきたエバンスさんの表情が、再び曇り出す。

「大丈夫ですよ。私達も、練習に付き合います」

及川さんの申し出に、セクシーギルティの他二人もうんうんと頷く。

「あら、いいんですか？」

「大丈夫です！ 定例ライブには出演しないので！」

ダフネの質問に、堀が答えた。……向こうのプロデューサーに連絡を取ってみようか。

社用携帯からセクシーギルティのプロデューサーを選び出し、発信する。

「お疲れ様です。アイドル事業部、城戸です」

『ああ城戸くん、お疲れ。そっちに三人が向かったと思うけど』

信号機や車の音が微かに聞こえてくるし、外回りでもしているのだろう。

「はい、今から合同練習をします」と

『ああ。いきなり全体曲をやるとなっても難しいだろうし、早いうちから合わせていっ

た方がいいだろう』

それに、と彼は言葉を続ける。

『うちのユニットが出るからには、失態を起こしたくないっていうのも本音だね』

「……はい。承知しています」

全体曲で失敗してしまえば、E・G・Gのみならずセクシーギルティの風聞も若干悪くなる。

俺が答えると、向こうは軽く笑った。

『——まあそんな事は置いといて、彼女達が先輩風を吹かしたいってだけなんだろうけど』

「はあ、先輩風、ですか」

『もつと言うと、あの提案をしてきたのも片桐さんだから』

「えっ？ そうなんですか？」

練習を始めた六人をちらりと見ながら、ため息をつく。てつきり、向こうのプロデューサーから言い出したものだとばかり思っていた。もしくは今西部長。

『つと、悪いね。オレはこれから打ち合わせがあるから。何か問題があつたら、連絡してくれ』

「はい、分かりました。それでは」

通話を切る。ため息が再び漏れ出た。先輩風とは言っていたが、根本にあるのは親切心だろう。——貴重な合同練習の機会なんだし、E・G・G・Sの三人にはしっかりと励んで欲しいところなのだが。

エバンスさんが再び歌詞を間違え、キョロキョロと周りを見渡していた。

うーむ、と片桐さんが唸る。

「やつぱり、まだ自信がない感じ?」

エバンスさんはこくりと頷く。

「はい。……さつきも、凄いい間違えていましたし」

それだけではない。歌詞が完全に飛んでしまっていたり、順序を間違えていたりもしていた。その度に他のメンバーを見るものだから、傍目に見えてもそこそこ目立つ。片桐さんが指摘する通り、自信がないから起こってしまう問題だ。

「そうですね。振り付けから合わせていきましようか?」

「むむむっ! 雫さん、サイキック気分転換ですね!」

サイキックかどうかは分からないが、確かに気分転換にはなるだろう。特に、E・G・G・Sの三人はずっとボーカルレッスンだったのだから。

「プロデューサー、問題ないかしら?」

「ああ。折角の機会なんだ、きっちり教えてもらいな」

いいですよね、とトレーナーの方を見る。俺の視線に気付いた彼女はゆつくりと頷いた。……柔軟な指導者は好感が持てるな。

「なら、準備しなきゃね」

ダフネはエバンスさんに声をかけた。エバンスさんの目は、まるで水を得たかのように輝く。

「はい、そうですねダフネさん！」

彼女の反応を見る限り、やはり振り付けには自信があるようだ。

「……ね、あの子大丈夫？」

そのように小声で尋ねてきたのは片桐さんだ。馬鹿にするような様子は微塵も見せず、その表情はまるで我が子を心配する母親のようだ。

「ま、見ててくださいいよ」

エバンスさんをちよいちよいと呼ぶ。彼女は俺に気付くと、とてとてと歩み寄ってきた。

「どうしたんですか、プロデューサー？」

「振り付けの方は問題ない？」

俺の質問に、エバンスさんにはっこりと微笑みながら答える。

「はい！ 全部覚えています！」

「そっか、なら良かった」

俺が右手でサムズアップすると、エバンスさんはべこりとお辞儀をして離れていった。

「……全部？」

ただ一人、片桐さんは訝しむような顔でエバンスさんを見ていた。

結果から言うと、振り付けは問題がなかった。ボーカルの方に集中していた分、振り付けにはあまり時間を掛けられなかったのだが、それでも他のメンバーと遜色がない。急に合わせたはずなのに、綿密に練習したかのようにこなしていた。

「振り付けは問題ないんだよな」

寧ろ、ハーミーとダフネの微妙な粗が気になりそうだな。二人は振り付けにこなれている分、逆にクセがついてしまっているようだ。少人数で踊るのならば問題はないのだが、六人で合わせると若干目に付いてしまう。

「凄いです。完璧じゃないですか」

及川さんがエバンスさんに、驚いたような感想を投げかける。……口調のせいで驚いているようには見えないのだが。

「サイキック反復練習のたまものですね！」

何なんだよサイキック反復練習って。エスパーの特訓かよ。

「ふふん、違うわ！ ハリエットはダンスが凄いで得意なのよ！」

「どうしてお前が得意げなんだよハーミー」

ダフネが「ふふっ」と笑う。

「いいじゃない。あたしも誇らしいんだから」

「……そうか？」

「ええ。プロデューサーさんも、胸を張ったらどう？ エバンスさんを見つけたのは、プ

ロデューサーさんでしょ？」

確かに、悪い気はしないな。

「エバンスさんだけじゃないっての。ダフネもハーミーも、俺が見つけたようなもんだからな」

何故武内さんが見落としたのか、寧ろそこが気になるぐらいには二人も逸材である——と、俺は勝手に自負している。俺の言葉に目を丸くしたダフネは、つつと目を細めた。

「悪い人ね、プロデューサーさんは」

「……何がだよ」

褒められたかと思ったらけなされた。

「はいはい、担当アイドルを口説くのはあとあと！——正直驚いたわ。眼鏡掛けてい

るのに、凄いきれッキレじゃない」

「口説いてた訳じゃないんだけどな」

片桐さんに反論しながらも、思考を巡らせる。

エバンスさんのダンスの技能はダントツだ。一回通しで見ただけで、振り付けを完全に習得してしまう。今まで普通の女子高生だったとは思えないくらいだ。懸念材料だった、中人数での合わせにも問題は無い。おそらく、十人を超えるような大型の編成でもキツチリ合わせてくるだろう。

対して、歌の方には不安が残っている。音程や声の大きさといったような事ではなく、歌詞が覚えられないといった致命的な点だ。音程や声の大きさならば基礎レッスンを積んで払拭出来る問題ではあるのだが、歌詞については覚えるしかない。

そういえば、「Union-jack」の方はどうなのだろうか。……いかな、考えたら考える程にドツボにはまっていく。とは言え、全体曲だけやっつてはい終わり、とはならない。寧ろ、E・G・G・Sにとつてのメインは持ち歌の方なのだ。一曲でも覚えられるかどうか心配なのに、更にもう一曲あつて……。うーむ、どうしたものだか――。

「……デューサー？ プロデューサー？」

「――つと、悪い、考え事してた」

声を掛けてきたエバンスさんに返事をする。

「それで、どうしたんだ？」

「その、何かいいアイデアがないかって、ハーミーが」

「どういう事だとハーミーに視線を向けるが、彼女はぷいと顔を逸らした。……あんにやろう。」

「良くないアイデアならあるが、ぶつちやけ使いたくねえんだよな」

「良くないアイデア、ですか？」

「ま、今回は伏せておくが」

例えば、「お願いシンデレラ」の時にエバンスさんを出さないというアイデア。しかし、それはその場限りの解決策にしかないし、エバンスさんも成長出来ない。一番楽な方法なのかもしれないが、悪手である事は明らかだ。——それを今、エバンスさんに言ったところで事態が好転する事もないだろう。

「そういうえば、持ち歌の方はどう？」

「良くないアイデア」の事を勤ぐられる前に、話題を変えてしまおう。

『Union—Jack』の事ですか？」

「そうそう」

歌だけのレッスンに加えて、振り付けと歌を合わせるレッスンも始めていた筈である。どちらかに気を取られて、もう一方がおさなりになっっていなければいいが。

「最近は、歌詞を覚えつつありますよ」

エバンスさんの顔は不安げなものではあったが、出てきた言葉はある程度安堵出来るものだった。

「それなら良かった。やっぱり、歌い慣れてきたつてもあるんだろうな」

数日ほど前はハーミーとダフネの二人も言葉を濁すくらいだったのだが、この所持ち歌に関しては話題にあまり上らなくなっていた。勿論、全体曲が目下の問題であるという事もあるのだろう。「知らせのないのは良い知らせ」と言ったところか。

「はい、多分そうだと思います。今週から振り付けとの合わせをしていつて、やっと覚えてきたつて感じなんですけど」

「だったとしても充分じゃないか。確実に前進しているんだから、もっと自信持てよ」
「……はい！　ありがとうございます」

俺に礼を言うと、表情がいくらか明るくなったエバンスさんはそのまま皆の元に戻っていった。……どうしてスキップしているのかは分からんが、元気付ける事が出来たのなら良しとしよう。

そうか、持ち歌の方は覚えつつあるのか。「どうしても覚えられない」といった、呪いのようなものではなくて良かった。人よりも、少し覚えるのに時間がかかると言った具合なのだろうか。

「……………ん？」

いや、待て。ずっと覚えられず、メンバーからも心配されるような覚えの悪さが、突然鳴りを潜めるだろうか。さっきのエバンスさんの話し方だと、「今までずっと出来なかったことが、急に出来るようになった」といったような感じだった。しかも、本人はそこに何らかの工夫を凝らしたようではないらしい。対策を行なっているならば、「多分そうだ」と曖昧な返事を寄越すはずがないのだ。ハーミー程自信满满とは言わないにしても、その方法を匂わせるような言い方をするはずである。

つまり、「Union-Jack」のレッスンの中に、エバンスさんの問題点を解決する糸口がある。

「……………そういう事か」

少し考えてみれば、それはかなり簡単な事だった。確かに、その方法で習得したとなれば納得がいくし、今後他の曲をやっていく際にも応用が効く。それ以上に、何故そんな簡単な事にも気付けなかったのかという驚きもあるのだが。

「ちよつといいか、皆」

意を決した俺は、振り付けを確認し続けるアイドル達に声を掛ける。

「次はなんなの？ 女つたらし」

おいおいハーミー、どうしてそんなに突っかかってくるんだ。

「皆、っていうのは私達も？」

「はい、協力してもらえますか」

片桐さんに答えながら、改めて皆を見る。……若干厳しい目付きなのは何故だろうか。俺何にもしてないんだけど。

「エバンスさんの歌詞の覚え方について、いい方法を思い付いた。——協力して欲しい」
皆の目付きが、先程とは違う真面目なものになった事を感じて、俺は、につ、と頬を緩めた。

第8話 Why cat-girl is impat ient (1)

346プロダクションの敷地内には、カフェがある。「何を馬鹿な」と思うかもしれないが、これは数ある福利厚生の一つらしい。それを抜きにしても、テラス席付きの明るい雰囲気のカフェというのは社員に人気がある。勿論、「オシャレにコーヒーを飲める」だの、「ゆったりとくつろげる」だのと聞いた、緩い理由ではなく。

「——では、詳細は追ってメールを送ります」

「ありがとうございます。そちらで必要なものがあれば、直ぐに準備しますので」

特に機密性が必要でない軽めの打ち合わせならば、ここで行なっても良いからである。今の俺みたいに社員同士での打ち合わせではともかく、社外の人物との打ち合わせになるとこのカフェの存在意義が出てくる。明るい雰囲気だからこそ美味しいコーヒーが相まって、和やかな雰囲気で打ち合わせが出来るのだ。相手方にいい印象を持たせる事が出来ればこちらのものである。

また、打ち合わせ以外にも活用法があり、その最も多いものが雑誌のインタビュー記事を飾る写真である。小洒落たカフェにわざわざ出向かわなくても、絵になる写真を

撮る事が出来るのはやはり大きいらしい。高垣楓のインタビュー記事も、このカフェで撮った写真が大多数を占める。次点で多いのは大衆居酒屋なのだが。

——さて、今回打ち合わせしていた相手は川島瑞樹——もとい、彼女の所属するユニットのプロデューサーである、剣崎さんだ。川島さんがMCを務めるラジオ番組の「わかるわアワー」に、E・G・G・Sの三人がゲストとして出演する事になった。彼女達は今まさに、デビューライブに向けての準備を進めている最中だが、プロデューサーである俺はその後に向けて絶賛営業中である。

ライブを終えた後に仕事がありませんでした、という事態に陥ってしまったと、元々なみに等しい知名度が更に無くなり、ひっそりと解散なんて事になりかねない。イベントに出るという手も無くはないのだが、発信力という心もとない側面もある。

その点、今回決まったラジオ番組へのゲスト出演は大きい。「わかるわアワー」は人気のある全国ネットの番組なので、遠く離れた地方にもE・G・G・Sをアピール出来る絶好のチャンスである。今回はの剣崎さん経由で番組プロデューサーと交渉し、晴れて出演が決まった。

ノートPCを使って、メールを確認する。新着のメールの中には、先程打ち合わせをしていた剣崎さんからのものも含まれていた。仕事が早い人だな。

「どれどれ……」

文面には、打ち合わせ内容の確認の他に、「デビュー曲の音源が欲しい」といった旨が書かれていた。まさに願ったり叶ったりである。とは言え、オンボーカル版はまだ用意出来ない。オフボーカル版のデータを添付して、彼に送ることにした。

「よおし、きつと皆喜ぶだろうなあ」

デビューライブ直後の大きな仕事の一つである。しつかりと発破をかけないと。

——今までPCの画面を見ていたからだろうか。カフェで起きつつある異変に気付くのが遅くなったのは。

二人の少女が、カフェのテーブルや椅子をこそごと動かしていた。掃除だろうかとも考えていたが、どうも様子がおかしい。掃除をするならば、テーブルを倒したりはしないはずである。

「ちよつ、ちよつとおー！ 困りますー！」

それに掃除ならば普通、制止しようとする事もないはずだ。……てか、安部菜々じゃん。所属アイドルがどうして社内カフェで働いているんだ？

「一体何……が……」

様子を見ようとしたところで、思考が追い付かなくなった。金髪をツーサイドアップにしている方の少女に、見覚えがあったからである。

「……あー 進にーちゃん!？」

「誰にや!」

——もう一人の従妹が、猫耳をつけた少女と社内カフェで馬鹿をやっていた、なんて言つても誰も信じないだろう。

テーブルと椅子を慌てて戻し、店員（とバイト中という事だった安部菜々）にひとしきり謝った後、少女二人を座らせた。

「……それで? 一体何だつていうんだ」

「うぐう……」と観念したような声を漏らしたのは、猫耳をつけた少女である。

「ストライキにや! みくは、莉嘉ちゃん和杏ちゃんと、ストライキするつもりだったにや!」

「……杏ちゃん?」

周りを見渡すが、それらしき人物は居なかった。

「いないな、そのもう一人が」

「……逃げた!? そんな馬鹿にや!?!」

ばんと勢い良く立ち上がると、猫耳少女は辺りを見渡す。

「そんな事より、進にーちゃんも346にいたんだ!」

もう一人の従妹である城ヶ崎莉嘉は、目を爛々と輝かせながら訊いてきた。……ます

ます、姉の美嘉に似てきたような気がする。髪の色や目の色はまるつきり違うが。

「あれ、美嘉から聞いていなかったのか？」

「おねーちゃん、進にーちゃんの事を聞いたら何か嫌そうな顔で首を横に振ったもん」

あいつめ。報連相は仕事の基本だぞ。

「……ちよつと待つにゃー！」

猫耳少女が我慢出来ないと云った調子で話に切り込んできた。

「莉嘉ちゃん、この人とどういう関係にゃ!? お兄さんがいるなんて話、聞いてないよ

！」

「え? 進にーちゃんは進にーちゃんだよ?」

莉嘉は真意を掴みかねる説明をし始める。そもそも俺を何だと思っっているんだ。従

兄とは別カテゴリなのかよ。

「従兄だよ従兄。城戸進ノ介、ここでプロデューサーをやってる」

猫耳少女は「なるほど、イトコ……」と呟くと、すつと再び椅子に座った。中々に忙しい奴だな。

「話を戻すぞ。ストライキってのはどういう事だ」

俺が話題を戻すと、猫耳少女の顔が再び険しくなる。

「……Pちゃんに何時デビュー出来るか訊いても、『企画検討中です』って言ってばかり

で、デビュー出来るかどうか分からないや」

うーむ、耳が痛い。ハーミーとダフネに同じような事をさせてしまった俺には、他人事に思えない部分もある。

「アタシよりも先にデビューが決まった子がいたの。アタシだって早くデビューしたいのに！」

周りのデビューも相まって、焦ってしまったという事だろうか。……いや待て、もしかしたら。

「……シンデレラプロジェクトか」

ぼそりと俺が呟いた途端、莉嘉の目の色が変わった。

「え!? 進にーちゃん、知ってるの!?!」

「知ってるも何も、デビューを控えているアイドルがいる大型のプロジェクトなんてそれしかないしな」

そもそも、小耳には挟んでいた。何でも、この前会ったあの三人娘と、もう一組他の二人組が、同時にデビューするのかなんとか。

「城戸チャンはPチャンと知り合いなの? もしそうだったら、そつちからも何か言つて欲しいにゃー!」

「とは言つてもなあ」

武内さんには武内さんの考えがあるのだろう。トントン拍子でデビューが決まった三人娘もそうだが、二人組に関しては無難なキャラクターの子達だ。キャラクターが強めの猫娘、あの「城ヶ崎美嘉」の妹という出生がついて回る莉嘉を先に出してしまうと、後に続くアイドル達の影が薄くなってしまいう危険性もある。おそらく、個性が強いアイドルは後々に回らざるを得なくなるだろう。

「……ダメ、なの？」

猫耳少女は、目で見ても分かるほどにがつくりと肩を落としたり。

「何で……？ みく、頑張ってるのに……。一体、何が足りないって言うの？」

猫耳少女は目尻に涙を溜め、声を震わせる。……この前のエバンスさんに続いてコレか。俺は新米アイドル専門のお悩み相談室じゃないんだぞ。

「アタシたち、このままデビュー出来ないの？」

猫耳少女に釣られたのか、莉嘉の表情も曇り始める。二人組の方は兎も角、三人娘の方は確かにぽつと出の子達だ。この二人の方が先に所属していたとなると、確かに「デビューをかつさらわれた」と考えてもおかしくはないだろう。

「そもそも、『企画検討中』って事はデビューさせる前提で動いているって考えていいんじゃないか」

「……まで焦らしておいてデビューさせない、なんて事を武内さんがやるはずもない。

実際、電話や会議や交渉を繰り返している姿を見ているからこそ、目の前の少女達の心配が杞憂であると分かるのだ。

「そんなの、信じられないよ……。だって、Pちゃんはいっつも『企画検討中です』とか言ってくれないもん……」

猫耳少女は消え入りそうな声で言った。……うーん、武内さんはいっつも仏頂面だからな。表情が読めないから、誤解されちゃっているんだらう。

「それだけ、キツチリと企画を練っているんじゃないか。少なくとも、見切り発車に近かった俺よりかは有能だと思っせ」

「えっ、進にーちゃんもアイドルをプロデュースしてるの？」

「そりやまあ、プロデューサーだしな」

ユニット一つだけでもてんでこ舞いなだから、複数を同時に管理しなければならぬ武内さんは何倍も大変なはずである。——赤羽根先輩は「規格外」とでも言えばいいだろうが。

「へー！ どのなの？ どのなの？」

俯く猫耳少女を尻目に、莉嘉は興味津々と言った調子で訊いてくる。

「何だったら、一緒に聞くか？ 猫耳少女」

猫耳少女はぱつと顔を上げると、眉間に皺を寄せながら返事をする。

「前川みくにゃ！」

「おっと、じゃあ前川さんも聞いてくれ。——ん、どうも」

猫耳少女もとい前川さんが頷いたのを確認すると、すっかり冷めきったコーヒを一
口だけ口に含む。

「デビューライブをそろそろ向かえる、『E. G. G. S』っていう三人のユニットを担
当している。……ああ前川さん知ってるんだね、その顔するって事は。そ、ずっとデ
ビュー出来なかつた子達だよ」

「……どうしてデビュー出来なかつたの？」

莉嘉が目を丸くしながら訊く。

「結論から言うと、俺が待ったをにかけていた。二人だけじゃ——ああ、最初は二人だつた
よ——二人だけじゃ、足りないと思つたからだよ」

前川さんは、むうと顔をしかめる。

「そんな事ないにや。二人でも、充分のはずだつたけど」

「実力的にはな。でもな、収まりが良すぎたんだよ。……アイドルってのは、ドラマを見
せなきゃいけないと俺は思つてる」

「……それは、女優って事にゃ？」

「違う違う。なんつーかな、アイドルに言うことでも無いのかもしれないが、一人の女の

子が成長してアイドルになる過程も含めて、アイドルなんだよ」

これは、あくまで受け売りの話である。赤羽根先輩が酒を飲みながら、したり顔で言っていた話でしかない。

「ファンの皆は、完璧なパフォーマンスを求めているものにや」

「大多数かもしれないが、それは一部の話だ。成長していく姿を楽しみにするファンもいるんだよ」

その分、二人は「完璧過ぎた」。完全に二人で完結してしまっていて、伸び代が見えてこなかった。

「進にーちゃん、言ってる事が分からないよ」

まあ、少し小難しい話だったかもしれない。

「武内さんも、きつと同じ考えだ。そうじゃなけりや、『シンデレラプロジェクト』なんて名前のプロジェクトを作ったりしないはずだからな」

みずぼらしい少女がお姫様になったように。普通の女の子がアイドルとして成長する事を願っているに違いない。……ともなれば、その手伝いをする武内さんは、さしずめ「シンデレラに魔法をかける魔法使い」とでも言えればいいだろうか。

「でも、何か考えがPちゃんあるんだとしても、みくは早くデビューしたいにや！ このままデビュー出来ないなんて嫌にや！」

「莉嘉も！ 早くおねーちゃんみたいステージで歌いたいよー！」

うげ、話が振り出しに戻ってしまった。さて、どう言ったものか――。

「――絶対に、デビューさせます。心配しないでください」

突如投げ掛けられたのは、響き渡るようなバリトンボイスだった。

「び、Pちゃん!?!」

「あ、杏ちゃんだ」

振り向くと、そこにいたのは武内さんだった。傍に控えているのは、ラフな格好をした、まるで小学生のような女の子である。しかし、すげえTシャツ着てんな。「働いたら負け」とか、今日日オタクでも着ねえぞそんなの。

「……城戸さん」

「自分の事は気にせず、言ってやってください」

ここから先は、武内さんの仕事だろう。……まあ、乗りかかった船である、行く末を見守ってみよう。

第9話 Why cat-girl is impatient (2)

武内さんは、俺の言葉を受けてゆっくり頷くと、再び前川さんと莉嘉に向き直る。

「……みく達、デビュー出来るの？」

前川さんの質問に、武内さんはこくりと確かに頷いた。

「はい。全員、必ずデビューさせます。私を信じて待っていてください」

ええ、と残念そうな声を上げたのは、そう言った武内さんの隣にいた、小さな女の子である。

「杏は別にいいんだけどな」

おいおい、Tシャツと同じような事を言っているぞ。

「……全員、必ずデビューさせます」

まるで出鼻をくじかれたような格好になってしまった武内さんは、首筋に右手を添えながら再び力強く宣言した。頑張れ武内さん。

「え、じゃあ『企画検討中』つてやっぱり……」

「はい。全員のデビューを見据えて、企画している段階です。時間はかかるかもしれま

せんが、待っていてください」

はあ、と脱力したように前川さんは体の力を抜いた。

「それじゃ、進にーちゃんが言ってた通りってこと!」

莉嘉の言葉を受けて武内さんは、驚いたような仏頂面で俺を見る。

「ああ、はい。前もって、そんな感じの事を言いました。武内さんが忙しそうにしていたのは知ってるんで」

「……すみません」

俺が武内さんに説明すると、彼は視線を下げた。

「何もしてないですよ、俺は」

結局、俺がやった事なんて見習いアイドル二人と駄弁っただけだし。

「次、次は誰がデビューするにや!?! みく!?!」

「もしかしてアタシ?」

「いえ、それは」

「あ、杏は最後でいいよ。というか、デビューしなくてもいいよ」

「……全員、必ずデビューさせます」

「おいおい、総出で武内さんを困らせるなよ」

兎に角、穩便に終わったと考えていいのだろうか。

「……いやあ、よかったよかった。平和なのはいいことだ」

いつの間にか俺の傍にいた謎Tシャツの女の子が、聞こえるような小声で呟く。

「とぼけんよ。武内さんを呼んできたのは君だろ」

きやいきやいやれつく二人の少女と大男を眺めながら、俺は小さい少女に言う。

「えー？ 杏知らなーい。ホントは杏も、週休八日を要求するつもりだったし」

「ぶれねえな」

余った一日は何処から湧いて出てきた。

「ま、たまたま止めるような知り合いがいて良かったよ。よく考えたら、ストライキなんてめんどくさいじゃん」

「本当にな。面倒臭い事態になりかねないからな」

カフェを占拠してストライキするなんざ、下手すると企業に対するテロ行為だ。346の事を考えると、何かと外部への露出が多いカフェで事を起こすのは不味い。内部からも外部からも、「シンデレラプロジェクトのプロデューサーは、担当しているアイドルも制御出来ないのか」と文句を付けられ、今後の営業活動に大なり小なり影響を及ぼしていたに違いない。その事態に泣きを見るのは、武内さんもそうだが、何よりもアイドル自身である。

「んー？ 杏はただ、『めんどくさい』って言っただけだよ？」

「ま、そういう事にしといてやるさ」

どうやらこの子は、意地でもとぼけ続けるつもりらしい。……分かったよ、その三文芝居に付き合っつてやろうじゃねえか。

「それにしても、赤の他人の相談に乗るなんて、物好きなプロデューサーもいたもんだね」

「それはどうかな？ 俺は従妹が馬鹿やつてるのを止めて、その友達の話の聞いたただけだよ。赤の他人だったら、無視してたかもな」

実際、当事者が莉嘉じゃなければ引き留めていたかどうかも分からない。

「へえ、お節介な兄だね」

「どちらかと言うと、娘みたいなもんだよ」

実際、前世からの累計年齢で言えば莉嘉ぐらいの、下手をすれば美嘉ぐらいの娘がいともおかしくはないだろう。

「ふうん？ 変なの」

「そうかもな」

……まあ、「実は転生してて」なんて話をした所で、信じてもらえるような話ではないだろうし。

「兎に角、武内さんを連れてきてくれて助かったよ。俺じゃどうしようもなかったかも

しれなかつたし。……えーと」

「双葉杏」

「そうか。サンキユ、双葉ちゃん」

「はいはい、と適当な返事をしながら、双葉ちゃんは俺の元を去っていった。……あの子、あんな調子だが相当頭が切れるらしい。その実、彼女の要求内容は現実的なものは無かつたので、二人の要求を有耶無耶なものにしようとしたのだろうか。まあ、俺がいた事で行動を変えたらしいが。」

双葉ちゃんと入れ替わるようにして、二人を振り切った武内さんがずんずんと俺に近付いてくる。

「……すみません、城戸さん」

彼はそう言うや否や、頭を下げた。

「いえ、自分は何もしてませんよ。俺はただ、あの二人と世間話をしていただけですから」

「いえ、と武内さんは頭を下げたまま俺の言葉を否定する。

「迷惑をかけてしまった事に変わりありません。城戸さん、ありがとうございます」

「いえ、従妹を注意するのは従兄の役目ですよ。本当に何もしていません」

武内さんはゆっくりと顔を上げる。うーむ、武内さんが上目遣いで見ると、メンチを

切っているみたいで迫力がある。

「……このまま彼女達を止めることが出来なければ、事態は更に大きくなっていました。例え世間話だったと言えども、前川さん達を引き留めてくださり、ありがとうございませう」

「ここまで言われてしまつては、謙遜し過ぎるのもいけないだろう。

「どういたしまして」

ふと、疑問がよぎつた。何故、前川さん達がストライキを決行する事になったのかと言え、大元は武内さんの「曖昧な回答」にある。武内さんが曖昧な回答をせざるを得ない程に、シンデレラプロジェクトの進行は不透明なものなのだろうか。仮に、ある程度の方針が決まっているならば、手段はどうであれ逐次説明を入れていくはずである。報連相は仕事の基本なのだから。

「武内さん、担当アイドルとのコミュニケーションの機会とかはないんですか？ —— あ、いえ、毎日忙しくしているのは重々承知しているんですが……」

俺が訊くと、武内さんは視線を下に逸らした。……まずい、地雷踏んじまつた？

「逐次、説明をしています」

いやいや、それが上手くいっていなかった結果がこれじゃないのだろうか。

「前川さんから聞きましたよ。『企画検討中』としか言わない、と」

「……はい。その通りです」

実際、そんなのだろう。もしも複数のユニットを同時進行で進めようとしても、作曲家の先生や作詞家の先生によって、デビュー順が前後してしまう可能性がある。今回は「キャラクターが薄味な子からデビューさせる」という方針上、武内さん自身も苦しいだろう。個性の強い子の曲が出来たとしても、薄味な方を優先させなければならぬのだから。

「これからは、より具体的に説明をしていきます。アイドルの皆さんに、不安を抱かせる事がないように」

俺がどう声をかけようか悩んでいると、武内さんがそう言ってきた。——既に、いつもの仏頂面に戻っている。

「ああ、はい。まだ自分も新人ですが、何か手伝える事があればサポートしますよ」
「……ありがとうございます」

何だろうか。微妙に違和感がある。まるで、本心を何かで必死に覆い隠しているような、そんな感じがする。とは言え、プロデューサーとしての手腕は彼の方が上である。まさか大きな失敗をする事もないだろう。

武内さんに限って——。

「あ〜ん〜ず〜ちや〜ん！ やつと見つけた！」

俺の思考を遮ったのは、突如聞こえてきた大声だった。

「うわっ、ちよつときらり、離してよ」

「ダメダメー！ 直ぐにレッスンをさぼっちゃうんだから！」

双葉ちゃんは、背の高い少女に捕まっていた。……いや何あれ。むちゃくちやでさえ。身長だけなら武内さんレベルだ。

「あ、きらりちゃんだー！」

莉嘉は双葉ちゃんを飼い猫のように抱え込む少女の元に駆け寄り、俺と武内さんの方へ引つ張っていく。

「ほらー！ この前話してた進にーちゃん！ 346にいたんだよー！」

近くに来たら尚更でさえ。ペこりと少女は頭を下げる。

「諸星きらりでーつす！ おなーしゃー！」

「お、お。おなーしゃー」

半ば気圧されるように挨拶を返す。背が高いが、顔は美人というより美少女といった感じだ。……ホント武内さん、すごい子を見つけってくるな。

「にゃー！ 莉嘉ちゃんのイトコって事は、あの城ヶ崎美嘉ともイトコって事にゃー！」

「え？ そうだよ？」

前川さん、今気付いたの？ 莉嘉も驚いてるぐらいのタイミングなんだけど。

「プロデューサーは知ってたの？」

諸星さんが武内さんに訊く。

「はい。彼が入社した後には知りました」

「えー!? 進にーちゃん、メンセツの時に言ったら一発オツケーじゃないの?」

「そればかりは勘弁だ」

親の七光りならぬ、従妹の七光りで入るのは気後れするんだよ。そういうのは自分の実力で入らないと、後々痛い目を見るんだ。それに、結局入社出来たんだからいいじゃねえか。

「……真面目だね。杏には分からないな」

「杏ちゃん! 杏ちゃんはこれから真面目に頑張るの〜!」

双葉ちゃんは、諸星さんに説教されていた。しかし、諸星さんの口調が緩いこともあり、がみがみ言っているような感じはしない。双葉ちゃんの小ささも相まって、まるで幼稚園の先生みたいである。

「前川さん。来週の週末、E. G. G. Sは一足先にデビューするけども、何だかんだ言っただまだ新人だ。——勿論、俺もプロデューサーとしてひよつこだしな。だからまあ、同じ新人としてこれからもよろしく」

武内さん以外では一番まともに話を聞いてくれそうな前川さんに対して、俺は右手を

差し出す。彼女はふんすと鼻を鳴らしながら、握手に応じた。

「よろしくにや。……でも！ みくはすぐにトップアイドルになるんだから！ 首を洗って待つてるにや！」

「ははは、その意気だ」

万力みたいに力入れてるけど、それは無意識なのかな？

所変わって、地下の部屋。今日、三人のレッスンに顔を出せなかった理由を話していた。

「って事があったんだよ」

へえ、とダフネは驚いたような声を上げる。

「プロデューサーさん、あの城ヶ崎美嘉の従兄だったのね」

「驚くところ、そこかな？」

色々と他にないのか？ ハーミーは目を釣り上げて言う。

「申し訳ないと思わないの？ 城ヶ崎美嘉の従兄で」

「そこまで言われるような事じゃないだろ」

エバンスさんが「それにしても」と話題を変える。

「プロデューサー、何だかよくシンデレラプロジェクトの人達と会いますね」

確かに、言われてみればそうだ。シンデレラプロジェクトは全然で一四人というから、既に半分と出くわした事になる。その内の一人は従妹だったのだが。

「それだけ人数が多いって事よ。……武内プロデューサーも、一四人を一斉にプロデュースするなんて、正気の沙汰じゃないわ」

ハーミーが武内さんをそう言うならば、赤羽根先輩は既に狂人の域に達してしまっているだろう。武内さんは「総勢一四人の複数のユニット」に対し、あの人は「別々の三人」をプロデュースしているのだ。同業者から見れば、狂っているとしか言いようがない。

……この世界には転生者もいるんだ、狂人の一人や二人いたところでどうって事ないだろう。

「それよりもだ。準備の方は大丈夫そうか？」

俺が訊くと、三人はそれぞれゆっくりと頷いた。

「わたしは問題ないわ。きっちりレッスンを重ねたから」

「勿論、あたしもよ？ 心配しないでね、プロデューサーさん」

エバンスさんはゆっくりと深呼吸すると、真っ直ぐな目で俺を見ながら言う。

「——まだ怖いです。歌詞が飛んでしまうのが。出てこなくなるのが。でも」

彼女は両脇にいるハーミーとダフネをちらりと見る。

「でも、皆が信じてくれているから……だから、ぼくもステージに立ちます」
「……そうか」

心強いじゃないか。

「最後の調整、きつちりやっておけよ。E・G・G・Sの第一歩だ」

「はい！」

「ええ」

「もちろんよ！」

来週の土曜日。やっと、彼女達をお披露目出来る。

第10話 How about our stage
(1)

遂に、この日がやって来た。今日は、E・G・G・Sがアイドルとして本格的な第一歩を踏み出す日である。

「……緊張するな」

「どうしてプロデューサーが緊張しているのよ……」

落ち着かない俺を、ハーミーがたしなめた。

そう、今日はE・G・G・Sのデビューライブである。とは言え、その規模は大きなものではない。そもそも、シヨツピングモールの中庭ステージで行なわれる、セクシーギルティのミニライブにちよつとだけ顔を出す程度ではあるのだが、それでも不安なものでは不安である。

「どう、皆行けそう?」

片桐さんが三人に声を掛けてきた。

「あたし達は問題ないけど、プロデューサーさんが緊張しているみたい」

「じゃあ問題なし、って事ね!」

片桐さんはぐつと親指を上げた。

「……皆問題ないならいいさ。エバンスさんも、大丈夫だよな？」

エバンスさんはこくりと頷く。

「はい、プロデューサーのアイディアで、何とかなりました」

「……そっか」

役に立てたようで何よりだ。

「エバンスさんの歌詞の覚え方について、いい方法を思い付いた。——協力して欲しい」
プロデューサーはそう言うのと、にっこりと頬を緩めた。ちらりと八重歯が見える。

「協力って言ったって、何をすればいいのよ？」

ハーマイオニーが彼に訊く。

「ダフネ、エバンスさんはいつ『Union Jack』の歌詞を覚え始めた？」

ダフネは腕を組み、思い出していくように言う。

「……確か、振り付けと歌を合わせていった時ぐらいからね。取り敢えず、歌詞の覚えについてでは置いておく事にして、あたしとハーミーのペースに一旦合わせる事にしたのよ」

「ね、ハーミー」とダフネがハーマイオニーに確認すると、彼女は頷いた後にプロ

デューサーの顔色を伺う。

「……ああ、そっか!」

片桐が気付いたように手を打ち鳴らす。

「むむむ、分からないです……」

頭を抱える堀と、未だに釈然としていない及川を無視するように、プロデューサーは言う。

「そうだよ片桐さん、寧ろそうするべきだったんだ。エバンスさんは、振り付けの覚えがとても早い」

プロデューサーはつかつかとオーディオ機器の元に歩み寄る。

「つまり、歌も振り付けの一部として覚えることが出来るなら、自然と歌えるようになる筈だ」

皆が顔を見合わせる中、「でも」と異を唱えたのはハーマイオニーだ。

「もし、上手くいかなかったら?」

「忘れたのかハーミー、もう前例があるじゃないか」

それに、と言葉を続けたのは、彼ではなく片桐だった。

「賭けてみましょう。面白くなってきたじゃない」

彼女は、じつとハリエツトを見据える。

「どうかしら？ 試してみる価値はあると思うけど」

ハリエツトは暫し目を瞑り、考え込む。——答えは決まりきっていた。

「やります。やらせて下さい、プロデューサー。……ほくも、賭けてみたいです」

それじゃ決まりだな、と彼は頷き、オーディオ機器から「お願いシンデレラ」を再生させる。

「早速始めよう。善は急げ、だからな」

そろそろ始まる頃合だ。既にスタンバイしている六人を尻目に、ふうとため息をつく。

「まるで父親みたいじゃないか、城戸くん」

声を掛けてきたのは、セクシーギルティのプロデューサーである五代さんだった。

「ははは、そうかもしれないね。上手くやってくれるか心配で」

彼の言葉に苦笑いしながら、E・G・Gの三人を見る。エバンスさんは白色、ハーミーは赤色、ダフネは青色。「Union-Jack」のタイトル通り、イギリス国旗と同じカラー三色の衣装だ。パンツスタイルの衣装は、サビの激しめな振り付けでも動きを邪魔する事はないだろう。

「ここまで来たら、プロデューサーは信じることしか出来ないさ。オレ達はプロデュー

サーだから、な?」

「……ええ、そうですね」

時間だ。セクシーギルティの三人がステージに上がる。三人の姿が見えるや否や、観客席からは歓声上がる。先の定例ライブに出る事が出来なかつたとはいえ、彼女達も充分に人気アイドルである。

『バキューン! セクシーギルティよー!』

片桐さんの一声で、歓声は更に大きくなった。

『よろしくお願いします〜』

及川さんが手を振りながら周りを見渡す。……ううむ、デカイ。

『おっと! テレパシーが届きましたよ!』

堀がどこからともなくスプーンを取り出し、キョロキョロと辺りを見る。……テレパシーにスプーンは必要ないと思うのだが、キャラ作りだろうか。

『何でも、今日はアイドルの卵が来ているみたいですよ!』

おおつ、と観衆がどよめく。イベントの詳細には書いてなかつたことなので、正にスプーンゲストという訳だ。——それにしても、まだまだひよっこ過ぎるが。

『だったら、早く呼んでみましょう〜』

『そうね、早く会ってみたいわ。皆もそうでしょ?』

片桐さんの呼び掛けに、観客は歓声と拍手で応じる。

『それでは、E・G・G・Sの皆さんです！ どうぞ！』

拍手が鳴り止まぬ中、俺の担当三人がいそいそとステージに上がった。三人がステージに上がるや否や、拍手のボルテージが一段と上がった気がする。よし、第一印象は良さげだ。

『み、皆さん、初めまして！』

エバンスさんの挨拶に、観客が沸き立つ。アウエー感どうの以前に、歓迎ムードだ。これは嬉しい。

『わたし達、E・G・G・Sよー！』

『これからよろしくね？』

ハーミーとダフネの言葉に、再び拍手が鳴った。——やはり、先輩アイドルの威光は大きい。新人アイドルのみでは、この盛り上がりはなかっただろう。小規模とはいえ、会場のボルテージが既に最高潮に達している。

『本当に卵なんですネ〜』

及川さんの感心しきった言葉に、観客席からは笑いが漏れる。……むしろ、オープニングトークの方を合わせていったのだが、まあそこは置いといて。

『こうしてステージに出てきたってことは、勿論？』

はい、とエバンズさんが頷き、ハーミーが言葉が続ける。

『わたし達の曲、聴いてもらえるかしら?』

ステージ的にはセクシーギルティに投げかけた言葉だが、それは同時に観客に掛けられた言葉でもある。

『良いわね! 聴かせてくれるかしら?』

『むむむっ! いい曲の予感がします!』

『楽しみです〜』

観客も、セクシーギルティに賛同するような声を上げた。

『——それで、曲のタイトルだけど』

『あら、あたし達の衣装を見たら分かるんじゃないかしら?』

ダフネ、それはどうかと思うぞ。その三色の要素なんて、色んな所で使われているし。

『そ、それだけじゃ分からないんじゃないかな?』

『そうよ! せめて、三人ともイギリス生まれって事を言わないと!』

セクシーギルティはいつの間にかはけていた。

「城戸プロデューサー、曲が終わったら自己紹介させるべきじゃない?」

一先ずステージから降りた片桐さんが、俺に耳打ちする。……確かに、三人の今のトークではユニット名しか言っていないかった。

「片桐さん、曲が終わったらフォローしてくださいか？」

「ええ、勿論。先輩アイドルなんだから、ね？」

「お願いします、と軽く頭を下げる。」

『今からわたし達のファンになってもらうから、覚悟しなさい！』

おおつとハーミー、ステージの上でも強気だな。

「……言うじゃないか」

五代さんは、にやりと笑いながら俺の方を向く。

「打ち合わせには無かった台詞なんですけどね」

上等だ。先輩アイドルから、ファンをかっさらってみせろ。

『E. G. G. Sで——』

エバンスさんは一旦言葉を切り、深く息を吸った。

『——Union—JACK』

それは、衝撃だった。

「おーい、早く行くぞー」

兄が声を掛けてくるが、私は足を縫い付けられたかのようにその場から動く事が出来なかった。

「……何だよ。……お、アイドルか？」

ほー、と兄は物珍しそうな顔で中庭のステージを眺める。ステージでパフォーマンスをしているのは、私とそう年齢が変わらない女の子達だ。

「お兄ちゃん。今日って何か、イベントやってた？」

どれどれ、と兄はスマートフォンを操作し、このショッピングモールのサイトを開く。
「……セクシーギルティってユニットのミニライブらしいな。こういう所でも営業するんだな、日本のアイドルって」

「……違う」

「何がだよ？」

私は自分のスマートフォンを操作し、セクシーギルティのファンサイトを開く。夜をイメージしたような暗い色調に、ネオン管で象ったようなフォントが踊るサイトだ。ページの上半分を占拠するように、ユニットの三人がポーズを決めている。

「ほら見て！ 全然違うじゃない！」

兄は私のスマートフォンとステージを交互に見比べ、「確かに」と一人呟く。

「滅茶苦茶おっぱいデカい人がいないもんな」

……満面の笑みを浮かべる兄の顔が何だかムカついたので、脛を思い切り蹴ってやった。

「いいいいつつてえ！ いや待てよ、目がいくだろ普通！」

確かにそうなのだが、何だかムカついたからしようがないのだ。うん、しようがない。
「つ、つつつ、つてえ……。……。そうか、新人かあ」

兄は感慨深そうに、再びステージを眺める。俳優としてある程度キャリアがある分、思うところがあつたのだろう。

「あの子、凄いいね？」

私は、眼鏡を掛けた子を指さす。純白の衣装に身を包んだ彼女は、他の二人を圧倒せんとばかりの踊りを見せていた。

「ありや相当じゃないの？ ダンスだけで食っていけるぜ」

日本のアイドルはレベルがたけーなあ、とのんびりした口調である。

「三人とも外国人つぼくない？」

「……言われてみれば確かに」

俄然、興味が湧いてきた。日本でデビューする外国人だけのアイドルなんて、珍しいじゃない。

「ちよつと見ていきましょ、お兄ちゃん！」

「馬鹿、僕はそろそろ休みたい……。つてえ！ 脛二回目！ 二回目だから！」

荷物持ちが文句言わない。兄の腕を引っ掴み、中庭の方へと進んで行った。

持ち曲が終わった。新人とは思えないようなパフォーマンスを見せた三人に、ボルテージが上がったような歓声と拍手が鳴り響いた。——よし、第一関門突破だ。

『いやー凄い！ 凄かったよ三人とも！』

再びステージに上がったのはセクシーギルティの面々だ。

『皆さん、E. G. G. Sの三人にもう一度拍手をお願いします〜』

及川さんの呼び掛けに応じたような拍手が鳴る。

『やっぱりこんな凄いステージを見せてもらったら、名前気になるじゃない？』

『そうですね！ 私のサイキックパワーでも、名前はわかりませんでした！』

堀はちよくちよくサイキックネタをぶち込んでくるな。前世のアイドルより「なんでもあり感」があるとはいえ、ここまで行くとは。

『それじゃあ、お名前をお願いします〜』

E. G. G. Sの三人は顔を見合わせる。右手を上げたのはダフネだ。

『ダフネ・グリーングラス。こう見えても一三歳よ？ これからよろしくね』

ダフネはちらりと横のハーミーを見る。

『ハーマイオニー・グリーンジャーよ！ ハーミーでいいわ！ ちゃんとして覚えて！』

最後はエバンズさんだ。

『ハリエツト・エバンスです！
……えっと、このライブの後も、よろしくお願いします』

第11話 How about our stage
(2)

観客に手を振りながら、E. G. G. Sの三人はこちら側に降りてきた。

「凄いわプロデューサー！ わたし達、本当にアイドルになったのね！」

ハーミーが興奮しきりに言う。

「そうね。ハーミーの言う通り、やつと実感出来た感じよ」

ダフネはハーミーの言葉に頷き、こちららに向かつて微笑む。

「ぼくは……ぼくはむしろ、夢を見ているみたいで……」

エバンスさんの言葉に、ハーミーとダフネはふふつと笑う。

「何処かの誰かさんが、ずっと焦らしてたから。あたしとハーミーは感傷に浸っちゃうわね」

ダフネもなかなか、意地悪な事を言うなあ。

「ああ。本当に悪かった。でもこうして、満点のステージが出来たんだ。俺は誇らしいよ」

おいおい、と口を挟んで来たのは、五代さんだ。

「まだまだ終わってないぜ」

……そりやそうだ。彼にとつてみれば、これからが本番だ。

『皆ー！ E. G. G. S のファンになっちゃった？』

片桐さんの問いかけに、観客は歓声を以て応じる。

『むむむっ！ 皆さん、今度は私達のステージですよ！』

『一生懸命歌います〜』

『だから——』

片桐さんが、ちらりとこちらを見た気がした。

『あの子達のファンになった人達も、もう一度私達のファンになりなさい？』

……成程。言うじゃないか。

「ふうん、片桐さんって意外とビッグマウスじゃない」

「お前が言うかハーミー」

兄は「おおっ!?!」だったり「うわああ」だったり、圧倒されたような感嘆を漏らす。主に及川雫を見て。

「お兄ちゃん、サイテー」

「仕方ないだろ！ あんなの、見るなって言う方が酷だ！」

……確かに、周りの男性陣は及川雫を見ているような気がする。と言うよりか、シヨップイングモールのミニライブのはずなのに、家族連れの観客がほとんどいない。熱心なアイドルファンが、ここに足を運んだみたいな。

「いやあ、凄いなあ。実際にこうして見ると、やっぱりパワーを感じるな」

間奏中、兄がしみじみとした調子で言う。何を言っているんだか。

「胸しか見てなかったくせに」

「んなつ、んな事ないって！ きつちりライブも見てたつて！」

さあ、どうだろうね。演技はそこそこなのに、嘘は下手つびなんだから。

「しっかし、あの子達からしてみたら、滅茶苦茶アウエーじゃないか。こんな中でよくやったもんだよ」

突然、兄の顔が真面目っぽいものになったかと思うと、これまた真面目っぽい事を言い出す。

「アウエー？ 盛り上がっているじゃない？」

「だからこそだよ」

よく分からないが、兄はこくこくと分かっているように頷き続ける。

「何だったっけか。……E. G. G. S?」

「うん、確かそうだったはず」

「成程成程」

にっと兄は笑う。

「こりや僕も、うかうかしてられないかもな」

その表情は、頼りない兄のものというよりは、テレビのインタビュー等でたまに見る、俳優としての顔だった。

「胸見ながら言わないでよ」

「だっかつらっ！ そればっか見てる訳じゃないって！」

ほーら、やっぱり見てるじゃない。何となくムカついて、足を踏みつけてやった。

「いいいいつつたあー！ かかとお！ かかとめり込んでる！」

知らないわよそんなの。

――
圧倒されているのだろうか。メイクを直している時も、三人はずっと黙ったままだった。

「やっぱり、凄いわ」

漏らすように呟いたのは、ダフネだ。

「凄いわ、確かに」

「分かつてはいましたけど」

他の二人も、ダフネに続いて感嘆を漏らす。……うーむ、こりやいかんか？

E・G・G・Sの三人には、この後「お願いシンデレラ」が控えている。プレッシャーがのしかかって、失敗をしてしまわなければならないのだが。

三人とも、動悸を抑えるように胸の辺りに手を置く。

「あのサイズは真似出来ないわ……！」

「無茶よあんなに育つなんて……！」

「ぼくはもう、間に合いそうにないよ……！」

——なんだそりゃ。

「及川さんにばかり目が行くけど、片桐さんも大概よ」

「そうね……。あの身長にあのサイズだから、相当のものね」

「牛乳毎日飲めば追いつくかな……無理かも……！」

「おい、聞こえてるからな」

俺が声をかけると、メイク直しがほぼ終わった三人が一斉に振り向く。

「スケベ野郎！」

「見損なつたわ、プロデューサーさん」

「聞かないで下さい！」

つれえ。分かっちゃいたけどつれえ。五代さんが俺の肩にポンと手を置きながら、た

め息をつく。

「オレも目のやり場に困るからさあ。同じ女性だと仕方ないんじゃないかなあ」

「そ、そうですね……」

男二人、しみじみとしてしまった。五代さんも大変だなあ。

さて、最後の全体曲だ。セクシーギルティの三人には連続でステージに立つてもらおう事になる。大変だろうなあと思っていただけのだが、「彼女達が望んだ事だから、心配する必要が無い」と五代さん。

「キツイのを承知でやると言ったんだ。本当に、お人好しなヤツらだよ」

文句をつらつらと述べているが、その顔は何処か嬉しそうだ。

「まあ、E. G. G. Sの三人もいざれそうなる事を願っておきますよ」

「ははは、さっさとそうなってくれよ」

ステージの上の堀が『またまた、E. G. G. Sの皆さんでーす!』と観客たちに言うとうと、E. G. G. Sの三人は再びステージに上がっていった。

「そういえば、シンデレラプロジェクトってどうなっているんだ?」

不意に、五代さんがそんな事を訊いてきた。

「えっ? どうして俺に訊くんですか?」

「いや城戸くんさ、シンデレラプロジェクトのメンバーに従妹がいるんだろ？」

辺りに言いふらしている訳じゃないのに、何故か広まっている。誰だよ広めたやつは。

「従妹はいますけど、あいにく何も入ってきませんよ。最近は彼女達の営業もありますから」

特に何も聞いていないが、向こうからも——特に莉嘉から相談事を持ち込まれている訳では無い。便りのないのはいい便り、といった具合だろうか。

「そうかあ。……オレも小耳に挟んだだけで詳しいことは分からないけど、最初にデビューするのは一組だけだったみたいだぜ」

「そうなんですか？ 初耳ですね」

彼の話によると、この前の三人娘のユニットはもう少し後にデビューする予定だった。つまり、当初は女子大生とロシア人ハーフの二人組ユニットが単独でデビューする事になっていた、との事だ。

「最初はE. G. G. Sみたいにな、別のユニットの前座としてライブに参加するつもりだったらしいんだが、事情が変わったとか」

「事情が変わった？」

五代さんは、ため息をつきながら答える。

「いくら何でも、五人という多さで、なおかつ別ユニットを前座にする訳にはいかないだろう?」

「……そうですね」

正直、一度に紹介してしまっただけはしつちやかめつちやかになるだろう。ただでさえよく知らないのに、「私達とこの人達は別のユニットです」なんて言われても、しつくりとこない。更には、先輩アイドルユニットとその五人で、どちらが主役なのかが分からなくなってしまう。結局は先輩アイドルのライブなのだから、主役は先輩アイドルユニットに譲る必要があるのだ。——今回のE・G・G・Sの場合は、向こうの厚意があつての事である。

……俺としては、二組をそれぞれ別の先輩ユニットの前座にすればいい話であるとは思うのだが。どうしてこう、346は力技を押し切る人が多いのだろうか。

「そういうわけか、新人アイドルのみでミニライブをする事になったらしい」
「ええ!? そんな無茶な」

正気か? そもそも新人アイドルを前座に据える意味を忘れちゃいないか!?

まず、そもそもの目的として「顔見せ」というのがある。仮にデビューしても、人の目に映ることがなければ意味が全く無い。言い方は悪いかもしれないが、先輩アイドルという「客寄せパンダ」を利用して、そのファンを中心に知名度を広めていく。

ゼロからイチを作るのは至難の技である。そのため、別のイチをこちらのイチにもする、というやり方を使うのだ。

第二に、先輩アイドルユニットがいるメリットが多い、という事もある。仮に前座の新人アイドルがステージ上でハマをやらかしても、先輩アイドルがフォローを入れるだろう。また、場馴れしていない新人のトークを広げ、盛り上げる役割もある。

最後に、今後の成長への足がかりになりやすい、というのもある。先輩アイドルがどのように観客を魅了しているのか、自分では何を武器に出来るのかを分析していける。ステージを終えた後でも、先輩アイドルから様々なアドバイスを受けることが出来るのは大きい。おそらく、プロデューサーの視点では気付かないような事もあるだろう。勿論、ステージを始める前にアドバイスを受けることも出来る。

「客寄せパンダ」と「ミスした場合の保険」、「今後の目標設定」。俺が思いつく限りでも、先輩アイドルがいる場合の利点はかなり大きなものだ。……それを、一切合切捨てる意味が見い出せない。

「そもそも誰が言い出したんですか、そんな事」

「……今西部長じやないか？」

「うわ出た」

考えるよりも先に、声が出てきてしまった。あの人は本当に何を考えているのか分か

らない。

「武内さんは……まあ引き受けたんでしようね」

「あの人、部長には頭が上がりないからなあ」

346に所属するアイドルのプロデューサーだったら、誰も頭が上がりないとは思うのだが。

「城戸くんの言う通り、かなりの無茶だ。二人組の方はともかく、三人組の方は所属してから日が浅い」

あの三人組に関して言えば、大きな場でバックダンサーとして、ステージデビューを既に終わらせた実績もある。おそらく、武内さんはその事も考慮したのだろう。

「間に合うといいですね」

「全くだ。……武内さんに限って、大きな失敗はないと思いたいが」

まあ武内さんだし。何だかんだで間に合わせるだろう。

「そろそろ終わるな」

五代さんと話し込んでいたら、いつの間にか全体曲も終わっていたらしい。ステージの上では、セクシーギルティとE・G・G・Sの六人が中央に寄り集まってポーズを決めていた。音源の再生が終わるとすぐ、爆発するような歓声が上がってきた。

『皆ー！ 今日ありがとう！』

『サイキック感謝です!』

『また会いましょうね〜』

『これからも、E・G・G・Sをよろしくお願いします!』

『わたし達の事、ちゃんと覚えていなさい!』

『SNSで広めちゃってね?』

六人は観客に手を大きく振りながら、こちら側に降りてきた。

『お疲れさん。今日も成功だ』

五代さんが自分の担当アイドル達に声をかけると、片桐さんは目を輝かせる。

『じゃあ、ぱーつと飲みましょ! もちろん、プロデューサー込みで!』

『おいおい、オレは財布か』

『サイキックメツシーくんです!』

『おい誰だそんな言葉を裕子に教えたやつはあ!』

……向こうは向こうで、そこそこにリラックスしているらしいな。

『プロデューサー、わたし達には何も無い訳?』

ハーミーが頬を膨らませながら詰め寄ってくる。頬をつついてやると、「ぶひゅー」と間拔けな音を立てながら、彼女の口から息が漏れた。

『何なのよ!』

「新人としては大成功だ。ただまあ、もっとトークを磨いていかなきゃな」
「あら、それは残念。何とかしなくちゃね」

正直、セクシーギルティとの一問一答といった形になってしまったのは良くない。近いうちにラジオ番組への出演もある事だし、自分達でトークを広げる事が出来るようになって欲しい。

「真面目な話、今回の観客は目が肥えたファンが多かった。セクシーギルティ自体の追っかけみたいなの連中だな。……そいつらを沸かせたんだ。自信持つてけよ」

片桐さんも、そういった客が多いことを理解しての立ち回りだった。実際、ライブ中は異様な熱気だったしな。

「……はいー」

エバンスさんが満面の笑みを見せる。

「分かってるわ！」

ハーミーは腕を組み、胸を張る。

「過信は禁物よ？」

ダフネが二人をたしなめるように言った。

——デビューライブは、大成功だ。

第12話 How about their stage

e (1)

五月も終わりが近付いて来た。梅雨に差し掛かるこの時期、地下に位置するE・G・G・Sのプロジェクトルームでは筆記用具の音が鳴り響く。

「うう、分からない……」

エバンスさんが弱音を吐きながら参考書と睨めっこする。そう、テストである。中間テストだ。

「分からなかったら、キッチリと学校の先生に教えて貰え。『アイドルだから勉強出来ないです』は言い訳にならないからな」

俺が会議の資料を読み直しながらエバンスさんに声を掛けると、ハーミーがむっとしたような感じで言ってくる。

「テストがないご身分はいいわね。こうして、直前の勉強でバタバタしないで済むもの」
「バッカお前、俺は人の二倍は定期テストがあつたんだぞ。転生してるんだから。」

「あまり参考にならないと思うけど、プロデューサーさんの勉強方法を教えてくれない？」

ダフネは問題集の自己採点を終えると、こちらに顔を向けて訊いてきた。成程、俺の勉強方法か。

「そりやもう、普段から真面目にコツコツと、予習復習を続ける事だよ」
「身も蓋もないですねそれ……」

とはいえ、それが一番良い事に変わりはない。

「後、余裕があるなら先の内容を把握しておくとか」

「よく言うわ」

ハーミーがため息をつきながら、教科書をめくる。いやいや、結構大事だぞ。

何せ俺の場合は、二回目の小学生時代は暇だったのだ。流石に暇過ぎて、中学高校の内容を「復習」したぐらいである。小学校の内容は兎も角として、中学高校の内容には抜けが多かったのもある。早め早めに復習を繰り返したお陰で、転生前よりも偏差値は高くなった。「勉強に王道なし」といった名言は伊達じゃない。

「そもそも、だったらプロデューサーが教えなさいよ」

ハーミーが口を尖らせて言う。その言葉に真っ先に反応したのは、何故かエバンスさんだった。

「プロデューサー、教えてください！ お願いします！」

「ええ……？ 俺にも仕事があるんだけど」

しかし、丁度資料は読み終わった。ここで無下にするのも、少しばかり後味が悪い。どれどれ、五教科のどれかなら少し見てやってもいいか。

「……つて、全部かよ！」

エバンスさんの目の前にずらりと並んでいるのは、英語以外の全ての科目の教科書と参考書だった。ええ……マジですか……。

「意外よね。エバンスさん、勉強出来そうだし」

……ダフネの言う通り、ラウンド型の眼鏡のせいでエバンスさんは頭が良さそうに見える。

「えええマジか……。その中でも、何処が分からないとかある？」

「全部です」

「全部う!？」

分からない所も分からないのかよ！ こりや教えようがねえぞ！

「……プロデューサー、フアイト」

……マジですか。俺が教えなきやいけないんすか。

シャープペンシルを置いたハーミーが、ぐぐぐと上体を伸ばす。

「んー疲れた！ ひと休みしましよ、ダフネ」

「そうね。そうしましょう。……プロデューサーさん、エバンスさんはどう?」
「お、おお。……まあ何とか」

高校一年で一番最初の定期テストという事もあり、並ぐらいの点数はマーク出来るぐらいだろう。必死に勉強すれば。

「……。……。——うあ、……。——」

当のエバンスさんは、完全に思考が回っていない様子である。どの道、これ以上勉強し続けるのは無理だろう。ハーミー達に便乗して、エバンスさんも休ませておこう。

「そういえば聞いた? 『ニュージエネレーションズ』のデビューライブ、今週末にあるらしいわ」

ハーミーが突如、ダフネに訊く。ニュージエネレーションズとはこの前出くわした、島村卯月さん、渋谷凪さん、本田未央さんの三人組の事である。

「ね、見に行かない? ダフネ、ハリエツト!」

「そうねえ」とダフネは逡巡する。

「でも、テストよ? 勉強した方がいいと思うけど。特に、エバンスさんなんて」

うぐつ、とハーミーは言葉に詰まる。ハーミーにはまだ、別のユニットのミニライブを見る余裕があるのだろうが、あいにくエバンスさんには一ミリも余裕がない。

「ぼくの事は……気にしないで……ああ、お星様が見える……彗星かなあ……でも彗星

はもつとこう、パーツて動くし……」

いかん。エバンスさんが精神崩壊を起こしてる。

「しっかし、この時期にライブとはまた。武内さんも酷な事をするよなあ」

ため息をつきながら言う。普通の高校生でさえ、テストやら全国模試やらで忙しいのだ。アイドルになったら、その苛烈さは言うまでもない。

「あたしもそう思うわね。……見直しておきたいところが多いから、今回はパスするわ」
「むう、残念ね……」

ぶくうと頬を膨らませて、ハーミーは机に伏せる。

「何だったら俺が一緒に行こうか？ 丁度休みだから」

休みではあるのだが、今後の勉強として他の新人アイドルのライブや、武内さんの肝入りの実力を見てみたいのだ。ハーミーはぼつと起き上がると、顔をしかめる。

「嫌よ。デートしてるって思われたくないわ」

一番ねーよ。

「俺、そんなに童顔か？ 身長低いかな？」

「そんな事ないですよ。プロデューサー、凄く大人っぽいです」

いやー、つれーわー、褒められてつれーわー。前世からの累計年齢は五〇弱だけど。

「あら？ おめかしするのハーミー？ アドバイスしてあげるわよ？」

「勉強するんでしょ、ダフネ！」

「普通でいいと思うが」

「ダメよプロデューサーさん。なんだつたら、プロデューサーさんの分もアドバイスするわよ？」

「いいつての」

「デートじゃねえし。精々、おじと姪ぐらいにしか見えないだろう。……無理があるな。ハーミーの見た目はバリバリの外国人だし。」

「そうじゃなくてな、ハーミー一人だと色々と不安だろ？　せめて大人一人ぐらいいた方がいいかと思ってな」

「プロデューサー」

不意に、エバンスさんが真面目な顔で話しかけてきた。

「警察が絡むような事にならないで下さい」

「いやないつて」

「ない……よな？　武内さんみたいに。」

日曜日、ニュージエネレーションズ達のライブ当日だ。……しかし改めて思うが、武内さんのコネや実力は並大抵のものでは無い。普通、新人アイドルのデビューライブに

こんな所を使うか？ 池袋の、しかも誰もが聞いた事のあるような商業施設だぞ？

E・G・G・Sの時とはスケールが桁違いだ。

「結局、プロデューサーがいて正解だったわ……。凄い人ね」

横でハーミーが感心したように呟く。確かに、ハーミー一人だと人混みで滅茶苦茶になつていたかもしれない。

「休日だし、都心だしな。並のアイドルでも中々ないぜ」

デビューの話が来て一ヶ月弱で此処を押さえたとなれば、これはもう奇跡としか言いようがない。事務所も、このプロジェクトに力を入れているのだろうか。

「凄いわね、シンデレラプロジェクトは。こんなにも注目されているなんて」

「いや……。それはどうだろう」

俺の歯切れが悪い言い方に、ハーミーは少し引つかかったらしい。不思議そうな顔で「どうして？」と訊いてくる。

「こんなにも人がいるのよ？」

「それはあくまで、ここがそういう場所だからだよ。あの子達がライブをするとか、そんな物は関係ない。E・G・G・Sのデビューライブの時も、結局はセクシーギルティ目当ての観客ばかりだっただろ？」

逆に言えば、デビューライブを行なう五人は自分達の実力のみで、施設を往来する

人々の足を止めなければならない。中々に頭が痛くなりそうだ。

「……つて事は、ライブを見て貰えないつて事？」

「んな事はないと思うが。武内さんの肝入りだ、誰も見向きもしないなんて事は絶対にないはずだ」

とは言え、ある程度の通行人の足を止められたら良いぐらいだろう。おそらく武内さんも、その辺りをライブ成功の基準に据えているはずだ。

「少なくとも、俺達はあるの子達のライブを見る。誰も見ないなんて事態は起きないさ」

人間の心理的に、何人がライブを見ていれば便乗してライブを見てくれるだろうし。

「……それならいいんだけど」

ハーミーは不安げな表情をして、俯いた。

開演の時間が差し迫ってきた。噴水をバックに据えたステージの周りには、ある程度の人だけが出てきている。普通に人がいるな。こりや心配は杞憂だったかもしれない。

「何よ、心配する必要なかったじゃない」

ハーミーも安堵に胸を撫で下ろす。

「本当に、新人としては満員御礼だ。すげえもんだよ」

思えば、特にニュージエネレーションズの三人はライブ前の告知に凄い力を入れていた。それこそ、既にデビューしているE・G・G・Sよりも先にラジオ番組に出演するぐらいには。

「後は、この中でキッチリとパフォーマンスが出来たら完璧だな」

「大丈夫かしら」

「ニュージエネレーションズの三人に関して言えば問題ないだろうな。何せ、定例ライブのバックダンサーをしたぐらいだ」

緊張はすれども、足がすくむ事はないはずだ。……彼女達よりも心配するべきは、女子大生とロシア人ハーフの二人組ユニット、「ラブライカ」だろう。その二人にとってみれば、今日が正真正銘、初ライブなのだ。

「……始まったみたいよ、プロデューサー」

ハーミーに促されステージを見る。雪のような純白のドレスを身にまとっているのは、ラブライカの二人だ。

「えつと……初めまして。ラブライカの、新田美波です」

ただたどしく口を開いたのは、大人っぽい魅力を持った亜麻色の髪の女性だ。

「オーチニ・ブリヤートナ……初めまして、アナスタシア、です」

聞き慣れない挨拶をした彼女が、ロシア人ハーフだろうか。銀髪のショートは純白の

衣装と相まって、雪原のような印象を受けた。

「聴いてください——」

間髪を入れずに、新田さんは観客達に声をかける。

『Memories』

やはり武内さんの肝入りともあって、新人アイドルとしては良く出来ている。しつとりとした曲調は、静かに降る雪を連想してしまう。ただ、やはり——。

「少し必死になり過ぎているわね」

どうやらハーミーも気付いたようだ。力が入るのは分かるのだが、力むような曲ではないはずである。緊張してしまっているのだろうか。

「ハーミーも気を付けろよ？ 今後、こういう曲をやるかもしれないからな」

俺の忠告に、彼女はふんすと鼻を鳴らす。

「当然よ。しつかり歌ってみせるわ」

ふむ、心強い。エバンスさんは兎も角、ハーミーとダフネの二人はキツチリとやってくれるだろう。

「……ありがとうございます」

曲が終わり、ラブライカの二人はぺこりと頭を下げた。その表情はやり切ったよう

な、達成感を含んだ笑顔だった。少なくとも、緊張し過ぎて歌詞が飛ぶような事も、ゆつたりとした振り付けをミスする事もなかったように思える。偉そうに批評する立場にはないが、上出来だろう。

「凄いわね、あの二人」

ふと、ハーミーが感想を漏らす。

「ああ、よくやり切ったよな」

さて、お次はあの三人娘だ。

ラブライカの二人と入れ替わるようにして、ニュージエネレーションズの三人がステージの上に立つ。赤色を基調とした、正統派アイドルといった衣装だ。アクセサリーに、それぞれのイメージカラーをあしらっているらしい。……三人とも緊張しているのだろうか。表情が硬い。特に、啖呵を切っていた本田さんの顔色が優れないように見える。

「ニュージエネレーションズです！」

第一声を放ったのは、ピンク色のアクセントをあしらっている島村さんである。

「私達のリーダーの……」

渋谷さんがちらりと本田さんの方を見ながら言うと、本田さんはぱつと顔を上げて言葉が続ける。

「本田未央でーす！　そしてこの子が——」

「島村卯月です！　頑張りますね！」

「私は渋谷凜。これから宜しくね」

うーむ、本田さんは緊張が顔に出ってしまうタイプだろうか。少し笑顔がぎこちない。

「それでは、ニュージエネレーシヨンスで、『できたてEvo！　Revo！　Gene
ration！』です！　聴いてください！」

第13話 How about their stage

e (2)

パフォーマンス自体は、問題がない。ただ、本田さんの表情がずっと引つかかる。

「緊張しているのかしらね」

「多分な」

定例ライブの時はあくまでバックダンサーであり、特に注目される事もない。仮に注目されるとするならば、それは大きな失敗をした場合だ。それに比べて今回は、自分達が主役であり、些細なミスでも目に付いてしまう。このユニットのリーダーは彼女らしいので、その分気負ってしまっているようだ。

曲が終わり、両脇の二人が観衆に手を振っている間も、本田さんは俯いていた。

「……様子がおかしいわ」

「気付いたか、ハーミー」

確かに、様子がおかしい。新人としては問題ないレベルのパフォーマンスだった。既集まっていた観客を落胆させることもなく、寧ろ通行人を新たに引き留めるぐらいだったのだ。大成功であると言っても過言ではない。

しかし、本田さんの表情は浮かないものである。——何かがおかしい。

その時だった。ふと上を見上げた本田さんは、まるで逃げるようにステージを去つたのだ。島村さんと渋谷さんは、慌てて観客に向かつて会釈すると、彼女を追いかけるようにステージから降りていった。

「やっぱり、様子がおかしいわ！ プロデューサー、今すぐ向かうべきよ！」

ハーミーが急かすように、俺に声をかけた。

「分かったよ。……迷子になったら困る。ハーミーも着いて来い」

「いいの?」

「それぐらい何とかするっての」

一応、俺達も346の関係者だ。彼女達の初舞台ともなれば、武内さんもいるだろうし。

スタッフ数人に場所を訊き、「関係者以外立ち入り禁止」の扉を開ける。開けた先にいたのは、既に私服に着替えた本田さんだった。

「本田さ——」

俺が声を掛けようとする、彼女は顔を俯かせ、そのまま脇を通り抜ける。

「待って!」

ハーミーが手を伸ばすが、僅かに届かない。……ここで本田さんを逃がしたら、大変

な事になる気がする。

「本田さん!」

俺も追いかけてようとするが、本田さんは雑踏に紛れ込んでしまった。——くそ、見失ったか。

「城戸さん……」

力なく声をかけたのは、武内さんだった。その後ろには、今にも泣きそうな顔をした島村さんと、険しい目付きをした渋谷さんがいた。

「一体、何があつたんですか?」

俺が訊くと、彼は首に右手を添える。

「答えなさいよ!」

感情を抑えられない様子の子のハーミーが、鬼気迫る調子で訊く。

「未央が——」

答えたのは、未だに険しい目付きで武内さんを睨む、渋谷さんだった。

「未央が、アイドルを辞めるって……」

「……は?」

「どういう事だよ。」

おそらく、ボタンの掛け違いだ。その時には気付くことがないが、後々になってズレていた事が分かる。服ならまだいい。ボタンをかけ直せばいいだけなのだから。しかし、人の認識となると、そもそも気付くことすら遅れる。気付いた時には、大事になってしまっている事も多いのだ。

「プロデューサーは、理由が分かるんですか？」

翌日、問題集に向かっているエバンスさんが訊いてきた。相変わらず間違いが多いのだが、今はそれどころではない。問題集にも載ってないような、厄介な出来事が起きてしまったのだから。

「もつと人がいるもんだと思ってたらしいな」

昨日の武内さんの話だと、どうもその辺りの認識のズレが発展したものらしい。

「あら、新人だったら聴いてもらえるだけでも成功じゃない？」

ダフネの言う通り、実績のない新人ならば聴いてもらえるだけでも御の字なのだ。足を留めてもらうだけでも上出来なのに、あの三人組は新たに人の足を止めた。素人が二ヶ月弱であそこまで行くのは、武内さんの能力以上に本人達の実力があるからこそなのだ。

「武内プロデューサーは、どうするって言っていました？」

「戻ってくるように言うらしい。ただ、どうなる事やら」

本田さん自身にその気が無ければ、どれだけ呼びかけた所で無駄になる。

「……プロデューサー、どうにか出来ないの!？」

ハーミーが訊いてくる。その場に居合わせた事もあり、二人よりも必死だ。

「残酷な事を言ってしまうが、俺達にとつてみれば『対岸の火事』だ。何も出来る事は無い」

そもそも、武内さん自身がかすべき問題である。外野がしゃしゃり出るような事をするべきではないし、彼もそれを望んではいないだろう。

「だったら、わたしが!」

「何処に住んでるかとか分からねえだろ」

「武内さんに訊けばいいじゃないそれぐらい!」

「あの人が教える訳ないっての」

住所はプライバシーに関わる事柄だ。武内さんが教えるとはどうも思えない。

「武内さんがどうにかするべき問題だ」

そう、彼自身が——。大きなため息が漏れ出た。

「ハーミー、俺も本田さんの事が心配だよ」

ただ、と言葉を続けようとして、結局口をつぐんでしまった。

むすつとしたハーミーの表情が、昨日の渋谷さんと何処か重なってしまつて。

ずんずんと家路を急ぐ。全くもう、プロデューサーも頼りにならないんだから。こういう時こそ、同じ新人アイドルが何とかするべきなのよ！ 今に見てなさい！

でも、本田さんの住所を知らないのは本当の事だった。結局、プロデューサーも教えてくれなかつたし。島村さんと渋谷さんも、知らない様子だつたわね。

自宅のマンションの集合ポストを見て、ふとある苗字に目がいく。……まさか。「本田」なんて苗字はありきたりなものだし、そんな事ありえないわ。だって、そんな偶然が起きたら、ロックハート先生の小説みたいじゃない。

「いえ、当たって砕けろよ、ハーマイオニー」

自分を鼓舞して、「本田」さんの家のインターホンを押す。——反応がない。いいえ、諦めてはいけないわハーマイオニー！ 「サンコノレイ」って言葉もあるくらいなんだから！

「こうなつたら、しつこく鳴らすんだから！」

もう一度、インターホンを鳴らす。やっぱり返事はなかつた。まだまだよ！ 返事があるまで鳴らすんだから！

「いい加減にしなさいつたらー！」

三度、インターホンを鳴らす。結局、何の反応もなかつた。

「いい？ 明日も来るからー」

聞いていないとは思うけど、そう言ってしまった。

——
ハーミーから来たメツセージに頭を抱える。

「何やってんだアイツ……」

自宅アパートに本田姓の苗字があつたらしく、意地でも呼び続けるとの事だった。止めてくれよ、本田さんの家族にまで迷惑だろ。それに、違う家だった場合はどうするつてんだ。

だが、ここで止めようとしたら——。何だか、問題が尚更こじれてしまうような気がする。ああくそ、頭がいてえ。

『他の人に迷惑がかからないやり方で頼む』

俺が返信を送ると既読通知がすぐ付き、よく分からないキャラクターがサムズアップしたスタンプが送られてくる。こいつ、スタンプで返事を有耶無耶にするつもりだな。

さてどう返すものか、と考えていると、扉がノックされる。

「進兄、いる、よね？」

—— 珍しいやつが来たな。

「ああ、入って来い。美嘉」

カチャ、と静かに扉を開けて入ってきたのは、沈んだ顔の美嘉だった。

「何か飲むか？ やつすいコーヒーか紅茶しかないけど」

「いい。いらない」

調子が狂うな。いつもだったら、何かしら文句をぶつたれるはずなのに。

「……アタシのせいなのかな」

ほつりと美嘉が零した。

「何がだよ」

「その、未央が辞めるって言い出したの」

……ああ、そう来るか。

「お前のせいじゃないって。そもそもあれは——」

「そうだけど！」

俺が言葉が続けようとする、彼女は突如大声で俺を制した。

「……そうだけど、でも、責任感じるじゃん、普通」

確かに、武内さんと本田さんの間に起きてしまった、ボタンの掛け違いの切っ掛けにはなったかもしれない。おそらく本田さんは、美嘉のステージにバックダンサーとして立ってしまったせいで、「アイドルのライブにはこれくらい来るのが普通である」と誤解してしまったのかもしれない。

「アタシが、あの三人をバックダンサーにしたから……」

「本田さんが誤解した、ってか」

そもそも、箱の規模が圧倒的に違うんだけどな。

「武内さんは、何か言ってたか？」

「……分からない。いなかったし」

「——そうか」

武内さん自身、これは不味いと思っっているはずだ。本田さん呼び戻そうと奮闘しているに違いない。

「あの人の事信じられないよ、進兄」

「そんな事はないんだけどな」

仕事は誠実で真面目だし、浮いた噂も聞いたことがないし。人間味があるかと訊かれたら、若干怪しいかもしれないが。

「どの道、お前が気に病む事はないって。結局、本田さん自身がどうしたいかって問題なんだから」

簡単な話だ。アイドルを続けるのか——あるいは辞めるのか。それを最終的に決めるのは、他でもない本田さん自身である。

「何だったら、俺から武内さんに訊いておくよ。あの人もあの人で忙しいかもしれない

けど」

美嘉は小さく「うん」と返事をした。

「そら、さつさと帰りな。おばさんが心配してしまう」

「……うん」

依然として浮かない表情だったが、美嘉は部屋を去っていった。

「——全く」

E. G. G. Sにとっては対岸の火事だったが、俺にとってはそうでもなかったらしい。

「武内さん」

焦っている様子の武内さん呼び止める。

「すみません城戸さん。先日は——」

「単刀直入に訊きます。本田さんは現在、どうしていますか」

武内さんは視線を下ろし、首筋に右手を添える。まだ解決に至ってないって事か。

「申し訳ありません。無関係のはずの城戸さんにまで、心配を——」

「無関係じゃないんですよ」

武内さんは右手を首筋に当てたまま、頭を上げて俺を見る。

「俺自身は兎も角、俺の『従妹』が見初めた子達ですからね」

真意が分かったのか、彼は再び視線を下げた。……くそ、俺はそんな所を見たい訳じゃないんだよ、武内さん。

「武内さん、お願いですから一人で全部抱え込もうとしないで下さい。何だったら、俺も力になります」

口を突くように、そんな言葉が出てきた。——確かにE・G・G・Sには何の関係もないし、本来ならば武内さんが解決すべき問題である。だが、そんな事は関係なく、ただ——。ただ、あの時の美嘉の顔が脳裏によぎったのだ。

——あの人の事信じられないよ、進兄。

……んな訳ねえだろ。

「………検討します」

………そうじゃないだろ。

「今回の問題は、私自身が対応します」

………違うだろうが。

「………分かりました」

一体どうしたって言うんだ、武内さん。どうしてそう、頑なに一人で抱え込もうとするんだ。

「覚えていて下さい、武内さん」

そのまま歩み去ろうとしていた武内さんを呼び止める。俺は彼の方を振り向いたが、彼は振り向きもせず、前をじつと見据えていた。

「あなたは一人じゃないです。……担当しているアイドルも、千川さんも、何だつたら俺もいますから」

武内さんはただ、考えあぐねるように右手を首筋に添えていた。

第14話 Can you open your door (1)

ぐつたりとテーブルに突っ伏しているエバンスさんを見て、ダフネは困ったように笑い、ハーミーはぶすりと不機嫌な顔をしていた。

「終わりました……何もかも」

この際、何が終わってしまったのかは訊かない方がいいだろう。

「うーん、こんな状態でレッスン出来るか？」

「絶対に無理。普段から勉強しないからよ、ハリエツト」

「うう……返す言葉が……」

「どうしましょうか」

「そうだなあ……」

E. G. G. Sの課題は、大体がエバンスさん起因のものである。中でも、全体曲のレパートリーが欲しい。現在習得している全体曲は「お願いシンデレラ」だけなので、もう少し数を増やしておきたい所だ。しかし、エバンスさん自身がこんな調子ならば、ハーミーの言う通りレッスンにはならない。

「まあ、今日はレッスン休みって事でいいんじゃないか」

「あらあら、体がなまっちゃうわね」

「自主練までは止めないさ。門限は守れよ」

俺が立ち上がると、ハーミーがじつと俺を見る。

「……何処か行くの？」

「晩飯買いに行くんだよ」

今日も今日とて残業だ。コンビニで適当に買うしかない。社内の売店はもう空っぽだろうし、外のコンビニに行くしかないか。

「ご苦労さま、プロデューサーさん」

「何、嬉しい悲鳴って奴だよ」

処理しなきゃいけない仕事があるって事は、三人が鳴かず飛ばずではない証拠だからな。閑古鳥が鳴くよりもよっぽどいい。

「それじゃ、各自支度するなりしてくれよ」

はーい、という三人の声を背に、俺は一階へ上がる階段を登った。

一階に上がるや否や、ずんずんと不機嫌そうに歩く少女の姿を目にした。あのなびく黒髪は間違いない。渋谷さんだ。

「渋谷さん」

俺が声を掛けると、彼女はむすりとした表情を変えずに振り向く。

「……ああ、えっと、城戸さん」

「覚えていてくれて何よりだよ。それで——」

「どうしたんだ？」と訊こうとして、咄嗟に言葉を引つ込めた。渋谷さんが不機嫌な理由など、思い当たるものは一つしかない。

「——相談に乗るよ？」

きよとんとした様子の渋谷さんに対し、俺は改めてにつと笑う。

「……でも、」

「こーう見えても、人生の先輩だからさ。——それに、渋谷さんが今抱え込んでいるものは、一人でしまい込んでいけない」

こちとら累計年齢は五〇弱だ。うら若き少女の愚痴のはけ口ぐらいにはなれるだろう。

「……分かった。話すよ」

「そりゃ良かった」

少しでも彼女の不安を紛らわせるために、俺は無理やり微笑を湛えた。

プロデューサーが部屋を出て暫く経った。今ぐらいのタイミングかしら。

「ダフネ、ハリエツト、わたし帰るわね」

立ち上がったわたしを見たダフネは、もの珍しそうな顔をした。

「あら、珍しいわね。何か用事？」

「そうね。そんな感じ」

適当に受け流しながら帰り支度を終えたわたしは、急いで部屋を出た。絶対に話をするんだから。

急いでマンションに戻り、本田さんの家のインターホンを押す。昨日みたいに三回押しても、返事はなかった。もう、宅配便が来たらどうするつもりなのかしら。

負けじともう一度押すと、スピーカーから必死な女の子の声が聞こえた。

『もうやめてよプロデューサー！ 来ないでって言ったでしょ！』

「違うわ！ わたしよ！ ハーマイオニーよ、本田さん！」

『えっ……』と困惑したような声を出した本田さんは、黙りこくってしまった。

「わたしもここに住んでいるんだけど、鍵を事務所に忘れちゃつて。親が帰ってくるまで、ちよつと入れさせて貰いたいの」

もちろん、そんな事はない。でも、嘘も方便って言うじゃない？

『……でも』

「他に頼れる人がいないの。お願い、本田さん」

しばらくの沈黙の後、『分かった』と渋々受け入れるような返事が届いた。よし、第一関門突破ね。

自販機コーナーに据えられたソファアに渋谷さんを座らせる。

「ほら、飲んだらどう?」

ブラックの缶コーヒーを手渡すと、彼女は小さく会釈した。

「ごめん、なさい。無関係の城戸さんにまで、気を遣わせちゃって」

「いいっていいって。丁度、美嘉からも相談されたし」

「美嘉……ああ、そう言えば従兄だったね。莉嘉が言ってた」

俺も自分の分の缶コーヒーを口に含む。……俺と城ヶ崎姉妹が従兄妹という話は、どうやら莉嘉が広めているらしい。話して何が楽しいんだか。

「まず、この前のデビューライブについて。俺も見ていたから、感想を言っちゃうか」
渋谷さんは顔を上げて俺を見た後、「ああ……うん」と不安げな表情を浮かべる。

「パフォーマンスを見れば、大成功だ。まだ二ヶ月弱なんだろう? その状態で、ニュージエネレーションズはちゃんとライブをやり切った。そこは誇ってもいいと、俺は思う」

うん、と力なく返事をする渋谷さんの顔は、依然として浮かないままである。

「ただまあ、緊張してたね。三人とも余裕がなかった。表情とかね」

「……うん」

渋谷さんはまるで、親に叱られた子供のように目を伏せ続けていた。

「あのさ」

彼女は缶の中身を一口飲むと、話を切り出してくる。

「うん？」

「私達って、笑顔以外に何かあるのかな」

それはつまり、アイドルとしての強みのことだろうか。

「あると思うよ？ 例えば渋谷さんで言えば、一見クールで他の人に冷たい印象を持っているけども、さっきみたいに歳相応に感情的になっちゃう所とか。背伸びしているって言うのかな、そんな感じが親近感湧いちゃうし、もう少し上の世代になれば庇護欲みたいな——」

「ストップ、城戸さんストップ」

おっと、いけないいけない。渋谷さんは顔を赤らめながら、俺を睨み付けていた。……うーん、そつちの趣味の人向けにも需要がありそうだな。いや、変な事を考えるな。思考を切り替えるために、わざとらしく咳払いをする。

「……まあ、そんな感じで、何かしらの強みとか長所はあるはずだよ」

「歌が上手い」とか「ダンスが凄い」とか、そういったものではなく、「そのアイドル自身でないと出せないような特色、個性が。」

「未央にも?」

「当たり前だよ。あの子は、もの凄くプレッシャーに強いんじゃないか?」

デビューライブなど、誰しもが緊張するものである。それをあの子は、「客が足りない」と言い放ったのだ。正直、肝が据わっているとかのレベルではない。

「そう、なのかな」

ぼつりと、渋谷さんは呟く。徐々に、彼女の缶を持つ手に力が入っているように見えた。

「渋谷さんは、本田さんとステージに立ちたい?」

「そんなの、当たり前だよ。ここまで来たんだから、中途半端な状態で諦められない」

コーヒールを一口飲み、ため息をつく。

「きつと、それは本田さんも同じだ。だから、信じてやってくれないかな」

「……プロデューサーを?」

渋谷さんは、苦虫を噛み潰したような顔になる。……これは、もしかしなくても一悶着あつたな?

「今すぐ武内さんを信じられないって言うなら……そうだなあ、本田さんを信じてみれ

ばいいんじゃないかな」

「……未央を？」

「絶対に戻ってきて、この前よりももっと、いいステージが出来るって具合に。だから——」

俺はにっと笑うと、渋谷さんの方を向く。

「だから、本田さんが戻ってきたら、笑顔で迎えてやれよ？　渋谷さん」

渋谷さんはふっと顔を下げたかと思うと、缶コーヒを一気に呷る。飲み終わった後の彼女の顔は、若干霽が晴れたようだった。

「……ありがと、城戸さん。少し、楽になった」

「そりゃ良かった」

少しでも力になれたのなら何よりだ。

「おや、珍しい組み合わせだね」

反射的に声のする方を向いていた。穏やかな面構え、撫でつけられた白髪、四角の眼鏡——。頭で理解するよりも先に、体が反応したらしい。俺は慌てて立ち上がっており、素早く頭を下げていた。

「ぶっ、部長！　お疲れ様です！」

「はっはっはっ、お疲れ」と今西部長は和やかに挨拶を返した。

「お疲れ様です、今西さん」

渋谷さんは、座ったまま挨拶をしていた。ちよつと君、立ち上がらんかい。

「どうしたんだい、城戸君。ナンパの途中だったかな？」

「い、いえいえ。……冗談でも人聞きが悪いですよ」

間違いなく事案じゃねえか。武内さんじゃなくても捕まるぞ。

「私が、その、相談をされていて。城戸さんに」

ふむ、と俺と渋谷さんを眺めた部長は、渋谷さんの向かいにあるソファーに腰を下ろした。

「丁度いいから、ちよつとした昔話をしておこうか。『魔法使いから車輪になった男の話』なんだけどね」

——なんじゃそりゃ。一体どんな男なんだよ。

ドアを開けると、本田さんが廊下に立っていた。

「ごめんなさい、急に」

「……ううん、別にいいよ。はみはみだから」

そう言うと、本田さんは力なく笑った。……この前のレッスンの休憩中みたいな、元気がいっぱいって感じの笑い方じゃなかったわ。

「お邪魔するわね」

「……………うん」

靴を脱ぎ、本田さんと一緒にリビングに向かった。結構、男物の洗濯物が多いわね。兄弟の物かしら。

「お茶飲む？」

「そうね、そうさせてもらおうわ」

テーブルの近くに座って、周りを見渡す。間取りはわたしの家と同じような感じだけど、感じが違う。兄弟がいるからごちゃつとしているみたいね。

「はい、麦茶だけど」

本田さんが麦茶の入った透明なコップを私の前に差し出し、向かいに座った。

「……………あのさ、はみはみ」

本田さんは、顔を下げたまま声を掛けてきた。

「はみはみの時って、どうだったの」

「わたしの時？」

「その、……………デビューライブ、の時」

本田さんの声は、尻すぼみになっていった。やっぱり、他のユニットのデビューがどんな物なのか、よく知らなかったみたいね。デビューライブが前座じゃないなんて、考

えられないもの。

「わたしの時は、リオンモールの中庭だったわ」

「リオンモールって、あそこのだよね？ 私達の時と同じ感じだったんだ」

「……本田さん、違うの」

「……え、どういう事？」

「セクシーギルティって知ってるでしょう？」

本田さんは「くくく」と頷く。

「あの人達のライブの前座として、わたし達——E・G・G・Sはライブをしたのよ」

「え、でもデビュールライブだよ？」

本田さんの顔からは、動揺が見て取れた。

「そうよ。目の前の観客は皆、セクシーギルティのライブを見に来た人達なの。E・G・

G・Sを見ようとしてやって来た人達じゃないわ」

「そんなの……」

本田さんは、消え入るような声を出しながら首を横に振った。

「本田さん、言っておくけど同情は要らないわよ。だって、失敗した訳じゃないんだから」

「そうよ。失敗してないわ。それどころか、大成功だったもの。ちゃんとわたし達のパ

フォーマンズが認められて、セクシーギルティのファンが「認めてくれた」。わたし達も、「アイドル」なんだって。

「はみはみ……」

顔を上げていた本田さんは、視線を落とした。

「はみはみはどう思ったの？ デビューライブが、他のアイドルの前座って聞いて」

「少なくとも、悪い気はしなかったわよ。だって、絶対に誰かがわたし達を見てくれるんだから。少なくとも、セクシーギルティのファンが」

コップの中の麦茶を飲んで、口を湿らせる。

「だから、ニュージエネレーションズは凄いのよ。先輩アイドルなしに、観客を集めたんだから」

プロデューサーに聞いたら、やっぱり凄いな事らしい。普通はあそこまで集まらないし、そもそもパフォーマンスを最後まで見てもらえない事もあるみたい。

「そう、なんだね」

本田さんの視線は、未だに下を向いたままだった。ぐすん、と鼻を鳴らす音が聞こえた。

「私、逃げちゃったよ。……もつと観客がいると思ってて。美嘉ねえのステージみたい」に、千客万来！ っつてのを想像していたから」

「本田さん……」

本田さんの鼻をすする音が段々と大きくなっていく。俯いた顔からは、ぼたぼたと涙が落ちていた。

「私、どうしたらいいか分からない！ 勝手にリーダーになって、勝手に失望して、あんなに当たり散らして！ 今更、どんな顔をして皆に会えばいいの？ ……戻れる訳……ないよ」

雨が強くなったのか、部屋がしんと静まり返ったのか分からないけど、本田さんの泣き声以外には雨の音しか聞こえなかった。

第15話 Can you open your do

o r (2)

そう遠くない昔——下手をすると、つい最近の出来事。

ある男は、魔法使いだった。彼は、少女達に夢を与え、それが叶うように力を尽くした。彼女達と共に彼は笑い、悲しみ、努力し、走り続けた。

何が起きたのかは分からない。彼が至らなかつたからだろうか。あるいは、彼女達との間に溝が出来てしまつていたのだろうか。彼の元から、彼女達は去つていった。

魔法使いは少女達が去つた時、自らに魔法をかけたのだろうか。あるいは、呪いだろつか。彼は物言わぬ車輪となり、同じく夢見る少女達を、目的地へ運ぶだけに成り下がつてしまつたのだつた。

「——そんな事が」

部長の語り口では、その男が誰だつたのかまでは語られなかつた。だが、紛れもなくあの人の事だろう。

「城戸君も知らなかつただらうね。正直、話しても楽しい事じゃないから」
部長は穏やかな顔のまま、ため息をつく。

「でも、そんなの間違ってる」

渋谷さんは怒りを露わにして、顔を上げる。

「結局同じ事が起きたら、意味がないよ」

「ああ、……多分、武内さんもそれは分かっているはずだ」

武内さんの心を覆っていたのは、恐怖だったのだ。再び夢見る少女達が、挫折し、夢を失い、失意のうちに消えていく事への恐怖。

だから彼は、耳を塞いだ。彼女達の失意を聞きたくないから。口を噤んだ。彼女達の夢を否定しないように。目を閉じた。彼女達が挫折する所を見たくないから。

——耳を塞げば、彼女達の助けが聞こえない。口を噤めば、彼女達を導けない。目を閉じれば、彼女達の夢と一緒に見ることが出来ない。

「私、プロデューサーを探してみる」

渋谷さんが意を決したように、俺を見る。

「……ああ、行つてこい」

渋谷さんはこくりと小さく頷くと、そのまま走り去っていった。

「……部長がどうしてシンデレラプロジェクトを気にかけるのか、少し分かりましたよ」
渋谷さんの後ろ姿が小さくなったのを見て、俺は部長に向かって言う。

「おや、そうかい？」

「ええ、そりやもう」

シンデレラプロジェクトと言うよりかは、武内さんを気にかけていたのだろう。車輪になつてしまった、悲しい魔法使いである彼を。

「ははは、気恥ずかしいから言うのだけは止めてくれよ？」

「はは、分かりましたよ」

この件に関しては、俺の役目は終わつただろう。外野にはもう、見守ることしか出来ない。

わたしは、動く事が出来なかった。本田さんは泣いているけれども、わたしの心の中では色んな感情が出てきては消えていた。同情。悲しみ。嫌悪。焦り。怒り。その全てが、目の前の本田さんに向かっていて、混ざり合っていた。

「……それだけの？」

漏れてきた言葉は、自分でも予想がつかなかったものだった。だけど、堰を切つたように言葉が溢れてくる。まるで、大雨で決壊したダムのように。

「それだけの?! ステージの前に立つて、パフォーマンスして、沢山の拍手をもらつて! 楽しくなかったの?! 嬉しくなかったの?! アイドルになったんだって、アイドルとして皆に認められたって、そんな気持ちにならなかったの?!」

「なったよ！ なったんだよはみはみ！ 確かに楽しかったし、アイドルとして認められたんだって私も思った！ ……だけど、それは美嘉ねえのステージで、私達はバックダンサーだった。私、早とちりしていたんだ」

「だったら！ ……だったら、逃げないでよ、本田さん。早とちりだったなら、そうだったと認めたらいいだけの話じゃない！ それに、本田さんがいないと、ニュージエネレーションズじゃないわ！ 絶対に皆、そう思っているもの！」

「分かんないよそんなの！ 皆、見捨ててるかもしれないじゃん！ 昨日、プロデューサーにも当たり散らしちゃったし！ 何を話せばいいの、はみはみ!? 今更『誤解でした、逆ギレしてごめんなさい』って言って、許されると思ってるの!?!」

「違うわよ！ そんなのじゃないわ！ 本田さんは今、どうしたいの!?! ただ謝りたいだけなの!?!」

本田さんの動きが止まる。いつの間にか前のめりになっていた上体を元に戻し、言い争いをする前と同じように俯いた。

「私は——私は、アイドルを辞めて——」

「本当の事を言つて、本田さん」

絶対に本心じゃないと思つた。だって、さつきから目が泳いでいるもの。

「私、本当は——」

本田さんの目が潤み、大粒の涙が零れ落ちた。

「——本当は、アイドルを続けたい！　だって、みつともないじゃん！　このままじゃ、後悔しちゃうよ！　何も出来ていないし、何も始まっていない！　嫌だよ、このままアイドル辞めちゃうのは！　だって、だって私——」

「……いいの。いいのよ、本田さん」

まるで小さな子供のように泣きじやくる本田さんをなだめる。

「大丈夫よ、本田さん。皆分かってくれるわ。本田さんがアイドルを続けたいって気持ち。だから、逃げないで。武内さんからも、自分の気持ちからも」

「……でも」

「いざとなったらわたしがいるわ！　プロデューサーでも何でも使って、武内さんを納得させるんだから！」

わたしが胸を張ると、本田さんは涙を流しながらも「ふふっ」と笑った。

「——うん！　ありがと、はみはみ」

「任せなさい！　学年はともかく、アイドルとしては先輩なんだから！」

「えー？　何週間かの差じゃない？」

「そつ、そんな事ないわよ！」

いつの間にか、雨も晴れたようだ。夕日が窓から見える。

「晴れたわね」

「うん、晴れたね」

ふと窓から地面を見ると、黒いスーツの男の人が警察に話を聞かれていた。……あれ？ 何か見覚えがあるわね。

「つて、プロデューサー!?! ごめんはみはみ、私ちよつと行つてくるね!」

本田さんはばたばたと忙しく、リビングを出ていった。ボタン、と玄関の扉が閉じた音を聞き、わたしはため息をついた。良かった、本田さんの本心を聞けて。やっぱり、続けたかったんじゃない。

出された麦茶を飲み干してコップをキッチンのシンクに出した。そろそろ帰った方がいいかしら。……このまま本田さんの家族と出くわしても居心地が悪いし、そうしましよう。

玄関に向かうと、わたしと同じくらいの、中学生くらいの男の子が玄関に突っ立っていた。

「あ、つと、えつと」

えつ、もしかして弟さん？

「日本語、おーけー?」

男の子は気が動転したのか、日本語とも英語ともいえないような質問をして来た。

「……ええ、大丈夫よ。お邪魔しました」
すつごく気まずいわ。いそいそと本田さんの家を後にした。

俺と渋谷さんが話をしている間、武内さんは本田さんの家に向かっていたらしい。いつものように警察のお世話になりかけつつも、何とか本田さんと話が出来たという事だ。……本心では辞めると言った事を後悔していたらしく、本田さんの方から「続けさせて欲しい」と頭を下げたと聞いた。後に渋谷さんも合流し、本田さんの助力で仲直りした、とか何とか。

「それでだハーミー、お前お節介を焼いたそうじゃないか」

俺が訊くと、ハーミーはむっとした顔で返してきた。

「いいじゃない。プロデューサーだって、結局渋谷さんの相談に乗ったんだから」

「ま、そこは大人としてな。あんなにぶりぶり怒っていたら、流石に気になるからな」

ダフネは俺とハーミーのやり取りを聞いて、くすくすと笑った。

「プロデューサーさんも、お人好しじゃない。大体の大人は、女の子がぶりぶり怒っていても気にしないものよ」

「そうかあ?」

……そうかも。

「兎に角、ハーミーもよくやったな。正直深入りはして欲しくなかったんだが、結果としては本田さんの本音を引き出したんだし」

ハーミーは突然きよとんとし、吐き気を催したような表情になった。

「……何だか、変な気分ね。プロデューサーに褒められるの」

「素直に受け取ってくれよ……」

あの、と声を上げたのはエバンスさんだ。

「ぼくも、褒めて欲しいんですけど……」

テーブルの上に並べられたのは、赤点をギリギリ回避した答案用紙たちだ。……英語以外の点数が軒並みあやしい。

「エバンスさんは普段から勉強してくれ」

「ええっ!? 酷くないですかそれえ!」

ダフネとハーミーは余程堪えきれなかったのか、腹を抱えて笑う。

「ふ、二人ともお、笑う所じゃないってば!」

「あーもう、おつかしい。何だったら、プロデューサーに見てもらえばいいんじゃない?」

「そうね、名案よハーミー」

くるりとエバンスさんは俺の方を向く。

「……分かった分かった。大学生の時は、家庭教師のバイトもやってたからな。分からない所をハッキリさせてから質問してくれよ」

こう見えて、結構人気だったからな俺。「一緒にいると勉強が捗る」だの、「横にいてくれるだけでも心強い」だの。……今思い返すと、置物みたいな評価されてるな。

「はい！ 全部お願いしますー！」

「全部う!？」

ダフネとハーミーは再びゲラゲラ笑う。あのなあ、笑う所じゃねえからこれ。

突然、メッセージアプリの通知音が鳴る。

「わたしのスマホね」

ハーミーはスマホの画面を眺めると、につこりと微笑んだ。先程のゲラゲラ笑いとは違い、優しい笑みである。

「……『未央さん』？ 本田さんから？」

画面を覗き込んだダフネが、ハーミーに訊いた。

「……ええ。未央さん、ちゃんと謝ったみたいね。もう大丈夫みたい」

いつの間にか本田さんとの距離が近くなったのは、ハーミーが本田さんの家の上がり込んだからだろうか。……まあ、喧嘩別れなんていう事態にならなくて良かった。

「プロデューサーさん、どうかしたの？ ニヤニヤして」

「いや、平和なのはいい事だと思っただけな」

今の俺は気分がいいから、遠回しに「気持ち悪い」って言ってきたダフネにも大人の対応をするぞ、うん。

「進兄、いる？」

……美嘉が突然部屋に来て、今の穏やかな俺は平気——。

「えつ、嘘、城ヶ崎美嘉!」

「あら、本当ね。……本当、ね。……」

「ダフネさん!? ダフネさんが動かない!? プロデューサー、プロデューサー!」

——俺が平気でも、E・G・Gの三人は平気じゃねえの忘れてた。

「あの、アタシ出直した方がいい？」

「大丈夫、大丈夫だって」

三人はぼんやりとした顔で、美嘉を見ていた。

「……本当に本物の城ヶ崎美嘉……」

「す、凄い。ぼく、初めて見ました」

「オーラが違うわね……」

突如、三人は厳しい目で俺を見る。

「本当にイトコなの？」

「プロデューサーさん、白状した方が身のためよ？」

「……誤魔化さないで下さい」

何で俺そんなに信用ねえの？ さっきまで楽しく談笑してたじゃん。

「従妹だよ従妹。な、美嘉」

「……そうだね。認めたくないけどそうだね」

「渋々認めるの止めてくれよ!? 一応血は繋がってるだろ!？」

三人はじつと俺を見続けている。

「……証拠か？ ……うーん、あ、そうだ、八重歯だ。美嘉にも莉嘉にも八重歯があるけ

ど、俺にもあるんだよ、ほら」

「見たくないわよ、ぼっちい」

「ぼっちい!？」

ハーマー、その言い方はないだろ！ ぼっちくねえし！ 昼食後にも歯磨いてるし！

「……で、どうかしたのか美嘉。何か用事があつて来たんだろ」

「ああ、うん」

無理やり話題を変えた俺に、美嘉は頷く。よし、何とか空気を変えることが出来た。

「その、ごめんなさい、進兄。アタシの軽い思いつきで、色んな人に迷惑をかけちゃった。

進兄やその子にも」

美嘉はじつとハーミーを見る。真つ直ぐな視線をカリスマギャルアイドルから向けられたハーミーは、少し恥ずかしそうだ。

「つたく、美嘉は昔つかから律儀だな。昨日も言ったけど、お前が気に病む必要はない。それに、何だかんだで丸く収まったからいいだろ」

結局、今西部長は何処まで見越していたのかは分からない。あの三人をバックダンサーにしたのも、デビューライブを新人のみで行なったのも、結局は部長の一声があったからこそである。この騒動が想定範囲内だったなら、美嘉も彼の掌の上で踊らされていたに過ぎないのだ。——やっぱあの人の考えている事はよく分からん。

「そうだったとしても、ごめんなさい。——そして、ありがと。二人とも」

美嘉は派手な服装に似合わない、丁寧なお辞儀をした。

「あつ、その、いや、大丈夫、大丈夫よ！ わたしも、自分がしたい事をしただけなんだから！」

「てな訳だ。——さ、楽しい楽しい芸能活動に戻ろうじゃないか」

目指すは、夏の346フェスだ。

第16話 How to read Grimoire

(1)

俺は、机の前に置かれた二つの本を覗んでいた。どちらも表紙は黒一色なのだが、大きさが違う。小さい方はまだ分かる。武内さんの手帳だ。問題は、スケッチブック程の大きさのノートである。

「一体これは何だつて言うんだ……」

ため息をつく。表紙からは誰のものか分からなかったため中身を覗いたのだが、その、まあ、なんだこりや。所謂「ぼくのかんがえたさいきょうのじゅもん」的なドイツ語と英語の羅列や、長つたらしく小難しい単語を並べ立てた文章であつたりとか、見ていて頭が痛くなるような事柄が所狭しと書かれていたのだ。これ以上はヤバイ。一回目の一四歳を思い出してしまふ。

武内さんの手帳にも同じような単語が並んでいる。こちらの方は、どちらかと言うと分かる日本語に翻訳をしているのだが、それだけでは読み解けない。そもそも、武内さんの翻訳もぶつ飛んでいる。何をどう解釈したら、「闇に飲まれよ」が「おはようございます」になるんだよ。闇に飲まれたら「こんばんは」になるじゃないか。

「分からん……全然分からん……」

武内さんの手帳にも同じような単語が並んでいることから、シンデレラプロジェクトの誰かのものだというのは分かる。しかし、今までに会ったメンバーとは印象がかけ離れすぎているのだ。おそらく、知らないメンバーのものだろう。

「それで、未央さんったら——どうしたのプログラマー、その黒いノートは？」

レッスンを終えて部屋に入ってきたE・G・G・S三人娘は、謎のスケッチブックを興味ありげに見る。

「おう。拾ったんだが、中身が全然分からなくてな」

「あら、プログラマーさんでも分からない事があるのね」

「毎日が勉強の日々だよ。……これに関してはお手上げなんだが」

ぺらり、とエバンスさんはノートの中身を見る。

「呪文ですか？ これ」

「さあ……？」

ハーミーが顔をしかめながらため息をつく。

「ねえ、勝手に覗いて良かったのかしら」

「あら、名前が書いてないからしょうがないわよ。心当たりはあるの？ プログラマーさん」

「まあ、シンデレラプロジェクトの誰かなんだろうなつてのは。武内さんに連絡したけど、全然返事が来なくてな」

あの人は、普通のプロデューサーの何倍も忙しいから仕方がないのだが。それに加えて、他のメンバーのデビューも見通しが立ったみたいで、常人では考えられないような量の仕事をこなしている。

「だったらわたしが、未央さん経由で訊いてみるわ。表紙だけなら問題ないわよね？」

確かに、本田さん経由ならば直ぐに持ち主が見つかりそうだ。幸い、シンデレラプロジェクトの誰かという当たりは付いているし。ハーミーは謎のスケッチブックの写真撮り、本田さんに送り付ける。送るや否や、通知音が鳴った。

「返信が早いわねあの人……。えっと、『らんらんのだ！』だって」

誰だよ。やっぱり知らないメンバーの物じゃん。

「……？ 誰か来るみたいですけど」

エバンスさんがそう呟くのと、扉が乱暴に開かれるのは正に同時だった。

「ぐ、グリモワールが深き地底の卵の間にあると聞いた！」

入ってきたのは、何やら慌てた様子で、フリフリのゴスロリ衣装に身を包んだ女の子だ。えっ何これ。銀髪と赤い瞳のお陰で違和感がないが、ちよつとでも間違えたら無茶苦茶痛いファクションだぞそれ。言葉遣いも訳分からんし。

「グリモワール？ あのノートですか？」

エバンスさんが指し示したノートを見た女の子は、安堵、羞恥、焦りところどころ表情を変えて、俺の手からスケッチブックを奪い取った。

「……あ、あの。見ました？」

スケッチブックで顔を隠した女の子は、まるで消え入りそうな声で俺に訊く。

「あー、まあ……。その、悪い」

悪気は無かったんですよ、ハイ。

「……。~~~~~！ ううっ、うう……」

「ちよっ、ちよつと泣かないで！ あーもう、プロデューサーの馬鹿！ また女の子を泣

かせてー！」

「俺に責任を押し付けなくてくれよ！ ホントごめんって！ 悪かった、悪かったよ！

馬鹿にはしてないからー！」

「あらあら、いけないプロデューサーさん」

「ダフネも、どうにかして宥めてくれ！」

どうにかして泣き止んだ女の子に、砂糖をたっぷり入れた紅茶を出す。

「悪かったよ。ちゃんと返すつもりだったんだけど、誰のものなのか分からなくて」

「うん……」

女の子は紅茶に口を付け、力なく頷いた。

「あなたが未央さんの言ってた、らんらんね?」

ハーミーの質問を受け、女の子はすつと立ち上がるとポーズを決める。

「いかにも! 我は神崎蘭子、闇より出でし墮天使である! 今こそ闇は満ち、降誕の時
が迫った!」

やべえ。何言ってるか全然分かんねえ。唯一分かったのが名前だけなんだけど。

「……プロデューサー、どういう事ですか?」

「エバンスさん、俺に聞かないでくれ。ここはハーミーに聞くべきだろ」

俺とエバンスさんの会話を聞いたハーミーが「ちよつと」と声を上げる。

「どうしてわたしに振るのよ! ダフネならどうにかなるんじゃないの!」

「ハーミー、あたしでも出来ない事はあるわよ」

うーむ、コミュニケーションが取れないぞこれ。どうするべきか――。

「ああ、そうだ」

武内さんの手帳から、それっぽい単語を見つけ出して翻訳すればいいのか。俺は直ぐに武内さんの手帳を開き、「神崎さん語」の翻訳がなされたページを見る。……えつと、「降誕の時」はこれかな。

「……つまり、近々デビユーするって事か」

神崎さんはポーズを決めたまま、こくこくと目を輝かせて頷く。よし、当たりみたいだ。……しかし、またエグい個性の子をデビユーさせるんだな。前川さんも浮かばれないだろう。いや、死んでねえし。

「……しかし、瞳を持つ者は闇の儀式を理解していない。これも全て、私の言の葉が届かぬ故」

えーと何だ？ 武内さんが「闇の儀式」を分かっているなくて、原因は神崎さんの言い方にあるって事か？ 闇の儀式って何だよ。武内さんの手帳にも書いてない。

「武内さんは、その闇の儀式をどう理解していないんだ？」

兎に角、何と誤解しているのかを知らなければどうにかなるのだろう。英文読解でもそうだ。分からない単語でも、読み進めると推測出来る事があるし。

「瞳を持つ者は、我に死神の饗宴を供した。だが私の欲せんとするものは、墮天使の転生、魔王への覚醒。血に濡れた死者の宴ではない」

やっぱり分からん。死神の饗宴って言葉も、「神崎さん語辞典」には載っていない。

「……あのさあ、三人とも助けてくれよ」

正直、限界が近い。助けを求めて三人を見るが……ちくしよう、露骨に目を逸らしやがって。

「血に濡れた、って所が気になるわね。武内さん、そんな人だったかしら」
ハーマミーがダフネに訊く。ダフネも唸りながら首を傾げた。

「とりあえず、方向性が違うって事かしらね、神崎さんのその言い方だと」
ダフネの一言に、神崎さんは力強く首を縦に振る。お、当たりか。しかし、方向性ねえ。

「その、死神の饗宴、ってのが違う事は武内さんに伝えたのか？」

神崎さんは顔を俯かせる。

「……未だに我の言の葉は、瞳を持つ者に届かぬ」

結局、その口調のせいで伝わっていないのだろう。俺達も探り探り話を聞いているし。武内さんが誤解したという話も、結局探り探り話を聞いているうちに見解がズレていったと考える事が出来るだろう。

「何かアイディアはないんですか？」

エバンスさんの問いかけると、神崎さんは再び「かつこいいポーズ」を決めた。よくそんなポンポン出てくるな。

「言の葉が通じぬならば、グリモワールを以て示すのみ！」

成程、「言ってダメなら見せてみる」という所か。あながち間違っではない。百聞は一見にしかず、ともいうし。

「だから、その、……拾ってくれて、ありがとうございます」

神崎さんは弱々しく小声で言う、ペこりと頭を下げた。——もしかしなくても、これが素なのかもしれない。

「ん、いいさ。——武内さんにイメージを伝えるなら、早めに準備をしいた方がいいんじゃないか？」

神崎さんはぱつと顔を上げて壁に掛かった時計を見ると、再びペこペこ頭を下げる。

「は、はい！ 失礼しました！」

神崎さんは結局素のまま、慌ただしく部屋を出ていった。

「……嵐みたいだったわね」

ハーミーがため息をつく。

「あらハーミー、あたし達も早めの準備が必要じゃない？」

「ラジオの話でしょ？ そうね、手は抜けないもの」

ハーミーは意気込むように鼻を鳴らす。川島さんの「わかるわアワー」の収録が今週末に迫っており、E. G. G. Sの三人も気合いが入っているようである。

「大丈夫かな……？ 嘸んじやいそう……」

「大丈夫だエバンスさん。川島さんもサポートしてくれると思うし、何よりも収録だ。」

生放送じゃないんだから、慌てる事はないって」

そもそも収録なものも、「放送時間の夜七時には、仲間と飲みに行きたいから」という事情があるかららしい。……大丈夫なのかこの事務所は。

「だとしても、話題を何も持ち合わせていないのは不味いわ、ハリエツト。作戦会議するわよー!」

「別にいいけど、さっさと家に帰れよ三人とも。親御さんに心配かけさせんな」

「分かっているわプロデューサー! それじゃあ二人とも、また後で連絡送るわ!」

「分かったわ。それじゃまた明日、プロデューサーさん」

「こ、今度はボツにならないきやいいけど……」

三人娘も、各々帰路についたようだ。——結局武内さんからの返事がないが、どうしたのだろうか。また何か、面倒事に巻き込まれてないといいが。

俺の心配も杞憂に終わった。武内さんは自分のプロジェクトルームでデスクワークをこなしていた。

「城戸さん、どうしたんですか?」

武内さんの質問に、俺は彼の手帳を掲げることで答える。はっと目を開いた武内さんは、椅子から立ち上がると頭を下げた。

「すみません。城戸さんには毎回」

「いえいえ、今回はたまたま拾っただけでですよ」

手帳を渡すと、武内さんは再びこくりと頷き、ページをめくる。——「神崎さん語」の対訳がメモされたページだ。

「そういえば、神崎さんのノートも拾ったんですよ」

「そうなんですか。本人には？」

「既に手渡ししました。自分にはよく分かりませんが、本人にとっては大事な物のようでしたので」

そうでしたか、と武内さんは安堵したようなため息をつく。

「そういえば、もうすぐデビューするとも言っていましたね。……どんな曲を？」

ふと興味が湧いてしまい、そんな質問をしてしまった。「死神の饗宴」とは一体何なのか、想像だけでは分からない。「百聞は一見にしかず」、いや「百聞は一聴にしかず」とでも言うべきだろうか。

「まだ仮音源ですが」

武内さんはパソコンを操作すると、音楽を再生する。——特に、何か引つかかるような所はない。むしろ、メタルロック調のそれは仮音源と言えども十二分に思えるのだが。

「となると、歌詞か……。武内さん、歌詞の方は見せてもらえますか？」

「いいですが……。神崎さんは、その……。何か言っていましたか？」

武内さんはコピー紙を手渡しながら訊いてくる。武内さんとしても、何処で神崎さんが待ったをかけたのか知りたらしい。

「まあ、その、なんと言うか、ええ……。すみません、あの子はその……。少し独特な言葉遣いだったので」

言葉を濁しに濁して、やつとの思いで答える。「そうですか……。」と武内さんの弱々しい返事が聞こえるが、今は歌詞を見てみよう。

「あー、そういう事か」

仮音源の曲調に合わせた、中々に過激な歌詞である。主にスプラッタな印象で。「死神の饗宴」とはなるほど、ホラーでスリラーな曲って事だったのか。

「神崎さんの言葉ですが、このようなホラーテイストは嫌だとの事でした」

「……！ そうだったんですね」

武内さんはさらさらと手帳に何かを書き足す。……意図せずして、また武内さんを助けるような流れになってしまった。

「それでは、どのようなものが良いと？」

「……へ？」

「……………城戸さん？」

——そこが一番分からねえ所だったんじゃん。

第17話 How to read Grimoire

(2)

神崎さんは、ホラーでスリラーでスプラッタな雰囲気駄目だというのは分かった。

——では、好きな曲調は何だ？ 正直、良く分からん。そもそも、今日が初対面だったのだ。神崎さんの事ならば、武内さんの方が良く知っていると云っても差し支えない。

「私は、神崎さんの世界観とマッチした曲を提示したつもりだったのですが」

「そう、なんですね……」

そもそも、音源というか、メロディ自体は問題ないのだ。結局は、歌詞に懸念がある状態なのである。しかし、あの世界観はなんと言うか、言葉に出来ない。

「……。明日、話を聞いてみます」

「是非、そうして下さい。彼女も、それを望んでいたのです」
「……この件に関しては、俺に出来ることはないな。」

ハーマイオニーが風呂に入るとの事で、ハリエットとダフネは二人取り残された。

『どうしましょうか。エバンスさん、他に何かあるかしら』

ハリエツトのスマートフォン越しに、ダフネが訊いてきた。現在はラジオの出演に向けて、三人で「作戦会議」の途中である。

「……テストで赤点回避した話は」

『ダメって言われちゃったものね。ハーミーに』

ハリエツトが話題の候補として上げたそのエピソードは、ハーマイオニーの必死の抵抗によりあえなく没となった。——ハリエツト自身としては輝かしいエピソードだったのだが、ハーマイオニーはアイドルとして恥ずかしいという理由を立て、考え直すようにしきりに言った。

「うーん、どうしよう……」

『無難に、アイドルを始めた理由でもいいんじゃないかしら』

ダフネのアドバイスに、ハリエツトは「うーん」と悩むように唸る。

「ぼくがアイドルを始めた理由なんて、面白いものじゃないと思うよ。プロデューサーがスカウトして、両親にも勧められたからなっただけで」

『あら、そうなのね』

「……そういうえば、ダフネさんとハーミーはどうしてアイドルになろうとしたの？」

ハリエツトの質問に『そうねえ』と逡巡したダフネは、ふふつと笑った。

『なんて事ないわ。——約束しただけよ。アイドルになるって』

「……そうなんだ」

誰と約束したのか、とハリエツトが訊く前に、ダフネは言葉を続けた。

『ハーミーなんてあなたよりも酷いわよ。あたしが養成所に通い始めたつて聞いて、便乗したんだから』

ハリエツトの脳裏に、地団駄を踏んで悔しがるハーマイオニーの姿が容易に浮かんだ。

「ははは、二人とも前から知り合ってたんだ」

ええ、結構長いわね、とダフネはハリエツトの言葉に応える。

『……プロデューサーさんと会う前のハーミー、凄かったのよ。例えるなら、小型犬つて所かしら』

「……小型犬？」

ハリエツトは何となく、チワワが懸命に吠えている光景を想像してしまう。

『ええ。警戒心が強くて、プロデューサーさんも手を焼いていたわね。今じゃ、そんな感じじゃないけど』

今でもハーマイオニーの扱いに手を焼いているような節があるようにハリエツトは見えていたのだが、ダフネの話しぶりからはそれ以上だったように思えた。

「……何だかんだ言つて、プロデューサーは頼りになるよね」

ハリエツトにとってみれば、少しかけ軽口が多い印象があるのだが。

『——あの人、結構無理しちやってると思うわ。毎日、あたし達が部屋に戻ってくる時には居るもの』

「え……」

確かに、殆ど毎日ハリエツト達がレッスンから部屋に戻ると、プロデューサーは確実に部屋の中にいる。しかし、その事についてなんの疑問も持たなかった。増してや、「無理をしても部屋にいる」と想像した事すらない。

『だって、忙しいはずよ？ 今回のラジオ番組の事もそうだし、もつと言えばデビューライブの調整だってそう。いつの間にか話を進めてて、いつの間にか決定しているじゃない』

確かに、ラジオ番組の出演に関して言えば、いつの間に交渉を行なったのかハリエツトには想像がつかない。

『多分、今後の調整や交渉も全部やっているわ』

「今後、って」

思わず、言葉に詰まる。

『分からないわ。でも、何ヶ月も先のスケジュールも管理していると思う』

「そこまで!?!」

へらへらと笑ったりハーマイオニーやダフネの言葉に翻弄されている、普段の彼の姿からは想像がつかなかった。

『ええ。そうじゃないと、プロデューサー業なんてやってられないんじゃないかしら』

「……大変なんだね、プロデューサーって」

ハリエツト自身は、次の定期試験への予定も立てられていない。これからアイドルとして忙しくなり、勉強にかけられる時間も少なくなるだろう、とは他でもないプロデューサーの弁だ。

『……だから、あたしはプロデューサーさんを信頼出来るの。例えどんなに忙しくても、あたし達とコミュニケーションを取ろうとするから』

ダフネの優しい口調を聞いて、ハリエツトはふと先日の騒動を思い出す。本田があのように愕然としたのも、武内とのコミュニケーション不足が原因ではないかとプロデューサーは推測していた。そして、今回の神崎の件も――。

「ダフネさん、ぼく達、とつてもいいプロデューサーに出会えたんだね」

能力やノウハウでは武内に負けるかもしれないが、ハリエツトは自然とプロデューサーに対して――城戸進ノ介に対して、そう思うことが出来た。

『ふふつ、抜け駆けは禁止よ?』

「えっ!? あっ!? そ、そんなつもりじゃないってば!」

『あら、冗談のつもりだったんだけど』

「……ちよつとダフネさん!」

『遅くなったわ——つて、一体何の話で盛り上がっているのよ!』

『ふふ、ハーミーには内緒』

『その言い方凄く気になるわよダフネ!』

——夜は静かに、それでも賑やかに更けていった。

メールの件名を見て唖る。必死こいて交渉を続けたが、あえなくご破算と言ったところか。テレビへの出演はまた先、今は地道に前座を積めと。……仕方ない、デビューしなくてもラジオに出演するだけでも頑張った方だ。

「プロデューサー、いるわね……つて、微妙に暗い雰囲気ね」

部屋に入ってきたハーミーが、若干落ち込んでいる俺に声を掛ける。

「何かあったんですか? まさか、ユニットの解散とか……?!」

「ちよつ、縁起でもないわよハリエツト! まだ何もしていないじゃないわたし達!」

「いや、そんなに深刻な事じゃねえよ」

高々、テレビ出演を断られたぐらいだ。エバンスさんが言ったような、ユニット解散の危機とまではいかない。

「あら、だったらどうしたの？」

ダフネが不思議そうに訊く。別に言う程の事でもない気がするが、ここまで探られると下手に隠すよりも言った方が良いだろう。

「テレビ出演の交渉が決裂しただけだ。やっぱり上手くはいかないもんだな」
改めて、メールの文面を追いかける。

「それに、解散なんて事には俺がさせない。例え俺がプロデューサーを辞める事になってもな」

それだけの価値が、このユニットにはある筈だ。だからこそ言い切れる。

「……………ね？」

「……………うん、そうだね」

エバンスさんとダフネが何かを言い合っているようだが、メールの文面に集中して……………おっ？ マジか。

「三人とも。出演は出来ないが、収録を見ることは出来るらしい」
交渉を続けたからか、一応見学ぐらいはさせてくれるらしい。

「あら、そうなの？ あたし、テレビの収録なんて見るの初めてよ」
うふふとダフネは微笑む。

「でも、一体どんな番組なの？ まあ、プロデューサーの事だから、ある程度はまともだ

と思うけど」

「ある程度までもって言い方は失礼だな……」

ある程度どころか、無茶苦茶マトモなんだが。

「ブレインキャツスルだよ。ほら、川島さんと十時さんの」

番組名を言った途端、エバンスさんの目が輝く。

「ブレインキャツスルですか!？」

おや、エバンスさんが食いつくとは思っていなかったな。

346プロダクションがメインスポンサーを務める「ブレインキャツスルは、「アイドルによる、アイドルのための、アイドルのクイズ番組」をテーマとしている。番組MCから出演者まで、全てアイドルで行なう徹底ぶりだ。その為、普段テレビとは縁がない若年層にも人気が高く、仮に出演出来たら良い宣伝になるのだが——今回は、武内さんの方に運が傾いたようだ。

「行きましょう。プロデューサー、収録、行きましょう」

さつきからエバンスさんの圧が強い。そこまで好きだったのかその番組。

「ハリエツト、ブレインキャツスル好きなのね」

「勿論だよハーミー！ 凄いな、もしかしたら生の幸子さんに会えるかも……」

「いやあのさ、同じ事務所なんだからすれ違うこともあると思うぜ？」

「あああそうだった……色紙とサインペン、色紙とサインペン……」

急に挙動不審になったエバンスさんを差し置いて、ダフネがくすりと笑いかける。

「とにかく、目の前の予定に集中しなきゃいけないわね？ プロデューサーさん」
分かつてくれているようで何よりだ。

「ああ、まずはラジオだな。——悪いな、大きな仕事を逃してしまつて。だがE、G、G・Sの知名度が上がれば、色んな所から声がかかると思う。四人五脚で頑張つていこうな」

俺がそう言うと、ダフネはにんまりと意味深な笑みを浮かべた。

「ふふつ、プロデューサーさんはいい人ね」

「……？ 一体何なんだ唐突に。」

結局、神崎さんは武内さんと意見のすり合わせが出来たらしい。レッスン中のハーミーのスマホに、本田さんから連絡が来ていたようだ。

『『グリモワールを拾ってくれてありがとうー！』……だつて』

ハーミーが読み上げたメッセージの下には、黒いノートを持つてはにかむ、神崎さんの写真が載っていた。

「良かったわね、ちゃんと話が出来たみたいで」

ダフネがゆっくりと紅茶を口にする。確かに、あのエキストラムな神崎さん語で、よくコミュニケーションが取れたものだ。

「今回は何も出来なかったわね、プロデューサー」

俺の方を見たハーミーは、意地悪なにやけ顔を浮かべる。

「何もする必要はなかったって。武内さんも、しつかりと向き合うみたいな話はしていたから」

今の武内さんは、今西部長が言っていた「ただ城に届けるだけの車輪」ではなくなっているはずだし。

「何もしてない事ないですよプロデューサー。プロデューサーが、グリモワールを拾ったんじゃないですか」

事の発端はそうなのかもしれないけどさあ。どちらかという今回、巻き込まれた感じだったじゃないか。

「あたし達も、うかうかしてられないわね」

ダフネは優雅に紅茶を飲み続けながら言った。

「だったら、のんびりと紅茶を飲むのをやめなさいダフネ！」

「あら、急がば回れとも言わよ？」

「で、でも、善は急げって言わない？ ダフネさん」

……平和で何よりだ。俺も、うかうかしてられないな。

第18話 Could you answer this question (1)

ラジオの収録中、エバンスさんはずっとソワソワしていた。このラジオ番組の収録の後、ブレインキャツスルの収録があるからだ。

「はい、先程流れた曲がE. G. G. Sで『Union-Jack』でした。可愛い子達が歌ったとは思えない、カッコいい曲ね。エバンスさん、いつ発売するんですか？」

「……うえっ、あ、はい！ 来週です！ 皆さん、是非CDを買ってくだひゃい！」

「シンデレラプロジェクトも凄いけど、わたし達も凄いんだから！」

「よろしくお願いするわ」

……収録に集中出来ていないのはいかな。本番前に言い含んでおいたが、もう少し強めに言っておくべきだったか。

「すみません剣崎さん、うちの者が収録に不慣れで」

川島さんと、彼女が所属するユニット「ブルーナポレオン」のプロデューサーである、剣崎さんに頭を下げる。

「いえ、大丈夫ですよ。生放送ではないので」

劍崎さんは丁寧に返してくれた。そもそも、ブレインキャツスルの収録があるのは川島さんも同じだ。エバンスさんには、川島さんの大人の余裕を見習ってもらいたいものである。

「今夜のわかるわアワー、そろそろお別れの時間ね。皆さん、さよアワー！」

「さよアワよ、リスナーの皆様！」

「うふふ、さよアワ」

「さ、さよアワです！」

収録が終わった。川島さんは立ち上がるや否や収録スタッフに会釈を行ない、劍崎さんの元に駆け寄る。

「打ち合わせには？」

「充分間に合います。——それでは城戸さん、またマツスルキャツスルの撮影で」

「ええ、は……いい？」

あれ？ 劍崎さん、今なんて言った？

「マツスルキャツスル、って何ですか劍崎さん？ ブレインキャツスルじゃないんですか？」

俺の質問に、劍崎さんも戸惑う。

「……あれ？ 聞いていませんでした？」

——え？

スタジオのセットには確かに「筋肉でドン！ Muscle Castle」と、番組名が銘打たれていた。「頭脳」を「筋肉」に、「Brains」を「Muscle」と杜撰な修正を行なつて。

「マジでか……」

カメラの方を見ると、武内さんが撮影スタッフに向かって何かを言っている様子が窺える。出演者側に話が来ていなかったのだろうか。こんな重要な事柄、真つ先に伝えるべきだろ。

「いやあ、まさか番組が変わるとは思っていなかったよ」

呑気に声を上げたのは、何故かいた本田さんだ。

「そうね。ちよつとしたサブライズみたい」

呑気なのはハーミーも同様らしい。

「いや二人とも、完全にジャンルが変わっているから」

呑気な二人にツツコミを入れたのは、ニュージエネレーションズでも常識人である渋谷さんだ。……島村さんもいるし、仲良し三人組で収録を見に来たのだろう。

「……智絵里ちゃん、大丈夫かな」

島村さんが不安そうに呟く。

「智絵里ちゃんと言うと……緒方さんの事かな？」

俺が訊くと、渋谷さんはこくりと頷いた。

「テレビの出演が決まった時点で、凄く緊張していたから。多分、こんな事になって更に不安になっていると思う」

「そうかあ。大変だな」

「うふふ、まるで他人事みたいねプロデューサーさん」

「いや他人事だからな？ 言い方は悪いけど」

俺達は見物客に過ぎないし、観客席から飛び降りて助け舟を出すようなマネも出来ない。緒方さん達「キャンディーアイランド」と、武内さんが一丸となって乗り越えるべきだ。

「もー！ シロちゃんしつかりしてよ！ ここはさ、『俺がついているから心配するな』って言って、しぶりんの頭をポンポンするべきでしょー！」

「頭の中お花畑か」

「どうして私が巻き込まれるの？」

本田さんにとって俺は一体何なんだよ。それに、そんな事言うようなタイミングでもないだろ。

「凄い！ 未央ちゃん、さっきのツツコミ、良かったよね？」

島村さんは島村さんで、どうしてそんなに嬉しそうなんだよ。

「んー、ちよつと突き放しすぎかな。やっぱり相手はアイドルだから、もう少しオブラートな言い方がいい」

「……あの、未央さん、何の話？」

ハーミーが困惑したように本田さんの話の腰を折る。

「バラエティにはボケとツツコミとリアクションだよ、はみはみ！」

「いや全然分からねえって」

芸人じゃあるまいし、アイドルがそんな事を気にする必要はないだろ。

「ボケ……？ 『なんでやねん！』って言うアレですか？」

「……ハリエツト、それはツツコミだから」

渋谷さんが頭を抑えながら、エバンスさんに答える。正直、俺も頭を抱えそうな程にカオスなやり取りだ。

「少しでもカメラに映る工夫、って所かしらね」

ダフネの推測に本田さんはこくこくと何度も、島村さんはゆつくりと一回だけ頷いた。……わざとらしいボケとツツコミとリアクションは寧ろ、場を白けさせそうな気がするが。

そんなくだらない事をぎやいぎやい言っていると、他の観客から歓声が上がると。セツトの方を見ると、そこにはディーラー風の衣装に身を包んだ、川島さんと十時さんがいた。……改めて実感するが、すっげえ人気だな。俺もE・G・G・Sをここまで成長させないと――。

「いだっ、いだだだだだ」

横に座っていた渋谷さんに、何故か突如手の甲をつねられる。何か凄い怖い顔しているんですけど。

「えっ何どうした渋谷さん？ 俺つねられるような事したかな？」

渋谷さんはため息をわざとらしくつくと、ぶいとそっぽを向いた。

「……知らない」

えええええー？ 何なんだよその言い方！

誰だこれ。えんじ色のツイントールの子が緒方さんで、クリーム色の髪の子が三村さんって事までは分かる。だが、その間にいる小さな女の子は誰だ。

長い髪を二つに結って後ろに流しているその姿は、体操服を着ているとはいえ、紛れもなく双葉ちゃんそのものだ。しかし、俺が以前会ったあの子は、なんとと言うか、もつと脱力した感じだったぞ。

「わあ！ 杏ちゃんとっても可愛い！」

えっ本人!? 島村さん、本人なのこの子? 双海姉妹みたいに双子とかってオチじゃ

なくて!?

『杏ちゃん、意気込みはどう?』

『精一杯頑張りまーす! 応援してねー!』

いや誰だよマジで。頑張るって言葉と無縁だろ君は。

「……どうしたの?」

渋谷さんが訊いてくる。

「いや、余りにも第一印象とは違っていて面食らったというかなんと言うか」

えっ、と意外そうに反応したのは本田さんだった。

「シロちゃん、杏ちゃんと会った事あるの?」

「ああ、まあちよつとな」

まさか、「この前シンデレラプロジェクトの子がストライキを起こそうとして」なんて言える訳がない。シンデレラプロジェクトが絡んでいるからか、E・G・G・Sの三人も苦笑して誤魔化する。

「そう言えば、きらりが言ってたよね。『莉嘉ちゃんのイトコに会った』って」

渋谷さんが言うのと、本田さんは思い出したように手を叩いて俺を見る。

「そうだよ、そうだった！ シロちゃん、美嘉ねえと莉嘉ちゃんの従兄なんだよね！」
……どうやら、シンデレラプロジェクト内ではその話が完全に広まってしまっているらしい。

「あんまり広めないでくれよ」

「おおー、有名人の家族っぽい！」

……「家族っぽい」んじゃないくて、本当に親族なんだけどな。

キャンディーアイランドの三人はトークバトルで意図せず勝ちを拾ったものの、風船早割り対決では敗北を喫してしまった。

「あら、負けても美味しい展開なのね」

ダフネの言う通り、紙コップを渡されたキャンディーアイランドにカメラが寄る。ただ、美味しい展開とはいえ、中身を一口含んだ緒方さんと三村さんは苦い顔をしていた。『番組特製、センブリ茶です！ 健康に良いらしいですよー？』

十時さんの言葉を聞いた双葉ちゃんは、必死の形相でコップを顔から遠ざける。川島さんがそれを押し返そうとするが、必死の双葉ちゃんはそれを許さない。

「杏ちゃん、そこは飲んでリアクションを取るところだよー！」

「いや本田さん、双葉ちゃんはもうリアクション取ってるだろ」

何としても飲もうとしない双葉ちゃんの状態からは、寧ろコミカルな空気が漂っている。本田さんが求めているリアクションとはまた違うが、これも立派なやり方だろう。『い〜やくだ〜！ わたしは絶対に飲まないぞ！』

おい、素が出てんぞ。

『……はあい、では次のゲームに移るわよ！』

スタツフ一同も、双葉ちゃんにセンブリ茶を飲ませる事を諦めたらしい。川島さんに指示を送り、次の企画に移ったようだ。

『次は、マシユマロキヤツチ対決です！』

派手な色のおもちゃの銃が、それぞれのチームに手渡された。

「マシユマロキヤツチで銃が必要なのかしら……？」

「撃ち出すんじゃないか？」

俺の予想通り、マシユマロを銃を使って撃ち、それをキヤツチするというものらしい。『……幸子さんがキヤツチするんじゃないんですね』

エバンスさんが落胆したような声を出す。輿水さんのチームは、マシユマロを撃つのが輿水さん、キヤツチするのが姫川友紀——野球好きで知られているアイドルだ。

「そうみたいだけど……エバンスさん、残念そうだね」

島村さんがそう言うと、エバンスさんは苦笑した。

「ぼくとしては、小早川さんがマシユマロを撃つて、幸子さんがキャッチする役だと思っ
ていて……。そうしたら、小早川さんが幸子さんに真っ直ぐマシユマロを撃つて、凄く
面白くなるかなって」

いい笑顔でなんて事言いやがる。今までのイメージが少し変わったんだが。他の皆
も、穏やかな眼鏡っ子から飛び出てきた物騒な内容に、若干ドン引きしてしまっている。
あの本田さんでさえ苦笑いって相当じゃないか。

「……え、ええと、エバンスさん、本当に輿水さんの事が好きなのね」

ダフネの懸命なフォローも、かなり虚しい。

「うん！ 見ていて元気になるから」

それはアイドルとしてなのか芸人としてなのか。今は追及をしないでおう。

『さて、キャンディーアイランドの方は——』

『はい！ 私がキャッチします！ マシユマロ大好きです！』

キャラが突然変わったのは、スタジオの三村さんも同じだった。食い気味で返事して
きたぞあの子。

「あー、みむっちは甘いものに目がないからなー」

「そうなの？ 初耳ね」

本田さんとハーミーの会話を聞くに、甘いものならモチベーションが上がるタイプの

子か。さつきは苦い飲み物を飲まされていたから、尚更食い付きがいいのだろう。

『マシユマロを撃つのは……智絵里ちゃんね』

『えっ!? あ、はい!』

双葉ちゃんが緒方さんの左腕を上げていたが、やはり面倒だからだろうか。節々で省エネしてやがる。

『それでは、YDチームから!』

『ちよつと! カワイイボクが抜けてますよ!』

ツッコミを入れながらも、しっかりとマシユマロを上を撃つ輿水さん。やはり威力は調整してあるらしい。高く飛ぶには飛ぶが、天井の照明に当たる程までは飛ばない。

『オーライ、オーライ……』

姫川さんはフライ球を撮る要領で、危なげなくマシユマロを手を取った。野球好きと公言するだけはあるな。

『友紀さん、マシユマロをキャッチしましたー! キャンディーアイランド、ここは取れないとピンチです!』

三回勝負ではあるが、ここで成功できないと後に響くだろう。テレビに不慣れな二人が、致命的な失敗をしなければいいのだが。

『う、撃ちます!』

素つ頓狂な声を出しながらマシユマロを撃つ緒方さん。ありや、微妙に明後日の方向に飛んじまったな。撃つ時に目を瞑ってしまったからだろうか。

「ダメかもしれないね」

渋谷さんがため息をつく。……あと二回残っているし、残りをキツチリと成功させれば問題ないだろう。

『はあっ!』

三村さんが動いた。おおよその落下地点が分かると同時に、風船早割り対決では見せなかつたような俊敏さで滑り込む。スライディングの体勢を取った彼女は、そのまま落ちてくるマシユマロに向かって大口を開け――。

『あむっ!』

閉じた。急に力の入った右足が三村さんのスライディングを止めることはなく、彼女はゴロゴロと数回ほど床の上を回る。

『ちよつと、大丈夫?!』

慌てた様子で、川島さんと十時さんが駆け寄る。むくりと起き上がった三村さんは、満足気に口を動かしていた。

『……せ、成功! 成功でーす!』

十時さんがふと我に返り、声を上げた。……確かに成功ではあるのだが、ちよつと体

を張りすぎてないか。

『凄いいり方だったけど、感想は何かあるかしら?』

川島さんが三村さんにマイクを向けると、彼女は満面の笑みを浮かべて答えた。

『はい、美味しいです!』

——いや、そうじゃないだろ。

第19話 Could you answer this
s q u e s t i o n (2)

マシユマロキヤツチ対決は両方の健闘もあり、引き分けに終わった。

「ちよつといい、えつちゃん？」

本田さんが不満そうな顔でエバンスさんに訊く。

「はい？ どうしたんですか、本田さん？」

「えつちゃんさあ、幸子ちゃんだけじゃなくてキャンディーアイランドの応援もしてよー！」

確かに、エバンスさんは先程から興水さんの応援ばかりしている印象がある。エバンスさん自身が興水さんのファンである事は致し方ないのだが、今はシンデレラプロジェクトのメンバーと一緒に座っている。敵に塩を送るといふ訳でもないが、本田さんの言う通り、キャンディーアイランドの応援もしてあげるべきだろう。

「でも、ぼくは」

「まあまあエバンスさん。両方応援してやれよ」

別にどちらか一方の肩を持つとは言っていないし。

「……むう、分かりました。プロデューサーが言うなら」

若干むすりとはしているが、聞き分けが良くて助かった。

「おやおやく？ シロちゃんって意外と、隅に置けないんじゃないの？」

本田さんがニマニマしながら言う。一体何処を見てそう思ったんだよ。ダフネは「ふつ」と笑い、本田さんに返す。

「もちろんよ、本田さん。だって、あたしとハーミーを口説き落としたんだから」

「ふんっ」

突如、渋谷さんにアキレス腱を蹴られる。いつてえ。

「ちよつと渋谷さん、暴力はダメじゃないか？」

「知らない」

さつきから何なのこの子。

「えつと、それってスカウトされたって事ですよね？」

島村さんの質問に、俺は頷いて返す。

「当たり前じゃない！ プロデューサーがナンパするなんて……ふつ、ふふふふ」

「どうして笑ったんだハーミー？俺がナンパするのってそんなに変か？ いやナンパした事もする気もないけど」

それよりも、早く誰か渋谷さんを止めてくれ。さつきからアキレス腱への攻撃が絶え

ない。蹴るスピードも速くなってきてるし。

「……あれ？　そういえば、双葉さんと小早川さんがいないですね」

エバンスさんの言葉通り、マシユマロキヤッチ対決に参加しなかったメンバーがいつの間にか、スタジオから姿を消していた。——そろそろ蹴るのやめてくれませんかね、渋谷さん。

「どうしたのかしらね」

ダフネが首を傾げていると、十時さんがスタッフの合図を受けて声を上げる。

『はあい！　準備が整ったようなので、次の対決、私服ファクションショーに移りまーす！』

十時さんのアナウンスに、川島さんも続く。

『アイドルの私服を見るチャンスよ？　意外な一面が見えちゃうかもしれないわね』

成程、おそらく双葉ちゃんと小早川さんはその準備に入ったという事か。……待て。

双葉ちゃんが？

「ヤバイよしまむー！　ピンチかも」

「えっ!?!　えっ?？」

本田さんも気付いたようだ。渋谷さんもため息をついているし、分かっているのはE・G・G・Sの三人と島村さんと言ったところか。

「あー、まあ……。こりゃあいかんな」

「ちよつとどういう事？ どうしてそんな諦めムードなのよ！」

いきり立つハーミーに、渋谷さんは答える。

「見ていれば分かるよ、ハーミー」

『先攻は、KBYDチーム！ 小早川さんの私服です！』

普段から着物を着ているアイドルだ。今回も、華やかな着物姿を見せるのであろう。

『じゃじゃん！』

セツト奥の幕が開かれ、着物を着た小早川さんが——着物じゃない？ セーラー服だ

と!? そう来たか。

『放課後すぐの収録で、制服なんです』

何時ものはんなりとした着物とは違い、清楚な少女といった雰囲気だ。やっぱり、服装で印象が変わるものなんだな。E・G・G・Sの三人も、写真集を出すとなったらこんな風にイメージを変えるような服装をさせてみるのも良いかもしれない。

むっ、嫌な予感。靴底が脚の筋を隠すようにかかをとを上げる。すぐに、土踏まずの辺りに衝撃が走った。

「……」

渋谷さんは無言で俺を睨みつけている。流石に学習するつての。こらこら、悔しいか

らって蹴り続けるのはやめなさい。

「どつたの？ しぶりん」

足元の攻防に気付いていない本田さんが、のんびりとした調子で訊いてくる。

「さつきから城戸さんが、鼻の下を伸ばしてばかりだから」

「伸ばしてないからな？」

妙な事を吹き込むな。

「ほほ〜う、ジエラシーですかしぶりんさ〜ん？」

本田さんは本田さんで、渋谷さんの逆鱗を触るような真似をしないで欲しい。その分のしわ寄せが俺に来るから。

「えっ、プロデューサー……もしかして、幸子さんの事も」

「いやだからそんな目で見てねえって」

エバンスさんも食いつくなよそんな話題に。

「未央、嫉妬とかじゃないから。頼りない近所のお兄さんに、喝を入れているようなものだから」

「俺ってそんな風なの？ 渋谷さん、一応俺もプロデューサーだよ？」

「知らない」

「いや知らないじゃなくて」

『さあ、次はキャンディーアイランドから、杏ちゃんです！ どんな私服なのかしらね』
あーもうほら、双葉ちゃんの番が来ちゃったよ。あーもうやっぱり、カフェで会った時に着てた「働いたら負け」Tシャツだよ。

「えつと……?」

「何かしらこれ……?」

「……何ですかあのTシャツ?」

E. G. G. S一同は困惑しきりである。そりやそうだろう。今までアイドルとして満点の笑みを振りまいていた女の子が、私服では「働きたくない」と声高に宣言しているのだから。そして渋谷さんはそろそろ蹴るのをやめてくれ。

『えーっ、と……?』

『素敵なTシャツですなー?』

MC二人も理解が追いついていない様子である。

『これは杏のモットー! 週休八日を希望しまーす!』

だから双葉ちゃん、余った一日は何処から来るっていうんだ。そんな事を本番中に言うんじゃない。

「ああ、やっぱり……」

「杏ならやりかねないとは思っていたけど」

本田さんと渋谷さんはがっくりと項垂れた。

「え？ 杏ちゃん、私服だよ？」

島村さんはそれで良いと思っっているのか。

『やっぱり目指すは印税生活だよね』

『……え、ええ、そうね』

川島さんの顔も引きつっている。

とはいえ、観客の笑いは取れているし、番組としては問題ないだろう。寧ろ、無難過ぎる服装だと撮れ高にならなかった可能性もある。あの子、試合に負けて勝負に出たな。「キャンディーアイランドを広く知ってもらう」という点では、あながち間違いとは言いきれない。広く知ってもらうためには、話題の提供が重要だからな。

『はあい！ 勝者はKBYDチームの紗枝ちゃん！』

十時さんの言葉を受け、小早川さんは柔らかな笑みを浮かべる。うーむ清楚。そして双葉ちゃん、自分が撒いた種なんだからちゃんとセンブリ茶を飲め。

「二〇対二二〇……圧倒的な差ですね」

正直、ここから勝てるビジョンが見つかからない。休憩という事で、出演者は舞台裏に引き払っているが、スタッフはひっきりなしに動いている。と言うのも、次は最後の種

目だからだ。

「どんなゲームだろう?」

「うーん、わかんないな。しぶりんは?」

「全然分からない。休憩挟む程だから、大掛かりなものだと思うけど」

「最後だから、テレビ的にも派手な種目じゃないかしら」

「どの道、応援しなきゃいけないわね!」

「うーん……幸子さんに頑張つて欲しいけど、キャンディーアイランドの三人にも頑張つて欲しい……」

口々に言い合うアイドル達を見て苦笑しながらも、心の片隅では緒方さんの表情が離れなかった。罰ゲームが峡谷でのバンジージャンプだと知った時の彼女の顔は、正に顔面蒼白といったものだったからだ。口に合わないセンブリ茶の後という事もあり、吐きそうになっていた。……大丈夫だろうか。

「……城戸さん? 智絵里の心配でもしてるの?」

ふと、渋谷さんが声を掛けてきた。

「ああ、まあな。落ち着いて欲しいが」

「大丈夫だよ。プロデューサーがついているから」

渋谷さんは、ふっと表情を緩めながらそう言った。以前相談事を受けた時に見せた悩

んでいるような表情ではなく、武内さんを信頼しているような、晴れやかな顔だった。「——ん、そうだな」

ささやかな笑顔を送った渋谷さんに、俺もにつと笑って返す。今の武内さんならきつと、緒方さんを勇気付けられるだろう。ただ回るだけの車輪でなく、シンデレラの手を引くことが出来る魔法使いに戻ったのだから。

「……ねえはみはみ、やっぱりしぶりんとシロちゃん、イイ感じじゃない?」

「あら、プロデューサーじゃ渋谷さんの相手には力不足よ」

「そうかな? とつても素敵だと思うよ」

「えっ、え? そう……かも……」

……な——んか周りが変な事を話してるな。

「あーのーなー、俺にはそういうつもりはぜんぜんないんだけどな?」

前世からの累計年齢で言えば、娘も同然だ。手を出すのは気が引けてしまう。

「そうなのかしら? 仮にそうだとしても、この六人の中で誰がタイプなの?」

ダフネお前、時々とんでもない爆弾を寄越してくるよな。

「そんな目で見えたまるかよ。ほら、そろそろ休憩が終わるぞ」

セットの中央には、白い粉がたつぷりと入った浅い箱の上に、滑り台が三つほどくっついたような器具が二つ並んでいた。……頼むから皆、白い目で俺を睨まないでくれ。

再びスタジオに戻ってきたアイドル達は、番組が始まった時から着ている体操服に加えて、ヘルメットを装着し、肘と膝にプロテクターを装備していた。

『最後の対決は、滑り台クイズ!』

クイズに答えると、相手の滑り台の角度が上がり、先に全員滑り落ちた方が負け、というルールだ。こんな所で突然、クイズ要素を思い出したように出してくるのか。番組のノリが昭和だとツツコむのは、もう遅すぎるだろうか。

「頑張つて、三人とも!」

ハーミーが祈るように呟く。大差が付いており勝利は見込めないかもしれないが、せめて一矢報いるぐらいはして欲しい。

『それでは最初は、芸能の一〇から!』

スタジオのモニターに、胸がデカイ二人組が映し出される。目を隠す黒線が掛かっているが、正直バレバレである。下手な話、顔じゃなくて胸に目がいくからな……つと、渋谷さん、腿をつねようとするなよ。

「……!」

彼女は右手を掴んだ俺の手を振りほどき、恨めしそうに睨みつけた。頼むから収録に集中してくれ。

『先週の放送で天然解答を炸裂させ、番組を終了させた、このチームの名前は？』

『BBチーム！』

『BBチーム！』

輿水さん早い。三村さん惜しい、もう少し早ければ。ピンポンピンポンと正解を表わすSEが鳴り、キャンデーアイランドの滑り台が少し上がった。……モニターに映っている、及川さんと大沼くるみの黒線が消えたが、正直なくす意味がないと思う。

『「芸能」の二〇！』

問題に正解した輿水さんは、より高い点数の問題を選ぶ。

『今年の四月から全国ライブを開催している、この三人組の男性アイドルユニットは？』
モニターには、三人の男性のシルエツトが映し出された。……この世界での男性アイドルは若干マイナーらしく、テレビでもあまり見ない。前世では、女性アイドル以上に見かけたというのに。

『ジュピター、どすなあ』

とは言え、小早川さんが危なげなく答えた。確かにその三人は、少しだけ世間を賑わせたからな。961プロから、315プロに移籍したという話を聞いたことがある。

「……かんっぜんに相手のペースじゃない！」

ハーミーが焦ったように声を上げる。このままだと、完封されてもおかしくないな。

続く姫川さんも正解し、キャンディーアイランドの滑り台はさらに上がる。

『……もうむりい』

双葉ちゃんがずり落ちそうになる。緒方さんはその腕をしかと掴んだ。いくら双葉ちゃんが小柄で軽いとはいえ、支え続けるのは難しいだろう。双葉ちゃんは体を横に動かし、足を突っ張って踏ん張る。

「もう後がないわね」

ダフネが心配しているような声で言う。

「まだまだ、これからだよフナちゃん！」

本田さんのその自信はどこから来るのかわからないが、今はその根拠のない信頼に乗っかるとしよう。

『次で決めますよ！「歴史」の一〇！』

輿水さんがクイズのジャンルを選択する。キャンディーアイランドは虫の息だ、あと少しでも角度が上がれば、カワイイヤキュウチームの勝利が決まるだろう。

『徳川将軍、三代目は誰？』

ふと、輿水さんとエバンスさんの動きが止まる。

「……徳川家康？」

「エバンスさん、それ一代目将軍だからな？ 真つ先に候補から外して欲しかったけど

な？」

しかし、興水さんも分からないのか。じゃあどうして選んだんだよ。

『家光！』

突如、キャンデーアイランドの方から声が上がる。答えたのは——三村さんか！

第20話 Could you answer this question (3)

三村さんが正答したことにより、ボクドスエチームの滑り台が初めて動いた。

『さあキャンディーアイランド、巻き返しの時よ！』

双葉ちゃんはこくりと小さく頷くと、意を決したように前を見る。

『「科学」の三〇』

観衆からは、悲鳴交じりの歓声が飛び出す。

『あ、杏ちゃん……』

緒方さんと三村さんは、不安そうに双葉ちゃんを見る。

『負けないためにはこれしかないよ』

いやはや、男らしいぜ双葉ちゃん。しかし、一体何だっというんだ。せいぜいクイズ番組なんだから、そんな難しい問題が出るはず——。

『スカイツリーのでっぺんからリングを落とすと、落下直前の速さはいくらになりますか？ スカイツリーは六三四メートル、重力加速度は九・八とします』

……あのさあ。難易度のふり幅が激しくねえかこれ。珍解答を連発したっというB

Bチームを責められないぞスタッフ。

「城戸さんは分かる？」

「……渋谷さん、無茶は言わないでくれ」

仮に理系出身だったとしても、暗算でこんな計算を行なうのは無理がある。

『秒速一一・四七四メートル』

ほんとかよ。適当に言っても意味ないだろ。

『えーっと、時速だと？』

川島さん、あなたは鬼か。適当に答えた双葉ちゃんに追い打ちをかけるな。

『四〇一・三〇六キロ！』

双葉ちゃんが力強く答えて一瞬。スタジオが静まり返ったかと思うと、ピンポンピンポンと正解を表わすSEが鳴り響いた。……え、マジで？

『せ、正解です！』

カワイイドスエチームの角度がぐんと上がる。その勢いに負けたのか、輿水さんは滑り落ちて……ない。すんでのところで、滑り台にしがみ付いている。

「幸子さーん！ 頑張つてー！」

エバンスさんは必死の形相で、輿水さんを応援している。

「なんかすごい態勢になっているわね……」

「アイドルがしていいのかな、これ」

「幸子さんだから大丈夫です!」

エバンスさん、それは褒めているのか貶しているのか。

『「アニメ」の三〇!』

『「幽体離脱! フルボッコちゃん」の主人公、フルボッコちゃんが生まれた場所はど—
—』

『冥王星六丁目六番地六号!』

双葉ちゃんの快進撃が止まらない。食い気味で答えるとは。

「これが三〇の問題? 一〇でもいいくらいだわ!」

ハーミーは鼻をふんすと鳴らしながら言った。それに食いついたのは本田さんだ。

「おつ、はみはみフルボッコちゃん好きなの?」

「あつ、いや、……常識よ常識!」

……知らんよそんな常識。そもそも作品名自体初耳なんだが。

『も、もう、あきまへん……ああつ!』

一気に角度が上がった滑り台に対応出来ず、小早川さんは滑り落ちてしまった。ぼすん、と勢いよく粉に落ちていった小早川さんは、真っ白になってしまう。

『早く、早く次の問題に移ってくださいー!』

それでも落ちない興水さんは、もはや意地だろうか。

『「スペシャル」の三〇!』

双葉ちゃんが問題を選択する。三連続で最高難度か。チャレンジジャーだなこの子。

『江戸時代のオランダ貿易で、ガラス製品の緩衝材として持ち込まれた外来種です。花言葉に「幸運」、「約束」などがある花は?』

……知らねえ。無茶苦茶難しいな。

「しぶりん、家が花屋でしょ? 分かる?」

本田さんの質問に、渋谷さんは首を横に振る。

「ううん、分からない。花言葉はともかく、江戸時代に入ってきたかどうか……」

「渋谷さん、実家が花屋やっているのね」

ダフネが意外そうに渋谷さんに訊く。

「小さい店だけだね」

実家が花屋でも分からない問題か。物凄い難問だ。いや、もしかしたら双葉ちゃんなら——。

『ごめん、分かんないや』

……分からないのか。どうしたものか。

『……シロツメクサ』

俺の思考は、小さく掻き消えそうな声で遮られた。

『シロツメクサです！』

それは、緒方さんの声だった。双葉ちゃんが落下速度を答えた時のような、はつとした静寂が訪れ——ピンポンとSEが鳴った。

『——正解です！』

『シロツメクサって……！』

『うん。四葉のクローバー』

『まさに、幸運の象徴だね！』

緒方さんと親交があるニュージエネレーションズの三人には、何やら思うところがあ
るらしい。

『緒方さんと何か関係あるのかしら』

『うん。智恵理、クローバーが好きだから』

なるほど。緒方さんにはうってつけの問題だったという訳か。

ボクヤキュウチームの滑り台が上がる。元々限界が近いのに、更に傾斜をつけられたのだ。運動神経がいい姫川さんでも、耐えきれぬようなものではなかったらしい。

『うわっ、うわわ！』

もうほとんど壁と言ってもいいぐらいの角度になった滑り台を、彼女は勢いよく滑り

落ちた。

『もう、限界……』

それに続くような形で、興水さんも粉の入ったプールに沈んでいく。

『幸子ちゃん、可愛い落ち方でしたよお』

『はあい、ということでキャンディーアイランドの勝利!』

観客席が沸いた。あれだけ綺麗な逆転劇を見たのだ。盛り上がらない方が不自然だろう。

『やったあ! 杏ちゃん、私たち、勝ったんだよ!』

感極まつたらしい三村さんが、今にもずり落ちそうな双葉ちゃんに抱き着く。——そうすると当然、二人を支えるのが緒方さん一人になるわけで。

『うわっ、うわああ!』

勝者のはずであるキャンディーアイランドの三人も、真っ白な粉に勢いよく突っ込んでいった。もくもくとスタジオに煙が舞う中、スタツフの声が響いた。……対決の撮影は終わったらしい。

「あつ、気付いたみたい!」

本田さんが、キャンディーアイランド三人に向かって手を振る。粉まみれの緒方さんは、いい笑顔でこちらに向かって手を振っていた。

「城戸さんは手を振らないの?」

「いや、双葉ちゃん以外にとつてみたら初めましてだからなあ」

突然知らない男性が手を振ってきたら、少し怖いだろう。それに、双葉ちゃんも手を振り返すような子じやないだろうし。

ふと、双葉ちゃんと目が合う。彼女は小さくため息をつくような真似をすると、控えめにピースサインを送った。——これに応じないのは流石に無礼だろうな。俺も彼女と同じように、小さなピースサインを見せた。

「何よ、結局ピースしてるじゃない」

「別にいいだろ、向こうからしてきたんだからさ」

双葉ちゃんも、はしやく時があるんだな。

結局、得点は二二〇対二二〇で終わり、両者引き分けとなった。

『仲がいいですねー』

いや十時さん、仲が良くてもなかなか点数は揃わないと思うぞ。

『そんな仲良しな二チームには、アピールタイムは半分こ! 罰ゲームも一緒に受けてもらうっていうことで』

川島さんの言葉に、両チームが一斉に顔色を変える。

『聞いてないですよー!』

『言わないようにって言われていたもの』

それでいいのか。この番組、色々と連絡が抜けているような気がするんだが、大丈夫なのかそれ。場当たりに制作してねえか。

『来週は、キャンディーアイランドさんとどすえチームさんのバンジー特番でーす!』

罰ゲームでまるまる一時間使うのかよ。無茶苦茶だなこの世界は。

『対決の意味はあったのかしら……?』

『ハーミー、深く考えるのはやめよう』

これはバラエティ番組だ。一々意味を求めていたら成り立たない。

『杏が頑張った意味がないじゃないかー!』

双葉ちゃんの虚しい叫びは、観客の笑い声で掻き消えてしまった。

収録が一通り終わった。キャンディーアイランドの三人は自らのデビューシングル
の告知、ボクドスエチームはブレインキャッスルの総集編DVDの告知といった形でア
ピールタイムを終えた。

『大成功だね、しまむー!』

『うん、やったね未央ちゃん!』

大きなトラブルもなく撮影を終えた事に、シンデレラプロジェクトの仲間は大満足している様子だ。

「CDの告知も出来てテレビのお仕事がもう一つ入るなんて、とってもいいじゃない」
ダフネもしみじみと感想を述べる。確かに、テレビの仕事がもう一つ入ったのはデカイ。内容がどうであれ、全国の視聴者に顔を覚えてもらうチャンスが増えたのだ。

「本当にな。さて、俺達は帰るけど、三人はどうする？」

俺が渋谷さん達に訊くと、エバンスさんは「えっ」と声を上げて俺を見る。

「こういう時はいつも、武内さんの所に行って話をしていませんか？ 今回は行かないですね」

あれ？ そうだったっけな。

「とかいってえっちゃん、幸子ちゃんを見たいんでしょ？」

本田さんが凶星を突いたのか、エバンスさんは「うっ」と返答に窮する。……付いてくるつもりだったのかよ。

「今回はパスパス。武内さんもバンジーロケの調整があるだろうし、忙しいだろ」
それに、わざわざ挨拶をする程でもない。

「あら、残念だったわね。エバンスさん」

ダフネの言葉を受け、エバンスさんは無言で俺の背中をポカポカと殴る。……何だか

今日は、アイドルから良く暴力を受ける日だな。

「取り敢えず、エバンスさんは輿水さんとの共演を目標に頑張っっていたらどうだ？
アイドルを続けていけば、チャンスはいくらでもあるだろうし」

エバンスさんは突如動きを止める。その後、決意したようにぐつと顔を上げた。

「……はい！ 頑張ります！」

「頑張ってください！ エバンスちゃん！」

島村さんのエールを受けて、エバンスさんにはっこりと笑った。……うん、目標が出来たのは良かった。モチベーション維持には大切だからな。

「わたし達も、頑張らなきゃいけないわね！ 目指すは、テレビ出演！ 撮れ高確保よ
！」

「ふふつ、ハーミーが頑張るなら、あたしも頑張らなきゃね」

今回、収録を見学して良かったな。こうして、E・G・G・Sの三人もやる気が出たらしいから。

「……私達も帰ろうか、未央」

「うん、そうだね！ 明日、盛大にお祝いしちゃおう！」

「はい！」

「おう、気を付けて帰れよ」

俺が手を振ると、ニュージエネレーションズの三人は各々会釈をして去っていった。

「もちろん、プロデューサーも頑張らなきゃいけないわよ」

ハーミーが釘を刺すように言った。

「分かってるよ。何せ、四人五脚だからな」

さてさて、先生に進捗を訊いてみないとな。

「……もつれて一緒に倒れるのだけは勘弁よ」

「うっせハーミー」

もし倒れても引き摺ってやるよ。

第21話 Where are they (1)

休日とは言え、一人暮らしにとっては忙しい事に変わりない。溜まっていた家事を全てこなしておかなければならないからである。掃除は粗方終わらせておいたし、ワイシャツのアイロンがけももう少しで終わる。——そろそろ暑くなってきたから、冬物も仕舞っておかないと。今日中にある程度、大仕事は終わらせてしまわないといけないな。

突如、メッセージアプリの通知が来る。送信者は……美嘉か。珍しいな。

『今ヒマ?』

……うーん、『今アイロンがけてる』つと。よし、返信も終わったしアイロンに集中して——。

『ヒマならきて』

……暇じゃないんだけどな。

『まだ家事が残ってる』

『いいからきて』

タコのような宇宙人のような黄緑色のキャラクターが怒りで真っ赤になっている、よ

く分からないスタンプが送られてきた。このスタンプが送り付けられるのは、大体本当にイラついている時か怒っている時だ。……分かったよ。

『今支度するから場所教えろ』

ワイシャツ一枚のアイロンなど、脛蹴りに比べたら安いものだ。脛蹴りはマジでいてえし。

待ち合わせ場所に余裕を持って着くと、美嘉が近付いてきた。

「……ダサくない?」

開口一番にそれか。

「仕方ないだろ。急いできたんだから」

「何それ!? 七分袖のシャツに黒いチノパン!? センスが高校生じゃん!」

悪かった、悪かったって。ビシツと決まっている美嘉と雲泥の差で悪かったって。

「……ファツションチェックはいいんだよ。それよりも、何なんだ急に呼び出して」

美嘉はまるで、信じられないと言っても言うような顔をした。

「今日、莉嘉がイベントする日! 何で進兄が知らないワケ!」

あれ、そうだったっけな。俺の方には連絡が行ってない気が――。

「……うつわ、マジだ」

メッセージアプリを開くと、莉嘉が「明日イベントだから来てー☆」と送り、俺が既読した後が。やべえな、殆ど寝ている状態で既読してたかもしれないな。

「さ、行くよ進兄!」

美嘉はずかずかと歩き始めた。

「分かったからそんなに急ぐなって」

くそう、俺の休日が。

さて、莉嘉達のユニット「凸レーション」が今回受けた仕事は、ファッションプラントとのコラボイベントという事だった。元々モデル事業部だった武内さんのコネがあり、こうして大きな仕事が舞い込んできた——とは美嘉の話。

「うーん、武内さんのコネはすげえな」

俺がしみじみと言うと、美嘉はため息をつきながら俺の方を向く。

「進兄も、もう少し頑張ったらどう? 担当しているアイドルが可哀想じゃん」

「はいはい」

お前に言われるまでもねーよ。……作曲の先生には何回か確認を取っているが、「スランプで曲が書けない」とか言ってるし。作詞の先生が友人って話だったから、彼とも結託して急かすべきだろう。

「素っ気ないなあ……。そんなんじゃ、シンデレラプロジェクトに追い抜かれちゃうよ」

「シンデレラプロジェクトと言えば、美嘉は最近顔出してるのか？ 結構部屋にやって来てたって話だったか」

俺が訊くと、美嘉はぷいっと視線を逸らした。……何かあったのかよ。

「……いや、ほら、アタシは部外者だし？ 余計な事してまた何かを起こしたくないっていうか」

……ああ、本田さんの件でまだもやもやしているんだな。美嘉は何も悪くないのに。「——つと、着いたよ」

丁度、イベントの最中だったらしい。特設のステージでは、莉嘉と諸星さんとあと一人、小学生ぐらいの女の子がキャピキャピと司会の女性とトークをしていた。

「うんうん、緊張していいみたいで良いじゃないか」

天真爛漫に年少の二人がトークを繰り広げ、諸星さんが二人をやりわりとセーブして舵を切っている。上手い具合に纏まってるじゃないか。

「緊張してないだけじゃダメなんだけど」

「……美嘉は敵しいな」

……おっと、ステージの上の莉嘉と目が合ってしまった。にししと笑うと、彼女は俺と美嘉に向かって手を振った。流石に無反応で突っ立っているのも悪いので、小さく手を振り返す。それに気付いたららしい諸星さんが、すぐに観衆に向かって手を振った。

……確かに、「城ヶ崎美嘉がいる」となったら、別の意味で騒ぎになりかねないからな。こうして観衆全員に手を振る事で、サービスの一つだと思わせるのか。ナイス判断だ、諸星さん。

『あー！ みりあもやるー！』

もう一人の女の子は、二人に負けじと観衆に向かって手を振った。いや、あれじゃ手を振るって言うより腕を振ってる感じだな。

「全く莉嘉は……。もう少しステージに集中しなさいよ」

「ま、そうだな」

我が従妹ながらハラハラしたぞ。

ステージが終わるや否や、美嘉はステージの裏へと向かっていく。

「おい美嘉、どうした？」

「進兄も来る？ 346の社員証は？」

「持つてるけど……。ああもう、分かった分かった」

おそらく先輩アイドルとして、あるいは一人の姉として意見を述べるのだろう。俺からしてみれば、別にこれと言った問題は何も無かったけどな。新人アイドルとしては満点に近いだろう。

「やつほー皆」

美嘉に続いてステージの裏に佇んでいたテントに入ると、パイプ椅子に座って水を飲む凸レーシヨンの三人がいた。

「あ！ おねーちゃん！ それに進にーちゃんも！」

真つ先に反応したのは莉嘉だった。諸星さんはすつと立ち上がると、につこりと笑った。

「城戸ちゃんおつすおつす！ お仕事はお休みー？」

ううん、まだちよつと慣れないかなーこの子の喋り方には。

「おう。明日はまた仕事だけどな」

寧ろ、今は彼女達が仕事 중이다。

「きらりちゃん、もしかしてこの人が進にーちゃん？」

黒髪の小学生が、諸星さんに訊く。

「うん、そだよー！ 莉嘉ちゃんと美嘉ちゃんのお兄さんでー、プロデューサーなんだつて！」

「へー！」

ちよつと違うんだけどな。正確には兄じゃなくて従兄だが。諸星さんの言葉で興味が湧いたのか、小学生は立ち上がって俺に近付く。

「わたし、赤城みりあつて言うの！　よろしくね、進にーちゃん！」
「よろしく、みりあちゃん」

こう、なんだろうか、年相応の女の子っていうのを久々に見た気がする。……今までが個性派揃いというかなんと言うか。

「あ、進兄ダメだから。小学生に手を出しちゃ」

「誰が出すか」

下手すりゃ孫みたいなもんだぞ。手を出したら異常者じゃねえか。

「——城戸さんと、城ヶ崎さん？」

武内さんがテントの中に入ってきた。俺と美嘉を見るなり、彼は目を見開く。

「おはようございませす、武内さん。今日は休日だったのですが、こいつに連れられて」
美嘉を見ると、奴はわざとらしく肩を竦めた。

「もちろん、オツケーだよね？　アタシ達、関係者だから」

両方とも莉嘉の親族であり、346に所属している身だ。確かに、これ以上ないくらいには言い訳が出来るが。

「ええ、はい。城ヶ崎さんと城戸さんなら、問題はないかと。城戸さん、社員証は」

「ああはい、持ってます」

ポケットに突っ込んでいた社員証を首に掛けて見せると、武内さんは小さく頷いた。

……随分とセキユリティーが甘い気がするが、この際柵に上げておくか。

「お二人は、先程のステージを見ていましたか？」

「うん！ おねーちゃんと進にーちゃん、デートしてた！」

武内さんの質問に答えたのは、莉嘉だった。デートつてお前。

「……城戸さん？」

武内さんも動揺しないでくれよ。

「莉嘉の年頃だったら、男女が並んでいるのを見たらそう思うんじゃないですか？」

「……城ヶ崎さん」

「——絶対に、ない。コレはちよつと無理。生理的に」

「生理的に!？」

反抗期の娘かよ！ いや時期的にそうかもしれないけど、俺は従兄なんだけど！

「えー、つままない」

「つままないって話じゃなくてな」

武内さんも話のペースを乱されて困惑しているらしく、首筋に手を当てている。

「その、お二人から見て先程のステージはいかがだったでしょうか」

さっきのステージ、ねえ。

「問題ないと思えましたよ。新人にしては、しっかりとトークを掘り下げ、ピカピカポツ

プのPRも盛り込んでいる。ターゲットであるティーンエイジャー層に届くようなものだったと思います」

俺の感想を受け、莉嘉はにんまりとした笑みを浮かべる。

「進にーちゃんに褒められた!」

「やったに、莉嘉ちゃん!」

「ずるーい! みりあも褒めてー!」

「あ、いや、三人とも良かったと思うぞ、うん」

しかし、美嘉は考え込むような素振りを隠していない。

「まず、莉嘉はもつとステージに集中して。お客さんがいっぱいいるんだから、アタシ達の方ばっかりチラチラ見ないこと」

「……はぁーい」

「きらりちゃんはナイス! もつとバンバンキャラを出してこー!」

「バンバン?」

「美嘉ちゃん! わたしは?」

「みりあちゃんは優等生過ぎるかな? でも可愛いからオツケー!」

……身内が可愛い故に厳しくなってしまったか。とはいえ、途中で俺達に向かつて手を振り、諸星さんのフォローを知らずに受けてしまったからな。厳しい意見はやむを得

ない部分がある。

「武内さん自身は、どう思いました?」

むうと不満そうに頬を膨らませる莉嘉は置いて、彼女達のプロデューサーである武内さんに話を振る。

「——お客さんを、もつと巻き込みたいと思いました。ファンのみならず、通りかかった人も足を止めるような」

武内さんはゆっくりと、言葉を選ぶように意見を言った。

「……通りかかった人も足を止めるような、ですか」

脳裏に浮かぶのは、渋谷さん達二ユーージェネレーションズのデビューライブだ。あのライブ自体は武内さんの言った通り、通りかかった人も足を止めていた。だが、それはパフォーマンスがあつての事である。トーク一本で通行者を振り向かせるのは、新人の凸レーションにしてみたらかなりの仕事だろう。

「何かアイディアはあるの?」

美嘉が武内さんに訊くと、武内さんは考え込むような姿勢のまま答える。

「……引き続き、三人の思うように進めていこうかと」

「何それ。丸投げ?」

「……武内さん、それでは諸星さんに負担が集中する気がするんですが」

凸レーションの特色は、ユニット名にもあるように「凸」の字のような身長差や年齢差にある。しかし、それ故に、年少の二人が暴走してしまうと、年長者である諸星さんが事態の收拾を行わざるを得ない。一応先程のステージで示したように、諸星さんはそれが出来る子である。とはいえ、彼女に全てフォローを頼むのも虫が良すぎるし、負担も大きいと思うのだが――。

「三人は、自由に行動させたら面白いユニットです。――私は、それに賭けてみたいと思います」

武内さんの言う通り、面白いことにはなるかもしれない。彼がしっかりと手綱を握るならば、大きな事件は起こらないだろう。

「……ま、いいけど。責任取るのはプロデューサーの仕事だし」

美嘉は納得いかないような様子でため息をついた。

「ああ、それが俺達の仕事だ。――それじゃ三人とも、またな。武内さんも、また後ほど」
俺が手を振ると、凸レーションの皆は三者三様に手を振った。

「うん！ またね進にーちゃん！」

「次のステージも見てね！」

「また会おうにい！」

複雑そうな顔をしている美嘉の腕を引っ張り、テントの外に出た。

「さて、どうすつか。次のステージまで、まだ時間があるし」

「……うん」

「美嘉はこの後どうなんだ？ 仕事か？」

「……ううん」

美嘉はじつと、凸レーションと武内さんが入っているテントを睨み付けていた。

「まあ、あの三人なら何とかなるだろ。心配しなくてもいいって」

首にかけていた社員証をポケットに突っ込み、美嘉の頭頂部に軽くチョップする。叩くのではなく、乗せるような感じで。

「いったあ！ 女の子に暴力振るうのはダメでしょ!？」

「オーバーなりアクションはやめろ。その帽子はただの帽子か？」

「そうに決まってんじゃない！」

ツノみたいな飾りが付いてるし、強そうだが。……いや、今はそんな事じゃなくて。「何かつつかえてるんなら、相談に乗るぜ？」

今日は休日だし、プロデューサーではなく従兄として、相談事に乗ってあげようじゃないか。

第22話 Where are they (2)

チェーンのファストフード店。ポテトと飲み物の紙コップが乗ったトレイを受け取り、美嘉が座っている席の対面に座る。

「……進兄はさ」

おもむろにポテトをつまんだ美嘉が、顔を下げたまま訊いてきた。

「あのプロデューサーの事、信じているワケ？」

「信じている、というと？」

随分とアバウトな質問だな。

「最近はコミュニケーション取ってるみたいだけど、あの三人の事があつたじゃん？
見ているユニットも人数も多いし、大丈夫なのかなって」

「……ああ、そういう事ね。「三人に任せる」という発言が未だに引つかかっていると。
あの時は「丸投げ？」と不満タラタラだったしな。」

「まだユニットで分けられているから大丈夫だろ。俺の知り合いなんて、一三人に加えて
更に三九人見るって言ってるし」

美嘉は俺の返答を聞いて顔を曇らせる。

「それって……狂人じゃない?」

「狂ってるな」

年長者のアイドルや事務員のサポートもあるらしいが、それでも赤羽根先輩は一人でプロデュースを行なっている。……一三人の時点でも大分狂っていると思っていたが、彼は三九人追加するプロジェクトに、諸手を上げて賛同したのかどうなのか。

「それに、武内さんはもう大丈夫だろ。痛いお灸は終わっただろうし」

あの事件があつてからは、特に大きな問題が起こったという話はない。その実、神崎さんの件なんてノートを拾っただけで終わったし、キャンディーアイランドもちゃんと自分達の力で収録を乗り越えた。

「どちらかと言うと、お前がどうしたいかって話なんじゃないのか」

ポテトを噛みちぎりながら訊く。凶星を突かれたかのように、美嘉の肩がびくりと跳ね上がる。

「アタシは、……アタシはいいよ別に。シンデレラプロジェクトにとってみたら、部外者もいい所だし」

美嘉はそう言うのと、コーラを一口飲んでため息をつく。

「それを言ったら、俺も部外者なんだけどな」

今回にしても、たまたま美嘉に巻き込まれてこうなった訳だし。下手をすれば、前川

さんのストライキ未遂——いや、ニュージエネレーションズの三人がレッツスの休憩中に乱入して来た時から、シンデレラプロジェクトには巻き込まれている。

「俺もお前も、言っちゃえば関係してしまってるじゃないか。両方とも莉嘉の血縁者だし、美嘉はそれに加えて、あの三人をステージに引き摺り上げた張本人だ」

「うーん、そうだけどさあ……」

負い目だろう。本田さんが誤解したのも全ては自分の責任だという負い目が、美嘉の心に重くのしかかっている。こいつ、まだ引きずってるのか。「気にすることない」って言ったはずなのにな。

「本田さんとは話したのか？」

本田さんの口からは、美嘉に対する恨みつらみは特に聞こえてこなかった。それどころか、「次一緒にやる時は絶対良いステージにするぞ!」と意気込むほどである——という話を渋谷さんから聞いた。

「ううん。まだ」

あーやつぱり。だから今でもうじょうじ悩んでるんだよ。

「全く……ちよつくら訊いてみるか」

スマホを取り出し、メッセージアプリを開く。正直、本田さんの連絡先は分からない。しかし、ハーミー経由なら聞き出せるだろう。

『本田さんに、美嘉の事をどう思ってるか聞いてくれ』

『?』

ハテナじゃなくてだな……。ひよこのようなキャラクターが首を傾げているスタンブも送られてきたが、ふざけている訳じゃなくてだな。

『今、美嘉がいるから』

そのメッセージに既読がついた途端、ハーミーは返事を寄越さなくなった。

「……………」

「いや、まだだ」

突然、着信音が鳴り始める。メッセージアプリの無料通話サービスのものだ。他の客や店員がこちらを見るが、何事も無かったかのように各々視線を外した。……………つぶねー。ハーミーのヤツめ、突然電話を寄越すとは。しかし、そういう事か。だったら、大人のお兄さんは空気を読むとしよう。

「ちよつと進兄、目立つのはヤバイって!」

「いいから、ほら、お前が受け取れ」

「何でアタシが……………」

「いいから」

俺がずいとスマホを押し付けると、美嘉はおずおずと手に取り、着信を受け取った。

「もしもし……。——！ うん！ それで……。……え？ でも、アタシ……。……
……。……うん、……。うん、そっか。……。ううん、ありがと。……。お、いいねそれ！
うん、またね！ それじゃ！」

ポロロン、と通話が終わった音が鳴った。美嘉は晴れやかな顔で、俺にスマホを返す。
「相手、本田さんだったんだな」

「うん、未央だった」

すぐに通話機能を使ってきた事から、おそらくハーミーと本田さんは一緒にいたのだ
ろう。手間が省けて良かった。

「……。ま、どうだったかは聞かなくても分かるけどな」

「そう？ じゃあ言っつてやんなーい」

「はは、言いやがるな」

笑いながらポテトをちびちび食べていると、再びメッセージアプリが音を鳴らす。

……。相手は本田さんだ。友だち追加か。ま、やっておくとしよう。「追加」のボタンを
タップした後、少しスマホを操作してからアイスコーヒーを喉に流し込む。

「未央？」

同じくポテトを食べている美嘉が訊いてきた。

「ああ。申請が来たから、友だちに追加しといた」

ぶふっ、と美嘉が小さく吹き出す。

「何か、進兄が友だちって言葉使うの、すっごい違和感あるんだけど」

「悪かったな」

不貞腐れながらもコーヒーを飲んでいると、美嘉は自分のスマホを取り出す。

「ん、アタシの所にも来たみたい」

「そりやま、俺が送つといたからな」

本田さんの事だから、『じゃあ次美嘉ねえのID送ってー!』と言ってくるに違いない
と思ひ、先にやっておいた。予想は当たっていたらしいな。

「……普段からそういうのなら、仕事もバリバリやっていけるんじゃないの?」

なーにを失礼な。

「言われなくてもバリバリだぜ? 入社二年目でプロデューサーしてるぐらいだから
な」

「ふーん? どうなの? シンデレラプロジェクトで埋もれちゃうんじゃない?」

「うぐっ……」

無茶苦茶痛いところを突かれた。

「やっぱヤバいと思ってるんじゃない。どうするの?」

「うーん……。とは言っても、ちよこちよこ小さな仕事をこなしながら、新しい曲を出し

ていくしかないんだよな」

ポテトを齧りながら答える。武内さんが率いるシンデレラプロジェクトの強みには、武内さんのコネも関係しているのだが、それ以上に個性のレパートリーが多いというものがある。

例えば、今回のようにティーンエイジャー向けのファッションブランドの仕事もこなせるし、ラブライカの二人でもう少し大人向けのブランドにも売り込みが出来る。また、キャンディーアイランドが収録したようなバラエティ番組からトーク番組まで、顔ぶれが多く選り取りみどりな向こうなら、フットワークはある程度軽く立ち回れるだろう。

しかし、E・G・G・Sとなると話は微妙な感じになってしまふ。三人しかないという人数差以上に、フットワークが若干鈍くなるという問題が出てくるのだ。こちらはメンバーの年齢層が殆ど同じであるため、今回のようなファッションブランドへの営業も範囲が絞られてしまふ。……そうなってしまえば残された道は一つ、曲をコンスタントに出していく、世間から忘れ去られないようにするしかない。

「でも、シンデレラプロジェクトも曲を出し続けてない？」

「まあな。アレは大型のプロジェクトって括りで出してるし」

幸い、デビューシングルの売上は悪くはない。とは言え、それはあくまで「外国人三

人組が、日本で日本語のアイドルソングをリリースした」という物珍しさから来ていることに間違いなく、正当に実力を評価されているとは判断出来ない。

「今、作曲の先生に二曲目を催促している所だ。……向こうは『スランプだ』だの何だの言っていて難しいが」

「何時まで出来るのそれ？」

「夏フェスに間に合うようにお願いしてはいるが……。正直、間に合わないかもしれない」

渋々ながらも了承はしてくれたのだ。信じて待つしかない。

「ダメじゃん」

「ま、ここからだよ」

少なくとも、ユニットの空中分解なんて形でE・G・G・Sを終わらせるつもりは毛頭ない。なんてったって――。

「約束したからな」

「……？ 何を？」

ついつい漏れてしまった心の声に、美嘉が反応する。

「E・G・G・Sの子とな。『絶対トップアイドルにする』って、まあそんな感じの約束をしたんだよ」

「へー。進兄にしては珍しく、暑苦しいエピソードじゃん？」
「暑苦しいってお前な……」

ポテトを啜えてカラカラ笑う美嘉をじろりと見るが、彼女が動じる気配はない。あの頃は大変だったからな。今以上に骨が折れたかもしれない。

——もうこのまま、辞めちゃえばいいのよ！ わたしなんて！

——馬鹿言うなよグレンジャーさん！ 辞める必要なんか何処にもないだろ！

——分かったよ。誰も見てくれないって言うなら、俺が見ようじゃねーか。絶対に、絶対にトップアイドルにしてやるよ！

確かに今思えば、割と暑苦しいエピソードかもしれない。うーん、少し恥ずかしいな。メッセージアプリが何かを受信する。……噂をすれば。相手はハーミーだ。

『美嘉さんに申請送ってもいいの？』

『自分で考えろよ』

『聞いて』

『どうして俺が』

『一緒にいるんでしょ？』

ひよこのようなキャラクターが祈るように手を合わせるスタンプが、続けざまに送られてきた。……全く、調子の良いやつだ。

「美嘉、E. G. G. Sの子が友だち申請していいか訊いてるが」

「ふーん？　どんな子？」

美嘉はポテトを食べながら訊いてくる。そうだなあ。

「中で、俺に対してはまあまあ小生意気だな」

「お、追加しとこーかなー」

「今のどこに決める要素があつた……？」

俺がハーミーに『いいってよ』と返信を送るや否や、美嘉のスマホが鳴る。美嘉はスマホを操作し、静かに微笑んだ。

「ふーん？　進兄にしては、ちゃんとした子を選んだんじゃない？」

「……少し言い方が引かかると、お前のお墨付きを貰って何よりだよ」

睨みつける俺を尻目に、美嘉はスツスツと文章を打ち込み続けている。

「……結構長いな」

「それでもないよ？」

納得がいかないが、女子は往々にしてこんなもんだらう——つと、何だ？　またハー

ミーからか。

『デートじゃない』

『はっ？』

『まるでデートじゃない』

何がだよ。

『何処をどう見た？』

『お忍びでヤックにいる所』

『それだけ？』

『うん』

……どうしてこう、このぐらいの年頃の子は何でもかんでも色恋沙汰に結びつけるかなあ。

「おい美嘉、お前が変な事を言ったせいで——」

俺が顔を上げて美嘉を見ると、彼女は顔面蒼白といった様子でスマホの画面にかじりついてた。

「——おい、どした？」

「進兄、大変！」

……尋常じゃないな。ハーミーに急いで『用事が出来た』とメッセージを送り、美嘉に差し出されたスマホの画面を見る。相手は莉嘉からだった。

「……武内さんがどっか行ったあ？」

美嘉の画面には『プロデューサーがどこかに行っちゃった！』というメッセージと、パ

ンダが号泣するスタンプが映っていた。悠長にスタンプを送ってる場合じゃねえだろ。……ん？ 新しくメッセージが来たな。——迷子になったあ!?

「どうしよう!?!」

「どうしようって、お前……」

スマホに表示されている時刻を見る。……ヤバいな。二回目のトーク本番まで、もう殆ど時間が無い。

「俺が社用携帯で武内さんに連絡してみる。美嘉は、莉嘉達が無処にいるか訊いてくれ」
こんな事に使うとは思っていなかったが、持っていて良かった。……掛かんねえし!
どうしたんだよ武内さん! 何時もは二回目のコールぐらいで出るでしょあなたは!

「早く電話掛けてよ進兄!」

「掛けてるっての! 向こうが出ねえんだよ! ああもう、どうすれば——」

……あの人の力を借りるしかないか。

第23話 Where are they (3)

武内さんのいる場所が分かり、急いで美嘉と向かう。

「どうしてまた、交番にいるのかなあの人は！」

「アタシが知ってるワケないじゃん！ また不審者だと思われたんでしょ！」

目的地に着き、走ってきた俺と美嘉は肩で息をする。久々に走ったぞ。くそ、体力がなくなってるな俺。

「お疲れ様です。城戸さん、美嘉ちゃん」

出迎えてくれたのは、俺が武内さんの代わりに連絡をした相手——千川さんだ。

「はあ、千川さん、武内さんの居場所を、はあ、探し出してくれて、ありがとうございませう、ふう」

「いえ、事務員として当然の事をしたまでですよ」

……正直、この人に頼ることはしたくなかった。いつもこの人は、武内さんがどの辺にいるのかすぐに分かるのだ。現に今回も、近くの交番ではなく少し遠めの交番にいると言ったのが彼女である。色々と千川さんの秘密を知りすぎたらタダでは済まないよな、とても嫌な予感がする。堀さんよりもサイキックじゃないか。

「武内さんは？」

「もうそろそろ……あ、来ましたね」

交番からすぐごと出てきた、大柄の男性。違くない、武内さんだ。

「すみません。警察のお世話になっていました」

「また職務質問ですか？」

「ええ、まあ」

武内さんは首筋に手を当て、視線を下ろす。……まあ、一番参ってしまったのは彼だろう。

「莉嘉は？ 皆は何処？」

美嘉の言葉を受け、武内さんはすぐに社用携帯を取り出す。少し操作して耳に当てて、彼は首を横に振ってため息をついた。

「……電源が切られているみたいです」

「そんな！」

美嘉が武内さんに詰め寄ろうとすると、肩を掴んで止める。

「美嘉、落ち着けて」

「落ち着けないって！ もし、莉嘉達に何かがあつたら、アンタは責任取れるの!？」

くそ、落ち着けてんだ。……俺もメッセージアプリで軽くメッセージを送るが、確

かに既読にならない。

「武内さん、他の二人は」

武内さんは小さく頷くと、再び電話をかける。

「——諸星さんに電話をかけましたが、繋がらないです。……赤城さんは、まだ携帯を持っていません」

いよいよやべえぞ。完全に連絡がつかないなんて。俺は千川さんの方を向く。

「千川さん、武内さんの時みたいに、莉嘉達がいる場所を割り出せませんか？」

千川さんはゆっくりと首を横に振った。

「……いえ、一度事務所に戻らないと」

……くそ、それじゃあダメだ。「事務所に戻れば分かる」というのはひとまず置いていて。

「二手に分かれて探しましょうか？」

俺が武内さんに声をかけると、彼は腕時計をちらりと見て固まる。

「……二回目のトークイベントの時間が差し迫っています。私はスタッフに調整の連絡をする為、会場へ戻ろうかと」

「でもそれじゃ……！」

武内さんに抗議しようとする美嘉を、必死に抑える。

「それで問題ないんですね、武内さん」

「はい。彼女達もアイドルです。イベントへの出演を優先すると信じています」
彼の目は真剣そのものだ。

「分かりました。……俺と千川さんは引き続き、彼女達を探します。美嘉、お前は武内さんと会場に向かってろ」

「でも——」

「お前がブラブラしている所を見つかったら、それだけでも騒ぎになりかねない。ここは俺と千川さんに任せろ」

美嘉は逡巡しながらも、千川さんの方を見る。

「はい、任せてください美嘉ちゃん！ 必ず見つけますよ！」
千川さんは力強く頷いた。

武内さん達と分かれ、俺と千川さんは莉嘉達の搜索に向かう。

「間に合わなかった場合は、どうしましょうか」

探しているとは言え、最悪の事態はある程度想定しておかないといけない。

「その場合も考えて、予めシンデレラプロジェクトの子達から直ぐに動ける子に連絡しておきました。少なくとも、イベントの中止はありません」

流石は千川さんと言ったところか。それならば、莉嘉達の捜索に集中出来る。

「武内さんから心当たりのある場所は聞きましたか？」

「はい。大通りではぐれてしまった——もとい、交番まで行くことになったとの事だったので、そこまで遠くには行っていないと思います」

「大通り、ですか」

人目につかない所、という訳では無い。ただ、人を探すのには難しい場所だ。余りにも多くの人が行き来しており、小さな女の子を探すのには一苦勞である。——つまり。

「兎に角、諸星さんを探しましょう。彼女の身長なら目立ちますから」

武内さんに迫る身長 of 彼女ならば、幾ら人混みが激しくても見つかるはずだ。それに、彼女ならばあの二人を置いていくということもないはずだし。

「はい、そうしましょう」

周りを見渡す。人、人、人。しかしその中に、あの少女の姿はない。

「……見つからねえ！ くそ、何処に行つたつていうんだよ」

「路地裏も探していたら、それこそ間に合いませんね……」

千川さんの言う通り、大通りから伸びる細道は無数にあるので、闇雲に探すのはかなり効率が悪い。こちらとしては、そんな所に迷い込んでいない事を祈るばかりだ。

「くそ、何処にいるんだあいつら……」

ふと、千川さんの動きが止まる。彼女はキョロキョロと辺りを見回すと、不思議そうな顔で俺に訊く。

「……何か聞こえてきませんか？」

「……何か、ですか？」

少なくとも、俺には街の喧騒しか聞こえてこない。

「はい、女の子が歌っているような……」

「女の子が？　ちよつと待っててください」

耳を澄ます。……確かに、微かだが聞こえてくる。

「後ろ……！」

振り向いた千川さんは、何かを見つけたように俺の肩を叩いた。

「どうしたんですか千川……さん……」

なるほど、そういう事か！

「それ」に連れ立って歩き、たどり着いた先は次の会場だった。

「進兄、あれは……！」

予め連絡しておいた美嘉と武内さんが、俺達に合流する。

「……何を考えたのかは知らんが、兎に角そういう事だ」

俺達の視線の先には、莉嘉がいた。いや、正確には「諸星さんに肩車された莉嘉」だろうか。莉嘉を肩車している諸星さんの手を握り、みりあちゃんも一緒に歩いている。……ただ歩いているのではなく、彼女達のユニットの歌を「歌って」。その周りを、まるでハーメルンの笛吹きにつられた子供達のように、群衆が取り囲んで移動していた。

「……周りの人達を、巻き込んでいます」

千川さんの言葉を受けて、武内さんははっとしたように息を呑む。

「あの子達……！」

「……ああ、莉嘉達は周りの人を巻き込んでいる」

それは正に、武内さんが言っていた事だ。ただでさえ長身で目立つ諸星さんが莉嘉を肩車し、三人で歌いながら移動する。素人がやつても痛いだけだし、熟練のアイドルがやれば困惑しか与えない。新人のアイドルだからこそ出来た、「通行人の巻き込み方」だと言っているだろう。

「あ、プロデューサーだー！」

莉嘉は武内さんを指差した後、笑顔で腕を振る。すげえな諸星さん。全然体勢がぶれねえ。体幹が強いな。

「……つと、俺達は一旦離れるか、美嘉」

莉嘉は俺達に気付いていないようだが、仮に気付かれると少し面倒だ。あの城ヶ崎美

嘉がいると知られたら、凸レーションが持っているはずの主演の座を奪いかねない。

「うん、そうしよつか」

「……会場近くのテントなら、問題はないかと」

武内さんの言葉に頷き、ポケットに突っ込んだままだった社員証を首にかける。確かにあのテントならば、外からは美嘉が見えないし、俺も社員証をぶら下げているので不審に思われることも無いだろう。

「では、また後ほど」

武内さんと千川さんに軽く会釈をしながら、美嘉と共にテントの中に入る。

「プロデューサー！……じゃない？」

……テントの中には先客がいた。ビビッドな色合いでフリフリの衣装に身を包んだ、渋谷さんと神崎さんと——もう一人はラブライカの新田さんだったはずだ。

「……へ？」

あれ？ もしかして俺、ピンチ？ いやいやいや、三人とも着替え終わっているし、社会的に死ぬ事はないよな？

「あれ？ どうしたのさ皆？」

美嘉はきよとんとした顔で三人に訊く。

「……ちひろさんから連絡があつて、直ぐにここに来て欲しいって言われて」

渋谷さんの言葉に、神崎さんと新田さんも頷く。そういえばそんな事言ってたな、千川さん。

「千川さんが言ってた動ける子って、渋谷さん達の事だったのか」

「別にそれはいいんだけど……。正直、城戸さんにだけは見られなくなかったというか……」

渋谷さんがじろりと睨む。

「よもやインキュベーターがこの場にいるとは。運命の歯車とは、かくも恐ろしいものね」

神崎さんは神崎さん語をやめて欲しい。……。しかし、「孵卵器」とはまた、仰々しい響きの割にみみっつい単語を選ぶな。

「えーと、……進兄、どういう事？」

「俺に訊くな」

わざとらしく咳払いをし、ポップでフリフリの衣装がミスマッチな新田さんの方を向く。

「初めまして。自分は城戸進ノ介、346でプロデューサーをやっています。もしかしたら、他の子から話は聞いているかも知れませんが——」

「ああ、はい。何でも、美嘉ちゃんと莉嘉ちゃんの従兄だとか」

「はい、そうです。自分が担当しているのも新人のアイドルなので、もしかしたらまたお仕事の方でご縁があるかと」

「——ふふっ」

渋谷さんと神崎さん、新田さんさえも急に吹き出す。ちなみに美嘉はずつと腹を抱えて笑ってる。

「……渋谷さん、何か笑いどころあった？」

「いや、ごめん、ふふっ。らしくないなって」

「らしくない？」

「もっと愉快な人だつて話を聞いていて、無理している感じが……ふふふっ」

「えっ俺どう思われてんの!? 渋谷さん、俺の事なんて言ってるの!?」

『『頼りない近所のお兄さんみたいな人』って言ったら、知ってる子全員納得してたよ』

「ホントに俺どう思われてんだよ!」

「う。ふ。ふ。ふ。つ。し、進兄らしいやそれ!」

「美嘉あ! あんまり過ぎるだろそれは!」

莉嘉のスマホは充電が切れてしまい、諸星さんは持つていくのを忘れてしまつていた。そして諸星さんが莉嘉を肩車していたのは、莉嘉の靴擦れが原因。結局は、ちよつ

とついでにない出来事が重なってしまったのが発端だった。

「災い転じて福となす、ってか」

社員証をポケットに仕舞いながら、俺はため息をついた。

「ええ。凸レーションの皆さんに、もしもの事がなくて安心しました」

武内さんを睨みつけたのは渋谷さんだ。

「そもそも、プロデューサーが警察に連行されたからこんな事になったと思うんだけど」

「凜の言う通り。アンタももつと、愛想良く笑えるようになった方がいいんじゃない？」

美嘉への返答に窮した武内さんは、困ったように右手を首筋に当てた。空いた彼の左腕の袖を、みりあちゃんはぐいぐいと引っ張る。

「だったら、一緒に写真とろーよ！ イベント成功祝いに！」

「お、いいねー！撮っちゃおう？」

「美嘉ちゃんもおー、一緒に写真撮るにいい！」

「もちろん、Pクンも一緒にだから！」

美嘉は俺の方を見る。俺は彼女に向かって首を左右に振った。

「俺は遠慮しとくよ。休日だからな」

じろりと睨む美嘉は無視して、千川さんに向き直る。

「……本日はご迷惑をお掛けして、申し訳ございませんでした」

キツチリと彼女に向かって頭を下げると、千川さんは「まあまあ」と声をかける。

「仕方ないですよ。城戸さんも、休日なのに力になってくれてありがとうございます。」

「いや、そういう訳じゃないですけども」

今回は美嘉の気まぐれに巻き込まれた感じでもあったし。

「それに」

「それに？」

千川さんの視線の先には、笑いを堪えている渋谷さん達の姿があった。……てか今気付いたが、神崎さん私服じゃなくて衣装のままだし。ちゃんと返せよ。

「——何だか真面目に仕事をしている城戸さんの姿が、ちよつと滑稽みたいですよ？」

「……ははは」

だから、シンデレラプロジェクトの中で俺はどういった印象を持たれてんだよ。

第24話 Which do you like,
a t o r r o c k (1)

それは、今後の方針についてE・G・G・Sの皆に話している時に起こった。

「で、取り敢えず作曲の先生から送られてきた音源がある」

俺がCDを取り出して見せると、三人は口々に「やつとね」といった事を呟く。

「早速聴かせてくれないかしら、プロデューサーさん」

ダフネの言葉に渋々と頷きながらも俺はCDをパソコンに突っ込み、再生させる。E

DM調の、高音と低音がずんと響くスローテンポな曲が流れ始めた。

「いいじゃないですか！ とてもカッコいいです」

エバンスさんは目を輝かせ、ハーミーとダフネもこくりと頷く。——うん、確かにカッコいい。「Union—Jack」よりもクールな曲調で、静かにアガるタイプの曲だ。だが。

「この仮音源だが、三〇秒程度しかない」

俺の言葉と共に、音源は音色の数を徐々に減らしていき、静かにフェードアウトしていった。

「三〇秒……？ 新曲として出すには、短くないかしら」

ハーミーの言う通り、問題はまさにそこなのである。

「余りにも短すぎる。作曲の先生を急かしてはいるが、なかなか作業が進まないらしい」

E. G. G. Sの皆は、がっかりしたように視線を下げた。

「タイトルは決まっていますか？」

エバンスさんが視線を下げたまま訊いてくる。俺は「ああ」と返事をしながら、パソコンからCDを取り出す。

「ああ、決まっている」

兎にも角にも曲名を早々と決めてしまい、作曲の先生を急かす事にした。作詞の先生も煮え切らない様子ではあったのだが、何も無いよりはマシである。とは言え、今手元にあるこの状態では未完成だ。……正直、夏フェスにはどうしても間に合わない。

「取り敢えず、今ある音源で新曲のレッスンをしていくしかない。もしかしたら、二曲目が出るのもう少し先——夏フェスが終わった頃になるかも知れない。——悪い。許してくれ」

三人に向かって頭を下げる。しばしの静寂の後、ため息が聞こえた。

「……別にいいわ。夏フェスに出れるなら」

ハーミーは紅茶を一口飲みながら言う。そろそろ蒸し暑くなってきたので、アイス

ティーだ。

「そうね。付け焼き刃で挑むより、扱いは慣れた得物を大事にする方がいいもの」

ダフネはふふつと静かに笑うと、ハーミーに続いてアイステイーを飲む。

「プロデューサー、夏フェスには出演出来るんですよね？」

エバンスさんが確かめるように訊いてきた。

「そこは問題ない。……実際はシンデレラプロジェクトの便乗、といった形だが、出られないよりは何倍もマシだ」

「シンデレラプロジェクトが出るならば、同じ時期にデビューした新人であるE・G・G・Sも出られるのではないか」と提言し、参加が決まった形である。今のE・G・G・Sの境遇は、シンデレラプロジェクトの金魚のフンのようなものになりかけている。

……この夏フェスが勝負だ。この夏フェスの結果を受けて、E・G・G・Sが金魚のフンに甘んじるのか、高みに登る龍へと変貌するのかが決まる。

「その為に、夏フェスまでの期間にミニライブをしたり、別の先輩ユニットの前座を請け負う事で知名度を上げていく。——もちろん、三人にライブ慣れをしてもらう目的もある」

「構わないわ。わたし達に出来ること、なんでしょ？」

「こなししていくしかないものね」

「……アイドルに王道なし、ですな」

話が早くて助かる。さて、シンデレラプロジェクトは夏に地方で合宿を行なう予定だ、と武内さんは言っていたが、こちらも合宿を行なうべきだろうか。いやしかし、俺を含めても四人だしなあ――。

部屋のドアが思い切り開かれたのは、そのような事を考えている時だ。何事かと動きを止めた俺達が見たのは、二人の不機嫌そうな少女達だった。一人は前川さんである。相変わらず、白い猫耳を頭に付けていた。もう一人は、見覚えがない子だ。真新しい感じのコードレスヘッドホンを首にぶら下げている。……よく分からないが、ファツションの一種だろうか。

「城戸チャン！ 訊きたい事があるにや！」

ばん、と事務機の天板を両手で叩く前川さんに、ヘッドホンは「ふんふん」と勢いよく頷いた。

「あ、ああ……？ どうした急に」

武内さんからは、この二人がここにやって来るといふ連絡を受けていない。唐突にどうしたと言うのだ。

「ネコとロック、どつちがいいと思う？」

ヘッドホングールがむすつとした顔のまま訊いてくる。

「……………へ？」

質問の意図が分からずに返答に困っていると、前川さんがずいど詰め寄る。

「もちろん、城戸チャンはネコチャンに決まってるにゃー！」

ヘッドホンガールも、前川さんに負けじと詰め寄ってきた。

「何言ってるの!?! オトコだから、ロックがいいに決まってるって!」

だから、一体何だと言うのか。

「……………あのー」

エバンスさんの声で我に返った二人は、恥ずかしさからか顔を真っ赤にして俺から離れた。

ネコかロックか。よく分からない選択肢の根幹には、彼女達がユニットを組むといったところにあった。

「最後の1組、って所だな」

特に、前川さんはずっと前からデビューしたがっていたので、今回のデビューに感慨もひとしおだろう。

「でも、ネコとロック……………」

「中々にエキセントリックな組み合わせね」

ただ、前川さんともう一人、多田李衣菜さんはユニットの方針について「ネコかロツクか」で大モメしており、第三者の意見を参考にしようとして俺の元に来たとか。

「あら、まるで駆け込み寺ね、プロデューサーさん」

「俺はそうなった記憶がないんだが」

「え？」と前川さんと多田さんは声を揃えて首を傾げる。

「シンデレラプロジェクトで何か困ったことがあった時、大体いつも城戸チャンがいるって聞いたにゃ」

「しかも関わったら絶対に解決するんでしょ？ なら使わない手はないよ」

だから俺を何だと思ってるんだ。しかもシンデレラプロジェクトに直接の関係はねえし。

「そもそも、俺に言われたからって素直に受け止める気もないんだろ」

う、と言葉に詰まった前川さんは不満げに俺を睨む。対して多田さんは、視線を逸らして何らかのメモディーを口笛で吹き始めた。——こいつらめ。

「……そもそも、両方混ぜちゃえばいい気もするんですけど」

エバンスさんの言葉に、前川さんと多田さんはぬつと彼女の方を向く。……タイミン
グがばつちり合ってる。

「だったら、ネコチャンとロツクの比率は何対何にするにゃ!? もちろん、一〇対ゼロだ

よね!」

「逆だよ! ゼロ対一〇!」

「ひやつ、ひやいい!?! えつ、えつと……」

「……つて、それじゃ意味ないにゃ!」

「そつちこそ!」

「こいつらめ……」。

「はいはい。エバンスさんも怖がつちやつてるし、プロデューサーさんもイラつちやつてるから、言い争いはここまで」

ダフネがパンパンと手を叩き、場を仕切り直す。グッジョブだ、ダフネ。

「一旦冷静になれよ。何だったら、俺達にプレゼンしてみな」

二人はまたしても同じタイミングで振り向き、「プレゼン……?」と声を揃えた。お前から本当は仲良しだろ。

「つまり、順序立ててわたし達にアピールするって事よ! ちゃんと資料も作って、心に響くように説明するの」

「ね、プロデューサー?」と得意げに説明したハーミーが、視線で訊いてくる。俺はそれに頷き、前川さんと多田さんの方に向き直った。

「今すぐやれ、という訳じゃない。ハーミーの言う通り、資料を準備して貰わないと聞く

側も困るからな。そうだなあ……今週の日曜日でどうだ」

その日はレッスンが入っている訳では無いが、E・G・G・Sの三人が自主的にレッスンを行なおうと言っていたのを聞いた。だったら俺も見に行こうかとも思っていたし、そこそこいいタイミングだろう。プレゼンに慣れていないであろう二人には、しつかりとした準備期間も確保しないといけないだろうし。

「……分かったにや。日曜日、それが勝負の時にや！ 李衣菜ちゃん、首を洗って待つてるにや！」

「みくちゃんも！ こういう勝負に勝つのが、ロックつてもんだから！」

俺の目の前で再び、前川さんと多田さんがヒートアップする。これが若さだろうか。俺にはさっぱり分からんが。

日曜日、プレゼン当日。自販機で買った缶コーヒーを飲んでいると、渋谷さんが突然やって来て、スマホの画面をずいと差し出してきた。……何故か少し怒っている様子で。

「……えーと？」

「見たら分かると思うけど」

画面にはでかでかと、正方形形状のモザイク柄——QRコードが映し出されていた。

「……いや、俺が聞いているのはそこじゃなくて」

メッセージアプリの友だち登録用のものである事は分かる。ただ、渋谷さんがそれを差し出してきた理由が分からないのだ。

「未央と相互なんですよ？」

「ああ、まあな」

美嘉との話の流れでそうなったのだが。

「一応、未央以外にも連絡がついた方がいいと思つて」

……まあ確かに、彼女は割と思ひ込みが激しいタイプだ。彼女以外の視点も、必要になる事はあるだろう——つて待て待て。

「いやいや、だったら武内さんに訊けばいいと思うんだけど俺は」

「忙しいじゃん、あの人。何時でも連絡がつく保証はないし」

まあ、そうだな。あの方は普通のプロデューサーの何倍も忙しい。……いや、そうじゃなくてだな。

「俺と連絡先を交換する意味はあるのかよ」

友だち追加とは言つても、関係性としては仕事で関わりがあるぐらいだろ。

「また何か相談事があったら、頼るつもりだから」

「だから皆、俺を何だと思つてるんだよ……」

しかし、一人で抱え込んでしまうよりは捌け口があった方が良さだろう。どうも、この子は人知れず抱え込んでいって、爆発してしまう感じっぽいし。

「……分かった分かった。追加しとくよ」

私用のスマホを取り出し、QRコードを読み込む。すぐ様出て来たダイアログで、「追加」のボタンをタップした。

「——ん」

何処か満足げに微笑む渋谷さんだが、まあ兎も角。

「渋谷さん達も自主練か？」

俺の質問に渋谷さんは「うん、そうだよ」と返事をしながら、自分のスマホを仕舞う。

「ハリエツト達も自主練している事を知って、今は一緒にやつてるけど」

「ああ、助かるよ」

E. G. G. Sの三人だけでは受けることの無い、様々な刺激を貰うチャンスだ。ハーミーが本田さんと仲良くなった影響が、いい方向に作用していて良かった。

「こつちも自主練だから、人数は揃っていないけど」

「それでもいいよ。一足す一足す一は、三ではなく一〇〇にも一〇〇〇にもなるってね」

「ふふ、何それ」

渋谷さんと談笑しながら、皆が自主練を行なっているであろう部屋へ向かう。ドアを

開けると、休憩中なのか各々リラックスした様子で話をしていた。

「——て感じで、最近トunks先生の調子が悪いんだ」

「ありやー、それはいけないね。トレーナーが上の空じゃ、レッスンを捗らないでしょ？」

エバンスさんは本田さんと話をしてた。……話題はトunksさんの様子がおかしい事についてか。三人がちよくちよく話題に上げていたので知っている。

「——だから、そういう時はきっぱりと断ること！ 大人の人呼びますとか言うのよ！」
「ダー。スパシーバ……ありがとうございます」

ハーミーは一体何の話をしているんだ。会話の相手は……ラブライカのアナスタシアさんか。

「——あら、本当に美味しい。作るのも好きなのね」

「うん！ 智絵里ちゃんも、どうぞぞ！」

「あつ、ありがとうございます……」

ダフネは三村さんと緒方さんの三人で、カップケーキを食べている。

「……結構自由にやってんな」

俺は、一人で黙々とノートにペンを走らせる島村さんを見ながら呟く。

「まあ、それがシンデレラプロジェクトと言うか……」

渋谷さんも苦笑いしているが、そちら側だぞ君も。

第25話 Which do you like,
a t o r r o c k (2)

本田さんがちらりとこちらを見た事で、俺が来たことに気付いたようだ。

「シロちゃん、やつほー!」

「やつほーって何だやつほーって」

本田さんが大きく腕を振るのに釣られてしまい、小さく手を振る。

「……あ、凜ちゃんの隣にいた?」

三村さんが思い出したように声を出す。おそらく、マツスルキャツスルの収録の事だろう。

「ああ。城戸進ノ介、E・G・G・Sのプロデューサーだ。三村さんと緒方さん、それにアナスタシアさんは初めましてだな」

「ダー。アナスタシア、です」

ロシア語混じりのアナスタシアさんが、とてとてと俺の元に近付く。

「……オトナの人、呼びます」

えっ俺何かした?

「ああ違うってばアーニヤさん！ 確かに初対面だけど、プロデューサーは大丈夫なのよ！」

ハーミーが慌てたようにアナスタシアさんに言う。だから、一体何の話をしてたんだよ。

「……そうなのですか？」

アナスタシアさんはきよんとした顔でハーミーに聞き返す。

「うふふ、ハーミーったら、アーニヤさんが良く街で変な人に声を掛けられるって話を聞いて、『じゃあわたしが何とかしないと！』って張り切ってたのよ」

ダフネが事情を説明してくれた。……拒否された訳じゃなかったのか。悪気はなかったみたいだし、ハーミーもしっかり訂正するだろうし大丈夫だろう。

「えっと……、その……」

緒方さんが恐る恐るといった調子で俺に声をかける。

「ん、どうしたの？ 緒方さん」

「あの、シンデレラプロジェクトの皆を助けてくれて、ありがとうございます、ます」

ペこりと彼女は礼をした。

「いやいや、感謝されるような事は出来てないって。それに、結果として助けるような形になっただけだから」

それ以前に、キャンディーアイランドの三人への手助けは何一つしていない。彼女達は自分達の力で乗り切ったし、先日のバンドのバンジージャンプもしっかりとやり遂げたとか。

「城戸プロデューサー、また手助けするんじゃないんですか？　次はみくちゃんと李衣菜ちゃんだつて」

三村さんがカップケーキを頬張りながら訊く。やつぱり噂は広まっていたか。

「そう言えば、二人とも何かを一生懸命調べていたみたいだけど、あれつて城戸さんが関係してたんだ？」

渋谷さんの質問に頷く。

「ああ、まあな。それぞれの意見をプレゼンしてもらおうと思つて」

「プレゼン？　それつて、ドラマの会議シーンとかでよくやつてるやつだよな？」

本田さんが話に入ってきた。

「何もドラマだけの話じゃないぞ？　社会人なら大なり小なりやる事だ。現に俺も、E・

G・G・Sが夏フェスに参加できるようにやつたりしてたからな」

とは言え、シンデレラプロジェクトの一同とE・G・G・Sのデビューシングルの売上を比較し、その上でE・G・G・Sにも伸びる余地がある事を指摘、シンデレラプロジェクトと同じくE・G・G・Sにも参加する事に問題がないことをアピールしただけだ。……テレビ出演が叶わなかった分、今回はやはり頑張らせてもらった。

「……未央ちゃんの言っている事とは違って、ちゃんと仕事してるんですね」

緒方さん緒方さん、さっきのは聞き捨てならなかったぞ。いや待て本田さん、こっそり逃げようとするな。

「いやあ、私は第一印象で言っただけだよ？ あ、でもほら、ギャップ萌えてヤツじゃない？ 普段はリアクションが面白いお兄ちゃんキャラが、実はバリバリに仕事出来るって結構ポイント高いよ！ うん！ しまむーもそう思うよね？」

急に話を振られた島村さんはぼつと顔を上げ、「えっ、ええ？」と困惑したように周りを見渡す。俺の顔をじつと見た彼女は、何かに気付いたかのように頷くと、満面の笑みを浮かべた。

「はい！ 私も城戸プロデューサーは素敵な人だと思います！」

違う、そうじゃない。褒めてくれるのは有難いけど、質問の答えにはなっていない。

「……卯月にも鼻の下伸ばしてるの？」

そして渋谷さんは睨むのを止めてください。お願いします。そして鼻の下を伸ばしていない。

「……問題の二人がいらないみたいだが、今は仕事に行ってるのか？」

無理矢理話題を変える。

「はい。今、二人は飴のPRをしていて、もうそろそろ戻ってくるんですけど」

三村さんが俺の疑問に答える。なるほど、飴のPRね。……ん？

「だったら、キャンディーアイランドの方が良くないか？ ユニツト名に飴って付いてるぐらいだし」

たはは、と苦笑したのは本田さんだ。

「アンズ、何処かに行つてしまつて、キラリが探してます」

アナスタシアさんが代わりに説明してくれた。また双葉ちゃんか。そしてまた諸星さんが探してるのか。

「あの二人の次に、私たちがPRをするんですけど」

「双葉ちゃんが見つかるまでは待機、つて事か」

緒方さんはこくこくと頷いた。

「杏ちゃん見つけたよおー！」

双葉ちゃんを抱えた諸星さんがやって来たのは、緒方さんが頷いてすぐだった。

「うへ……。だから杏はやる気が……。げ、城戸プロデューサーじゃん……」

ぐつたりとしている双葉ちゃんは、俺を見て更に脱力する。

「聞いたよ。アンタも結構物好きだよね。あんな言い合いにわざわざ乗つかかるなんて」

諦めたような笑いに俺も乗つかる。

「乗った訳じゃなくて、巻き込まれた感じだけだな。でもま、乗りかかった船ではあるし、ちよつとは助けようかなと」

話を聞いていた諸星さんは、にっこりと笑みを湛えた。

「城戸ちゃんはいいい人だから、つついとお世話焼いちやうんだよお、杏ちゃん！」

「いや、これは度を越しているでしょ。世話焼きどころか、お節介だよ」

「それは同感しちゃうわね」

「おいおいダフネ、それはないだろ」

そのお節介がなけりや、こうして自主レッスンで和気あいあいとやってないだろうに。

「うーん……ま、テキトーに聞き流せばいんじゃない？」

何だか投げやりだな、双葉ちゃん。

「まあ、そうさせてもらうよ」

……今更かもしれないが、嫌な予感がしてきた。

E・G・G・Sのプロジェクトルーム。前川さんと多田さんは、距離を置いてソファに座っていた。ちらりちらりと互いを見ては、「ぐぬぬ」だの「うぐう」だのよく分からない唸り声を上げている。

「さて、それじゃあ始めようか。今回二人のプレゼンを聴くのは、俺とE・G・G・Sの三人。最初に言っておくが、互いに相手のプレゼンを邪魔しない事。時間は三分程で頼む」

「ええっ!? それじゃあネコチャンの魅力が全然——」

「ロツクの口の字も伝えられないよ!」

何分を想定していたんだ二人とも。

「あ、余り長すぎても、ダメな気がするんですけど」

エバンスさんがおずおずと右手を上げながら言う。

「エバンスさんの言う通り。——さて、どちらからやる? ジャンケンで決めてもいいぜ」

二人は互いに顔を見合わせ——いや、睨み合って、互いにすつと右手を振りかざす。

「最初はグー!」

前川さんが掛け声を上げる。

「ジャンケン……!」

多田さんの掛け声と同時に、二人の手が出る。互いにチョキ。

「あいこで……」

次は両方ともグー。

「あいこで」

またチヨキ。二人の顔が曇り始めた。

「……あいこで」

二人ともパーを出した所で、前川さんの腕がぶるぶると震えた。

「にゃー！ 全然決まらないにゃー！ 李衣菜ちゃん、同じのを出し続けなくて欲しいにゃー！」

「みくちゃんだって、さつきからあいこになってばかりじゃないか！」

「なにをー！」

「ぐぬぬ！」

「お前らさあ、本当は仲良いんじゃないの？」

俺のボヤキに、二人が一斉に振り向く。

「そんな事ないにゃー！」

「そんな訳ないって！」

「……やっぱり仲良しじゃん。」

兎も角、最初は多田さんに決まった。え、決め方？ 鉛筆を転がしたんだよ。

「よーし、それじゃあ始めるよー！」

黒いトートバッグから多田さんが取り出したのは、何枚かの画用紙だった。一番前の画用紙には、『ロックについて』と書かれ、様々なアーティストのシールが貼り付けられている。

「……紙芝居？」

ハーミーが訊くと、多田さんは「うぐつ」と言葉に一瞬詰まったが、咳払いをして持ち直す。

「プレゼンで紙芝居ってロックじゃない？」

「全然ロックじゃないにや」

「どうどう、前川さん。……それじゃ、始めてくれ」

俺はストッププオッチのボタンを押し、時間を測り始める。

「うん。……ロックについて、始まり始まり」

「あの、やっぱり紙芝居なんじゃ……」

エバンスさんのツッコミを無視し、多田さんは表紙の画用紙を束の後ろに追いやる。次のページには、なにやらびっしりと文字が詰め込まれていた。

「まずロックって何かなんだけど、音楽のジャンルなんだよね。1950年代にアメリカ合衆国の黒人音楽であるロックンロールやブルース、カントリーミュージックを起源とし、1960年代以降、特にイギリスやアメリカ合衆国で、幅広く多様な様式へと展

開した。また、ロックミュージックは英国のモッズやスウィング・ロンドン、1960年代後半に米国のサンフランシスコからひろがったヒップムーブメントやカウンターカルチャーなどの社会運動が高揚した時代と同時期に絶頂期を迎えた。同様に、1970年代後半のパンクは、ゴスや後年のグランジなどの新しいジャンルのルーツとなった。フォーク（民族音楽）のプロテスト精神を継承し……」

待つてくれよ。画用紙の中身全部読むのかよ。しかもそれ、ネット百科事典の丸写しじゃねーか。

「……」

前川さんが俺の方を見て、目で「ツツコミを入れていいか」と訊いてくる。俺は首を横に振り、前のめりになって画用紙を読む多田さんを顎で指す。

「それじゃ、次のページに行くね」

文字まみれの画用紙を超えた先は、また文字まみれの画用紙だった。

「1964年、ビートルズはロックンロールが誕生した国、アメリカへの上陸を果たし、全米チャートでヒットを連発することになった。ビートルズ以外にも、エリック・バードン率いるアニマルズやローリング・ストーンズ、ザ・フー、キンクス、ゾンビーズ、デヴィ・クラーク5といったイギリスのロック・バンドなどがこの時期にアメリカでヒットを出したことから、これはブリティッシュ・インヴェイジョン と呼ばれる。アメリ

カでもブリティッシュ・インヴェイジョンの影響を受けて……」
「……残り一分」

ストツプウォッチを見ながら声を出すと、多田さんは画用紙から目を離し、慌てたような声を出す。

「ちよつ、ちよつと待つてよ！ まだ二ページ目なんだけど！ ……後にガレージロックと呼ばれるグループが次々と登場し、一部のバンドは成功を収めた。また、時を同じくしてブリティッシュ・インヴェイジョンの影響を受けたフォーク・グループも次々と登場した。これらのグループの多くは元々はフォークを演奏していた若者たちによって結成されたものであり、彼らの音楽性もフォークからの影響を受けたものであったため、この動きはフォーク・ロックと呼ばれた。フォーク・ロックの代表的アーティストには」

「三分経ったな。多田さん、終わりだ終わり」

多田さんから画用紙の束を没収すると、彼女は不満そうに顔をしかめた。

「まだ全然説明出来ていないんだけど！」

「いやいやいや、丸パクリじゃねーか！」

大学のレポートだったら即死だぞ！ つーか、これ全部書き写したのかよ！ 無茶苦

茶だぞオイ！

第26話 Which do you like,
a t o r r o c k (3)

多田さんから取り上げた画用紙の束をちらりと流し見る。……やつぱり、最初から最後まで文字がぎつしりと詰まっていた。何なんだこれは。

「……質疑応答に入るが、誰か質問あるか？」

面食らった様子の一団の中で一人だけ、ダフネだけがすつと右手を上を挙げた。

「ダフネ」

俺が呼びかけると彼女は立ち上がり、多田さんを見る。

「……結局、ロックってどういう事かしら」

「えーっと、それは……」

多田さんが俺から画用紙の束を奪い取ろうとするが、すぐに頭上に上げて取れないようにする。

「……何だよケチー」

多田さんは口を尖らせて俺を睨む。

「あのなあ、それぐらい何も見ずに言ってくれよ」

自分の主張なのだ、こんな画用紙なしで言つて欲しい。拾つてきた文章の丸写しに頼っているようじゃ、心に何も響かない。

俺の真面目な顔を見たからか、彼女は尖らせていた口を元に戻し、表情を引き締める。そして、ゆつくりとダフネの方を向いた。

「——うん。私が思うロックつてのは、……何なんだろ」

いや、訊かれても困るんですけど。後、俺の顔はカンペじゃねえぞ。見ても意味ないからな。

「とにかく、私がロックだと思えば、ロックなんだよ！」

余りにも基準が曖昧過ぎるが、まあ良いだろう。

「じゃあ、ネコチャンにロックを感じたらいいにや！」

そう言いながら勢い良く立ち上がったのは、ネコミミ装着アイドルの前川さんだ。そこそと鞆の中を探り、タブレット端末を取り出す。

「城戸チャン！ 出力は？」

「出力？」

「本格的ね、前川さん」

ハーミーとダフネが、感嘆の声を上げる。アプリ版のプレゼンテーションスライド作成ソフトを使ったのか。そこそこにポイントが高いな。

「あー待つてくれ。……プロジェクトはないからな……確かこの辺りに、使えるモニタが……よしあった」

脇に除けていたガラクタから、若干ホコリを被った液晶モニタと接続ケーブルを取り出す。この接続ケーブルと充電用に使っているケーブルでタブレット端末を繋いで、つと。うんうん、問題なく映る。

「よし、これでオッケー。それじゃ前川さん、時間は同じく三分で頼む」

若干埃臭い設備に顔をしかめながらも、前川さんは頷く。

「分かったにや！ 三分あれば充分にや！」

タブレット端末を操作した前川さんは、モニタに真つピンクの画面を映し出す。早速目に優しくない。

「みくのテーマはもちろん……これだよ！」

「にゃーん」と気の抜けるような音声素材がタブレット端末から流れ、真つピンクのスライドに虹色の文字が浮かび上がる。文字はぐにやぐにやに変形されているが、「ネコちゃんについて」と書かれていることがギリギリ判断出来た。

「ふふん、みくはちゃんと勉強したもん！」

いやしてねえだろこれ。ちかちかする表紙スライドから、もう嫌な予感しかない。

「まず、ネコちゃんについて！」

表紙スライドと同じくらいにどぎついピンク色が、聴衆の視覚を襲う。「同じくらい」と称したのは、微妙に色味が違うからである。こちらの方が少しだけ紫っぽい。

「これを見て!」

再び「にゃーん」と気の抜けるようなサウンドエフェクトが流れ、猫の写真が右から跳ねてくる。比喩ではなく、本当に跳ねてくる。ぼよんぼよんバウンドして。

「どう思うにゃ!?!」

前川さんはびしりとハーミーを指さす。

「ええと……可愛いわね?」

探り探り言ったハーミーに、「そう!」と前川さんは力強く首肯した。

「可愛いんだにゃ! そして!」

真っピンクのスライドが切り替わる。今度は芝生をイメージしたのか、目にも鮮やかな黄緑色のスライドだ。……無茶苦茶目が痛い。

「このネコチャンも! このネコチャンも!」

「にゃーにゃー」と効果音が立て続けに鳴り、子猫の写真が左右から跳ねてきた。そのアニメーション効果好きだね、君。

「どうにゃ!」

いやどうって言われても。

「ネコちゃんには無限の可能性があるにや！　つまり、ネコちゃん要素を取り入れたアイドルはものすっごい可能性があるの！」

チャリン、とレジスターのサウンドエフェクトが鳴り、下から「ネコちゃんは無限大」と記された、虹色のぐにやぐにやフォントがせり上がる。そこは鳴き声の効果音じやないのかよ。

「以上にや！」

「終わりのい!?!」

思わず素っ頓狂な声が出してしまった。

「ホントはネコちゃんの解説を入れるつもりだったけど……やむを得ないにや」

残念そうに言うのはやめろ。

「……質問！　誰か質問はあ!?!」

ストツプウオッチはまだ三分を指し示していないが、猫の写真の解説を長々と聞くつもりは毛頭ない。

「えっと、具体的にどんな方針なんですか？」

エバンスさんがおずおずと訊く。

「——へ？」

前川さん、どうして動きを止める。

「……アイドルとしての方針なんですけど」

エバンスさんは縮こまりながら言葉を続ける。前川さんはしばし考え込む。

「……えーと、ネコチャンアイドル？」

だから、訊かれても困る。

「みくちゃんの話じゃ、取り敢えず猫の写真は癒されるって事しか分からなかったよ」

多田さんがため息をつきながら言う。

「なにをー！ 李衣菜ちゃんだって、全然ロックじゃないにやー！」

「だったらみくちゃんのプロゼンも！ 目がチカチカして見づらかったじゃん！」

やいのやいのと、再び言い合いが始まった。……あーもう、何処からどうツツコミを

入れたものか。

「……そういえば、プロデューサーもプロゼンをしたんでしょ？」

ハーミーの言葉に、周りが静まり返る。

「……したっていうか、良くするな」

職業柄、切っては離せないものだが……まさか。

「だったら、プロデューサーさんのも見てみたいわ。お題は何でもいいから」

ダフネの言葉に、前川さんと多田さんは勢い良く首を縦に振る。

「そうにや！ 文句ばかり言っているんだから、みく達に見せてみるにや！」

「そうだそうだ！」

喧嘩していた二人も、何故か結託して声を荒らげる。やっぱり仲良しなんじゃないか君達。

「……別にいいが、つまらん話だぞ？」

前川さんのタブレット端末を外し、事務机の上に置かれたノートPCを代わりにモニタと繋ぐ。

「いいんですか？」

エバンスさんが訊いてくるが、苦笑いして返す。

「いいっての。……そうだなあ、じゃあ『E. G. G. Sがサマーフェスに出演する意義』ってなお題目で」

つい最近まで使っていたテーマでもやるか。

—— スライドが終わったことを示す、真っ黒な画面が映し出された。

「—— 以上。簡単だが、プレゼン終わり。何か質問は？」

一同を見回すが、特に手を上げるような気配はない。……つと、ハーミーが顔を上げたな。

「感想でもいいかしら？」

彼女は手を挙げた。

「何も無いよりいいぜ」

ノーコメントで終わるのも、かなり辛いものがあるし。

「二人のプレゼンよりも分かりやすく見やすかったわ」

「だろうな」

それらを比較対象にされても困る。

「そもそも、最初はハブられていたなんて思ってたよ。出演出来るように説得す

るなんて、ロックじゃん」

「多田さん、俺は仕事でやってるんだが……」

ロックな要素は一ミリもないぞ。

「……うにゃー！ 城戸チャン、全然仕事出来ないイメージがあつたのにー！」

「なあ、俺どう思われてんの？ シンデレラプロジェクトの子達みんな、ことごとく俺の

事を『面白お兄さん』枠にしか見てないか？」

「凜ちゃん達の話だと、面白お兄さんにしか思えなかつたなー」

あの子は。あの子は、と言うよりか、どうもニュージエネレーションズの子達に舐められているような気がする。……警戒されるよりもマシだという事にしておこう。

「それで、どうするのプロデューサーさん？ 目論見、外れちやつたわね」

「全くだな。こうなるとは」

流石に、ダフネには意図が悟られていたようである。

「目論見？」

ハーミーとエバンスさんは、未だに分かつていない様子である。……睨み合っている二人は兎も角として。

「ああ——」

そもそも、「猫」も「ロック」も、互いに上っ面しか分からない状態だったのだ。そこで、互いにプレゼンを行ない、それを聴かせる事で理解が深まる——と思っていたのだが。

「上手くないもんだな」

ここまで筆舌に尽くしがたいプレゼンをされるとは、予想だにしていなかった。

「絶対に、分かり合えないにや！」

「そうだよ！ 絶対に無理！」

前川さんと多田さんが、語尾を強めながら否定してきた。……ちよくちよく意見が一致するから、分かり合えそうな気はするんだが。

「そんなこと言わずに、しつかりとコミュニケーション取ってくれよ。……っーか、さつさと決めないと、夏フェスに間に合わないんじゃないのか」

「うぐつ」と言葉に詰まった前川さんと多田さんを見て、ハーミーはため息をついた。「こんなところで喧嘩している場合じゃないわよ！ どうにかしなさいよ！」

一二歳に説教される高校生、というシニールな絵面が繰り広げられるが、まあそこは置いて。

「時間がないからこそ、きちんと相手の話を聞いてやれ。また喧嘩になるようだったら、俺達が止めるから」

前川さんは苦虫を噛み潰したような顔をする。

「具体的にはどうやって？」

「知るかよ……。二人で考えてくれ」

やや投げやりな俺の言い方に、部屋の一同は厳しい視線を向ける。

「お悩み相談室として、それはどうなのさ！」

「多田さん、俺にも無茶なことはあるんだって」

そしてお悩み相談室ではない。

「ま、俺から言えることは一つだな」

「何ですか？」

訊いてきたエバンスさんに頷きながら、俺は言葉を続ける。

「猫とロツクを融合させる事だ」

「——無理だにや!」

「——お断りだよ!」

……そんなことはないと思うんだけどなあ。

前川さんと多田さんがぷりぷりと怒りながら部屋を出て行った後、ダフネは「ふふつ」と困ったように笑った。

「プロデューサーさんにも、解決出来ない問題があるのね」

「二人の向き合い方の問題だからなあ、こればかりは」

周りからどうこう言われようと、結局は彼女たちが折り合いをつけていかないとうしょうもない。それに——。

「おそらく、武内さんも二人に委ねたいんだろうな」

「……すつごい不安にならないかしら? さっきのやり取りを見ていたら」

「まあまあ、そんな事を言うなハーミー」

凸レーシヨンの時のように、彼女達だからこそその爆発力を信じているのだろう。だったら、一から一〇まで手取り足取り教えるのはお門違いだ。

「……あの二人、夏フェスに間に合うといいですね」

エバンスさんが心配するような声で呟いた。

「あら？ あたし達も手は抜けないわよ？」

ダフネはエバンスさんにそう言うと、にっこりと笑った。

「そうよ。プロデューサーも、作曲の先生に催促してちょうだい！」

「……分かったよ。粘ってみるさ」

——催促するのは、作曲の先生だけじゃないけどな。

第27話 Now, I find our way

(1)

「それじゃ、反省点としてはこんな所か」

ホワイトボードには「リハーサルで感じた事」と題された箇条書きが、四行くらい書いてある。

「——そうね。こんな感じかしら」

ペンの蓋をはめたダフネは、こくりと頷いた。整った字がとても読みやすい。「顔を上げる」、「笑顔を忘れない」、「はつきりと歌う」、「合図をよく見る」。基礎的な事だが、改めて意識して損は無い。

「しっかりとね、ハリエツト。落ち着くのよ」

「うっ、うん」

その反省点の全てが、エバンスさんに向けられたものではあるのだが。

「さて、俺からも一つ。——あーこら、嫌そうな顔すんなハーミー、この後打ち合わせなんだよ。……さて、このサマーフェスは、E. G. G. Sにとつて初の大舞台だ。もしかしたら各々、『失敗したらどうしよう』って心配になったりとか、『気合いを入れな

きや』つて力んだりとかしてるんじゃないか? ……エバンスさん、ハーミー、やつぱり思ってたな? いやいや、確かにそれも必要なんだが、大切な事を忘れるな。——ダフネ、ペンを貸してくれ。ん、サンキュ」

ダフネから受け取ったペンで、箇条書きに新しく項目を付け加える。

「——俺からは、この言葉を送る」

三人は首を傾げながら、俺が書き加えた項目を読む。

「……『兎に角、楽しめ』?」

「ああ、そうだ。デビューして三ヶ月程で、こんな大きなステージに立てるんだ。楽しまなきゃ損だろ?」

まあ、俺はアイドル活動しているわけじゃないけど。

「兎に角、楽しめ。観客も皆、分かってくれるはずだから」

机の上にペンを置く。さて、そろそろ時間か。

「それじゃ、俺は打ち合わせに行ってくる。三人とも、そんな気負うなよ。俺もついてるからな」

以上、と話を切り上げて、会議が行なわれる部屋へと向かう。

さて、今日は待ちに待った、サマーフェス当日である。とは言っても、フェス自体は何日かに分かれて行なわれる。新人アイドルのシンデレラプロジェクトとE・G・G。

Sは今日、一日目のプログラムに参加する事になっている。

フェスの始まりを告げる「お願いシンデレラ」を皮切りに、人気アイドルがE・G・G・S、シンデレラプロジェクトを挟み込むといった流れになっている。会場のボルテージを上げる先輩アイドルと、ボリュームが多いシンデレラプロジェクトの繋ぎとして、E・G・G・Sがねじ込まれている形だ。前後に比較対象がある分、プレッシャーは大きいかもしれないが、是非ともあの三人には最高のパフォーマンスをしてもらいたい。

「——という流れになっています。本日は気温も高いので、各プロデューサーはアイドルの体調管理に気を配ってください」

会議室のホワイトボードには、大まかな流れが書かれている。セトリリストに大きな変更はない。少しばかり、高垣楓の担当する時間が増えているぐらいか。おそらく、マスメディアに向けてだろう。346所属アイドルの中でも、彼女の知名度は段違いだからな。

「城戸さん」

打ち合わせが終わり、武内さんが声を掛けてくる。

『『アスタリスク』について、改めてお礼を』

「ああ、あの二人ですね」

前川さんと多田さんのユニットである「アスタリスク」は、結局上手い具合に收拾がついたらしく、何とか参加という形になった。ホント、よかったよかった。

「あの二人が、自分から歩み寄ったからこそですよ。切っ掛けを与えただけに過ぎませんから」

莉嘉のアイディアで解決に向かったらしいので、総合的に見ても俺達は何もしていない。寧ろ礼を言うべきは莉嘉じゃないだろうか。

「切っ掛けだったとしても、城戸さんにはまた助けてもらいました。……ありがとうございます」

武内さんは深々と頭を下げた。……何度か武内さんに頭を下げられているが、やはり慣れない。

「いえ、こちらこそ。……それよりも、あの曲はどうですか？ 最初の方は、なかなか揃わなかったと聞いていますが」

あの曲——シンデレラプロジェクトの全体曲。合宿で初めて話をしたらしいそれは、一四人という人数のこともあつてか、レッスンが難航したと渋谷さんや本田さんから聞いた。

「はい、大きな問題はありません。新田さんが皆を引っ張っているので」

「だったら、安心ですね」

メンバーの中でも大人の彼女なら、上手い具合に舵取りをしてきているはずだ。

「はい。——お互い、ベストを尽くしましょう」

武内さんの言葉に頷く。

「ええ。ベストを尽くしましょう」

開演の時間は、刻一刻と迫りつつあった。

事務所に選ばれたメンバーが「お願いシンデレラ」を歌っている。——凄い。やつぱり、レベルが高い。

「いやあ、高垣さんはやつぱりすごいなー」

隣の兄は、呑気な声を上げた。

「当たり前じゃない！ 346のトップメンバーよ！ 更に言えば、その隣も、更に隣も

！ 全員凄くて当然なんだから」

ははは、と苦笑いした兄は、サイリウムを頭上で振りながらも私の方を向く。

「でも、お目当ては違うんだろ？」

「まっ、まあ、そうだけど」

私の様子を見た兄は、にやりと意地悪な笑みを浮かべた。

「あの時に見た、あの新人アイドルユニット。えーと、なんだったっけな……」

「E. G. G. Sよ、E. G. G. S」

「ああ、それぞれ。早速ファンになったんだろ」

悔しいけど、兄の言う通り。なんだかんだ言つて、行ける範囲のライブならば足を運んでいる。デビューシングルなんて、私のみならず兄にも買わせたし。

「僕はいいと思うぜ。何だったら、インタビュウの時にも言おうか? 『妹がお熱のユニットがあつて』とか」

「お兄ちゃんがお熱じゃないと、宣伝効果ないと思うけど」

「ま、それもそうか!」

あつけらかんと笑う兄に何となく腹が立ち、彼の脛を足で小突く。

「……正直兄の手も借りたいぐらいだから、今回はこれくらいで許してあげる」

兄は肩を竦めた。

「へいへい、分かったよ」

ハーミーに無理やり連れてこられた先は、医務室だった。

「大変! 大変なのよプロデューサー!」

「医務室……。まさか、誰かケガしたのか!?!」

本番直前にケガとなれば、それは由々しき問題である。医務室の前には、シンデレラ

プロジェクトのメンバーが大勢詰めかけている。

「渋谷さん、いったい何が」

俺に気付いた渋谷さんは、深刻そうに首を振る。

「美波さんが」

「……新田さんが？」

医務室の中を覗くと、ベッドの上でうずくまる新田さんの姿があつた。見たところ、負傷したようにも見えないのだが。

「ちえりんの練習に付き合っていたみなみんなが、突然倒れたらしくて。E・G・G・Sの三人もその場にいたんだけど」

本田さんは、渋谷さんの言葉に続く。医務室内の千川さんによると、極度の緊張による発熱とのことである。ケガではなくて一安心なのだが、問題はそのタイミングだ。

シンデレラプロジェクトの中でも、ラブライカの出番は早い方である。どのくらいで復帰できるのかは分からないのだが、間に合わないことは確実だろう。

「——ステージへの出演は、許可できません」

武内さんの静かな宣告が、慌ただしい廊下にまで伝わってきた。

「ラブライカが出演できないとなると、調整が必要ですね」

「待つてくださいい！」

新田さんは、声を振り絞って千川さんの言葉を遮る。

「私が出られないのは、自分のせいです！ でも、アーニヤちゃんは……」

「アーニヤちゃんだけは……」と弱々しい声が掻き消えていった。

「プロデューサー、どうにか出来ないの？」

ハーミーが俺に訊いてくる。ただただ、首を横に振る他なかった。

「……ハーミー、そろそろE・G・G・Sの出番だ。準備をしてくれ」
「でも」

「今は——今は、武内さん達を信じるしかない。俺達には、俺達の仕事があるんだ」

とん、と軽く彼女の背中を小突く。

「行くぞ、観客は待ってられないからな」

ハーミーは不安が拭いきれないのか、本田さんと渋谷さんの方を向く。

「未央さん、凜さん、わたし——」

「うん、行つてきなよはみはみ」

「美波さんは私たちに任せて。ちゃんとやり切つてきて」

二人は静かに微笑むと、ハーミーに言った。——不安なのは、ここにいるメンバー全員同じだ。しかし、だからと言って立ち止まる訳にはいかない。

「……分かったわ。新田さんの分まで頑張るんだから！」

「ああ、その意気だ。——急ごう、時間がない」

突如照明が切られる。私たちの周りの観客も、どよめき始めた。

「ん？ トラブルかなあ？」

兄は空を見上げた後に、首を傾げた。よく見たら、黒い雲が宵の空を覆っている。一体どうしたのだろうかと疑問に思っていると、聴き慣れたイントロが流れ始める。ギターの刻むような伴奏、ドラムのフィルイン。間違いない、あの曲だ。

メロディが奏でられると同時に、照明はぱつと明るく灯る。そして、ステージの下からあの三人が飛び出てきた。純白、緋色、コバルトブルー。

「ああ演出か、そりやそうだよな」

兄はのんびりとペンライトを白色に灯し、私の方を悪戯っぽく見る。

「メインディッシュだぞ、ジニー」

「言われなくても！」

私も白色にしたペンライトを頭上で大きく振る。正直、今までのアイドルに比べると周りのペンライトの数が少ない。とは言え、白、赤、青の明かりはちらほらと灯されていた。

——耳を 塞がないで

——私たちの 声を聴いて

何度も聴いている筈なのに、ビリビリとした感覚が私を襲う。どう表現したらいいだろう、分からないけど、すつごく嬉しい！ E・G・G・Sがこのフェスに参加しているのも、私がそれを見ていられるっていうのも！

「久々に見るけど、結構良くなってるなあ。表情もいい具合に作れてる」

「ちよつとお兄ちゃん。野暮よ」

私が窘めると、兄はキョトンとした表情になる。……でもそれも一瞬の事で、彼はにこりと笑い領いた。

「折角ライブに来たんだから、楽しまないと、だな」

兄の言葉に頷き、三人の——更に細かく言えば、純白の衣装に身を包んだハリエツトさんを必死に目で追う。

そうよ、楽しまないと。

今までで最高だ。渾身の力を振り絞り、ベストのパフォーマンスを發揮している。歌は響き渡り、ダンスは見るものを魅了し、笑顔は心に届いている。新田さんの事で心配になっているだろうが、それを微塵も感じさせない。

「いいで、三人とも」

自然と拳に力が入る。

「おやおや、感慨に耽っているようだね」

突如、後ろから声を掛けられる。今西部長だ。

「……はい。長いようで、短かったです」

俺の感想を聞いて「ははは」と部長は静かに笑った。

「まだまだ終わってないよ、城戸くん。これが始まりだからね」

いつもと変わらぬ穏やかな表情で、彼はステージをちらりと見る。——そうだ、これがスタートラインなんだ。

「はい、肝に銘じておきます」

自然と、口元が緩んだ。それが自信からくるものなのか、決意からくるものなのか、期待からくるものなのか。今となってはどちらでもいい。ただ——ただ、楽しみになったのだ。

「いい笑顔だよ、城戸くん。何だったら、君もアイドルをやってみるかい？」

「部長、それは勘弁ですよ」

俺が脱力したように答えると、彼は再び静かに声を上げて笑った。

「そうかそうか、それは残念。……それじゃ、彼女達を温かく迎えてやってくれよ？」

「ええ！ 勿論です」

遅いのもかもしれないが、今やっと俺の目標が出来たように思えた。それはプロデューサーとして当然の事で、今までとも同じような物なかもしれないのだが。

彼女達を、E・G・G・Sをアイドルのトップにする。

今、俺の進むべき道を見つけたような気がした。

第28話 Now, I find our way
(2)

ふわふわとしていた。パフォーマンスが終わった後も、舞台袖に引つ込んだ後も。更
に言つてしまえば——ニコニコと笑顔で出迎えてくれた城戸を見た後も。

「よくやった三人とも！ 今ままで最高だった！」

ただ、彼の言葉を聞いて、ダフネとハーマイオニーの「当たり前よ」という言葉を聞
いて——ハリエツトは、やつと実感した。あのステージに立ったのだという事を。

「とはいえ、これで終わりじゃない。最後の全体曲、『ススメ☆オトメ』の事も忘れるな
よ」

城戸が釘を刺す。アンコールの「ススメ☆オトメ」では、フェスに参加したアイドル
が一斉にステージに立ち、歌を合わせる。振付を披露するのはごく一部のアイドルであ
り、E. G. G. Sとシンデレラプロジェクトは歌のみでの参加となっている。とはい
え、大きな振付があるわけでもないのだが。

ハリエツトにとっては、忘れるわけがないプログラムだ。何せ、あんなに練習したの
だから。

「ええ、すっかりと覚えているわよ、プロデューサーさん」

ダフネが微笑みながら頷く。彼女に続くような形で、ハーマイオニーもふんすと鼻を鳴らした。

「ああ、覚えていてくれて何よりだよ。エバンスさんはどう？」

「はい、バッチリです！」

城戸はハリエットの言葉を聞いて、微笑みながら頷いた。歌詞を振付と同時でないと覚えられないハリエットに合わせ、城戸はまたしても「解決策」を用意したのだ。

「……ありがとうございます」

ぼつりと、意図せずに、ハリエットの口から感謝の言葉が漏れた。それを聞いた城戸は、不思議そうに首を傾げる。

「感謝したいのはこっちなんだけどな。スカウトを受けてくれて、こうして努力してくれているし」

「そうじゃなくて」

彼女は、彼の目を真っ直ぐと見た。しかし、城戸は気恥しそうに目をそらす。

「アイドルにしてくれて、ありがとうございます」

気付けば、ハーマイオニーとダフネはにやにやと笑いながらハリエットと城戸を見ていた。その事に気付き、ハリエットは頬が熱くなるのを感じた。

「……ああ、どういたしまして。さて、次の準備をするか」

照れくさそうに笑う城戸の顔も、心做しか若干赤くなっているような気がした。薄暗い舞台裏ではよく見えなかったが。

既に神崎さんのステージも終盤に近付いているのだが、新田さんの体調は依然として優れないままである。医務室に足を運んでみたが、彼女は未だにベッドの上で横になり、浅く呼吸を繰り返している。

「武内さん、新田さんの様子は？」

俺が訊くと、武内さんは仏頂面で首を横に振った。ラブライカの曲は神崎さんが代役で入るらしいのだが、全体曲ではそうもいかないだろう。それまでに、新田さんが復帰しないといけない。

「……城戸プロデューサー」

新田さんが力なく、俺の方を向く。

「今は無理せず休んでください、新田さん」

俺が声を掛けると、彼女はきゅつと目をつぶり、再び目を開く。

「——私も、ステージに立ちたいです。立たせてください」

「……気持ちはわかります。ですが、無理をして倒れてしまったては、他のスタッフにも迷

惑がかります。こちらとしても心苦しいのですが、今は回復する方に専念して——」

「私は」

武内さんの言葉を遮るように、新田さんは口を開く。

「私は、あの子達のリーダーとして、頑張つていかなきゃいけないんです。他の誰でもない、私が。こんな所でずつと寝ている訳には——」

「新田さん」

息も絶え絶えに起き上がろうとした新田さんを、俺は言葉で制した。

「新田さん。リーダーだからといって、誰にも頼らないっていうのはダメです。他の人の何倍も頑張つて倒れてしまつては、リーダー失格です」

目を伏した彼女を見て、俺は頭を掻く。あまり説教するのは趣味じゃないんだけどな。

「だから、俺達を頼ってください。武内さんやシンデレラプロジェクトのメンバー、他のスタッフ、他の出演者——皆、力になってくれるはずですよ。勿論、E・G・G・Sも力になります」

彼女がぶつ倒れたのも、リーダーという役職に重すぎる責任を感じてしまつたが故なのだろう。自分が皆を支えていかなければいけないと考え、必要以上に気を配つてしまひ、パンクしてしまつた。彼女ならば問題はないだろうと樂觀視してしまつた、俺達の

責任でもある。

「ですけど、これ以上の迷惑は——」

「新田さん」

武内さんは俺の方をちらりと見ると、少しだけ表情を緩めた——少なくとも、俺にはそう見えた。

「アイドルは助け合い、ですよ」

武内さんの言葉に、彼女はははつとしたように目を開いた。

「そうですよ。アイドルは助け合いです。皆——少なくともこのステージにいる皆は、皆仲間です」

武内さんに乗乗する形で、俺も彼女に言った。孤軍奮闘する必要などないのだ。仲間なのだから。

「次はシンデレラプロジェクトのメンバーがあなたをフォローする番って考えてください。ほら——」

ベッドの前のモニタでは、神崎さんとアナスタシアさんが高らかに『Memories』を歌い上げている様子が映し出されていた。

「新田さん、あなたは一人じゃないですよ」

新田さんはモニタを齧り付くように見つめ、「アーニヤちゃん……」と小さく呟いた。

「——さて、武内さん。自分はそろそろ、あの子達の様子を見に行きます」
「……はい、分かりました」

武内さんと新田さんに軽く会釈をすると、俺は医務室を出てE・G・G・Sの控え室に向かった。

「アイドルは助け合い」と言ったんだ、こちらとしてもやるべき事をやっておこう。

今日は晴れだったはずなのに。メンバーの変わった「Memories」が終わった途端、激しい土砂降りになった。何だか凄い音がして、ステージの照明も切れちゃうし。「すっごい雨だな……。流石に予想外だよこりゃ」

とにかく今はテントで雨宿りする事にして。兄は、真っ赤なもじやもじや髪をこじこじとタオルで拭きながらため息をついた。

「このまま、中止にならないといいけど」

兄が差し出してきたぐしよぐしよのタオルをやんわりと拒否して、私も真っ赤な髪をタオルで丁寧に拭く。

「うーん、この雨が続くようなら正直ヤバいかもなー」

兄が外をちらりと見ながらため息をつく。外の土砂降りは激しさを増していて、風がテントの支柱をガタガタ揺らす。

「縁起でもないこと言わないでよ。だったら、天気予報でもあらかじめ言ってるはずよ。これは通り雨で、直ぐに止むって考えないと」

「考えないと?」

「私が救われないじゃない!」

「なんじゃそりゃ」

大袈裟に肩を竦めた兄が妙にムカついて、脚を蹴り飛ばしてやろうかと思っただけども、今回はやめにしておいた。自分でも、それが八つ当たりになるのは分かっているし。

「……お、勢いが収まってきた。続けられるんじゃないか?」

兄の言う通り、土砂降りはばらばらとした雨に変わり、風の勢いも収まっていた。小降りの雨なら、ライブ的には問題がない。場内アナウンスも、『後一五分でライブを再開する』って言っているし、これ以上は気を揉む必要がないみたい。

「ふいー、合羽を持ってきててよかった」

「それ、私のアドバイスなんだけど」

「そうだったかな? ……そうだった」

いそいそと合羽を着出す兄をじろりと睨み付けて、私はため息をついた。

突然の土砂降りが影響してか、観衆の戻りはあまり良くない。次にステージに立つの

は……ニュージェネレーションズの三人か。デビューライブを思い出してしまわなければいいが。

「シロちゃん」

俺に声を掛けてきたのは、決心したような表情を浮かべた本田さんだった。彼女の横には、渋谷さんと島村さんもいる。

「……ああ、本田さん、それに二人とも。再開後すぐだったね」

こくりと三人は頷き、にこりと微笑んだ。

「美嘉ねえにも言ったんだ。『次は一步進んで、前よりもっといいライブにする』って」
「へえ。そしたら?」

『「一步じゃ分かんないかも」だってさ」

「全くアイツは……」

俺の呆れ返るような声とは裏腹に、三人は笑顔を崩さない。——どうやら、俺が心配する事は何も無さそうだ。

「本田さん、渋谷さん、島村さん。君達三人には、人を引きつける魅力がある。だから、今俺が言ったところでどうということはないかもしれないけど。一步とは言わず、二歩でも三歩でも進んじまいな」

「ふっふっふ」 と本田さんは不敵な笑い声を上げた。

「もちろん！ 何だったら、一〇〇歩でも一〇〇〇歩でも進んじゃうよ！」

「み、未央ちゃん、そんなに進んだらステージから落ちちゃうよ！」

「いや、卯月、そういう事じゃないと思うけど」

本番前とは思えないようなやり取りに力が抜け、俺の口から笑いが漏れる。ニュージェネレーションズの三人も、それに釣られるような形で各々が笑った。

「それじゃ、楽しんでこいよ」

三人はこれまたいい笑顔で、返事をした。

「「はい！」」

——
 そう言えば、ニュージェネレーションズの激励に武内さんが居なかった。何か嫌な予感がする。

医務室に急ぐと、未だにベッドで横になった新田さんと、その横で困ったような表情を浮かべる武内さんと千川さんの姿があった。

「……新田さんは？」

俺が訊くと、千川さんは首を横にゆっくりと振った。

「まだ熱が下がらない状況です。そろそろ下がってくれないと、全体曲——『GO IN !!!』に間に合わないのですが」

新田さんはしかめっ面のまま、ベッドの上でため息をつく。峠は超えたいが、未だに不安が残るといつたところか。

「セトリの調整は？」

「現在行なっていますが、芳しくありません。土砂降りが実質的には休憩時間となつてしまいましたので、休憩時間を挟む事も出来ず」

武内さんは右手を首に添えたまま、俺の質問に答える。

「他のアイドルの出演を早める事は出来ないんですか？」

「一通り掛け合いましたが、早めるのは難しいようです」

……事態は宜しくないようだ。しかし、これは正直、俺にとっては『見越していた事態』だった。その為に動いていたし、E・G・G・Sの三人にも準備をさせた。かなり無理を言ってしまったが。

「新田さん」

俺は黙つたままの新田さんに声を掛ける。彼女は返事をする事無く、ただ押し黙つたまま俺の方に顔を向けた。

「新田さんは、ステージに立ちたい？」

じつと俺の目を見た新田さんは、ゆっくりと口を開く。

「……今、この状態で立つと皆に迷惑を掛けてしまいます。私と同じくらい、他の子達も

全体曲には思い入れを持ってはいるんです。だから、私は我慢して——」
 「そうじゃなくて」

俺が新田さんの言葉を遮ると、医務室の三人が俺の顔の方を向いた。

「新田さん、君はどうなんだ？ 体調とか周りの迷惑とか、そういうのを置いといて、君自身はどうしたいんだ？」

動きを止めた新田さんは突如、ぼろぼろと泣き始めた。

「……私も！ 私も、ステージに立ちたいです！ リーダーとしてじゃなくて、一人のアイドルとして！ だって、だって、悔しいじゃないですか！ あんなに練習したのに！ あんなに頑張ったのに！ あんなに——」

彼女の声は嗚咽で潰れ、すすり泣く声が医務室に響いた。

「……だよな。そうだよな」

我ながら、意地悪な質問をしたかもしれないな。武内さんと千川さんの方を向く。

「お願いがあります。この後の出演者に、『出番を遅らせる』ように掛け合ってください」
 「……遅らせるように、ですか？」

武内さんが目を丸くするのを無視して、俺は言葉を続ける。

「正直に言ってしまうえば、これは最後の手でした。……ですが、出し惜しみは出来ません。千川さんも、お願い出来ますか？」

「何か考えがあるんですね？ 城戸さん」

「——ええ」

準備は行なったが、一か八かの策だ。

第29話 Now, I find our way
(3)

アスタリスクの「・w・ver!」が終わった瞬間、照明が三度落とされた。

「また停電か?」

兄が不安そうにステージを見た。確かこの後はMCが入るので、ステージが真つ暗になつてしまう必要はない。何か、トラブルが発生したのかな。他の観客も不安に駆られたのか、どよめき始める。あんなトラブルがあつた直後だから不安になるのかもしれないし、実際私も不安だ。

——この気持ちを 隠していたい

——Invisible Veil, Invisible Veil, Invisible Veil……

そんな動揺を切り払うかのように、澄んだ歌声が会場に響き渡り始めた。

「……真つ暗なままだけど」

それだけじゃない。メロディすら流れていない。ただただ、歌声だけが聞こえている状態だ。

——私一人の 秘密の気持ち

—— Invisible Veil, Invisible Veil, Invisible Veil……

待つて。今気付いたんだけど——。

「これ、一人で歌ってるんだな」

「そうみたい、しかも」

私は慌てて手元のペンライトを赤色に照らす。私以外にも気付いた人はちらほらいたみたいで、ぼつぼつと赤色の光が灯され始めた。——やっぱり。

「どうしたんだよ、いきなり」

私に合わせてペンライトを掲げた兄を無視して、ステージに集中する。未だにステージは暗闇のままだが、よく目を凝らすと三人の人影が立っている事が分かった。両脇の二人は微動だにしていらないが、真ん中の一人は立ったまま腕を動かしている。歌っているのはやっぱりこの子みたいだ。

「なあ、一体何が——」

——暴いて！

まるで兄の質問に答えるように、ステージが眩い光に包まれて、EDMのようなメロディが心を揺さぶり始める。重いベース音を踏みしめるように、軽やかな高音に体を預

けるように、あの三人——E. G. G. Sの三人が、パフォーマンスを始めた。

—— Invisible Veil, Invisible Veil, Invisible Veil, Invisible Veil……

「なあ、これって——」

「新曲、新曲よ、お兄ちゃん！」

まさか、一足先に聴けるなんて！

それは、十数分前の事だ。

「ハーミー、行けそうか？」

今回の鍵を握る、我らがハーミーに声を掛ける。

「何とかするわ。……いいハリエツト？　今回は振付に集中すればいいから」

「うん。ハーミーも、ソロ頑張つて」

「もちろんよ」

ハーミーが頷いたのに合わせて、ダフネも微笑む。

「あたしも出来る限りの事をするわね。プロデューサーさんが頑張つたんだから、次はあたし達の番ね」

「ああ。頼む」

武内さん達が出演者への交渉を行なっている間、俺はスタッフ達への交渉を行なっていたのだ。幸いギリギリ間に合い、前川さんと多田さんのユニットであるアスタリスクの次に、E. G. G. S の出番を再び差し込む事が出来た。……音源データをスマホに突っ込んでいた自分を褒めてやりたい所だ。

「分かつてはいるだろうが、音源はとても短い。……何秒かはアカペラで凌いで貰うが」
 「問題ないわ。合図は送るから、しつかり見てて頂戴」

「おう、頼まれた」

新田さんの体調は回復したが、どの道シンデレラプロジェクト全体での調整が必要だ。アスタリスクの二人もMCが挟まれているとはいえ、続け様にパフォーマンスを行なうのには不安が残る。

そこで、俺はあまり使いたくない手を準備する事にした。未完成の曲——『Invisible Veil』を、急ごしらえで披露する。新田さんの様子を知ってから急いでレッスンをさせて、兎に角形にはしておいた。

「そろそろだな。それじゃ、俺から一つ」

ステージの照明が落とされた事を確認し、俺はE. G. G. S の三人に声を掛ける。

「何よ。つまらない話だったらぶつ飛ばすわよ」

「こらハーミー、そんな事言うな。——楽しいめ。以上、行ってこい」

暗闇の中で三人がどのような表情をしていたのかは分からないが、力強く頷いたのは影の動きで分かった。

先に振付を止めたのは誰だろうか。美波には知る由もなかったが、何が彼女達の動きを止めたのかはすぐに分かった。レッスンスルームの天井から吊り下げられたモニタ・ステージを映しているそれは、ただ真つ暗な外の風景を映し出しているに過ぎなかった。

しかし——それでも、聞こえていた。まるで繊細なガラス細工のような、張り詰めていて澄んだ歌声が。

「はみはみだ」

独り言を漏らしたのは未央だった。

「……ハーミーが？」

凜がモニタと未央を交互に見ながら、未央に訊く。

「うん、間違いないよ。はみはみだよこれ」

美波の脳裏に、珍しく深刻な面持ちをした先程の城戸が浮かんできた。彼は、「何とかする」とだけ言い残し、医務室を出たきりだった。

「つて事は、進にーちゃんが？」

莉嘉が質問すると同時に、モニタからは光が炸裂する。……いや、照明が一気に照らされたのだ。

「これ——」

美波も、絶句してしまった。先の暗闇の歌声をガラス細工とするならば、これはまるで爆弾の爆発だ。レッスルームでは依然として「GO IN!!」が流れているのだが、それを塗りつぶすようにE・G・G・Sの三人がパフォーマンスをしている。

「にや!? 歌ってるの、ハーマイオニーちゃんだけにや?」

「えっ? ……ホントだ」

みくと李衣菜の会話にふと気付き、美波も耳を澄ます。——確かに、歌を披露しているのは中央の赤い衣装の少女だ。音源の激しい自己主張に負ける事なく、ガラス細工のような歌声を響かせている。

「うっきゃく!! ハーミーちゃん、すっごい歌が上手いんだね!」

きらりが嬉しそうにみりあや杏と戯れるが、美波としてはそれどころではなかった。

まるで、挑戦状のようにも感じられたのだ。それがE・G・G・Sからなのか城戸からなのか、あるいはその両方からなのかは分からないのだが、「これを超えてみせる」と言わんばかりの挑戦状に。

「……美波さん」

動揺する彼女の手をそつと握ったのは、凜だった。いつの間にか両手を握っていたことに気付いた。じんわりと、手汗が掌を覆っていた事にも気づかなかつた。

「城戸さんの事だから、特に何にも考えていないと思うよ」

「えっ、あの、それは失礼じゃない？」

凜の宥めるような発言に困惑したのは、パフォーマン스에魅了されていた卯月だった。

「全くもー、しぶりんは言葉が足りないんだから！ みなみん、つまりしぶりんが言いたいのはその様な事じゃなくて、気楽に行こうぜつて事！」

「えっ、でも、こんな物見せられたら」

「——いえ」

いつの間にか来ていた武内プロデューサーが、いつもの仏頂面で話に加わってきた。

「彼の——城戸さんの伝言です。『気にせず楽しんでこい』と」

「ほら、やつぱり」

凜はため息をつきながら、美波の方を向いた。

「進にーちゃんの手だから、意地悪な事は考えてないと思うよ」

武内プロデューサーの伝言で呆気に取られた美波に声を掛けたのは、城戸の従妹である莉嘉だった。美波が莉嘉の方を向くと、彼女はにっこりと笑う。姉である美嘉に似て

いて、それでも純真さでは勝っている表情だった。

「……彼の卵のみならず、我らが灰被りもここが特異点——。その、頑張り、ましょう」
蘭子がこくりと頷きながら、美波を真っ直ぐに見つめた。

「そうだよ、蘭子ちゃんの言う通りだよ！ 私達も気合い入れないと！」

「少し、怖いけど、でも、皆が——シンデレラプロジェクトの皆と、E. G. G. Sの人達がいるから！」

かな子と智絵里も、蘭子に続いて頷く。

「うんうん、ほら、杏ちゃんも！」

「えー？ 杏は暑苦しいのはパスしたいんだけど」

「杏ちゃんも一緒だよ！」

きらりとみりあは、杏の腕をぐいぐいと引つ張りながら笑う。半ば巻き込まれた形の杏は、ため息をつきながらも、心から嫌がっているようには見えなかった。

「何だかんだで、いい所ばかり城戸ちゃんに持つてかれてるような気がするにや……」
「そうかな？ 結構ロククじゃない？」

みくと李衣菜は談笑しながらも、他のメンバーに続く。

「ミナミ」

「……アーニヤちゃん」

アーニヤは美波の方を向き、力強く頷いた。

「大丈夫です。皆、ミナミの味方です」

美波は、自分を見ている少女達を再び見渡す。信頼している眼差しの中には、アーニヤの言葉通り敵意を持ったものがなかった。思わず、目頭が熱くなる。

「……では、スタンバイに向かってください。——新田さん」

美波には、武内プロデューサーが微笑んでいるように見えた。何時もの仏頂面には変わりなかったのに。

「楽しんでください」

「——はい！」

彼女は力強く、彼に返事した。

予想外のパフォーマンスに歓声が沸く中、セクシーギルティの三人がステージに上がる。

「凄かったわね！ はい、E. G. G. Sの三人に改めて拍手！」

片桐の一声で、再び拍手がハリエツト達に浴びせられた。

「まさに、サイキックサプライズでした！ 歌ったのは、ハーマイオニーちゃんです！」

「いい歌声でした〜」

ハーマイオニーは堀と及川の賞賛を受けて、これ見よがしに胸を張った。

「当たり前よ！　なんてったって、わたしなんだから！」

「あらあら、後でキャンデイあげなきやね？」

「要らないわよダフネ！」

二人のやり取りに、ハリエットは思わず吹き出してしまう。慣れてきてはいたのだがやはり、姉妹のように見えてしまった。

「どうだったエバンスさん？　楽しかった？」

片桐が寄越してきた質問に、ハリエットは大きく首を縦に振って答えた。

「はい！　とても楽しかったです！」

観客がそれに賛同するように、歓声を再び爆発させた。

「でも、次の曲も見逃せないんだから！　シンデレラプロジェクトの子達が皆出てくるのよ！」

ハーマイオニーが「ね？」とハリエットの方を向いて訊いてくる。

「うん、——E. G. G. S. にとってはライバルかもしれないけど、仲間でもあります。だから、ぼく達も応援したいです！」

「ふふっ、切磋琢磨ね」

「当然よ！」

片桐の言葉に、ハーマイオニーはまたしても胸を張つて答えた。

「だから、あたし達E・G・G・Sと彼女達シンデレラプロジェクト、これからは両方応援してね？」

ダフネが観客に呼びかけると、観客は賛同するように声を上げた。

「城戸さん」

俺がステージを見守っていると、後ろから呼びかけられる。衣装に身を包んだ新田さんだ。

「ああ、新田さん。調子が戻つてよかつたよ」

医務室にいたような、うなされていような表情ではなかつた。いくらか落ち着きを取り戻し、自信に溢れている顔だ。

「私の為に、ありがとうございます」

深々と頭を下げた彼女に、俺は「いいっていいって」と声を掛けた。

「準備したのにステージに立てないなんて、ガツカリ過ぎるからね。やるべき事をやっただけだよ」

「でも」

「そうだな——じゃあ、また何かあつたら協力してくれよ。俺は、あーいや、E・G・G・G。」

S一同はそれで充分だから」

新田さんは頭を上げ、柔らかな笑みを浮かべながら頷いた。——助けたくて助けたんだ、見返りは別にいららない。

「やる時はやる男、つて事じゃん！ いやー、カッコいいねしぶりん！」

「どうして私に振るの？」

「凜ちゃん、怒らない怒らない」

ニユージエネレーシヨonzの三人が賑やかに話に入ってきた。

「微妙に締まらねえな……。まあいいや、楽しんでこいよ」

MCを終えて、観客に手を振りながらこちらにやって来たE・G・G・Sとセクシィルティを迎えながら、一同に声を掛ける。

「はいー」

——シンデレラプロジェクトは、再び歩み始めた。

第30話 Now, I find our way

(4)

一日目の日程が終わった。シンデレラプロジェクト一同とE・G・G・Sの三人は、興奮冷めやらぬ様子でステージに腰かけていた。

「いやー、あつという間だったね」

「はい！」

本田さんと島村さんは、感慨深そうに星空を眺めていた。結果から言ってしまうえば、今回のライブは大成功だ。新田さんの件でバタバタしてしまつたが、E・G・G・Sは「Invincible Veil」を何とか披露したし、続くシンデレラプロジェクトも「GO IN!!」を全員で、完璧にやり切った。勿論、アンコールの「ススメ☆オトメ」も文句なしの出来だった。

「ありがとう、城戸さん。また助けられちゃったね」

渋谷さんが俺に礼を言ってきた。

「流石に今回は焦つただけだな。ま、結果オーライって事で。……それに、礼を言う相手は俺じゃないだろ」

莉嘉達と談笑している、E・G・G・Sの三人をちらりと見る。俺の真意が伝わったのか、「そうだね」と頷き、渋谷さんは俺の視線の先へと向かっていった。彼女と入れ替わるように、武内さんが俺の目の前にやって来る。

「……城戸さん。ありがとうございました。貴方の判断のお陰で、シンデレラプロジェクトは万全の状態で『GO IN!!』を披露出来ました」

「いえ、自分も彼女達が揃ってパフォーマンズをする所が見たかったですし、結局はE・G・G・Sの三人に負担を強いてしまった訳ですから。……渋谷さんにもそれとなく伝えましたが、本当に頑張ったのはあの三人です」

ハーミーが俺を指さし、話し込んでいたグループがゲラゲラと笑い始めたが、今は好きにさせておくとするか。アナスタシアさんと二人で話している新田さんを見て、武内さんは俺の言葉に返す。

「思えば、城戸さんには借りを作ってばかりですね。……すみません、ろくにお礼も出来ず」

「いいですよ、気にしなくて。アイドルは助け合いなんですから、きつとプロデューサーも助け合いですよ。武内さんも、E・G・G・Sがフェスに出られるように頑張ってくれた立役者の一人じゃないですか。シンデレラプロジェクトがフェスに参加出来たら、E・G・G・Sも参加出来たんですよ」

アイドルが仲良いのにプロデューサーがいがみ合ってるなんて、正直やってらんないからな。——それに、仕事仲間は邪険に扱ってはいけないのだ。まあそれは、どちらかと言うと俺の流儀に近いものなのかもしれないが。

無関係と言うには、E・G・G・Sとシンデレラプロジェクトは関わりを持ってしまった。こうなったら同じ新人アイドルを抱える身だ。運命共同体になっても致し方ないだろう。

「はい。そうですね」

武内さんが仏頂面を俺に向ける。……こころなしか、若干その顔は微笑んでいるようにも見えた。いややっぱ仏頂面だな。暗いからそういう風に錯覚したのかもしれない。

ふと私達の前に現れたのは、二人の女の子だった。一人はふわふわとたくせつ毛を束ねている、眉毛が印象的な子で、もう一人は明るい茶髪を二つにまとめた子だ。

「やつほ、久しぶり」

髪を二つに束ねた子が、私とダフネの方を見ながら挨拶をして来た。……誰だろう。私には心当たりがなかったが、ダフネは大きく目を丸く見開いていた。

「久しぶり……ですね、カレンさん」

あれ？ 共通の知人なんていたかな。考えを巡らせている私の様子を見て、「やつぱ

り、覚えてないか」とその子は少し残念そうに笑った。

「北条加蓮よ」

「あたしは神谷奈緒って言うんだ！ 宜しく！」

名前を聞いても、いまいちピンと来ない。

「おい、加蓮。やっぱり覚えてないみたいじゃないか」

「仕方ないって。調子は良くなっていたけど、学校は休みがちだったし」

「そうだったんですね。あまり見かけなくなっただから、すっかり元気になったんだと」

「今は元気元気。あすちーは？」

北条加蓮に話を振られたダフネは、「ええ、まあ」と言葉を濁す。あすちー？ 誰のことだろ。

「元気ですよ。あたしがアイドルになって、一番喜んでると思います」

「ふふっ、変わんないね」と彼女は笑う。

「えっと、私は覚えていないんだけど」

私が訊くと、彼女は「えっとね」と説明を始めた。

「中学が同じだったんだよ。さっきも言ってたけど、アタシは学校休みがちだったし知らなかったと思うけど」

「でもね」と北条加蓮は言葉を続けた。

「あなたが噂になつてたのは覚えてて。——だから、一方的にアタシが知つてる形になつちやつてるのかな」

確かに、中学生の頃に「激レアな美少女がいる」というような話は耳にした事があつたのだが、それが目の前の子だとは思つてもいなかった。

「いやー、すごいよな加蓮は。『アイドルになつた知人が二人いる』なんて」

神谷奈緒が感慨深そうに言つた。確かに、なかなか出来ないような体験だろう。……私はもうアイドルだから、そんな体験は出来ないだろうけど。

「エバンスさん、ハーミー。紹介が遅れたわね。——二つ結びの人が、北条加蓮。あたしの知り合いよ。もう一人が……ええと、初対面の人ね」

「神谷奈緒！ これから宜しくつて言つたじゃないか！」

——ん？ これから宜しくつて事は。

「えっと、もしかして」

ハリエツトの疑問に、北条加蓮と神谷奈緒の二人は大きく頷く。

「アタシ達も346プロのアイドルになつたの。……とは言つても、まだまだ新米だけどね」

「アイドル……？ でも、カレンさん」

不安そうに訊いてくるダフネに、北条加蓮は微笑み返した。

「大丈夫。もう元気だから」

「それならいいんだけど」とは言っているが、ダフネは心配そうな表情を崩さない。「学校を休みがちだった」という言葉と、「今は元気」という言葉から想像すると、ダフネは彼女を体力的な方向から心配しているようにも思えた。……私の目からしてみると、健康そのものと言った感じだけど。

「もしかしたら、これから一緒に仕事をする事もあるかもしれないわね！ 二人でユニットを組むの？」

ハーミーが訊くと、神谷奈緒は「ああー」と力強く頷いた。

「来月の末にデビューする予定なんだ！ デュアルプリズムってユニットで、これからレッスンも本格化していくらしいんだ」

「だったら、手伝える事は手伝います。なんとって、カレンさんがいるユニットですか」

「ありがと、その時はお願い」

ダフネと北条加蓮が会話をしていると、城戸さんがゆっくりと近付いてきた。

「仲が良さそうで何よりだよ。——えっと、神谷さんと北条さん、だったかな」

二人は城戸さんにペコりと頭を下げると、私達の方を見る。

「この人は城戸さん。E・G・G・Sのプロデューサー」

私の紹介に応じて、城戸さんにはこりと微笑む。

「渋谷さんの言う通り、E. G. G. Sのプロデューサーをしている城戸だ。デュアルプリズムだったか、また一緒に仕事をする時はよろしく」

「よろしくお願いします！」

何だか、アイドルにしつかりとした挨拶をされている城戸さんを見るのはかなり新鮮だ。

「そこまでかしこまる必要はないですよ。プロデューサーさんはかなりざつくりとした人ですから。——ね、プロデューサーさん？」

ダフネが城戸さんの方を悪戯っぽく向くと、彼は肩を竦めて苦笑いした。

「もうちよい敬って欲しいのは山々だが、まあ俺もあまりお堅いのは好きじゃないからな。……っつーか、その二人には敬語なんだな、ダフネ」

「あら、プロデューサーさんも敬語がいいかしら？」

「今更変えられても変な感じがするからな。そのままでもいいよ」

「……なんつーか、近所の兄ちゃんって感じの人だな」

神谷奈緒が、二人の会話を見てそんな感想を言った。

「怖い人じゃないからいいんじゃない？ 何だか、奈緒みたいな雰囲気があるし」

「どういう事だよそれ」

「ほら、いじられ体質っぽい所とか」

「んな訳あるか！」

神谷奈緒と城戸さんの声が綺麗に揃った。

あの、とエバンスさんが恐る恐る俺に声を掛けてくる。

「ああ、どうしたエバンスさん」

「あの、北条さんとダフネさんに何らかの繋がりがあるみたいなんですけど、心当たりありませんか？」

なんだなんだ、藪から棒に。

「本人に訊けばいいんじゃないか？ 何か後ろめたい事でもあるのか」

つーか、俺も初耳だぞ。

「妹の関係よ、プロデューサーさん」

——ああ、そういう事ね。成程。

「そういう事ね」

「……えつと？」

ハーミーは察したらしいが、エバンスさんは依然として分からないらしい。

「また後で話すよ。少々込み入った話だし」

話すんなら、本人もいた方がいいだろうからな。

「ダフネ、近々報告に行くのか?」

俺が訊くと、彼女は「ええ」と首を縦に振った。

「明日にでも行くつもりよ。プロデューサーさんも行くの?」

「ああ。俺だけじゃなく、エバンスさんとハーミーも同行していいか?」

「ええ、もちろん。喜ぶと思うわ」

ダフネはスマホを取り出し、素早く画面にメッセージを打ち込む。

「うん、やっぱり喜んでるわ。一緒に行きましょう」

「それは良かった」

なんの事か分からないエバンスさんを尻目に、ハーミーは一人嬉々としている。

「わたし、会うのは初めてなのよ。楽しみだわ」

「お、そうだったか。俺は久々かな。少しは良くなっているといいんだけど」

「ええ、そうね」

ダフネはにつこりと微笑んだ。——しかし、一瞬だけ見せた寂しそうな顔が、少しだけ気にかかった。

夜空には満点の星が瞬いている。その一つ一つが自己主張をしながらも、他の星を照

らしてより明るく輝かせているようにも見えた。——まるで、今日のライブのように。「感謝しなくちゃいけない、かな」

美波は城戸の方を見る。彼は彼女に目もくれず、自分の担当しているユニット——E. G. G. Sの三人と何かを話し込んでいた。

「はい。彼の助力もあり、シンデレラプロジェクトは『GO IN!!』を問題なく披露する事が出来ました」

武内プロデューサーが頷きながら美波の言葉に答えた。他の皆が言っていたような面白い青年という印象は、美波の中からは消え去っていた。

——俺達を、頼ってください。

そのように彼女を諭した彼の目は力強く、頼りがいがあった。

「凜ちゃん、全然頼りなくなかないよ」

初めて見る女の子二人と話している凜を見ながら、美波は呟いた。

「プロデューサー。もしE. G. G. Sが困るような事があつたら、私も——いいえ、私達も手伝えたらいいですね」

美波がそのように言うと、武内プロデューサーは美波の方をしつかりと向き、「はい」と返事をしながら頷いた。

「彼に——いえ、E. G. G. Sの子達にも、助けられてばかりですから。シンデレラプ

プロジェクトで手伝える事があれば、その時はよろしくお願いします」

仏頂面を崩さない武内プロデューサーに苦笑しながらも、美波は頷いた。

「はい。これからもよろしくお願いします、プロデューサー」

満天の星空が、エールを送っているような気がした。

第31話 Her start—line like

a doll

俺達がいるのは市内の総合病院だ。ダフネが受付で見舞いの確認をしている間、エバンスさんはそわそわと周りを見渡す。

「あ、あの、いきなりこんな人数で押しかけたら、迷惑になりませんか？」

「多分大丈夫だよ。今はそこまで深刻じゃないだろうし」

それに、と俺は言葉が続ける。

「アイドルの見舞いだから、相当喜んでると思うぜ」

ダフネがニコニコ顔で戻ってきたのを見て、肩を竦める。テレビでは、芸能関連のニュースをやっている所だった。やはり、高垣楓のメディア露出がかなり多い。——俺も、E. G. G. Sをここまで有名にしていかないと。

「さ、行くわよ。ハーミー、エバンスさん、プロデューサーさん、付いてきて」
今までになく、ダフネはいい笑顔をしていた。

「楽しみね、プロデューサー」

「ああ、そうだな」

やっと彼女にいい報告が出来る。

個室の扉を開くと、今か今かと待ちくたびれた様子の少女がベッドの上で上体を起こしていた。絹のように滑らかな金髪と宝石のように青い瞳、新品のシーツのように真っ白な肌は、まるでフランス人形のようなのである。

「お姉様！」

「いっくら、じつとしてなさい？」

ダフネがゆっくりとベッドに近寄り、持っていた紙袋を少女に渡す。

「元氣そうで何よりだよ、アストリアさん」

アストリア・グリーングラス。ダフネの妹である。彼女はベッドの上で会釈をした。

「ご無沙汰しています、城戸プロデューサー。そちらの二人は、E・G・Gの人ですよね？」

ああ、と相槌を打ち、ハーミーとエバンスさんを前に出す。

「わたしはハーマイオニー・グレンジャーよ。直接会うのは初めてね」

「はい、姉から話は聞いています！」

アストリアさんは嬉しそうにハーミーを見る。ほとんど同じくらいの年齢だから、友達になれそうだな。

「ハリエツト・エバンスです！ ……えっと」

「アストリアです」

「あつ、はい、よろしくお願ひします、アストリアさん！」

ハーミーよりも少し歳下の女の子に、エバンスさんは深々と頭を下げた。まあ、上品なオーラに気圧されちゃうよな。姉のダフネとは違って、本当にいい所のお嬢さんみたいな振る舞いだし。

「そうだ、アストリア。紙袋の中見てみなさい？」

ダフネに言われて紙袋の中を覗き込んだ彼女は、ぱあつと目を輝かせる。中から出てきたのは、「Union-Jack」のシングルCDだった。

「お姉様、これって！」

「ええ、そうよ。あたし達のデビューシングル」

アストリアさんは嬉々とした顔のまま、ベッド脇の台から何かを取り出して大事そうに抱え込む。——って、同じシングルじゃねえか。しかも三枚も。

「嬉しいです、お姉様！ この子達共々、大切にしますね！」

「え、ええ、そ、そうね」

流石のダフネも、これにはドン引きのようである。えーと、観賞用、保存用、布教用、布教用その二か？ 熱心なファンが身近にいるもんだな。

「……あの、皆さんにお願いがあるのですが」

シングル四枚を抱えたまま、アストリアさんは不安げに視線を下げる。

「何だい？ 出来る範囲なら、俺達で何とかするよ」

「あ、あの」と彼女は恐る恐る口を開く。ハーミーとエバンスさんはどのような要望が来るのか分からず、警戒しているみたいだが——身構える必要はないだろう。

「あの！ この子達にサインして貰えますか!？」

……ほらな、やっぱり。

保存用三枚に一人づつサインをして貰ったアストリアさんは、驚く程に上機嫌だった。ベッドの上で身悶えするくらいには。つか、滅茶苦茶元気になったんだな。

「ああつ！ お姉様のみならず、ハーマイオニーさんやハリエツトさんのサインまで！ 生きててよかった！」

君が言うのとシヤレになんねーからやめてくれないかなそれ。

「……あの、その、好きなんですネ、ダフネさんの事が」

エバンスさんが恐る恐る訊くと、アストリアさんは素早くエバンスさんの方を向き、ふんすと鼻を鳴らす。

「はい！ わたくしが持ち得ていない大人の魅力！ ふとした時に見せる大人の余裕！

わたくしとたった二歳しか離れていないのにそれを持ち合わせている神秘！ まさに、理想の姉です！」

力説するアストリアさんに、質問をしたエバンスさんが後ずさる。ふと俺と目が合ったアストリアさんは、「ふふっ」と上品な笑顔を見せた。

「もちろん、そのお姉様を見つけて下さった城戸プロデューサーにも感謝しています。お姉様の魅力を、全世界に発信して下さいますから」

「お、おお、そうだな」

俺の仕事を端的に言えばそれで合ってはいるのだが、微妙に意味が食い違っているような気がするのなんなんだ。

「そう言えばハリエツトは知らないんじゃない？ ダフネがアイドルを目指した理由」
ハーミーがエバンスさんに訊く。

「えっと、約束した、と言うのは聞いていたけど——」

エバンスさんの視線は、今にも恍惚でよだれを垂らしそうなアストリアさんの方を向く。うん、分かるよ。そんな感じに見えないからね。

「今でこそこんな感じだが、少し前まではヤバかったんだ。それこそ、生死の境を彷徨う程に」

生まれつき体が弱かったらしい。それこそ、峠を越えた今でさえ療養中であるぐらい

には。

「そんな時だったんだ。ダフネが、『アイドルとしてパフォーマンスをしている姉を見た』って言われたのが」

自分ではステージに立てないと、彼女は悟ったのだろう。——だから敢えて、自慢の姉に自分の願いを託したのかもしれない。

「そう、だったんですね」

エバンスさんは返答に詰まり、視線を下げた。まるで、聞いてはいけない事を聞いてしまったかのように。しょんぼりしてしまったエバンスさんの肩をポンポンと軽く叩き、俺は言葉を続ける。

「ま、俺がプロデュースするって事になってからは面白いぐらい回復したんだ。今になつて気にする事じゃないさ」

元来、人間とは欲深い生き物である。金を持つていても更に懐を潤したがるし、美味しいものに囲まれていても更に美味しいものを求める。……例を上げたら正直どうしようもない性質だなこりや。

ただ、アストリアさんの場合は、「アイドルの夢を託した姉を応援したいから、もつと元気になろう」といった具合のものだ。そこには、真つ直ぐな少女の願いが込められている……はずだろう。元気になった今では、アイドルオタクまっしぐらな言動をしてい

るけど。

「ハーミーは知ってたの？ ダフネさんが、そんな約束をしたって事」

エバンスさんの質問に、ハーミーは「いいえ」と首を横に振った。

「でも、体が弱い妹がいるって事は知ってたから、何となく察する事は出来たわ。だって、唐突だったもの。急に『アイドルになる』なんて、ダフネらしくなかったから」

「ふふっ、じゃあダフネさんをサポートしようとして、ハーミーもアイドルになったんだ」

「そっ、そんなんじゃないわよ」

さて、どうだろうな。

「ちよっ、にやにやしないでよプロデューサー！」

「気のせいだよ気のせい。ハツハツハ」

「もう！」

ぷりぷり怒ったハーミーを尻目に、ダフネは「そう言えば」と話題を変える。

「アストリア。カレンさんの事、覚えてる？」

北条さんの名前が出た途端、アストリアさんの顔色が変わる。

「はい。覚えています。……もしかして、何かあったのでしょうか」

途端に心配するような表情になる彼女に、ダフネは不安を払拭するような笑みを浮か

べる。……北条さんも中々に体が弱かったのだらうか。こうして、不幸な知らせを覚悟されるぐらいに。

「大丈夫よ、元気になつてたもの。あの人、アイドルになるみたいよ」

ダフネの知らせに、アストリアさんは顔色を二転三転させる。

「加蓮さんが!?! 本当に元気になられたんですね!」

「ええ。もうすぐデビューするみたいよ」

アストリアさんは何かを決意したように、ゆつくりと頷く。

「——決めましたわ、お姉様」

ダフネの顔が微妙に曇る。彼女のそんな顔を見るのは正直に言つて初めてだ。

「何かしら。もしかして……」

アストリアさんはダフネと俺の顔を交互に見ると、再びこくりと頷いた。

「ええ。わたくしも——わたくしも、アイドルになります」

そうくるよな。うん、知つてた知つてた。

「だ、ダメよアストリア!」

その決心に異を唱えたのは、血相を変えたダフネだった。

「まだ退院の目処が——」

姉の主張を、妹は遮る。

「来年の二月には退院出来るみたいです。——遅くはありませんよね、城戸プロデューサー？」

ダフネとアストリアさんは俺の方を向く。一人は口の動きで「やめて、やめて」と繰り返し返し、もう一人はただ押し黙って俺の反応を窺っている。——悪いがダフネ、嘘をつく訳にはいかない。

「……勿論、遅過ぎるなんて事はない。なんせ、アラサーでデビューした人もいるくらいだ。もし通院が必要なら、それも考慮してプロデュースするぐらいの余裕は346にある。もし、選考に通るなりスカウトされるなりって前提はつくけど」

しかし、容姿に関して言えば問題がない。体力面でのリスクを除いてしまえば、彼女もアイドルになれるだろう。

「……プロデューサーさん」

ダフネが恨めしそうに俺を見る。やめてくれよ、そんな顔をしないでくれ。

「——とは言え、君のお姉さんの心配も分かる。峠を越えたとは言え、今はまだ療養中だからね。……アストリアさん、まずはお医者さんのお墨付きを貰う事。兎にも角にも元気になるないと、アイドルなんて夢のまた夢だよ」

どうだダフネ。——まだ足りないか。未だに、彼女は渋っているような顔を崩さない。

「もう一声」

もう一声って言われても……そうだなあ。

「じゃ、俺がスカウトなり推薦なりしないって事で」

ええつ、とアストリアさんは落胆するような声を出す。

「いけずですわ、城戸プロデューサー！」

「まあまあ。アストリアさん、自分の力でアイドルになつてみなよ。E・G・G・Sの三人も、自分の力でアイドルになつたんだ。……それぐらい、出来るだろ？」

エバンスさんは「あの」と弱々しく声を上げる。

「ぼくはプロデューサーにスカウトされたんですけど」

まあ、そうだけどさ。

「運も実力のうちって考えな。——さて、これでどうかなダフネ？ 346プロの人間

としては、是非ともアイドルになつて欲しい人材ではあるんだが」

むう、と不満そうな顔ではあるが、ダフネは観念したように頷いた。

「分かったわよ。随分と譲歩したのは分かったもの」

それなら良かった。

「……よーし！ 目標が出来たわね、ダフネ！」

ハーミーが威勢よく大声を上げた。

「目標?」

「ハリエツト、アストリアとも共演が出来るようにわたし達も頑張るのよ! せっかくなんだから、モチベーションを上げていかなきゃ!」

ハーミーの言葉に、ダフネはふっと微笑んだ。

「……そうね。新しい目標が出来たと思わないと」

ダフネは再び、アストリアさんの方を向く。

「先に待っているわ。本当にアイドルになりたいなら——まずは、しっかりと療養する事。分かった?」

アストリアさんは、満開の花のような笑顔を見せた。

「はい! お姉様!」

さて、だったらその約束を破らないように、俺も仕事を頑張っていかないな。

第32話 The fan who is red-hair

夏フェスの後、そこそこにE・G・G・Sの仕事が増え始めた。咄嗟の判断で披露した「Invisible Veil」が、ある程度の話題作りにはなつたらしい。まあ一番嬉しいのは、作曲の先生がスランプから抜け出せた事か。

「はい、カット!」

でもそれ以上に、ライブやラジオ以外の仕事が増えたのは大きい。例えば、今回のようなTVC撮影とか。

「良かったよ、次は四人のシーンも撮っていくから」

「はい!」

監督の指示にハキハキと答えるハーミー。エバンスさんとダフネも、笑顔でこくりと頷いた。

「いやあ、いいですね。撮影が順調で」

赤髪の青年が、のんびりとした調子で俺に話しかけた。

「はい、このような仕事は初めてのはずですが、上手くやってくれていると思います」

俺は彼に向き直り、頭を下げた。

「改めて、ありがとうございます。CMの共演を打診してくれて」

赤髪の青年は「いやいや」と照れ臭そうに手をひらひらと振った。

「確かに打診したのは僕ですが、ゴーサインを出したのは監督ですよ」

赤髪の青年——ロン・ウィーズリーは、温和にはにかんだ。

俺が彼を初めて見たのは、今から二〇年程前の特番だった。大家族の生活を追うタイプの、前世でもよく見たパターンの番組だ。外国人家族が日本で面白おかしく生活をしていく明るい雰囲気、かなりの人気を博していた。

しかし、俺が目にしたのはそこではない。ロン・ウィーズリー。『ハリーポッター』の中でも重要な位置付けにある登場人物が、なんて事ない様子で日本にいる。その事に衝撃を受けたのだ。

その特番は彼の兄達が成人して海外に居を構えていった事でなくなったのだが、目の前にいる彼——ロン・ウィーズリーは、日本で俳優として活動している。今では名バイプレーヤーとして、若くして日本の芸能界になくてはならない存在にまでなった。——つまり、大抜擢である。そんな彼の指名を、E. G. G. Sは直に受けたのだから。

「しかし、E. G. G. Sを指名するとは思いませんでした。てつきり、同じ新人アイドルならニューージェネレーションズが選ばれてもおかしくないはずですが」

「ああそうかも」とロン・ウィーズリーは頭を搔く。

「身内にファンがいてですね、何らかの形で一緒に仕事をするって言ってしまったんですよ」

身内にファンが？ それは嬉しいものだ。

「そうだったんですね。喜ばしい限りです」

何よりも、彼女達の身内以外にもファンがいるという事実を聞いて嬉しい。彼女達の頑張りもそうだが、俺の仕事が無駄になっていないという事を実感出来るのだから。

「つと、ではそろそろ」

監督の視線に気付いた彼は、教室を模したセットへと向かっていった。

「ええ。至らない所があれば、アドバイスをしてやって下さい」

俺が声をかけると、彼は「任せろ」と言わんばかりに親指を上げた。

さて、今回撮影しているのはソフトキャンデーのCMである。テンションが上がらない女子中学生三人に、商品のタイアップキャラクターであるロン・ウィーズリーが颯爽と登場、商品のソフトキャンデーを勧めるといった内容である。バイプレーヤーの彼にしては珍しく、主役の立ち位置と言えるか。

E. G. G. Sの三人は女子中学生然としたセーラー服だが、彼は商品をイメージした、白色に赤いラインの入ったスーツだ。イチゴ味だろうか。まあそんな事はどうでも

いいだろう。過去には白一色の全身タイツだった事もあるくらいだし。てか、仕事は選んでくれよ名俳優。

「待ちなレデイー！」

見え見えの黒子が引つ張る台車に乗ったロン・ウィーズリーが、開いていた扉から飛び出してくる。

「カット！ 三人とも、もつと驚いたりアクションをしてー！」

監督が撮影を止める。確かに、E. G. G. Sの三人はあまり驚いたような動きを見せていなかった。まあ、撮影前に段取りを確認した事もあるのだが、CMの流れ的にはもつと驚いて然るべきだろう。

「は、はい！ 気をつけますー！」

エバンスさんが頭を下げる横で、ロン・ウィーズリーはいそいそと台車を元の位置に引つ張っていた。シユールな光景ではあるが、撮影の舞台裏はそんなものだろう。

「テイクツー！」

監督の掛け声から数刻程遅れて、ロン・ウィーズリーが再び台車に乗ってやって来る。

「待ちなレデイー！」

「ひゃん!?!」

「きやつ!?!」

「えっ!？」

今度は三人ともリアクションを取ったが、監督は気に食わない様子で首を横に振る。「カット。もう少し、動きが欲しいな」

ううむ、こだわるなあ。CMの撮影なんだから、程々でいい気もするんだが。

「……そうね。せつかくあのウィーズリーさんとの共演だもの、手を抜けないわね」

ダフネはそう呟くと、ハーミーと目を合わせて力強く頷いた。あーそうか、名俳優がいるから大根役者じゃ笑われてしまうのか。

「そんなに気負わなくていいよー」

台車を引き摺りながら、ロン・ウィーズリーはそんな風に言う。彼自身はリラックスしている様子なのだが、他のスタッフは微妙にピリピリしている。

「エバンスさん、いける?」

「うん、頑張つていかないとだよね、ダフネさん」

エバンスさんは膝の上に置いた両手を、きゅつと固く握りしめた。……ロン・ウィーズリーの言う通り、そんなに気負う必要はないはずなのだが。

「……テイクスリー」

先程までと同じく、ロン・ウィーズリーが台車に乗ってやって来る。

「待ちなレディー!」

「ひやいつ?!」

「きやあつ!?!」

「ふぎやつ!?! きや!」

ガタン、と大きな音を立てて、三人は思い切り驚く演技をする。特にエバンスさんは、机を思い切り跳ね除けながら倒れて——待て待て待て、大丈夫かエバンスさん!?!

「はいカーツト! いいよー!」

良くないっての! 怪我したらどうすんだよ。映像を確認する監督を尻目に、セットの方へと駆け寄る。

「エバンスさん、怪我は?」

頭をさすりながら立ち上がる、眼鏡がズレたエバンスさんに訊く。見たところ、転んだ跡は付いていない様子だが。

「いたた……。大丈夫です、プロデューサー」

たはは、とロン・ウイズリーは緩く笑う。

「いやあ、765プロの春香ちゃんを思わせるコケっぷり、良かったよ」

でも、と彼は言葉を続ける。

「今度からは気を付けてね。君達のプロデューサーは、どうも心配性みたいだから」
ですよ、城戸プロデューサーさん、と言いながら、彼は俺に目配せした。

「……まあ、ウィーズリーさんの言う通りだな。いいか、無茶すんなよ。これからって時に怪我されちゃ、元も子もないからな」

エバンスさんは慌ててストレッチをして、俺に頭を下げた。

「ごめんなさいプロデューサー！ 大丈夫です、怪我はありません！」

「だったら良かったけど——」

監督は少しも気にかかることなく、右手でオツケーサインを作る。全く、呑気でいいものだな。

最後に四人で行なう決めポーズも問題なく終わり、撮影は全て終わった。途中で冷や冷やしてしまったが、大きな問題も特になく、順調に撮影が終わったからよしとしよう。

「ウィーズリーさん、ありがとうござ——」

俺がロン・ウィーズリーに挨拶しようとする、ズカズカと一人の少女が彼に近付き——名俳優のロン・ウィーズリーをどついた。

「ちよつと！ 私を呼んでって言ってなかった？」

「げえつ、ジニー……」

ロン・ウィーズリーは顔色を変えると、近くにいた俺の背後に回り込む。すつこい震えているけど、そんなにあの子が怖いのだろうか。いや怖いか。名俳優を躊躇いもなく

どついたんだし、嫌な汗しか出てこねえ。

「……すみません。どいてください。兄をどつけないので」

まるでめらめらと燃えるような赤い髪の少女は、俺の後ろにいるロン・ウィーズリーを真つ直ぐと睨み付けた。

「ええと？ あなたは？」

「ジネブラ・ウィーズリー、この兄の妹です。ジニーで結構ですよ。そんな事より、このっ、バカ兄！」

ジニーと名乗った少女はロン・ウィーズリーを俺の背後から引つ張り出し、ガミガミと怒り始める。

「言ったよね?! 絶対言ってた!」

「いやだって、今日も朝から色々と予定が立て込んでたし——」

「この予定にだけ顔を出せたらいいの! 連絡ぐらいしてよ!」

「……あつ、そうか。そりやそうだな」

「こんの、バカ兄!」

ベシンベシンと、少女が若きバイプレーヤーの頭を叩く音が響き渡る。

「ちよつと、何よ一体! プロデューサー、説明しなさい!」

突如始まった騒ぎに駆け寄ってきたのは、慌てた顔のハーミーだった。芸能界の大先

輩がシメられている姿を見て、血相を変えて俺に詰め寄る。

「俺が訊きたいっての、ちよつとジニーさん!? 落ち着いて!」

周りのスタツフも止めてくれ! どうして「我関せず」って顔してんだ!

しゅんと勢いをなくしたジニーさんは、俺達に向かって謝罪した。

「すみません、いつものノリで……」

あれが何時ものノリなのかよ。道理で、周りのスタツフが動かない訳だ。

「そ、そうなのね。びつくりしちゃったわ」

ハーミーが苦笑いしながら答えた。遅れてやって来たエバンスさんとダフネも、引きつった笑いを浮かべている。……何時ものノリでプロレスじみた締め技をされるのか、この俳優は。

「えつとですね城戸プロデューサーさん、この愚妹が——」

「くうつ!」といきなり観念したような声を出したジニーさんは、がばりと素早い動きでエバンスさんの両手を握り締めた。

「ハリエツト・エバンスさん!」

「ひやつ、ひやいいい!!」

急な動作について来れなかったエバンスさんは、半ば恐怖したような声を出す。

「ちよつ、うちのアイドルに——」

俺がジニーさんに注意しようとした所で、彼女はぼつと顔を上げる。目がらんらんと輝いていた。

「ファンです！ 会えて嬉しいです！」

あれ？ 思つたよりも普通じゃん。俺とは違い微動だにしなかつたハーミーとダフネは、冷たい視線で俺を見据える。

「何だと思つたのよ、プロデューサー」

「いや、てつきり何かの刺客かといいいつつつて！」

ハーミーに思い切り横腹を殴り付けられた。いやだつて、ロン・ウィーズリーにキヤメルクラッチかました子だよ？ 警戒するなつて方がおかしくない？

「えつ、と、ぼくのファン、なんですか？」

「はい！ デビューライブの時から見てました！」

俺がボディに強烈な一発を貰つたことなど露知らず、ジニーさんは興奮した様子でエバンスさんの顔を真っ直ぐと見つめていた。

「……ウィーズリーさん、もしかして、身内のファンつて」

「ええ、はい。彼女です」

たはは、と彼は笑いながら頭を掻いた。

「あいつ、何だかあの三人を気に入っちゃって。特に、あの眼鏡の——エバンスさんか。……あいつがああやって何かに熱中するなんて初めての事なので」

ロン・ウィーズリーの目は、E. G. G. Sのサインを貰って狂喜乱舞するジニーさんに向けられていた。先日のアストリアさんを何となく思い出すが、こちらの方が何倍もアグレッシブだ。

「兄として応援したくなつた、という事ですか」

「ま、そんな所ですね」

俺とロン・ウィーズリーは顔を見合わせて笑つた。気持ちはこちらからでもない。美嘉が読モになると言い出した時にも、あいつの「進兄さん」として出来る限りの応援はしたしな。

「——って、お兄ちゃん！ 次の現場！ 早く行かないと遅刻するよー！」

ジニーさんは時計をちらりと見た後、彼に向かって言った。

「全く、またマネージャーから予定を聞き出したのかよ……」

ロン・ウィーズリーは肩を竦めて、俺に向かって右手を差し出す。

「またいつか、一緒に仕事しましょう。城戸プロデューサーさん」

彼が差し出した右手を握り返し、にたりと笑い返す。

「出来れば、ドラマ出演の交渉も手伝ってくださいよ？」

「たはは、善処します」

第33話 The gentle lady in the bookstore

やっと買いに行けるわ。ジェームズ・エバンスの日本語訳、凄く楽しみね。原語版も持っているし何度も読んだけど、日本語訳には日本語訳の良さがあるもの。翻訳者の癖だったり、もしかしたら人生みたいなものも翻訳に影響するんだから。——でも、結果は散々。まさか、ここまでないなんて思ってもいなかっただわ。

「……それで、どうしているのよ」

見つからない苛立たしきから、隣の人物に訊く。

「どうもこうもねえよ。俺も探してんだし」

隣の人物——プロデューサーは、ふうとため息をつきながら答える。

「何なのよもう！ ストーカーでもしている訳じゃないでしょうね！」

「どうして担当アイドルのストーリーカーをしなくちゃいけないんだよ……。ほら、入るぞ」

そう言つて、プロデューサーはまるでお化け屋敷のような古本屋に入ろうとする。

「ちよつ、ちよつと！」

冗談じゃないわよ！ ここに入るの!?

「どうしたんだよハーミー。さっさと中に入ろうぜ。こんな店でも、クーラーぐらい付いてるだろうし」

確かに、暑さでやられそうだから涼みたいのは山々だけど！

「でも、出るんじゃない？」

「は？ 何が」

プロデューサーはじつとお化け屋敷を眺める。街中にしては珍しい、古めかしい日本住宅。こんなの、出るに決まっているわ！

「……お、開いてるみたいだな。ごめんくださーい！」

「ちよつと、置いていかないでよー」

お化けが出てきたらどうするのよ！

すりガラスのような扉でよく中が見えなかったが、入ってみれば綺麗なものだ。しっかりと掃除が行き届いている。ただまあ、なんだ、少し品物が乱雑に置かれている印象があるんだが。

「つと、これは……はあ、ホントに古本屋だな」

若干煤けた背表紙には、金色の刺繍で物々しく題名が記されている。お、これは昔の百科事典か。少しナンバリングに抜けがあるのが気になるな。全体的に、絶版になって

いそうな古書が多い。古本屋つつーか、本の博物館みたいだ。

「うーん……。流石に新刊はないのか？」

「当たり前よ！ 古本屋って見えなかったの？」

「誰かが売ってるかもしれないだろ」

何故か膝が笑っているハーミーの睨むような視線を受け流しながら、棚を物色する。本を大事にはしているみたいだが、並びが不規則だ。本のジャンルがひっきりなしに変わる。常連客がよく立ち読みして、適当に戻しているのだろうか。いやでも、棚の整理も店員の仕事じゃないのか。

「……ひうつ!？」

ハーミーがびくりと跳ね上がる。

「どうした？ 冷房が強いんなら、店員に言って少し弱めてもらうか？」

たたと俺の方に駆け寄ったハーミーは、ガタガタと震えながら俺の背を引つ掴む。

「おい、服が伸びるからやめろ——」

「何か聞こえなかった？」

「……は？」

耳を澄ますが、特に何も聞こえない。振り子時計が規則正しく動く音ぐらいである。

「時計の音じゃないのか？」

「違うわよ！ 今確かに、女の人の声が聞こえた！」

「はあ？」

何を言っているんだ。今ここには俺とハーミーぐらいしかいない——ん？

「なあ、店員は見たか？」

俺の質問に、ハーミーはふるふると首を振った。まさか、誰もいないとでも言うのか？ ……何が床と擦れる音が、微かに聞こえる。布か？ でも今は夏だ、丈の長い服を着る必要が何処にもない。

「……………か」

聞こえた。聞こえた聞こえた聞こえた！ ハーミーの言う通り、女の人の声が！

「どうにかしなさいよ！」

「いやどうすりやいいってんだよ！」

そもそも、お化けなんている訳ねえし！ 転生した俺がお化けみたいなモンだし！

「ここに入ったのもプロデューサーじゃない！ ああもう、わたしは嫌よ！ こんなところで呪われるなんて！」

「バツキャロ、人のせいにすんな！」

小学生のような言い合いをぎゃいぎゃいしている今この瞬間にも、布の擦れる音が近付いてくる。

「ひ、ひいいいっ!」

「ああくそ、つねってる! 背中つねってるって!」

ふと、布の擦れる音が止んだ。静寂の後、棚の陰から出てきたのは——髪の長い女の頭だった。

「びっ、ぴゃあああんぐっ?!」

叫ぶハーミーの口を手で塞ぎ、女の出方を見る。じつとこちらを見た女は、こてんと首を傾げた。

「……何か……お探ですか?」

ああもう、びっくりしたびっくりしたびっくりした!

「はあ、親戚の」

プロデューサーの質問に、「はい」と幽霊みたいな人は答えた。

「すみません。お客さんも殆どが顔見知りの人なので。驚かせてしまいました?」

ちらり、と幽霊みたいな人はわたしの方を向く。

「ええ、まあ。静かでしたからね」

こっちは心臓が張り裂けそうよ。バクバクうるさいぐらいだわ。

「それで、探している本なんですけど」

「そう！　そうよ！　『龍の騎士』！」

目的を忘れるところだったわ。お手伝いさんは人差し指を頬に当てると、のんびりとした他の棚へと向かっていった。

「……ま、お化けじゃなくてよかったな」

プロデューサーが意地の悪い笑みを見せる。

「悪かったわね。普通、真夏にあんな服装しているなんて思ってもいないじゃない」

お手伝いさんの格好は、ゆったりとしたロングスカートにストール。あんなの、寒くなつてからの格好よ。

「ちよつとばかり冷房が強いのもあるのかもな」

「どうして服装で調整しないのかしらね……」

「さあ？　暑いと古本が痛むとか？」

「適当な事を言わないでよ」

プロデューサーとそんな話をしていると、何冊かの本を持ったお手伝いさんが戻ってきました。

「こちらでどうでしょうか。手当り次第にエバンスさんの本を持ってきましたけど」

「手当り次第か……」

「せっかく持ってきてもらったんだから、文句は言わないで頂戴」

「へいへい……つと、原語版が多いな」

プロデューサーの言う通り、原語版の本が多数を占めている。フランス語版とかドイツ語版とかもあるけど、誰が買うのかしら。そもそも、こんな物があるなんて驚きだわ。「うーん……最近でた、日本語のやつはないですかね」

「一冊だけありますけど」

あるのね！ 良かったわ！

「良かったなハーミー。ほれ、買つときな」

店員さんから手渡された本を、プロデューサーはわたしに手渡した。

「え？ でもプロデューサーも……」

「別に今すぐ読みたいって訳じゃないからな。読みたがってる読者の元に行く方が、本も幸せだろ」

そう言うのと、プロデューサーは無理やりわたしに本を握らせた。目元が前髪で隠れちゃっている店員さんは、頬を緩ませて小さく頷く。

「はい。私もそう思います」

静かな雰囲気はそのままに、声が若干弾んでいるみたい。この人、本が好きなのね。「親戚のお手伝いっていうのも、本が好きだからなのね」

わたしが訊くと、店員さんは「はい」と答えた。

「本はいい物です。私が見たことも無い世界を、沢山見せてくれます。活字の一つ一つに、作者の人となり映し出されているので。彼らの考え方に触れ、共感し、時には正反対の意見を抱きつつ、それでも読み進めて、私の中の世界が広がっていくのが好きなんです」

夢中で喋っていた店員さんは「あつ」と気付くと、しゅんと恥ずかしそうに頭を下げた。

「ごめんなさい、初対面で」

「いや、いいっていいって。そういうのを聞くのが俺の楽しみだし、仕事でもあるんだから」

「仕事……ですか?」

「こてんと首を傾げた店員さんは、本を抱えていたわたしをちらりと見て、分かったみたいに手を合わせた。」

「なるほど、先生でしたか」

……え?

「先生?」

「はい。生徒さんと一緒に、読書感想文のための本を探していたんですね。わざわざお疲れ様です」

ぺこりと店員さんは頭を下げた。

「いや、えつと……まあ、いいか」

プロデューサーは説明を諦めたかのように、頭を掻く。ちよつと、ちゃんと説明しなさいよ自分の仕事ぐらい！

「店員さん、この人は先生とかじゃなくって、わたしの——」

「別にいいだろ、ハーミー。同じようなもんだし」

ちつとも良くないわよ。こんなのが先生なんて、冗談じゃないわ！

「生徒さんは外国人なんです。原語でも読めるような物を探していただくんですか？」

「ええ、そうですね。『ハックリベリー・フィンの冒険』とかでも良かったんですけど、それじゃ書くことが多すぎるかと思って」

「同じ作者なら、『トム・ソーヤの冒険』もありますけど」

「ま、そこは押し付けるような所じゃないですからね。本人が読みたい本を読ませるのが一番かと思って」

「ふふつ、そうですね」

ちよつと、わたしを差し置いて本の話をしなさいよ！ それに、どつちも読んだことあるんだから！ 特に『ハックルベリー・フィンの冒険』なんて、論文も少し読んだことがあるわ！ 内容は……まあその、難しかったけど。あの本から当時のアメリカの人

種意識に繋がるなんて、思っても見なかったもの。

「——つと、そろそろ会計を済ませちゃいませうか」

プロデューサーがわたしの顔をちらりと見て、店員さんにそんな事を言った。わたしがしかめつ面なのは、会計を早く済ませたい訳じゃないんだけど。

「はい。そうですね」

相変わらずゆつくりとした歩みでレジに向かった店員さんは、わたしから本を受け取り、会計を済ませる。

「はい、どうぞ」

店員さんから本が入った紙袋を受け取り、わたしは小さくお辞儀した。

「折角ですから、名前をお聞きしても？」

プロデューサーが店員さんに向かって言う。……ホントこの人は。

「ナンパするつもりなの？」

「ちげーよ！　なんてったってそんな風に思うんだ」

心当たりがないのかしら。シンデレラプロジェクトの皆——一部かしら、に向かって、思わせぶりな態度をするんだから。そう思われちゃっても文句は言えないはずよ。

「名前……ですか？」

「何かの縁ですからね。——あ、抜けてた辞書がこんな所に」

そんなのどうだつていいわよ。机の上に第四巻が積まれてるぐらいで、いちいち声を
出さないで欲しいわ。

「鷺沢文香、です」

「そっか、鷺沢さん。俺は城戸進ノ介です」

プロデューサーはズボンのポケットから名刺ケースを取り出すと、中身を一枚引き抜
いて店員さんに手渡す。

「ご丁寧に、ありがとうございます」

ははは、とプロデューサーは小さく笑いながら、店を出ようとする。わたしが慌てて
追いかけると、プロデューサーはびたりと足を止めた。

「——もしかしたら、近いうちにまた会うかもしれませんね」

わたしが「どういう事よ」と訊こうとする前に、プロデューサーは店を出て行ってし
まった。

店を出てしばらく歩き、ある事に気付く。

「……なあハーミー、エバンスさんの家に行けば一冊ぐらい貰えたんじゃないか？」

後ろをついてきているハーミーはびたりと止まると、「ああー！」と声にならない叫び
を上げた。

「そうよ！ そうじゃない！ どうして今まで気付かなかったのよ！」

「いや、俺も今気付いた所だし」

「この、バカバカバカ！」

「いてっ、いてっ！ 殴ることはないだろ！」

最近よくアイドルに暴力を振るわれます。これってイジメですか？ ——くそ、相談

内容を自分で考えておいて、余りの情けなさに没にするとは。

「そうと決まれば、行くわよプロデューサー！」

「行ってくて、何処に？」

「決まってるじゃない！ ハリエットの家よ！」

いやいや、別に急いで行かなくてもいいだろ。

エバンスさんは「それで」と頷く。

「昨日、ぼくに持つてくるように言ったんですね」

部屋の片隅では、エバンスさんが持つて来た本に頬ずりをするハーミーの姿があった。作者のサインが入っている、日本語訳だ。……同じ本が二冊ある事になるんだが、そこは気にならないのだろうか。

「これは保存用ね！ 家宝にするわ！」

「アストリアアさんかよ」

ここに「布教用」があつたら完璧だったな。

「……喜んでるようで、何よりです」

エバンスさんは満面の笑みを浮かべるハーミーを眺めながら、嬉しそうに呟いた。

「まあ、E. G. G. Sはサインを喜んでもらう側にならないといけないけどな」

俺の発言の意図を理解したらしいエバンスさんは、こくりと頷く。

「はい。——引き続きよろしくお願いします、プロデューサー」

「ああ。頼まれた」

にっとエバンスさんに向かって微笑んだ。

第34話 The silhouette behind

d u s (1)

珍しく、武内さんが疲れたようなため息をついた。

「どうかしましたか？」

声を掛けてやつと気付いたように顔を上げた彼は、「ああ、いえ」と歯切れの悪い返事を寄越すのみだ。

「何か悩みでもあるんですか？」

とは言え、思いつくような悩みはない。シンデレラプロジェクトも夏フェス後は軌道に乗っており、大きな問題も特には耳に入ってきていない。——流石の武内さんも、激務に悲鳴を上げそうになったのだろうか。……ニユーヨーク帰りの常務の事もあり、気苦労が絶えないのかもしれない。優秀故に目を付けられてしまったらしく、こちらとしては応援する他ないのだが。

「大きな問題ではないのですが——」

彼からため息の理由を聞いた俺は、「ああ……」と苦い顔をする以外になかった。

「……武内さんですか」

俺もまた、同じような悩みに苛まれていたのだから。

「ストーリーカーあ!？」

ハーミーがキヨロキヨロとプロジェクトルームの中を見渡しながら叫ぶ。

「思い上がりじゃなくて?」

ダフネが首を傾げて訊く。

「そう思いたいのは山々なんだが、そうでもないらしい」

でも、とエバンスさんは腕を組んで考え込む。

「アイドルにストーリーカーがつくならともかく、プロデューサーにつくんですか?」

「そう、そこなんだよ」

俺と武内さんが苛まれている悩み。それはまさに、「プロデューサーがストーリーキングされている」という事だった。エバンスさんの言う通り、アイドルにストーリーカーがつくのはまだ分かる。その場合は然るべき対処をするし、用心もする。深刻な事態である事には変わりないのだが、奇妙な事ではない。しかしストーリーキングされているのは、武内さんと俺なのだ。アイドルではなく、アイドルのプロデューサーがストーリーキングされている。そこが奇妙な点であると言っても差し支えないだろう。

「どう言った時に視線を感じるとか、そういうのはあるんですか?」

エバンスさんの質問に「そうだなあ」と考えを巡らせる。

「……あまり疑いたくはないんだが、社内でも感じるんだよ」

「まさかの身内なのね」

「——ああ」

大きくため息をついた。心当たりがないので、尚更頭を痛めているのである。

「やめてよねプロデューサー。後ろからグサツツと言うのは洒落にならないわよ」

「おいこらハーミー、俺はそんなに恨みつらみを持たれるような奴に見えるのか？」

「例え話よ例え話！」

ぎゃいぎゃい騒いでいると、ハーミーのスマホがメッセージアプリの通知音を鳴らす。

「未央さんからね。どれどれ……。——っ！」

スマホの画面をのぞき込んだハーミーは、息を呑むとダフネに画面を見せる。

「どうしたのよハーミー、急に黙り込んで……」

画面を見たダフネもまた、途端に動きを止めた。彼女にしては珍しく、顔が真っ青になっている。

「二人とも、どうしたの……。きやああ!?!」

同じく画面を見たエバンスさんも、悲鳴を上げてスマホに背を向けると屈み込んでし

まった。一体何なんだよ。

「……プロデューサー、見る覚悟はある?」

「どうして勿体ぶるんだよ。呪いの写真でも送られたのか?」

ふるふると震えるハーミーの手から、スマホを受け取る。そこに映っていたのは、一枚の写真だった。武内さんを中心に、島村さんと莉嘉、渋谷さんとみりあちゃんが横に立ち、武内さんの後ろには諸星さんが立っているような、何てことない集合写真である。ただ一つ、少しだけ開かれたドアの背後に謎の影が見えること以外は。

「……心霊写真?」

俺がそう呟くや否や、E・G・G・Sの三人は各々悲鳴を上げる。ああもう、うっさいなあ。ある意味幽霊みたいな存在なら、目の前にいるつての。

「地縛霊よ地縛霊! 346プロには地縛霊がいたのよ!」

ガタガタと分かりやすく震えながら、ハーミーはそんな事を言い出す。

「いいえ、それはおかしいわ。だって、今までそんな話は聞いた事ないもの」

聞いてたまるかよそんな話。大手芸能プロダクションを何だと思ってるんだ。

「じゃあ、ストーリーカーの正体はお化け……?」

エバンスさんの言葉に、他の二人の血の気がさつと引いた。

「……どうするのよそうだったら! 本当にプロデューサーが刺されちゃう!」

「いいえ、お化けなんだから呪い殺されるかもしれないわよ」
「んな事あるかよ、ホラー映画の見すぎだ」

転生した俺が言うんだから間違いないぞ。ふと、俺が手にしていたハーミーのスマホが、再びメッセージを受信する。

「今度は何かしら……」

俺からスマホを奪い取ったハーミーは、画面を見ると「むっ」と唸り、何かを打ち込んで返信した。

「……ハーミー、どうしたの？」

エバンスさんが訊くと、ハーミーはコクリと頷いた。

「……餅は餅屋よ」

——なーんだそりゃ。

ハーミーに連れられて来たのは、346のエントランスだった。そこには武内さんとシンデレラプロジェクトの面々に加えて、二人のアイドルが立っている。ドジっ子系アイドルの道明寺歌鈴と、ホラー系アイドルの白坂小梅か。道明寺さんが巫女装束を着ていることにはツツコミを入れるべきなのかどうなのか。

「幽霊ときたら、専門家に見てもらおうのが一番！ という訳で、アイドル界ナンバーワン

の靈感の持ち主に、実家が神社の巫女さんにや！」

それでこの二人というわけか。シンデレラプロジェクトとE・G・G・Sの三人は口々に感心しているが、武内さんと俺は苦い顔をする他にない。

「……一体これは何なんですか、武内さん」

俺の質問を受けて、彼は困惑したように首筋を抑えた。

「いえ、私にもわかりません」

「……ですよねー。」

「じゃあ早速、お願いしますー！」

お願いします、の掛け声とともに、一同が頭を下げた……武内さんも頭を下げるのかよ。わざわざ付き合わなくてもいいのに。

「では……。かしこみく、かしこみく」

道明寺さんが、数枚のひらひらした紙がついた棒——後に調べたところ、あれは幣ぬさと言うらしい——を、頭を下げた武内さんの頭上で左右にしゃなりしゃなりと振る。

「ほら、シロちゃんも！」

「え、俺も？」

本田さんに急かされて、結局俺も武内さんと共にお祓いをする事になってしまった。……つーか、ストーカー騒動がどう間違えたら、お祓いになるんだよ。

プロデューサー達がお祓いをしてもらっている時に、白坂さんがぼつりと呟いた。

「何をしているの?」

「何って、お祓いにゃ」

前川さんが、お祓いをしてもらっている二人をじつと見ながら言った。

「誰を?」

「誰って、もちろん、Pちゃんと城戸ちゃんを」

白坂さんは、疑問を持ったように首を傾げながら前川さんに向かって言った。

「……何も、憑いてないよ?」

「へ?」

驚きの声が、346のロビーに響いた。えっ嘘、心霊写真になっていたのに!

「でも、本田さんが送ってきた写真には確かに映ってましたよ?」

ハリエツトが未央さんの方を見ながら言う。未央さんは未央さんで、こくこくと頷きながら白坂さんに詰め寄った。

「じゃあ、志半ばに敗れ去ったアイドル見習いは?」

白坂さんは、また首を傾げた。

「女の人の霊? ……見えないよ?」

はあ、とプロデューサーはわざとらしくため息をついた。道明寺さんの手は止まっています、三人は困惑したような表情を浮かべている。

「言った通りだっただろ、ハーミー。気のせいだって」

「ぐぬぬ……!」

プロデューサーのくせに生意気ね!

「じゃあ、霊はいないんですね!」

ハリエツトが安堵したようにため息をつくとき、白坂さんは「ううん」と言いながら首を横に振った。

「この辺りに、笑ってるお侍さんがいるよ」

そう言つて、諸星さん達の方を指さした……けど、サムライなんて当然いない。近くにはいた諸星さんの血の気がさあつと引いた。

「によわあああ?!」

悲鳴がロビーに響いた。

あの子には何が見えてんだよ。もしかしなくてもガチ中のガチかよ。とは言え。

「霊でもないって事は、普通のストーカーだな。……ストーカーつて時点で普通じゃないだろうけど」

しかも、アイドルのプロデューサーを付け狙うとかいう、特殊なタイプのストーカーである。ぎやいぎやい騒ぐアイドル達を眺めながら、武内さんはいつものように、首筋に右手を添えた。……最近この人もそればつかだな。何とかしたいが、正直難しいだろう。常務にマークされている件なんか特に。

「すみません城戸さん。巻き込んでしまうような形になってしまつて」

「ああ、いえ、なんて事ないですよ」

頭を下げた武内さんに向かって苦笑する。俺も武内さんも、ストーカーの被害者である事にもあまり変わりはないし。

「兎にも角にも、アイドルの無事が第一です。——ストーカーの狙いが、私達とは言い切れないので」

武内さんは変わらぬ仏頂面で言ってきた。……確かに、プロデューサーのストーカーをしているからと言って、その狙いがプロデューサー本人であるとは言えない。その実、プロデューサー経由でアイドルを付け狙っているとも判断出来る。……くそ、その可能性も考慮すべきだったか。

「用心しておいた方がいいですね」

この売り出し中の時期に、大きなトラブルが起きてしまうのは何としてでも避けたい。その前に、犯人を特定してこの騒動を終わらせないと。

「社内でも視線を感じる時があるので、やはり346の関係者でしょうか」

「……あまり疑いたくはありませんが。城戸さんには、心当たりがありますか？」

「いえ、全くないです」

俺の知る限りでは、この会社にそんな輩はいない。人間関係でいうならば、前世に勤めていた会社なんかよりも真つ白である。一番人物像がよく分らないのはニユーヨーク帰りの常務だが、あんなバリバリのキャリアウーマンがストーカーをするとは到底思えないし。

……そもそも、何故俺と武内さんなのだろうか。共通している点と言えば、新人のアイドルをプロデュースしている事ぐらいで……つまり身内の中でも、妬んでいる同業者が？ いやいやいや、思いつく限りでもそんな事で妬んでくるプロデューサーが思い浮かばない。もしかしたら俺が知らないだけで、この会社にはそんな奴がいるのかも――。

「プロデューサーさん、あたし達、決めたわよ」

俺の思考を遮るかのように、突如ダフネが声を掛けてきた。

「はあ、何をだ」

すんげー嫌な予感がする。

「皆と話し合ったの。武内プロデューサーとプロデューサーさんは、ストーカー被害に

困っている、そうよね？」

「え、ええ」

「まあ、そうだな」

武内さんと俺は渋々頷いた。結論だけを言ってしまったえば、まさにそんな感じだしな。「だから、ここはアイドル同士協力する事にしたのよ」

ハーミーがダフネの後ろから声を上げると、その場にいたアイドルが「うんうん」と力強く頷く。……やっぱり嫌な予感がしてきた。そんな俺と武内さんの懸念を知ってか知らずか、本田さんが胸を張って言葉を続ける。

「その名もズバリ！ 『アイドルSP大作戦』！」

「却下だ」

「私も反対します」

もう作戦名だけで嫌な予感が当たったような気分だ。流れるように反対した俺達に向かつて、少女達は「ええー」と落胆する。ええー、じゃないんだよ。君ら一体何を話し合っただんだ？

「だって、プロデューサーとシロちゃんのピンチだよ！ ここは私達がいっちょ一肌脱がないとー！」

「いえ、本田さん、その必要は」

こりや武内さんじゃ制御しきれないな。オイオイ渋谷さん、シンデレラプロジェクトのストッパーだろ。早く止めてくれよ。

「……」

あ、この子も目がマジだ。

第35話 The silhouette behind
d u s (2)

「ふう……」

彼女は少しだけため息をつき、凝り固まった目頭をほぐす。……休んでいる暇はない。まだまだ確認すべき書類は山積みとなっている。

「……シンデレラプロジェクト」

ぼそりと呟きながら、ホチキス止めの資料に再び目を通す。新人だけが集められたプロジェクト。彼女達を支えているのはあの男だ。今は徐々に頭角を現しているらしいが――。

「それでは、間に合わない」

あまりにも遅すぎる。その他のアイドルにしてもそうだ。……このままでは駄目だ。「はあ……」

思わず、ため息が漏れてしまった。彼女にしては珍しく。

――変革を起こさないといけない。このプロダクションで、この芸能界に。

思わず俺は足を止め、ため息混じりに呟いた。

「いやホント、何してんだよ……」

俺のぼやきに気付いたハーミーが、「むっ」と不機嫌そうに睨んでくる。

「分からないのプロデューサー？ 見張りよ見張り！」

いや分かるけどさ。今も後ろに、諸星さんと前川さんがいるから。

「あのなあ、別にいいって言ってるだろ？」

「良くないですよ！ プロデューサーがピンチなんですから！」

いい加減やめてくれよ。武内さんと話していた通り、プロデューサーを付け狙う目的がアイドルという事も有り得るんだからさ。

さて、俺と武内さんが担当アイドルに何をされているのか。結論から言ってしまうと、「警備」である。その手の専門家を呼ぶのであったりするならばいいのだが、警備しているのはアイドル達である。……普通は逆じゃないか？ どうして警備対象であるはずのアイドルが、なんて事ない一般人のプロデューサーを警備するんだ。こんな事に、レッスンの合間やオフを使うべきじゃないだろ。

「そもそも、今日の仕事も室内の写真撮影だ。カメラマンは前に撮ってもらったチョウさんだから、警戒する必要もないと思うんだが」

いいえ、と首を横に振ったのはダフネだ。

「何が起きるか分からないもの。もしかしたら、ストーリーカーの正体かもしれないわねーよ。あの人に失礼だろ。」

「そんな！ チョウウさん、クリービーさんがいながら……」

「そんな感じじゃなかったけどな？ 見ている限りじゃ、普通に師弟関係だったけどな？」

何時まで続くんだよこの探偵ごっこは。

撮影は順調だ。少しは場数を踏んでくれたお陰で、彼女達も成長したという事だろう。……うんうん、アイドルとしての成長はこちらも嬉しいものだ。

『プロデューサーさん』

ちよいちよいと肩をつついて来たのは、チョウウさんのアシスタントであるコリン君だ。

『どうかしました？』

俺が声をかけると、彼は後ろの方を指さす。

『誰かいるみたいですけど』

む、誰だろうか。まさか、話題のストーリーカーじゃ……。

「……う、城戸さん」

渋谷さんか。その隣には、島村さんもいる。てか、諸星さんと前川さんじゃないのか。
「今日はオフか、二人とも」

私服姿だし、そうである事を願いたい。俺が訊くと、島村さんが「はい」と快活に頷いた。

「あの二人は私達のプロデューサーの見張りがあるので、私達が代わりに見張りをします！」

「だから安心して、城戸さん」

いや、だからと言ってコソコソしなくても良いだろうが。むしろ怪しいからな。

『あの、プロデューサーさん。部外者ですか？』

あーもうほら、コリン君は二人と面識がないんだし、そう思われても無理がないって。

『いえ、E. G. G. Sのアイドル仲間ですよ！』

コリン君に返事をした後に、ほら、と姿を隠そうとした二人に呼びかける。

「見学だのなんだの言つとくから、隠れるのはよしてくれ」

まさかこんな所にまで、ストーカーが来る訳もないだろうしな。

取り敢えずで用意したパイプ椅子に、二人を座らせる。

「城戸さん、私達はあくまで見張りで——」

「分かったから分かったから。兎に角、じつとしていてくれ。コソコソされている方が落ち着かないって」

まだ言い足りない様子の渋谷さんが、不満そうに眉を吊り上げる。撮影スタッフ一同に向かつて頭を下げた俺に感謝してくれよ。

「でも、びつくりしました！ 城戸プロデューサー、凄く英語が得意なんですね！」

島村さんが感激したように言うと、「確かに」と渋谷さんが頷き返す。

「習ったの？ 英会話」

「ん、高校ぐらいまでな」

「復習」を終わって暇だったから、前世でやっておきたかった英会話教室に行っていたのだ。やはり「継続は力なり」という言葉は真理である。……それが回り回って、アイドルプロデューサーの切っ掛けになるとは思っていなかったが。

「ま、俺の事はどうでもいいか。二人はどう？ 楽しいか？」

「はい！ とつても楽しいです！」

島村さんは即答してくれた。キラキラと眩しい笑顔からは、言葉通り楽しんでるような感情が見て取れた。対して渋谷さんと言うと、声を押し殺して笑っている。失礼じゃないか。

「ぶつ、ぶつ……。城戸さんも、同じ事訊くんだ」

「同じ事？ 武内さんにも訊かれたのか」

横に座っている島村さんも、目を丸くしている。おや、訊かれたのは渋谷さんだけだったのか。

「うん。……私は、『楽しくなる途中』、って感じ」

「——そっか」

素直じゃないな、全く。だったら、「楽しい」って事じゃないか。

「ふふっ、私は楽しいよ、凜ちゃん」

「うん、ありがとう」

ほら、島村さんに微笑み返す君の顔も、楽しくなきや出てこないだろうに。

「……あ、そうだ」

何かを思い出したように、渋谷さんは俺の方を向いた。

「ね、北条さんと神谷さんについて、何か知ってる事ってある？」

「ああ、あの二人か」

夏フェスの時に、何やら話し込んでいたらしいからな。何か気になる事でもあったのだろうか。

「正直、俺もよく知らないな。うーん、美嘉と同じ部署だったと聞いた事はあるが」

小耳に挟んだ程度の話でしかないし、あの二人とはあれつきり会っていない。たま

に、ダフネの話にちらつと出てくるぐらいか。

「そっか」

渋谷さん本人もそこまで期待してはいなかったようで、若干残念そうに笑うぐらいだった。

「ま、機会があれば美嘉にでも訊いてみてくれ」

「うん、そうするよ」

島村さんは、不思議そうな顔をして渋谷さんに尋ねる。

「凜ちゃん、どうかしたの？ 急にあの二人の話をして」

「昨日から、一緒に登校するようになって。同じ事務所のアイドルなのに、何にも知らないのは失礼かなって」

おっと、そうなのか。

「いいじゃないか。渋谷さんも、後輩に慕われるようになって」

「はい！ 仲良しなのはいい事ですよね」

「もう、二人とも」

三人にも、慕ってくれるような後輩が出来ればいいんだがな。撮影を順調に進める
E. G. G. Sを見ながら、まるで親のような気持ちが湧いた。

結局、撮影中に不穏な視線を感じるような事はなかった。「モテモテじゃないの、城戸プロデューサー」と事情を聞いたらしいチヨウさんからかわれたぐらいであり、問題は何か一つ起きなかった。

「……あ、未央ちゃん！ ……うん、城戸プロデューサーの方は問題なし……へ？」

本田さんからの電話を受け取ったらしい島村さんが、急に驚いたような表情になる。

「……うん、……うん、うん。えっ、でもそれって……え？」

あまり深刻そうな顔はしていないが、困惑している所が気になる。

「うん、いるよ。……うん、変わるね」

島村さんは自身のスマホを、撮影終わりのハーミーに差し出す。

「はい、あ、未央さん？ ……うん、えっ、えええ？ それってホント!? いやでも、佐久間さんに限って……うん、うん、二人にも言っておくわ！」

ハーミーはそそくさとスマホを島村さんに返すと、俺の方を向く。

「この後は特に予定入ってないわよね？」

「あー、まあそうだけど」

彼女は「こうしちゃいられないわ」と眩くと、エバンスさんとダフネを引っ張る。

「二人とも！ ストーカーの正体が分かったわよ！」

「えっ!？」

「まさかとは思うけど」

島村さんと渋谷さんの二人も、こくりと小さく頷いた。

「佐久間まゆ——わたし達の先輩アイドルよ！」

幽霊の正体見たり枯れ尾花。いやはや、よく出来た言葉である。

「何よ、つまらないわ」

ハーミーがE・G・G・Sのプロジエクトルームで文句を漏らす。

「そうね、イケナイ恋の予感がしたのに」

ダフネはダフネで、のんびりとアイステイーを飲んでいた。

「で、でも、ストーリーカーの正体が分かって良かった、かな」

安堵したようにため息をついたのは、エバンスさんである。

「そもそも、ストーリーカーでも何でもなかったな」

俺と武内さんの不安は全くの無駄だったって事かよ。

ストーリーカーの正体は、E・G・G・S達の先輩アイドルである佐久間まゆだった。

……いや、ストーリーカーでもないか。彼女は、ただ単に自分の担当プロデューサーの誕生日を訊こうとしていただけだったのだ。少し控えめな彼女の性格が回りに回って、こんな騒動になっていたらしい。……とは言え、手紙で呼び出すか普通。それじゃ恋文と聞

違えられてもおかしくないぞ。

「さて、この話は終わり終わり。明日からはいつも通り——」

そんな時だった。不穏な視線を感じたのは。俺はすぐにスマホを取り出し、メッセー
ジアプリでダフネにメッセージを送る。

『視線を感じる』

メッセージを受け取ったダフネは訝しむような表情をした後、二人に画面を見せる。
……よく見たら、ドアが少しだけ開いている。しっかりと閉めたはずなのに。

『もしかしたらドアの向こうにいるかもしれない』

『分かったわ、捕まえてみる』

『ちよつと待て、危険だから』

俺の書き込みを無視して、三人は素早くドアを開いたかと思うと——。

「ぎゃん!?!」

——一人のアイドルを捕まえていた。

大西由里子。ファンの間でも、「アレな本を読むのが趣味」だと知られているようなア
イドルだ。アレな本とはつまり、男と男がすったもんだしているようなブツであり。

「ビジネスライクな男二人が、クールな掛け合いをしている姿……脳内変換ご馳走様で

した！」

やっぱりよく分からん。神崎さん語とは別の意味で、言っていることが理解出来ねえ。

「プロデューサーをストーリーカーしていたのはあなたなのね、大西さん」

「ハーミーが訊くと、大西さんは「いいえ！」と力強く否定した。

「私はただ、観察していただけですよ！ 若い男が、どんな男性とどんな会話をするのか……！」

話を通じてない気がする。E・G・G・Sの三人も、呆れて物が言えないらしい。

「えーと？ つまり、武内プロデューサーには佐久間さんが、プロデューサーには大西さんがストーリーカーしていたって事かしら」

「ストーリーカー!? 歪んだ愛、禁断の感情……！ そんな男がこの会社に？」

「終わったわよ、全て終わったのよ大西さん」

何なんだこの子は。それに男だと決めつけるな。

「そんなのけしから、許せません！ 観察、もとい監視、いや、見張りしないと！」

「あの、話を聞いてください！」

ぎざいぎざい騒ぐアイドル達を見て、思わず脱力してしまった。

「平和だな……」

…そう、
平和だったのだ。
この頃は、
まだ。

第36話 The Cinderella who

was taken off shoes

いつも通りの日だった。特に雨が降っているわけでもなく、極端に暑い訳でもなく。いわば、なんて事ない日だった。

ただ、一つだけ引つかかる。なぜ、エントランスにいる関係者は皆忙しく動いているのだろうか。ある者はダンボールの箱を抱えて。また別の者は携帯で通話しながら。

「あら、ハリエツト」

「ああ、うん、ハーミー、ダフネさん」

少し遅れて顔を出してきた二人に軽く挨拶をしながら、ハリエツトは首を傾げる。

「どうかしたの？ 気分悪いとか？」

「ハーマイオニーが彼女の顔を覗き込むが、「ううん」と首を横に振った。

「ううん、何でもないよ」

「嫌な予感がする」という、漫然とした不安を口にするぐらいしか出来ないのだから。

いつも通り地下のプロジェクトルームへと足を運ぶ。何だか、ドアの前が少しだけ賑

やかだ。

「……あ、はみはみ、フナちゃん、えっちゃん」

真つ先に気付いたのは、浮かない顔をしている本田だった。どういう事なのか、シンデレラプロジェクトの一同が揃いも揃ってドアの前で固まっていた。

「ちよつと、一体何なのよ未央さん。そんな所で集まって」

E. G. G. Sの三人は、珍しい光景に首を傾げながらもドアを解錠しようと歩み寄る。……鍵を開けようとしたその時、一枚の張り紙がドアに引っ付いているのが見えた。

「——何よ、これ」

ダフネがぼそりと呟く。張り紙には「E. G. G. S及びシンデレラプロジェクト・プロジェクトルーム」と書かれている。おかしい話だ。シンデレラプロジェクトのプロジェクトルームはこの地下一階よりもずっと上の、三〇階に位置していたはずだ。

「どういう事ですか、渋谷さん？ 三〇階のあの部屋は？」

ハリエツトが渋谷に訊くが、彼女は事態を飲み込めていないような様子で首を横に振った。

「分からない。ただ、部屋から家具が運び込まれてて」

……ドツキリの企画だろうか。しかし、それにしては不自然だ。わざわざこのよう

な、視聴者に伝わらない「テレビ的に地味な事」をするのだろうか。それに加え、シンデレラプロジェクトのアイドル全員が一樣に不安そうな表情をしている事もおかしい。諸星や渋谷はともかく、演技があまり得意そうではない赤城や島村でさえ浮かない顔をしているのだから。

「——皆さん、ここにいましたか!」

駆け寄ってきたのは、三人の人影だった。武内と城戸、それに千川である。

「……悪い、連絡が遅れた」

三人の大人の顔は、切羽詰まっているかのような真剣な顔だった。急いで来たのか、それぞれが肩で息をしている。

「プロデューサー、一体どうしたの!? プロジェクトルームは?」

本田が武内に訊く。彼は首筋に右手を当て、相変わらず低い声で彼女の質問に答えた。

「それが……。常務の方針で、アイドル事業は全てが白紙に戻されて」

彼の言葉に続いたのは、千川だ。

「事業の見直しを図るとの事で、一旦あの部屋はシンデレラプロジェクトの手を離れる事になりました」

——言葉が出なかった。それは、ハリエット以外の皆も同じだったらしい。

「白紙、って……。それじゃ、みく達はどうなるにや！ アスタリスクとしての仕事は、まだまだ残っているにや！」

「慌てないでくれ。今入っている仕事が急に無くなる事はない」

「でも進にーちゃん、どうなっちゃうの!? 莉嘉たち、バラバラになっちゃうの?」

「えー! みりあ、離れ離れになるのはやだー!」

「よもや、遙か天上の宣告により、我らが引き裂かれようとは……」

「プロデューサー、全てって事はE・G・G・Sも!? どういう事なのよ!」

「仮にシンデレラプロジェクトも入ると、あの部屋じゃ手狭になってしまいそうね……」
「プロデューサー、きらり達どうなっちゃうの?」

「落ち着いてください!」

声を荒らげて場を制したのは、普段静かな武内だった。物珍しいその光景に、地下一階の廊下はしんと静まり返った。思わず大きな声を出してしまった事に彼本人が動揺した様子を見せたが、すぐにいつもの仏頂面に戻った。

「……現在、私達で打開策を検討しています」

「他のプロデューサーやアイドル達にも声を掛けることにしている。いくら何でも、唐突が過ぎるからな」

城戸は頭を掻きながらため息をつく。

「——皆さん。私達を信じてください。絶対に、シンデレラプロジェクトを解体させるような事はさせません」

こくりと小さく、城戸と千川が頷いた。

「俺達は緊急で会議をする。それぞれ、レツスンや仕事に向かつてくれ。部屋が必要になつたら、今はE・G・G・Sに言うように。シンデレラプロジェクトの分の合鍵も、取り急ぎ準備する」

スーツ姿の男二人は、それだけ言い残すと慌てたように階段へと向かつていった。

「……それでは皆さん、お仕事頑張ってください」

千川は曇つた表情のまま一礼すると、二人の後を追つていった。

大変なことになってしまった。あの常務は、今の346アイドル事業部の状態を知らないのだろうか。確かに成長は少し遅いのだが、このままの伸び率をキープすれば来年には投資を上回る計算である。何も事業全てを白紙に戻して検討するほどに、取り返しの付かない窮地に陥っている訳ではないはずだ。

「武内さん、今回の会議には誰が？」

早歩きで会議室へと向かう武内さんに訊く。彼は苦虫を噛み潰したような顔で首を横に振りながら答える。

「現在、劍崎さんと五代さんには話を取り付けました。左さんは遅れて来るそうです。また、野上さんと操真さん、紅さんには後に議事録を送ります。つ、すみません。……葛葉さんも会議に顔を出すみたいです」

やはり、常務のやり方に違和感を持つプロデューサーは多いらしい。

「二人とも、ここにですよ」

千川さんに呼び止められ、危うく通り過ぎそうになった会議室の中へと入る。広めの会議室の中には、ぽつんと二人の男が席についていた。

「劍崎さん、五代さん。急な呼び出しに応じてもらい、ありがとうございます」

武内さんが二人に声を掛けると、彼らは神妙な面持ちで会釈を返した。

「困っているのは武内さんと城戸くんだけじゃない。うちのアイドル達にとっても大きな問題ですから」

五代さんがため息をつきながらぼやく。……確かに、彼の担当するセクシーギルティは、確実な人気を博しつつある。順調に進んでいる今、プロジェクトの凍結を言い渡されてしまったのはたまったものじゃない。

「……今日集まったのは、これからの為ですよ？ 他には、誰が来るんですか？」

「はい、左さんと葛葉さんが遅れて——」

武内さんが劍崎さんの質問に答えている途中、ドアが乱暴に開かれた。

「遅れた！ 武内、これからどうするつもりだ!？」

——葛葉さんか。

「まだ始めたばかりです。葛葉さん、これから話し合っついていきますので落ち着いて座ってください」

「——ああ、悪い」

息を切らした葛葉さんが椅子に座ったところで、武内さんは周りを見渡す。会議の始まりだ。

「現在、アイドル事業部の全プロジェクトが凍結、見直しを図られることになりました」
「理由に思い当たる節は？ いくらニューヨーク帰りで日本の芸能界がよく分からないとは言え、こんな事するのは無茶苦茶だ」

葛葉さんの言葉に、他のプロデューサーも一斉に頷く。視線は皆の前に立っている、武内さんに注がれた。——ニューヨーク帰りの常務がこの方針を打ち出す前によく話をしていたのは、この中では武内さんただ一人だ。彼女の切っ掛けについて、彼ならば何か掴んでいるのかもしれない。

「常務の方針発表の後、直ぐに問いました。彼女が何を考えているのか、何を行なうのか。……私が会議を開いたのも、それを皆さんと共有する為です」

会議室のプロデューサー達は、依然として押し黙っている。

「彼女は、実力主義のようです。資格があるものを大々的にプロデュースし、他を切り捨てるとの事でした。現在多角化しているアイドル事業部の売り込み方をやめ、346プロのブランドイメージを一本化すると」

……確かに、悪くはない話ではある。企業のブランドイメージを固め、それに集中する事は間違つてはいないやり方だろう。間違つてはいないのだが。

「——切り捨てるつてのは納得がいかねえつすね」

いつの間にか来ていた左さんが、カッコつけながら黒いハットをくいと動かす。……ここ室内なんですが。俺の次に若いプロデューサーだが、カッコつけようとする所は若干子供っぽい。

「左さん、来ていたんですね」

「後輩、どう思う？ オレは気に食わねーかな」

俺はキメ顔の彼に向かって頷く。ブランドイメージを固める為に、成長の見込みがあるアイドル達を切り捨てるのは何かズレている。

「俺も同じです。切り捨てられたアイドル達はどうしろつて言うんですか」

五代さんも「ああ」と首肯する。

「武内さん、勿論反対でしょう？ 貴方が一番、切り捨てられる痛みを分かっているはずです」

劍崎さんの言葉に、武内さんは顔を俯かせる。——そうか、以前彼はかつて担当していたアイドル達から離れる事となった。それはつまり、「以前のアイドル達に切り捨てられた」という事でもあるのだろう。

「はい。……私達は、彼女達に可能性を感じてプロデュースしています。例えば彼女が言う『資格』とは違っていても、それは変わりません」

会議室にいるプロデューサー達は、俺を含めて全員一斉に頷いた。

「それで、どうするんだ?」

葛葉さんが武内さんに訊く。

「常務が事業の再編を本格的に行なうのは来月からです。なるべく早い段階で私の方で対抗策を打ち出し、彼女に打診を試みます」

つまり、早くて今月末、仮に遅れたとしても来月上旬がタイムリミットか。もう時間がない。

「恐らく、皆さんの助力を求める形になるかと思えます。申し訳ありませんが、その際にはお力添え頂けると幸いです」

彼は頭を下げた。

「勿論ですよ、武内さん」

俺はそれだけ言うと、会議室の中を見渡す。返事こそなかったものの、他のプロ

デューサー達はこくりと頷いた。

「後輩も言つてたもんな。『プロデューサーは助け合い』、だろ？」

「えっ、左さん、夏フェスのアレ聞いていたんですか？」

「なかなかアツい言葉だったぜ？」

今こうして改めて言われると、なんか顔が熱くなるな。めつちや恥ずかしい事言つてんじやん俺。

「だつたら今がその時、だな！」

葛葉さんが気合いを入れるように握りこぶしを自らの手のひらに打ち込み、ぎらりと目を輝かせる。

「千川さん、武内さんのサポートをお願いします。……オレ達も、出来る限りの手助けはしていきます」

五代さんの言葉に、千川さんは頷いた。

「はい。精一杯サポートします」

「だつたら、自分も武内さんのサポートをします」

俺も続いて名乗りを上げる。

「自分と武内さんは、プロジェクトが違えど新人のアイドルを見ている事に変わりはありません。それに——」

「それに？」

目を丸くした武内さんの方をしっかりと見据える。

「……俺も、何かできる事をしたいですから」

彼がはつとした表情をした事を見届けると、他のプロデューサーの方を向く。彼らも腹を決めたようだ。

「分かりました。では城戸さん、お願いします」

剣崎さんに続いて、左さんと五代さん、葛葉さんも頷いた。

「城戸、武内。アイドル事業部を頼む」

ああ。やってやる。俺と武内さんだけじゃない。この戦いは、他のプロデューサーも付いているんだ。

第37話 The dance of Cinderellas

武内さんと一緒に一晩ほどで書き上げた、「常務への対抗策」となる企画書に目を通す。

「こんなものでしょうか」

アイドルの個性を前面に打ち出し、様々な企画とステージを取り行う。一言で言ってしまうえば、準備がものすごく大変なイベントではある。

「はい。城戸さん、追加で何か要望があるならば是非意見を言つて頂けたら」

「——いえ、問題はないです。ただ、決めなければいけないならイベント名ですかね」

画竜点睛を欠く。簡単に言つてしまえば、どんなに素晴らしいイベントの計画が出来たとしても、「チキチキ346アイドル博覧会」とかいう名前を付けてしまつては台無しなのである。……うーん、「チキチキ」は流石にないな。いや、「博覧会」なんて言い方も宜しくない。

「では……『シンデレラの卵の舞踏会』はどうでしょう」

武内さんがホワイトボードに書き込む。「舞踏会」か、成程。ロマンチックでいい響き

だ。しかし。

『シンデレラの卵』と言うのは？ 346のアイドルが全員出るとなれば、卵という言葉方には引っかけられますけど」

仮に高垣楓が出るとなれば、卵という言葉は相応しくないだろう。あの人は既にトップアイドルとして羽ばたいているしな。「あ、いえ」と武内さんは説明を続ける。

「企画者がシンデレラプロジェクトの私と、E. G. G. Sの城戸さんですので」

はあ、別にそんな所で気を使わなくてもいいのにな。

「語呂が悪いですから、『シンデレラの舞踏会』にしましょう。それに、武内さん——」
俺はパイプ椅子から立ち上がり、ホワイトボードにユニット名を書いていく。Candy Island、New generations、凸レーション、Eggs、Rosenburg、Engel、Love Laika、Asterisk。それぞれ大文字になっている所に丸印をつけ、凸レーションの近くには「D」とだけ書いて丸印を同じようにつけた。……相変わらず、偶然にしてはよく出来ているな。

「これで、シンデレラですよ」

ホワイトボードに「CINDERELLA」と書いた。わざわざ「卵」と付け加えなくてもいい。E. G. G. Sは、シンデレラに既に加わっているんだから。

「——っ！……そ、そうですね」

武内さんは初めて気付いたのか、慌てて仮題の「卵の」をクリーナーで消しとる。

「では、イベント名は『シンデレラの舞踏会』でよろしいですね」

「はい、すんなり決まって良かったです」

さて、こちらもちちらで準備を始めていかないと。

今西は武内の手から企画書を受け取ると、慌てる素振りも見せずのんびりと目を通し始めた。

「成程……君らしいね」

今西の言葉を受けて、彼は「はい」と落ち着いた様子で返事をした。

「城戸君もお疲れ様。とはいえ、まだまだこれからだけだね?」

「はい、承知しております!」

かたや城戸は、緊張した面持ちで答えた。今西は既に、武内に付いている事務員から話を聞いていた。「武内と城戸が、常務に企画を提案する事」、「所属アイドルを守り抜こうとしている事」を。

「私の方からも言っておくけどね。なるべく部下の話聞くようには。古い仲だから聞いて欲しいものだけだ」

今西は呟くように言いながら、部長の承認欄に丸い判を押しつける。欄内の捺印は、

寸分違わず真つ直ぐ押されていた。

「あの……部長」

「どうしたんだい城戸君」

「その、常務の事についてなんです……。以前から、このような調子だったのですか？」

うーむ、と今西は唸りながら白髪を搔く。

「彼女は昔から堅物ではあったね。堅物というか、猪突猛進というか。一度決めたら、なかなか曲げない子だ」

武内は今西から手渡された企画書を受け取りながら、城戸の言葉に続く。

「いえ、そうではなく……。私達が疑問に思っているのは、『順調な事業に思い切りメスを入れるような、勝負師であったのか』という事です」

びたり、と今西の動きが止まる。ああそうか、と彼はため息をついた。

「確かに、そうだね。思い切りがいい方ではあったけど、今回はちよつと行き過ぎかもしれない」

アイドル事業とは——言い方が悪いかもしれないが、水商売である。ファンの人気で成り立っており、おいそれとプロジェクトの再編を行なってしまうのは危険な賭けである。ファン一同はそれにより、冷や水をぶっかけられたような気持ちになってしまいか

ねないからだ。

今回はその所業を、346プロ所属アイドルのファン全員に行なうものと言つても過言ではない。一つでも噛み合わなかった場合——冷や水を掛けられたファン達のずぶ濡れの視線は、346を離れるかもしれない。

「常務にとつても、分の悪い大博打でしかないはずです。一体何が、彼女をつき動かしたと言うのですか」

城戸が半ば詰め寄るような形で今西に迫る。今西は、ばつが悪そうに苦笑する事しか出来なかつた。

「分からないんだ、それが。向こうで何があつたのか、彼女が何に触れて、何を思ったのか」

彼の予想に反し、城戸は「そう、ですか……」とあつさり引いた。仮に左だったならば、それでも何かを聞き出そうと食い下がっていたかもしれない。

「幸い、彼女は社内にいる筈だ。その企画書を持って行つてはどうかね」

部長の進言を受けて武内さんと一緒に常務の所へ向かう途中、これまた珍しい人物とすれ違つた。高垣楓——346プロアイドルのドル箱である。

「お疲れ様です、高垣さん」

俺が会釈すると、彼女はじつと俺達を睨んだ。……へ、何か悪かったかな俺。恐る恐る背後を見る。武内さんが微動だにせず、高垣さんを見ていた。

「っ、……」

我に返つたらしい武内さんは、まるで蛇に睨まれた蛙か何かのように、ぎこちない会釈をした。高垣さんは冷ややかな目で武内さんを見ていたが、ふいと視線を下ろすとそそくさと去つて行つてしまった。

「……何かあつたんですか？」

まるで喧嘩別れした元カツプルのようなピリピリとした空気に耐え切れる訳もなく、高垣さんの姿が見えなくなった途端につい訊いてしまった。

「……いえ、何でもありません」

彼の額には冷や汗が浮かんでいる。あまり追及するのも悪いか。ここに向かった目的とはかけ離れているし。——まあ、気になる事と言えば。

「彼女も、常務に呼ばれたという事でしょうか」

「……最近、常務は一部のアイドルやプロデューサーを呼びつけている。遂にその魔の手が、346プロを代表するような筆頭アイドルにまで及んだという事だろう。」

「……急ぐ必要がありますね」

「……はい、そうですね」

これ以上滅茶苦茶に掻き回される前に、一手でも打っておかないと。

常務の執務室は、シックな色合いで纏められている落ち着いた部屋だ。洋城を模した346のエントランスのイメージを崩さない、上品な内装。ただ一つケチを付けるならば、王族然としたエレガントな物は見受けられず、若干シンプルな調度品が整えられている所か。

「今西から連絡があつた。何やら、企画書を提出すると」

これまたシンプルなデザインの黒い革の椅子に座つた常務が、冷徹な眼光を俺達に浴びせる。びしつと着こなされたレディーススーツと相まって、威圧感が凄いな。

「はい。是非ともお目通し頂きたい企画が」

武内さんは、「シンデレラの舞踏会」についてまとめられた企画書を常務に手渡す。彼女は受け取るや否や破り捨てるような事はせず、丁寧に中身を吟味し始めた。

「アイドルの個性を活かし、彼女達の可能性——『パワー・オブ・スマイル』を引き出す成程」

常務は顔を上げて、武内さんと俺をまじまじと見る。

「私の方針とは一線を画すものだな」

武内さんの話では、選んだごく一部のアイドルにリソースを集中させ、346のブラ

ンドイメージを確立させるのが常務の方針である。武内さんと俺が提示してきたような、アイドルの個性を前面に押し出す——言い換えれば、「ブランドのイメージがブレる」この企画は、まさに正反対の位置にあると言ってもおかしくない。

「はい。私と城戸さんの二人で、企画の管理を行なう予定です」

「……ほう？ 君もか」

まるで値踏みするような常務の視線が、俺に突き刺さる。

「はい。武内さんと共同で立案致しました。運営管理もまた、自分達で責任を負うつもりです」

正直、この人にあまり目を付けられたくはなかったのだが、ここまで来たらやむを得ない。武内さんに助力する時点で、覚悟はしていた。俺と武内さんにヘイトを集中させ、他のプロデューサーがある程度自由に動けるようにする。この企画書を提出する、「二つ目の理由」だ。勿論、「一つ目の理由」は言う必要もないだろう。

「こちらとしては、企画の立案や遂行に反対する気はない」

常務の口から飛び出してきたのは、意外な言葉だった。……てつきり、強く反対されるなり妨害を示唆されるものだとばかり思っていたが。

「ただ、利益が見込めなかった場合。——その時は、分かっているだろうな？」

刺すような常務の視線が、より冷ややかなものになる。……成程、結局はそういう事

か。常務にとっての目的は「アイドル事業部の売上を伸ばす事」であり、「プロデューサーの邪魔をする事」ではない。「アイドル事業部の全プロジェクト解体」も、「346プロのブランドイメージ確立」も、あくまで手段であつて目的ではない、といった所か。「はい。承知しております」

武内さんが覚悟を決めたような眼差しで、常務の冷たい視線に立ち向かう。静かに交わつた視線の先で、バチバチと激しい火花が散つたように思えた。先に視線を外したのは、無然とした態度で鼻を鳴らした常務だつた。

「いいだろう。ならばその覚悟、見せてみる」

……何だかゲームのキャラクターみてーなこと言い出したぞこの人。——「プロデューサーの邪魔」が目的ではなく手段だと言うならば。あくまで「アイドル事業部の売上を伸ばす」という目的に固執しているのならば。ここで一つ、賭けに出てみるか。

「では、約束して欲しい事が一つあります」

俺が切り出すと、常務は「何だ」と冷たい視線を向けてきた。武内さんも俺が突如口を開いた事に驚いた様子だ。——まあ、今思いついた事だし。

「全プロジェクトの解体を、少しの間留保して頂きたいのです。少なくとも、この企画の結果が出るまでは」

「……メリットは？」

ぐつ、こえーなこの視線。だが、これこそ今思いついた「第三の目的」、ここでやつぱ辞めはなしだ。

「この企画——『シンデレラの舞踏会』の真髄は、ここに所属しているアイドルの個性を引き出す事にあります。言い換えてしまうと、既存のプロデュースによって見出された彼女達のポテンシャルが、直接収益に影響するイベントです。解体を今すぐ撤回しろ、とは言いません。ですが——」

息継ぎがてら、常務の顔を窺う。眉をぴくりとも動かさず、俺の話聞いてる。

「——ですが、プロジェクトの解体によって彼女達の個性が塗り潰された場合、我々がこの企画書に打ち立てた利益は見込めなくなる可能性があります」

俺がそこまで話し終えると、常務はぴくりと眉を釣り上げた。武内さんがはつと息を呑む。

「つまり——脅迫と捉えていいのか？」

うっ、怖え。確かにそう聞こえるかもしれないけどさあ。

「城戸さん——」

「ここは任せてください」

武内さんが止めようとして来るのを制す。ここまで言ってしまったからには、きつちりと最後まで伝えるべきだろう。

「いいえ。ただ一つ言えるのは——美城常務、我々も貴女と同じく、346プロダクシヨンの事を考えてこの企画を打ち立てた、という事です」

さて、切れる手札はある程度打った。どうだ。

「——良いだろう。未だ私に賛同できない者達には、具体例を以て分からせる必要があるだろうからな」

常務が、俺と武内さんをじろりと睨み付ける。

「そこまで言うならば、やって見せろ。邪魔立てはしない」

「っ、ありがとうございます」

「……あ、ありがとうございますー！」

よおし、第一関門突破だ。今日は祝杯だな。

第38話 The Cinderellas walk

barefoot

すっかり手狭になった、E. G. G. Sのプロジェクトルーム。まあ、シンデレラプロジェクトのメンバーも一齐に押しかけているから仕方ないか。

「大型のイベントを用意しました」

武内さんが話を切り出す。俺はホワイトボードに企画名を書き、アイドル達の方を見る。

「シンデレラの、舞踏会？」

エバンスさんが真っ先に反応した。

「はい。私と城戸さんで立案し、無事、承認されました」

「二応、全プロジェクトの解体は保留。突然バラバラになる事態もなくなつたと考えていっ」

はいはい、と元気よく手を上げたのは、莉嘉とみりあちやんだ。

「じゃあ、あの部屋も使えるの？」

「あー、いや……」

「ないのー?」

「……その、悪い」

結論から言ってしまうえば、駄目だった。あくまで俺が出した条件は「プロジェクト解体の保留」であり、「リソースの回復」ではない。つまり、あの部屋や家具は、未だに常務が握っていると考えていい。俺が返答に困っていると、本田さんが「ふっふっふ」と不敵な笑みを漏らす。

「今部屋がなくてもなんて事ないよ! 逆境から立ち上がるヒーローみたいでカッコいいじゃん!」

「ヒーロー」という言葉に目を輝かせたのは、神崎さんだ。

「英雄は、敵が強大であればこそ真価を発揮する……! 我等には相応しいものね」

「そうよ! 負けずに頑張っていけないと!」

「おっ、はみはみも気合い充分だね!」

気合いを入れるアイドル一同を尻目に、いまいち乗り切れていない人物が二人いるのに気付いた。渋谷さんとダフネだ。

「……どうかしたのか」

沈み込んでいる、という訳では無いのだが、何かを考え込んでいるような感じだ。

「プロデューサーさん。……ええ、そうね、言った方が楽になるかもしれないわね」

ダフネが渋谷さんに目配せする。視線を向けられた渋谷さんは、力なく頷いた。

「話しにくい事だったら、気持ちを整理してから言うのも手だと思うぜ。別に、俺は催促している気はないからな」

「気を使ってくれてありがとう、プロデューサーさん。でも、言うわ」

ダフネは俺に近付くと、小声で話し始めた。

「実は——『デュアルプリズム』の——カレンさんのCDデビューが無期限延期になつて」

「……ああ」

話は聞いている。今一番方針転換の煽りを受けているのが美嘉のいる部署で、そこに所属している新人の北条さんや神谷さんもまた割を食っているのだ。部署の中でも稼ぎ頭である美嘉の方針転換にバタバタしており、あの二人は二の次三の次、下手をするとな番下の優先順位で控えさせざるを得ない状況であると。

プロジェクトの解体は免れたが、「プロジェクトを解体しない方針転換の撤回」や、「未デビューのアイドルの早期デビュー」にまで交渉を持つていく事が出来なかった、俺のミスである。……くそ、詰めが甘かった。

しかし——この情報の速さはおそらく、本人から直接聞いたのだろう。

「あの二人、最近はその話ばかりしていたから。——なんと言うか、他人事じゃないよう

な気がして」

渋谷さんも小声で話に加わる。確かに、渋谷さんにとっては他人事ではない。一緒に登校しているぐらいの関係性ならば、彼女達を取り巻く状況に一喜一憂するのも無理はないだろう。昔からの顔馴染みであるダフネも、気が気でないのかもしれない。

「俺も野上さん——美嘉のプロデューサーにそれとなく聞いてみる。彼も常務の方針には乗り気じゃなかったからな」

「それでも従うのはやっぱり、逆らえないから？」

渋谷さんが訊いてくる。

「まあ、面と向かって喧嘩を吹っ掛けた俺と武内さんが特殊だからな。それが普通だよ。——とは言え、納得いかないプロデューサーの方が数は多い。俺達も何人かには協力を呼び掛けているし、具体的なプランも出来上がってきている」

真っ直ぐに二人を見つめ、安心させるために微笑みかける。

「だから、心配すんなよ。俺と武内さん、他のプロデューサー達で手を組んで、全アイドルを助け出すから」

「……ん」

「そこまで言われたら、ね」

不安の種が直接取り除けたわけではないが、ひとまず二人の不安が和らいだようだ。

考え込むような表情も収まった。

「ま、大船に乗ったような気でいてくれ……?」

何だか静かだな。周りを見渡す。全員の視線が一齐にこちらを向いているようだ。本田さんとハーミーは信じられないものを見るような目をしていた。

「……えっ? ホントにシロちゃん? 完全に別キャラじゃん!」

「何か悪いものでも食べたの、プロデューサー!」

「人が真面目に論しているのを見てソレか!? 開口一番がソレか!」

「あ、あわわ」と緒方さんが分かりやすく狼狽える。

「悪いものを食べた……!?! 大丈夫ですか!?!」

「食べてないから! 大丈夫だから!」

どうしてこう、カツコよくしまらねーかな!

彼女は資料を見ながら、ため息をつく。

「……城戸進ノ介、か」

社内の視察をしていた頃、同行させていた武内から数回ほど名前は聞いていた。プロデューサーとしても社会人としてもまだまだ新人、故に目をつけていた訳ではなかったのだが。

あの時の交渉。金魚のフンのように部屋の中に入っただけかと思いきや、「プロジェクトの解体を待て」と言ってきたのだ。あろう事か、アイドル事業部の売上の左右を人質にして。

「……警戒すべきは彼のみではなかった、という事か」

経歴を調べる。地元の高校を卒業し、そのまま有名私立大学に入学。卒業後すぐに346プロに広報として入社、その後プロデューサーとしての仕事に就く。彼の人生は、バックボーンが入り込む余地もないぐらいに平凡だ。つまり、「経営陣の一人に牙を向ける覚悟が備わるような、修羅場と呼べる人生の荒波を経験していない」。

順風満帆な人生を送っていたのならば、大多数の者は安牌を打っていく。いや、仮に順風満帆ではなくても、普通の思考回路を持っているのならば、安牌にすがって行く。武内の金魚のフンとしてついて行くだけならまだいい。「シンデレラの舞踏会」と称されたこの企画は、武内と彼の共同で立案をしたのだから。

しかし彼は、城戸は、敢えて危険な牌を自分から打ってきた。まるで大博打に挑む、勝負師のように。覚悟が決まっていたのか、或いは頭のネジが吹き飛んでいたのか。武内の手が入っていたのか？ いや、城戸が話を切り出した時の表情からすれば、それはないだろう。あれ程に顔を真っ青にした仏頂面の男など、彼女も初めて見た。

「まさか、従妹への想いで成したとでも？」

彼女は備考欄に記された、「城ヶ崎美嘉・城ヶ崎莉嘉の血縁者（従兄妹）」の一文を見ながら呟く。彼女一人の部屋では、誰もその質問に答えない。しんと張り詰めたような静寂が、再び室内を覆った。

「……どの道、城の威光は取り戻さなければならぬ」

城戸の事について記されたデータベースを閉じ、彼女はアイドルの資料に再び目を通し始めた。

彼らの企画が上手く行けば、346プロの売上は伸びる。そうでなければ、自らの正しさが証明される。彼女が狼狽える必要など、何処にもない。

左さんが送ってきた資料を確認しながら、俺は頷く。

「武内さん、これなら行けそうですね」

武内さんもまた、資料に目を通しながらこくりと小さく頷いた。

「はい。良い企画だと思います」

「シンデレラの舞踏会」があるとはいえ、その準備だけを粛々とすればいいというものでもない。アイドルの個性を売りにするならば、その事を広くアピールするべきである。一番手っ取り早い、確実な方法の一つが——テレビ番組である。まさかこんな形で、E・G・G・Sのテレビ番組デビューが決まるとは。

「十時さんも快諾してくれたようですから、後は諸星さん達ですね。——まあ、返事は分
かりきってますけど」

資料を流し読みしながら笑う。左さんの持ってきた企画——「とときら学園」の資料
に再び視線を落としながら、武内さんは「ですが」と口を挟む。

「——変化が欲しいです。レギュラーメンバーのローティーンだけではなく、他の年齢
層のアイドルもアピールが出来るような」

「……他の年齢層、ですか」

確かに、この企画では年長のアイドルがMCの——番組の設定としては先生役の——
十時さんと諸星さんぐらいであり、些か出演アイドルに偏りが見られる。コンセプトと
しては正しいのだが、武内さんの指摘通り、何らかの変化が必要だ。何より、個性豊か
なアイドルは子供ばかりではないのだから。左さんめ、自分の担当アイドルがそのぐら
いの子達だから、そっちにばかり意識が向いてしまったな。

高校生ぐらいまでのゲストなら、生徒役のレギュラーメンバーと同じ席に座らせる事
も無理矢理出来るのだが、川島さんのような人が並んでしまった場合——いささか、
シユールな絵面になってしまう。

「そうですね、他の年齢層——」

お？ いいアイディアが出てきた。

「任せてください。彼に伝えておきます」

「——教えて頂いても？」

グツドなアイデアを聞き出そうとする彼に向かって、俺はにいつと笑いかける。

「——その時のお楽しみ、って事で」

少し驚いたような表情を見せた武内さんは、ふっと柔らかい微笑を湛えた。

「分かりました。楽しみにしておきます」

彼の微笑に応えて頷くと、俺は左さんのプロジェクトルームへ駆け出した。

出来上がった写真を見て、ため息をつく。そこに映っていたのは、今までの仕事とはまた違う自分だった。シックな衣装に身を包み、整ったメイクを施され、カメラの方向に妖しげな流し目をする自分。

「……いい、出来だと、僕は思うよ」

プロデューサーが慎重に言葉を選ぶかのように、ゆっくりと言う。

「……アタシらしくない」

思わず本音が漏れ出てしまった。自らの発言にはつとして顔を上げると、プロデューサーは苦々しい表情で視線を下げていた。気まずい沈黙が二人の間に流れる。先に口を開いたのは、頭を下げたままのプロデューサーだった。

「……ごめん。分かっている。僕が、情けないばかりに」

「そ、そんな事ないって!」

経緯は予想がつく。常務の方針変更に従わざるを得ないのは、誰しもが同じだ。彼女は——美嘉は、憤りを感じていた。自分のプロデューサーではなく、あの常務に。彼女が、プロデューサーの仕事をねじ曲げた。彼女が、妹を窮地に追いやった。彼女が、二人の悲願を遠ざけた。彼女が——。

突如、プロデューサーの社用携帯が鳴り出す。

「……はい」

逡巡した様子の彼は、美嘉の前で呼び出しに応じた。

「……はい。え? そうなんですか? はい、はい。——ええ。はい、是非。とは言え、協力できる事は少ないですが。——はい、ありがとうございます。はい、では」

彼の顔は、みるみるうちに明るくなっていった。ぱあつと輝いた表情が、美嘉に向けられる。

「やったよ美嘉。今までの仕事も受けられるみたいだ」

「えっ? でも、こんな仕事が増えていくんじゃない?」

美嘉の質問に「そうだったんだけど」とプロデューサーが応える。

「武内さんと城戸さんの——君の従兄の交渉で、今すぐ方針を変える、という事がなく

なっただんだ」

「え——進兄が？」

ああ、とプロデューサーは頷く。

「でも、デュアルプリズムの二人についてはまだ不透明だ。……そこは本当にごめん」

「ううん、いいんだけど」

「けど？」

「……ごめん、何でもない」

胸の辺りで、何かがつつかえた様な感覚がした。特に、気にするような事ではないはずだ。あの従兄が常務に与した訳ではないし、その実、美嘉自身にとっても喜ばしい知らせであるはずなのだ。でも——。喉に引っかかった小骨のような心残りは、徐々に大きくなっていった。

「……はあ」

小さな、それこそプロデューサーも気付くことがないぐらいにささやかな、下手をすると自分でさえ気付けなかったかもしれないため息が不意に口を突いて出てきた。

「何やってんだろ、アタシ」

ほんの一瞬だけ、美嘉はこのスタジオで一人ぼっちになったような気がした。

第39話 The little—Cinderella
a s t a l k i n s t a d i o

企画の承認から撮影までは、まるで光のように早かった。何でも今西部長が裏で一枚も二枚も囁んでいるという噂なのだが、敵でなくて良かったと思う他ない。あの人が常務の側についていたら、つくづく詰んでたな。

今日は「ととくら学園」の初回收録、E. G. G. Sのテレビ番組デビューだ。……それは別にいい。彼女達の目標の一つではあったし、この番組が常務への反撃の一手になるし。ただ、予想外の問題が一つだけ。

「ねえ、プロデューサー。これ、どうなのかしら?」

訝しむような顔で訊いてきたのは、番組の衣装に身を包んだハーマーだった。

「まあ、違和感がないんじゃないか?」

「どういう事よ! わたしが子供だって言いたいもの!」

「違う違う! そんなつもりはなかったんだ、マジでスマン!」

予想外の問題——それは、「衣装が足りない」という事だった。余りのスピード採択により、出演するローティーンアイドル——莉嘉とか双葉ちゃんとかも紛れているのだが

——全員の分の衣装が用意できなかったのだ。急いで連絡をとった所、当初予定していたものの代わりに運び込まれたのが何を隠そう、スモックだった。

「スモック」と聞いて首を傾げたエバンスさんに、双葉ちゃんが「幼稚園児の制服だよ。ほらあの、水色のヤツ」と簡単な説明をしているのを、呆然と聞く事しか出来なかった。そのスモックの山は何でも他の番組の収録で使っていたものらしく、子供用の一〇センチ刻みサイズから大人用のSMLまで、幅広く取り揃えてあるらしい。いや何でだよ。何処でそれだけの数とレパトリーが必要だったんだよ。そもそもそんな事より——。

「左さん。これは、『学園』と言えるのでしょうか」

これじゃ「とときら幼稚園」じゃないか。どういう層にアピールするんだよこれ。下手すりゃ特殊なプレイじゃねえか。

「……ま、そこは二人の手腕に任せるさ」

相変わらず帽子をキザに被った左さんが、これまた保育士然とした淡いピンクのエプロンをしたMCを眺めながらふうとため息をつく。根本的な解決にもなつちやいねえ。武内さんもまた、がっくりと項垂れるのみだった。

——俺としては、鬼の形相をしている莉嘉が気がかりではあるのだが。

結局、数とレパートリーに負けて、スモックで撮影を行なう事になった。左さんはどうか分からないが、俺と武内さんは納得してないからな。

『皆ー！ 授業がはっじまるよー！』

軽やかなチャイムのSEに続いて、諸星さんのかけ声が上がる。

『皆さあん、席についてくださいねー？』

十時さんも続いた。——「十時」と「きらり」で「とときら」とは、左さんも考えたな。

『この番組では、ちよこつと疑問に思っちゃう事や、はびはびな事を皆で学んでいくにいい！』

『では号令をかけます！ 起立、礼！』

十時さんの号令に合わせて、スモックを着たアイドル集団が一カメに向かってお辞儀をした。諸星さんの説明にも少しあった通り、この番組は検証バラエティとなっている。スタジオで実際に実験を行ったりVTRを用意したりして、アイドルのリアクションを見せていく番組だ。

『そして、生徒の皆さんと一緒に学んでいくのは、この子達！』

諸星さんの台詞と共に、セットの中へエバンスさんとダフネが入ってきた。

『こんばんは、教育実習生のハリエツト・エバンスです！』

『同じく、ダフネ・グリーングラスよ。よろしくね?』

——俺が思いついたアイディア、それがこの「教育実習生」というシステムである。簡単に言ってしまうえば「ゲスト」なのだが、二〇代も半ばを過ぎたアイドルが生徒側でそれを導入するのは、流石に難しい。需要は兎も角。

そのような年齢の問題もあるし、今では豊富なスモックがあるから問題ではなくなつたが、衣装を一々用意するというのも煩雑である。

しかし、「教育実習生」というやり方ならば、ある程度は融通が利く。衣装もMCの二人が付いているようなエプロンを用意すればいいし、毎週変わったとしても不自然ではない。更には、成人したアイドルやスモックではミスマツチな雰囲気のアイドル、更にはアイドル以外の男性芸能人も自然に番組のゲストとして呼べる。「学校」という設定の枠組みを利用するに当たって、これほど最適なポジションはないだろう。……現在のスタジオの様相を見ると、完全に「幼稚園」なのだ。

「いやあ、改めて言うが、よく考えたな後輩。確かにこれなら、実質的な制限はない」
左さんが頷きながら感慨深そうに言った。

「はい。すっかり失念していました。左さん。今回と次回は試験的な導入として、城戸さんと私の担当アイドルが務めます。他のアイドルを呼ぶのは、三回目の収録からとなります」

「うつつ、よろしくお願ひします、武内さん！」

自分でもつくづく思うが、これは無茶苦茶いいアイディアだ。——というふうに関心の中で自画自賛していると、ADが見せてきたカンペをちらりと見た十時さんが、生徒側のアイドル達に向いた。

『では、今日は初めての授業なので、自己紹介をよろしくお願ひします！ 最初は……杏ちゃん！』

『えー、杏はラストにしてくんない？』

どうやら双葉ちゃんは、素の状態収録に臨む事にしたらしい。「アイドルの個性を前面に押し出す」という俺達のポリシーを、彼女なりに汲み取ってくれたのだろうか。

『もー杏ちゃん！ 年長さんなんだから、しっかりするの！』

『うへえ……』と観念したような声を上げながらも、双葉ちゃんはテキパキと自己紹介をした。勿論、寄ってきたカメラに向かって。テキストに見えてしつかりと仕事をこなす姿からは、既に貫禄が出ている。君まだデビューして間もないよね？

『じゃあー次は……ハーマイオニーちゃん！』

十時さんに指名されたハーミーは勝気な顔で立ち上がると、すつと移動したカメラに向かつて胸を張る。

『ハーマイオニー・グレンジャーよ！ ハーミーでいいわ！』

うんうん、変に緊張していないようだ。むしろ、カメラの外とはいえソワソワし出したエバンスさんが心配だな。……少なくとも、E・G・G・Sの中では。わざわざそのように付け加えたのには、依然としてむすつとしたままの莉嘉の存在がある。今は本番だし、収録に集中して欲しいんだけどな。

『はい！ 龍崎薫です！ よろしくお願いまーす！』

左さんの担当アイドルが、元気に自己紹介をした。うんうん、と左さんは満足気に頷く。

「左さんも大変ですよね。武内さん程ではないとは言え、大勢のアイドルを見ているんですから」

彼は「そうかあ？」と返事をしながら俺の方を向く。

「一つのユニットとして見てるから、意外と何とかなるぜ。武内さんみたいに、複数のユニットの管理はしたくねえけどな」

「はは、そうですか。ですが、小さな子達ばかりじゃないですか？ 本当、良くやるものですよ」

「ま、しっかりした子もいるからな」

そこまで言った左さんは、まるで項垂れるようにため息をついた。

「……どうしたんですか？」

急に分かりやすく落ち込まれると、正直扱いに困るんですけど。

「ああ、いや。……目をつけていた子が、常務に引き抜かれてな」

「……マジですか」

予想していたよりも深刻な話じゃん。

「年齢の割にはしつかりした子だから、上手いことセーブ役になると思ってたんだけどな。くそ、俺が甘かったぜ」

簡単に話を聞いてみると、僅かな差で常務のスカウトの方が先だったらしい。うむ、あの人が直々に新人をスカウトするとは。しかし、そういう事はつまり――。

「……はい。近々、何らかの形でユニットを発表するかと」

いつの間にか話を聞いていた武内さんが、俺と左さんの会話に加わってきた。少しだけびつくりして声を上げそうになったが、そこは我慢我慢。なんてったって本番中だぞ。

「やはり、そうとしか考えられませんね」

常務が言っていた「資格を持つアイドル」の具体例の一人として、左さんが目をつけていた子がスカウトされた。てつきり既に所属しているアイドルのみで引き抜きを行なうとばかり思っていた俺達は、完全に出し抜かれた形になってしまったようだ。

『最後はー、莉嘉ちゃん！』

プロデューサー同士で話し込んでいる間でも、番組はきっちり進行していたらしい。自己紹介の手番は、不機嫌な様子の莉嘉へと渡った。頼むから、きっちり仕事してくれよ——。

『じよ……城ヶ崎、莉嘉、です……』

俺の思いはある程度届いたらしく、莉嘉は引きつった笑顔で、消え入りそうな声で自己紹介をした。番組ディレクターが不満タラタラに「カット」と声を張り上げる。

「莉嘉ちゃん、もつと元気よく出来るかな？」

莉嘉にしては珍しく、元気がない。——とは言え、理由は何となく分かるのだが。

「は、はい」

再びカメラの前で、莉嘉が自己紹介する。

『じよ、城ヶ崎莉嘉、です……。よ、よろしく』

……こりやいかな。さつきとあまり代わり映えしない。このままじゃ、全カトトされちまう。

『んもー！ 莉嘉ちゃん、緊張しちやつた？』

すかさず諸星さんが助け舟を出した。彼女の意図を察したらしい十時さんもそれに応じる。

『初めての授業ですから、緊張しちゃうのは仕方ないですねえ。緊張しちやつてる人ー

？」

十時さんが生徒側に呼びかけながら右手を上げると、生徒側のほとんどが元気よく手を挙げた。手を挙げたアイドルの中には、ゲストのエバンスさんも混じっている。

『エバンスさんも緊張しちやつてるんですねー。確か、E. G. G. Sはテレビ出演が初めてとか』

『はっ、はい！』と急にカメラを向けられたエバンスさんは、ガチガチに緊張した様子で答える。

『がっ、頑張りまふ！』

『囁んじゃってるじゃないハリエツト！』

生徒側のアイドルが朗らかに笑う。——しかし、莉嘉の笑顔はやはりぎこちないものだった。

休憩に入った後、武内さんは莉嘉を呼び出していた。何故か、俺と一緒に。

「……撮影に集中出来ていない様子でした。」

武内さんがそう話を切り出すと、莉嘉はむすつとした顔を俺達から逸らす。

「その、私に話しくい事でしたら、城戸さんでもよろしいので」

ああ、だから俺もか。確かに、身内になら話せる事もあるかもしれない。むすりとし

た顔の莉嘉は、俺の顔を窺う。

「……進にーちゃん、怒らない?」

何だか懐かしいな、そのやり取り。

「分かった分かった。言ってみろ」

原因が有耶無耶のまま放ったらかしてしまふよりは、話を聞いてやった方がいいに決まっている。もしもじとしている莉嘉に耳を貸してやる。

「その……これじゃクラスメートの男子に馬鹿にされちゃうと思つて……」

「……あー」

確かに、年齢的にはその心配をしようかもしれない。莉嘉は多感な一四歳、クラスメートも同じ年齢である。少しでも莉嘉が気になる男子達にとつてみたら、幼稚園児よろしくスモックを着たクラスメートなど、格好の話題になるだろう。中二の男子なんて、下手すりゃ小学生とおなじだからな。

「城戸さん」

答えをせがむ武内さんを少し待たせて、莉嘉に耳打ちする。

「そこら辺はほら、他の女子達にフォロワーしてもらえばいいじゃないか。仲が悪い訳じゃないんだろ?」

そういう時の女子は強い。ちらほら女友達と遊ぶ事もある莉嘉ならば、孤立無援つて

事もないと思うんだが。

「その……」

莉嘉は覚悟を決めたような顔を見ると、再び俺に言った。

「その、皆に『お姉ちゃんみたいにセクシーに映る』って言っちゃって……」

「……ええ？」

いやいやいや、どう考えても無理だろそれ！ 番組名知ってただろ!? 「とときら学園」の生徒側として出演で、セクシーってどうやりやいいんだよ！ スモックになる前の衣装ですら、どうすりやいいか分かんねえんだけど！

「進にーちゃん、怒った？」

不安げに訊いてくる莉嘉に、俺は首を横に振る。

「いいや、呆れた」

こりや、どうするべきなのやら。

第40話 The distress of Cinderella

「スモックが子供っぽい」という莉嘉のクレームを何とか押さえつけ、今回の収録は終わった。相変わらずカメラの外ではむすつとした莉嘉だったが、「美嘉だったらそれでもキツチリ仕事はこなすぞ」という俺の言葉を飲み込んだのだろう、ぎこちないながらもダメ出しを食らうような事はなかった。撮影スタッフはオープニングトークで諸星さんが言った、「緊張している」という話を信じたのだろう。——ホント、頭が下がる思いである。

「諸星さん、ありがとうございます。アイツが迷惑をかけてしまつて」

撮影が終わり、十時さんと世間話をしていた諸星さんに声をかける。にっこりと人懐っこい笑みを浮かべている彼女は、まるで小動物のように首を傾げる。

「んゆ?」

「……ありや、ホントに緊張してると思つてたのか」

十時さんも俺の感謝の意味が分からなかつたらしく、首を傾げた。

「えっと、何かあつたんですかあ?」

「ああ、実は——」

MC二人に、莉嘉が撮影に集中出来ていなかった理由を話す。……言いふらすのもアレかもしれないが、一応二人は心配りの出来る番組MCである。この際、問題は共有しておくべきだろう。話を聞き終えた二人はそれぞれ、「へえく……」だの「そんな事があつたんですねー」だの、深刻そうな表情を見せる。

「莉嘉ちゃんにとつては、すつこい問題だに——」

「何とかしてあげたいですけどねえ」

まあ結局、本人が腹を決めるしかないのが大きな問題なのだが。

「それで、お兄さんはどうするんですかあ？」

十時さんの質問に「ううん」と首を横に振る。

「取り敢えず、美嘉に相談してみるように言つといた。スモックでセクシーに見せるだのなんだのなんて、俺には想像が付かないからな」

その分野に関して言えば、モデルとしてのノウハウも持ち合わせる美嘉に助言して貰う方が良いだろう。

「うんうん！ 餅は餅屋！」

諸星さんがそんな事を言いながら手を叩いた。

「ま、次の収録に間に合うように祈るしか出来ないな」

頼むよ美嘉。「とときら学園」はお前の手にかかっているぞ。

勿論、テレビ収録だけがE・G・G・Sの仕事ではない。三人のソロ曲に向けたレッスンも、大きな仕事の一つである。……とは言え、俺は会議や打ち合わせもあるので顔を出せないのだが。最近は三人も夜遅くまでレッスンをする事が多くなり、本当に申し訳ない気持ちで一杯である。三人とも、「今踏ん張らないといけないから」と口を揃えて言ってくれるのには感謝してもしきれない。

さて、一服がてら缶コーヒーを一つ買って地下のプロジェクトルームに戻ると、珍しい人物が一人、部屋の中のソファーに座っていた。前川さんである。重い表情と頭のネコ耳が凄いアンバランスだ。

「……あ、城戸チャン、今いい?」

久々に見る彼女の神妙な顔つきに俺は「お、おう」と答えながら、彼女の向かい側のソファーに座る。

「……」

前川さんは押し黙っており、掛け時計の針が進む音が部屋に響く。

「その、ありがとう」

「……………ん?」

一体なんの事だろうか。感謝される様な事は……ぶっちゃけてしまえば数えるくらいにはあるが、それも他のプロデューサーがいての事だし、こう面と向かって前川さんに言われるような事は思い当たらない。

「その、プロジェクト解体を後伸ばしにしてくれた事にや」

「ああ、それか」

危ない綱渡りだった。しかし、解体がチラついた状態でバラエティなんかやらせても、上手いこといかない事は目に見えていたからな。現時点ではそちらの方の収益も無視できないからこそ、常務はその条件を呑んでくれたようなものだし。

『シンデレラの舞踏会』をするに当たって、アイドルの個性を伸ばしたいからな。『餅は餅屋』って訳でもないけど、やっぱり担当していたプロデューサーが一番担当アイドルの事をよく分かっていると思うし——」

「そうなんだけど」

前川さんは俺の発言を止め、真っ直ぐに目を見た。

「そうかもしれないけど、——それで救われたアイドルもいるから」

「……救われたアイドル？」

うん、と前川さんは頷くと話し出した。ウサミン星出身のとあるアイドルが——正直そのプロフィールでバレバレなのだが——救われた事。意地でも自分のキャラを貫き

通そうとしていたその姿に感銘を受けた事。

「成程ね、安部さんにそんな事が」

確かに考えるべくもなく、「ウサミン星出身の永遠の一七歳アイドル」なんてもの、常務が気に入るはずもないだろうしな。コッテコテのバラエティ向きのキャラ付けである。

「みくも……。みくも、そんな風にネコ耳を外さなきゃいけなかったかもしれないって思ったら」

確かに、頭に動物の耳を模した被り物をしているという点でいえば、共通しているな。……勿論、高い実力を持っているという点でも共通しているけど。

「でも、プロジェクトの解体はもう少し見送りになるって話になった。……Pちゃんに訊いたら、城戸ちゃんの頑張りがあつたって」

あの人、交渉の直後に珍しく説教してきたけどな。まあ確かに、なんの打ち合わせもなしに勝負に出た俺が悪いんだけど。

「だから、菜々ちゃんを救ったのも、みく達のキャラクターを捨てずに済んだのも、全部城戸ちゃんのお陰にゃ」

「……そっか。それなら良かった」

おそらくそうならなかったとしても、安部さんは自分のキャラを捨てまいと奮闘して

いたかもしれない。それこそが、「彼女が彼女である所以」であるのだから。何だか、こ
う表現するしかないようにも思える。

「前川さん、安部さんってなかなかロックだよな」

前川さんはさっと睨み付けるような表情に切り替わると、不機嫌そうな声を上げた。

「どっこがにゃ」

……え、結構ロックじゃない？

昨日のテレビ出演に関するインタビューを最後に、今日の主だった仕事は終わりであ
る。

「仕事が増えてきたわね」

ハーマイオニーが感慨深そうに言う。ダフネはくすくすと笑いながら首肯した。

「ええ。急に仕事が増えるんだもの、驚いちゃう」

夏フェスを皮切りに、E・G・G・Sも忙しくなった。CMの撮影もしたし、雑誌の
取材も着実に増えている。テレビ出演も「ときら学園」を始めとして順次決まりつつ
あるとの事だった。最近なかなか城戸と話が出来ないのは、ハリエツトにとつては寂し
い気持ちもあるのだが。とは言え、彼はこの会社のアイドルを全員救うために奮闘して
いるのだ。……自らの実力も伸ばさないといけない。

「二人はどうするの？　ぼくは、ちよつと自主レッスンをしようかなって思ってるんだけど」

ハリエツトの提案に、ハーマイオニーとダフネは頷く。

「ええ、あたしもするわ」

「わたしも。振り付けで、どうしても確認したい事があるの」

「うん、手伝うよ、ハーミー」

「お願いするわ。ボーカルレッスンなら、わたしも力になれると思う」

とは言え、レッスンスルームは軒並み他のアイドルが使っている状況だ。最近見慣れないプロジェクト名も増えた事もあり、彼女にとっては少しだけ気が引けた。

「その前に、少しだけ休憩しない？」

ダフネがそう言いながら、中庭の方を向く。ストーカー騒動で訪れはしたものの、結局はそれつきりだった。……あくまで次に行なうのは自主レッスンなので、羽休めをしたとしても誰かに咎められる事はないだろう。

「そうだね。少しだけ休憩しよう」

噴水が中央に位置するような、凝った造りの中庭に躍り出る。——先客に気付かなかったのは、噴水の陰になっていたからだろうか。

「……あれ、莉嘉じゃない？」

ハーマイオニーが先客に気付き、声を出す。金髪のツーサイドアップが目立つその少女は、城戸の従妹である莉嘉だった。元氣ハツラツといった何時もの様子はなりを潜め、落ち込んでいるようだ。

「莉嘉ちゃん！ どうしたの？」

痛々しいその表情を、ハリエツトは無視出来なかつた。二人も同じだったらしく、神妙な面持ちで彼女の元に歩み寄つた。

「あ……みんな」

莉嘉は三人に気付くと、今にも泣きそうに顔を歪めた。

「ちよつ、ちよつと！ どうしたのよ！」

「ハーミー、何かしたのかしら？」

「そんな訳ないじゃない！」

「莉嘉ちゃん！ 落ち着いて！ 悩みがあるなら聞くから！」

ぐずぐずと泣く莉嘉をハリエツトは宥める。嗚咽混じりでありながらも、莉嘉は徐々に落ち着いたようだ。

「それで、どうしたのかしら。あなたが泣くつて事は、ただ事じゃないと思うのだけど」

ハーマイオニーが訊くと、莉嘉は「うん」と力なく頷いた。

「おねーちゃんと……喧嘩しちゃって……」

「…………え？」

余りにも素つ頓狂な声が、ハリエツトとハーマイオニーの口から漏れ出た。

「どうしよう、嫌われちゃった…………！」

そこまで言うのと、彼女は再びポロポロと涙を零し始める。

「ああつ、ちよつと、落ち着いて莉嘉ちゃん！」

「泣かないの！ ダフネも手伝いなさいよ！」

パニックになってしている二人を尻目に、ダフネは何かを考え込む。

「リカ、取り敢えず話を聞かせてもらえるかしら？」

それはまるで、赤ん坊をあやす母親のような優しい声だった。

泣き止んだ莉嘉の両脇にハリエツトとハーマイオニーが座り、ダフネは彼女の前で腰を下ろして視線を合わせる。

「それで、何があつたの？ 喧嘩したって話だけど」

視線を落とした莉嘉は、「うん」と小さく返事をする。

「その、昨日、『スモックでセクシーに見せる方法』をおねーちゃんに訊いたら、『そんなの自分で考えなさい』って言われて。『どうしたらいいか分からない』って言ったら、『アタシもどうしたらいいか分からない』っておねえちゃんが怒って」

「スモック?」

ハリエツトが訊くと、ハーマイオニーが「ああ!」と思いがたつたように声を出す。
「昨日の収録の事ね! とときら学園!」

確かに、リカはあんまり乗り気じゃなかったものね」

ダフネの言葉に、莉嘉は「うん」と答えた。きらりのフォローもありハリエツトには
「緊張している」だけに見えたのだが、どうやらそういう訳でもなかったらしい。

「おねーちゃん……美嘉さんに訊いたのはどうして?」

ハーマイオニーが訊く。

「進にーちゃんが、スタジオでの見せ方はおねえちゃんに聞いた方がいいって」

「プロデューサーが……」

確かに、見せ方のノウハウで言うのなら、モデルとしての経験がある美嘉に聞くの
は理にかなっている。莉嘉が目指している方向性は、正に自身の姉と同じなのだから。

「そこで、言い合いになっちゃったんだね」

ハリエツトの言葉に、莉嘉は頷いた。

「意外ね。城ヶ崎姉妹は凄いい仲良しだから、喧嘩しないものだと思ってたのに」

ハーマイオニーがそう呟くと、ダフネが「いいえ」と釘を刺した。

「そうでもないわよ? 喧嘩するほど仲がいいって言うじゃない? むしろ、あたしは

アストリアと仲良くできているのか、すごく不安になっちゃう時があるもの」

「そうなの？ 結構仲良く見えたけど」

「そんなことないわエバンスさん。……知らず知らずのうちに距離を作っちゃってるから」

ダフネはそう言うと、遠くを見るような目で莉嘉を見つめた。

「だからね、リカ。ちよつと羨ましいわ。そんな風に気兼ねなく言い合いが出来るお姉さんがいるのは」

「……そう、なのかな」

未だに自信のなさそうな莉嘉の声が、噴水の音に掻き消えた。

第41話 Cinderella—sister hold hands again

「莉嘉がレッスンに顔を出していない!」

俺が打ち合わせの後に武内さんから聞いたのは、そのような話だった。

「はい。社内で見かけた人はいるらしいのですが、どうやらレッスンを無断欠席しているようで」

武内さんも困っているらしく、首筋に手を添えている。

「城戸さん。心当たりはありますか?」

「心当たりですか? 昨日はととくら学園の収録でしたよね? 確か——」

くそ、まづった。

「……俺の責任です。俺があんな事を言わなければ」

一呼吸置いて考えりや気付けるような問題じゃないか! 俺のミスだ!

「城戸さん、一体何を——」

「美嘉に……美嘉にアドバイスを貰うよう、助言したんです」

よりにもよって、今一番フラストレーションが高まっているアイツに押し付けてし

まった。何らかの衝突があつたのだろう。こうしちやいられない。早く探さないと。

すぐ様駆け出そうとした俺を、武内さんは「待つてください」と引き止めた。

「城戸さん、落ち着いてください。まだ会議が残っていますから」

「ですが——」

「現在、諸星さんと赤城さんが探しています。……心配しないで下さい。彼女達なら、きつと見つけ出します」

「——分かりました」

はやる気持ちを何とか抑え、髪をくしゃくしゃと乱雑に搔く。

「頼んだ、二人とも」

今俺に出来るのは、奔走している二人に祈る事だけだ。

「ダフネの「距離を置いている」という発言に、ハリエツトは少なからず衝撃を受けた。彼女には兄弟や姉妹がないので——親の祖国であるイギリスには、工場勤務の従兄がいるのだが——、本当の兄弟がどのようなものかはよく分からない。しかし、先日見たダフネとアストリアのそれは、まるで打ち解けているような感じに見えた。」

「プロデューサーが原因なら、文句の一つでも言つてやるべきよ！ 未央さんの時みたいに、何とかなるかもしれないし」

ハーマイオニーの意見に、ダフネは首を横に振った。

「ダメよハーミー。プロデューサーさんも今は忙しいもの。……今更言うのも都合がいいかもしれないけど、あの人に全部押し付けちゃうのはダメだと思おうわ」

それに、とダフネは言葉が続ける。

「姉妹喧嘩なんだから、ちゃんとリカと城ヶ崎美嘉が自分で解決しないとイケないわ」

ぐぬう、とハーマイオニーは言葉に詰まる。確かにその通りなのかもしれない、とハリエツトは心の奥底で思い直した。——いつも城戸に助けられているのだ、今回ばかりは自分達が城戸を助けないと。

「……うん。分かつてる。でも、今まで進にーちゃんが助けてくれてたから」

莉嘉はぼつりと言った。……彼のお節介は、今に始まったことではないらしい。むしろ、今までの延長線上に、シンデレラプロジェクトへの助力があつたのだろう。

「これからは、自分達で仲直りする事。いいわね？」

「うん。約束する」

でも、とハーマイオニーが口を挟む。

「結局、『スモックでセクシーに見せる方法』なんてあるのかしら」

そもそもの発端は、莉嘉がそれを美嘉に訊いた事で起こった問題なのである。何らかの形でその方法を見つけ出さないと、仲直り以前に番組の危機である。

「エバンスさんはどう？ 何かあるかしら？」

ダフネに話を振られたハリエツトは、狼狽してしまふ。

「えっ?! ええつと!?! —— 分かんない、かな、ぼくも」

テレビ番組に出演するのは初めての事だったので、そこにまで気を配る余裕がなかった。そもそも、莉嘉がそのような悩みを持っていたことにさえ今まで気付かなかったのだ。

「ダフネ、そういうのはあなたが得意でしょ？ まず、自分の意見を言うべきだわ」

ハーマイオニーの言葉に、ダフネはため息をついた。

「思いつかなかったから、エバンスさんに訊いたのよ」

「思いつかなかったのね……」

「ハーミーは？ スモックを着ていたなら、何かアドバイス出来ると思うけど」

「無茶言わないでほしいわハリエツト。わたしなんて、プロデューサーに馬鹿にされた事ぐらいしか覚えていないんだから」

「え!?! 進にーちゃんが!?!」

莉嘉が意外だとしても言うかのように驚く。しばし考え込んだハーマイオニーは、「うーん」と唸りながら続けた。

「……いえ、『悪気はなかった』とか『本当にすまない』とか言っていたから、馬鹿にす

るつもりはなかったと思うけど」

「じゃあ、進にーちゃんもわざと言った訳じゃないんだね？」

「——そうね。……だとしても、わたしとしては納得出来ないけど」

ハーマイオニーはじろりとダフネを睨む。確かに、ハーマイオニーと学年が一つしか違わないダフネは、生徒側で出演せず教育実習生として出演した。アイドルの割り振りは別のスタッフが行なっているとの話だったが、それに納得していないのだろう。

その時、ダフネが「あら？」と何かに気付いたような声を出し、遠くを見る。つられてダフネの視線の先を見ると、そこには背の高い少女がいた。——間違いない、きらりだ。

「キラリさんね」

近付いてきた彼女は莉嘉に気付くと、「莉嘉ちゃん、ここにいたんだね」と優しく声をかけた。

「レッスンに出ないなんて、どうしたの？」

莉嘉はきらりの質問にただ、気まずそうに視線を下げて黙るのみだった。

「スモックが嫌？」

彼女の核心を突いた発言に、莉嘉のみならずE・G・G・Sの三人も驚いてきらりの顔を見る。依然として、きらりの顔はにこにこ満面の笑みだった。

「そういうのじゃなくて……おねえちゃんと喧嘩して……」

「ふふつ、大丈夫だよ莉嘉ちゃん。美嘉ちゃんも、喧嘩したくて喧嘩した訳じゃないから」

きらりはあやすかのように莉嘉の頭を撫でる。その姿は姉妹と言うよりかは、まるで親子のように思えた。

内心ハラハラしながら会議を終え、地下のプロジェクトルームへと急ぐ。ドアの前には、E・G・G・Sの三人がいた。

「良かった、三人とも、莉嘉が——」

俺がそこまで言うのと、ダフネが人差し指を口に当て、僅かに開いているドアの向こうを指差す。部屋の中には、莉嘉と諸星さんがいた。

「これは……。そういう事か」

俺が胸を撫で下ろすと、三人はこくりと小さく頷いた。武内さんの言っていた通り、凸レーションの他のメンバーが探し当ててくれたようだ。

「プロデューサー、諸星さんには言っていたんですね」

エバンズさんが小声で話しかけてくる。

「ああ、まあな。番組のMCだし、何かあったら共有しておくべきだと思ってな」

ハーミーが大きくわざとらしいため息をつく。

「出来れば、わたし達にも話しておいて欲しかったわ」

「悪いな。ここまで大きな問題になるとは思っていなくて」

結局の所、俺のミスが発端である。しっかりと反省しなきゃな。

「しかし、どうしたもんかな」

あいにく、デスクワークをしようにも資料は部屋の中だ。相談事をしている、二人の空気を邪魔したくはない。

「だったら、久々にあたし達のレッスンをみるのはいかがかしら。自主レッスンだけど」

ダフネの提案に乗る事にしようか。

「——そうだな。最近忙しかったし、久々に見るとするか」

ここは、きらりお姉さんに任せる事にしよう。

夕暮れの中庭には、誰一人いなかった。ただ穏やかに、中央の噴水が水の音を囁くぐらいである。

「はあ……」

中庭のベンチにこうして腰を下ろすのは、いつ以来だろうか。346に所属して当初は、レッスンの合間に何かと通っていた気がする。アイドルとして忙しくなつて来た頃

からだろうか。こうして噴水の音に耳を澄ませるのは、長い間なかったように思えた。「何やってんだろ、アタシ」

昨日の喧嘩を引きずってしまい、満足のいくような仕事が出来なかった。そういえば、小さい頃はこうして喧嘩した時、進兄がいたつけ。泣きじやくるアタシ達に手を焼きながらも、結局は仲直りの切っ掛けを作ってくれたつけ。

「……結局、進兄頼りってコトか」

自嘲気味な笑いが、ため息と共に漏れ出た。シンデレラプロジェクトの事にしても、アイドル事業部の事にしても、結局はあの従兄の助力があつてどうにかなつた。対して自分は——自分は、どうしようもないことでイライラしてしまつて、何も知らずに頼つてきた妹にぶつけてしまった。

「これじゃ、姉失格かな……」

こんな時、仮にあの従兄なら何と言うだろうか。「んな事どうでもいいからさつさと仲直りしろ」と尻を叩くだろうか。それとも、「知るかよ」と突き放すだろうか。——後者はないかもしれないが、そう言われそうな気がしてならなかった。

「……あ、美嘉ちゃん」

ふと声をかけられて、後ろを振り向く。幼い声の正体は、みりあだった。

「……ん、みりあちゃん」

美嘉の元に駆け寄ったみりあは、そのまま美嘉の隣に腰を下ろす。

「……アタシさ、姉妹喧嘩の仲直りが下手なんだ」

まるで懺悔をするかのように。美嘉は、妹よりも歳下の少女に零した。

「仲直りが？ どうして？」

みりあは美嘉の顔を覗き込み、純粋な眼差しを向ける。

「そういうの、進兄に頼ってきたから。今までずっと、頼りきりだったんだ」

「情けないよね」という言葉が口を突いて出てきてしまい、力なく笑いかける。

「アタシがお姉ちゃんなのに、ホント、情けないよね」

ううん、とみりあは首を横に振る。

「お姉ちゃん是我慢しないといけないからね。みりあも分かるよ」

「……そっか」

そういえば、莉嘉が言っていたような気がする。みりあに、妹が出来たと。

「アタシも、お姉ちゃんだし我慢しないと、だね」

分かつてはいるのだ。「莉嘉の姉」であるという事以前に、自分は「城ヶ崎美嘉」である。アイドルとして、与えられた仕事はしっかりと我慢してこなしていけないと――。

「……あれ」

頬を、生暖かい雫が伝った。拭っても拭っても、目尻から溢れ出てくる。

「アハハ、何で泣いてんだらうね、アタシ」

思えば、歳下の少女に投げかける質問としては、かなり情けないものだったかもしれない。しかし、それでもみりあは、嘲笑うような事はしなかった。優しく微笑むと、美嘉の頭をそつと抱き寄せる。

「うんうん、お姉ちゃんにも泣きたい時はあるよね」

冷静に考えたならば、それは質問の答えになっていないのだろう。それでも——そうだったとしても、美嘉は、心のどこかで、「許された」ような実感が湧いた。

——そうだ。アタシは今、泣いてもいいんだ。

夕日のさす中庭に、すすり泣く声が響いた。

「——そうか、仲直りしたのか」

美嘉は電話越しに『うん』と頷いた。

『ゴメン。進兄はそんなつもりじゃなかったはずなのに』

「いや、気にしないでくれよ。元はと言えば、俺のミスだから」

美嘉の方針転換を止めることが出来なかったのも、莉嘉をけしかけてしまったのも、俺の責任なんだから。

『ま、今回はそういう事にしておくよ』

「ああ。……それで、莉嘉にはアトバイスしたのか？」

『そう、それ!』と美嘉は思い出したかのように息巻く。

『いくらアタシでも、そんなの思いつかないって!』

「えー……マジ？」

『マジマジ! スモックでセクシーに見せるなんて、正直滅茶苦茶だよ!』

うーん……だったらどうしようか。

『でも……でも、一緒に考える事にしたよ。すぐに思いつかないかもしれないけど、ここ

はアタシに任せて』

「……そうか」

別に焦る必要はない。きつと、いいアイディアが浮かぶだろうから。

「だったら頼んだぜ、美嘉お姉ちゃん」

『はは、進兄がそれ言うときモいね。それじゃ』

通話が切れた。——キモいはないだろキモいは。進兄さん傷付くぞ。

「つと」

再びスマホが鳴る。相手は莉嘉のようだ。

「——さつき聞いたんだけどな」

まあいいか。プロデューサーではなく、「進にーちゃん」として、話を聞いてやるとす

るか。

第42話 The Cinderella's
clock is moving quietly

ぼんやりとした多田さんが、俺に訊いてくる。

「ロックつて、何なんだろうね……」

知るかよ。そもそも君、プレゼン騒動の時に言つてたじゃないか。ロックだと思えばロックだつて。

「なあ、何か知らないか皆」

たまたらず、プロジェクトルームにいた他の子に訊く。

「……何かあつたんでしようかね？」

たまたま居合わせた島村さんが、苦笑いしながら俺に訊いてくる。

「最近、調子が良くないような気がしますね。いつも『解散だー』つて言っているぐらいには元気があるのに」

新田さんが首を傾げながら言う。隣に座っていたアナスタシアさんも「ダー」と頷いた。——いやいやいやいや、まだそんな事言つたのかアスタリスクの二人。てつきり上手くやつてるものだと思つてたんだがな。

「大丈夫なのかそれは……？ ホントに解散しないよな？」

「し、しないですよ！」

跳ね上がるように立ち上がって反応したのは、多田さんではなく島村さんだった。ふと我に返った島村さんは、顔を赤らめてすくすく座り直す。——どうかしたのだろうか。まあ同じプロジェクトの仲間が解散の危機、なんて考えたくもないのは分かるが。

「そもそも多田さん、今更どうしてそんな事を考えているんだよ」

武内さんから以前聞いた所によると、「アスタリスク」はお互いの個性を認め合うという方向性で折り合いがつけられたはずである。——まあ、解散するだのしないだのという言い合いがあったとしたら、そういうじゃれ合いであるとひとまず考えておいて。プレゼンの時に多田さんが言った「自分がロックだと思えばロック」という信念を貫いているのなら、今こうしてボンヤリしていないと思うんだけどな。ここはやはり、本人に訊いてみるしかない。

「城戸プロデューサーに言っても分からないと思うけどな……。木村夏樹って知ってる？」

多田さんの口から、突然346のバンド系アイドルの名前が飛び出してきた。

「……逆に訊くけど、どうして知らないって思ったんだ？」

むしろ島村さんとアナスタシアさんの二人は知らないようで、新田さんから説明を受

けている。

「知ってるならいいや。……やっぱりさ、ああいうのがロックって事なのかな……」

うーん、まあサバサバしていて女性ファンが多い、「カッコイイ」系のアイドルである事には違いないのだが。

「リーナは、お話しした事、あるんですか?」

アナスタシアさんが訊くと、多田さんは「うん!」と目を輝かせながら答えた。

「すっごいカッコいい人でさ、なんて言えばいいんだろ、自分の音楽に自信を持っている人で! やっぱり、ああ言うのをロックって言うんだろうな!」

……突然まくし立て始めたが、まあボンヤリされているよりかは何倍もマシだろう。

「悪い、話を聞いてやりたいんだが、俺は『舞踏会』の打ち合わせもあるからこれで。戸締りはしっかりしてね」

ノートPCと資料をカバンの中に突っ込んで、部屋の中のアイドルに言う。

「はい。お仕事、頑張ってください」

新田さんがこくりと頷き、見送ってくれた。うんうん、いいお嫁さんになれそうだな。暫くはアイドルとして頑張って欲しいけど。

「あ——っ、……頑張ってください。私も頑張ります」

一方、島村さんからは歯切れの悪い返事が返ってきた。何かあったのかな——やべ、

考えてる暇がねえな。早く行かないと。

舞踏会で必要になる機材についての打ち合わせが終わり、急いでプロジェクトルームに向かう。新たに資料を作成しないといけないので、トンボ帰りに近い形になってしまった。

「あ、貴方は」

廊下でふと、声をかけられる。

「……ああ。鷺沢さん、だったよね」

呼びかけてきたのは、つい先日ハーミーと世話になった古本屋のお手伝いである、鷺沢文香さんだ。

「あの時は驚きました。先生ではなく、プロデューサーさんだったんですね」

まあ、最後の最後に名刺を渡してそのまま店を出たからな。

「ドツキリみたいな形になっちゃったね。でもまあ、こうして346プロの中で会えて良かったよ」

……あまり望ましい形ではなかったけど。

「はい。城戸プロデューサーさんには、お礼をしないとイケないですね」

「お礼？」

「私を、こうして346プロへと連れて来た事にです」

——そっか。

「楽しんでるんだね」

俺が訊くと、鷺沢さんはゆっくりと、それでも力強く頷いた。

「はい。お陰様で」

だつたら何よりだ。きっと、他のアイドルに助けられての事だろう。

「じゃあプロデューサーとしてのアドバイスを少ししよっかな。——焦っちゃダメだ。鷺沢さんのペースでいいから、確実に前に進むこと。ああ勿論、仲間を大切にね。同じ事務所なんだから、皆仲間だよ」

俺の言葉を聞いて、鷺沢さんは控えめに「ふふつ」と笑う。何か俺、変な事言つただろうか。

「本当に、学校の先生みたいですね」

「……そうかなあ」

まあ、E. G. G. Sの年齢層から考えちゃえば、そうなるのも無理はないか。

「今からレツスン？」

「はい、そうです」

「そっか。それじゃ、俺はこれで。頑張つてね」

「はい」

そのまま彼女と別れ、エントランスに出る。——少し前に撤去された展示物は代えられ、新しい映像がモニタに映し出されている。そこには、何人かの実力派アイドルと見慣れない顔に加えて、鷺沢さんの映像もあつた。

『プロジェクト・クローネ』ねえ」

重すぎて首が回らない王冠じゃなければいいんだが。

エントランスで、見知つた人物がため息をついていた。凜は思わず、彼に声をかけた。「どうかしたの?」

城戸はこちらの方を向くと「いいや」と振り払うように首を振り、彼女に向かって微笑む。

「何でもないさ。ただ——ただ、常務も仰々しい名前を付けるもんだなって」

彼は再び、モニタを眺める。プロジェクト・クローネ。確か、クローネは「王冠」という意味である事を美波から聞いた。

「城戸さんは、どう思う?」

何となく放つてしまった質問は、かなり曖昧なものになつてしまった。城戸は凜から視線を外して考え込むと、呆れるように肩を竦めた。

「正直、失敗はして欲しくないな」

それは意外な回答だった。常務と対抗している彼の口から、そのような言葉が出るな
ど思ってもいなかった。

「それはどうして？」

「どうしても何も、プロジェクトと銘打ったからには金や人、モノ、あらゆるリソースが
使われる事になる。一社員としては、それを無駄にして欲しくないし」

城戸はまた、凜の方に向き直った。

「特に常務なら、失敗すれば容赦なく切り捨てるかもしれない。俺達が良くても、あのプ
ロジェクトのアイドル達にとってみればたまったもんじやないだろ」

凜の脳裏に、デビューが延期して沈んでしまったデュアルプリズムの二人が浮かび上
がる。——そうだ、アイドル達は何も悪くない。頭からその事が抜け落ちる所だった。

「何だかんだで色々考えてるんだね」

城戸は目を見開くと、「たはは」とばつが悪そうに笑った。

「まあ、そりやな。……俺は346のアイドルを全員救いたいと思ってる。常務お抱え
のアイドルだからナシ、って言うのは話が違うだろ？」

「それに」と城戸は言葉を続ける。

「ちよつとした知り合いもいるからな。知り合いの成功を願うのは、おかしくないだろ

「？」

彼は悪戯っぽく笑う。ちらりと見えた八重歯は、彼の従妹である莉嘉や美嘉を思い出させた。

「そっか」

無理やりにも笑顔を返そうと思ったがそれも出来ず、凧は顔を俯かせてしまった。

「……どうかしたのか？」

城戸が凧を案じて声をかける。

「——うん。実は、デュアルプリズムの二人と、少だけボーカルレッスンをして」

「へえ、あの二人と。どうだった？」

素直に答えるべきか迷ってしまった。

「その……何だろう、ニュージェネレーションズにはない、『違う可能性』みたいなものを感じた」

我ながら、キザな言い回しだと思ってしまった。しかし、凧自身の実感として正しく表現するならば、その言い方が一番しっくり来たことも間違っていない。

「——違う可能性、か」

城戸はどう受け止めたのだろうか。天井を見上げて逡巡する様からは、表情を読み取る事が出来なかった。

「ま、いいんじゃないの？ からつきしダメってなっちゃうよりかは」

へらへらと笑う城戸は、未だに暗い表情の凜を眺め、再び真顔で考え込む。しばしの沈黙の後に彼は口を開くが、先程のような笑顔ではなく、真剣な顔をしていた。

「……そう思う事は、何も裏切った事になんねえよ。たまたま一緒にレッスンした二人とイイ感じになった、それだけだろ」

「……私、そんなつもりじゃ」

「うえ？ ……そつか、俺の考え過ぎか」

「いやあ、悪い悪い」と照れ臭そうに笑いながら頭を掻く城戸の姿は、既に何時もの調子に戻っている。

「ま、何かあったら言ってくれよ。俺はシンデレラプロジェクトの皆も応援してるから」

「あれ？ E. G. G. Sや他のアイドルはいいんだ？」

「意地悪言わないでくれよ。E. G. G. Sは無論、他のアイドルも応援してるっての」
軽口を叩いた凜に肩を竦めた城戸は、彼女に向かって微笑む。

「346のプロデューサーとしてだけじゃなく、城戸進ノ介個人としてもな」

「——うん。ありがと」

幾ばくか、心が軽くなったような気がした。

プロジェクトルームでは、エバンスさん達が今日行なったロケについて色々とお話を語っていた。

「それで、かな子さんが倒れちゃって」

「ちよつと、大丈夫だったのそれ!？」

エバンスさんの話に、ハーミーが横槍を入れる。ととくら学園用のVTRを撮影していたのは、エバンスさんとダフネ、緒方さんと三村さん、カワイイヤキュウの三人だったはずだ。

「一旦休憩したから大丈夫よ。かな子さん、おやつだけじゃなくてご飯も抜いていたみたいで」

おいおい、急に過激なダイエットをしたらそりゃ体が持たないだろ。

「アイドルなんだから、ご飯はしっかり食べないといけないのに。おやつは……まあ、控えた方がいいかもしれないわね」

……あの子にそれが出来るんなら苦労もないんだが。

「しかし、上機嫌だなエバンスさん」

ロケは武内さんに任せっきりにしてしまったので、エバンスさんがやけにご機嫌な理由もよく分からない。

「ああ、はい。やっとお話出来たので！」

「お話？ 誰と？」

ダフネが「うふふ」と面白がるように笑う。

「輿水さんと」

「ああ」

そう言えば、やけに入れ込んでいたな。

「はい！ とつても可愛かったです！ ほくが『ファンです！』って言ったら、『フーン、ボクはカワイイから当然です！ ……え、ドツキリじゃないんですか？』ってビツクリしていて！」

どうしてアイドルなのに芸人魂が炸裂してんだよ。

「面白かったわよ？ わざわざ、『えつ、ドツキリじゃないんですか？ 逆にドツキリしましたよ！』って言ってたもの」

「純粋なファンでドツキリするアイドルって何なんだよ……」

「他にも、『一人称が丸かぶりじゃないですかー！』ってぼくに絡んだりしてきて！ すつごく幸せでした！」

「……ねえプロデューサー、ツツコむべきかしら」

「……幸せそうだし、いいんじゃないか」

少なくとも、俺には満面の笑みで話をしているエバンスさんに水を差す勇気がない。
「そういえば、多田さんは？」

「あらあら。あの人にも手を出すつもり？」

ダフネが悪戯つぽく笑いながら訊いてくる。

「ちげえよ。ボンヤリしてたから、心配になったただけだつての」

「てか、「にも」って何だよ」にも」つて。俺がいつアイドル達に色目を使つたつてんだ。
「……？ 何だか、『行きたい場所がある』つて言つて、そのまま部屋を出ていきました
けど」

エバンスさんが質問に答えてくれた。

「そうか」

彼女の疑問に、彼女なりに何か糸口を掴んだのだろう。ならば、俺は出る幕がないか
な。机の上でノートPCを開き、資料の確認を始める。

「ちよつと、何なのよ！ 一人だけ分かつたような顔して！」

「いや、別にいいだろハーミー。……あつ、こら、勝手に資料を読もうとするな！」

その日の夜は、まるで常務が来る前のように平穏だった。

第43話 Do the Cinderellas put on Krone

俺と武内さんは、常務から呼び出しを受けた。プロデューサーだけではなく、武内さんは渋谷さんとアナスタシアさん、俺はダフネを連れて来るように言われて。

「何かしらね」

道すがら、ダフネが訊いてくる。

「さあ。何だろうな」

少なくとも、俺達のクビではない事は明らかだった。仮にそうだとしたら、担当アイドルの一部だけを連れて来る理由が分からない。そのような話題の場合、プロデューサーだけを呼び出すはずである。

「城戸さん。この前のような事はなしでお願いします」

武内さんが静かに釘を刺してきた。……まあ、ひやひやさせてしまった事は申し訳ない。

「——分かりました。これからは大人しめに話を聞きますよ」

勿論、時と場合によるのだが。

常務は執務室で、以前交渉した時と同じように革の椅子に座ってじつとこちらを見ていた。

「来たか。余計な挨拶はなしだ、単刀直入に言おう——」

常務の視線はゆつくりと、アナスタシアさん、渋谷さん、ダフネと移る。

「シンデレラプロジェクトから渋谷凛とアナスタシア、E. G. G. Sからダフネ・グリーングラスを、私が管轄する『プロジェクト・クローネ』で見る」

……は？

「ま、待ってください！—」

悲痛な叫びが、武内さんから放たれる。俺は未だに思考が追いつかない。——どうやらそれは、呼ばれたアイドル達も同じようだ。

「彼女達は、私達が担当しているアイドルです！ それに、以前話したではないですか！ おいそれと今のプロジェクトを解体させて別のプロジェクトに移籍させるのは、話が違います！」

ほう、と常務が不敵な笑みを漏らす。

「ならば、解体はしなくていい。今のプロジェクトと『クローネ』、並行して行なえばいいのではないか？」

——くそ！ 最初からそれが目的か！

「ですが、三人ともデビューして間もないアイドルです。一年も経っていないんですよ。いきなり、二足の草鞋を履かせてしまうのは負担になるのでは」

慌てて俺も、武内さんの援護射撃を行なう。しかしそれでも、常務は眉一つ動かさない。

「それをサポートするのが君達プロデューサーの役目だろう？」

くつ、正論をぶつけられてしまった。

「……つ、ですが」

武内さんが反論しようとするが、常務はそれを意にも介さず話し続ける。

「私はこの三人に、新たな可能性を感じたまでだ。シンデレラプロジェクトやE・G・

G・Sでは掴めない、新たな可能性を」

「可能性」という言葉に、渋谷さんがびくりと肩を動かす。それを知ってか知らずか、常務は再び不敵な笑みを見せる。

「ですが、認められません！」

武内さんがキツパリと言い放つと、常務はすつと真顔に戻って俺達——武内さんと俺を見る。

「確か君達は、アイドルの自主性を、個性を重んじると言っていたな？」

——まさか。

「ならば、アイドル達の意見も聞かずに、プロデューサーが全て決めるといふのもおかしい話だと思うが？」

「———そ、それは、そう、ですが」

唯一の突破口が、完全に裏目に出てしまった。

「———どうだ。やってみる気はないか」

「常務、余りにも急では」

「私は、三人に訊いている。君には訊いていない、武内君」

常務の凍てつくような冷たい声を受け、遂に武内さんは黙りこくってしまった。

「………分かりません」

真つ先に口を開いたのは、渋谷さんだった。俺も含めた皆の視線が、一斉に渋谷さんに注がれる。

「分からない、とは」

常務が眉をひそめ、静かに渋谷さんに訊く。

「………何か、今の時点で決定している事はありませんか？ 仮にクローネに参加するとして、どのような形で活動するのか、だったり」

ダフネが常務に質問した。………確かに、常務が考えもなしに引き込むとは到底思えない。ある程度の方針が出来上がったからこそ、こうして呼び付けたのだ。

「ふむ。ならば言っておこう。グリーングラス君とアナスタシア君、兩名はソロでの活動となる。対して、渋谷君には」

常務はモニタの画面をこちらに向ける。渋谷さんの写真の両脇に、神谷さんと北条さん——デュアルプリズムの二人の写真が並んでいた。

「先日所属したデュアルプリズム——神谷君と北条君の二人とユニットを組んでもらう」

「……二人と？」

渋谷さんから、動揺したような声が漏れた。

「どうした？ 不満か？」

「いい、いえ……その」

返答に窮した渋谷さんを、武内さんは不安げな仏頂面で眺める。——常務がいつ、このようなユニットを思いついたのかは分からない。もしかしたら、三人で行なっていたボーカルレッスンを見ていたのだろうか。渋谷さんと——もしかしたらデュアルプリズムの二人も含めて——同じように、「違う可能性」を見出したのだろうか。

「その……二人は、デュアルプリズムの二人は、どんな反応でしたか？」

絞り出すような渋谷さんの質問に、常務ははきはきと答える。

「二人とも喜んでいた。『最高の形でデビュー出来る』とな」

デュアルプリズムの二人には、常務の誘いに断る理由がない。デビューの延期の原因が常務の方針だったとしても、かねてから組みたいと思っていた人物と組んでデビュー出来るのだ。あからさまなマッチポンプには違いないのだが、その提案は魅力的に見えるだろう。

なんせ、プロジェクト・クローネには「常務のお墨付き」という大義名分がある。売上があからさまに悪くなければ、再び憂き目に合わなくて済むのだ。それだけでも、デュアルプリズムの二人にとってみればまたとないチャンスである。

——完全にしてやられた。論点を封じ込まれたのみならず、外堀まで埋められている。

「君も感じたはずだ。ニュージエネレーションズでは得られない、新たな可能性を」
「ですが、二つのプロジェクトを兼任させるのは」

「今は渋谷君と話している、武内プロデューサー」
若干勢いのある言葉に押され、武内さんは再び口をつぐんでしまった。その目は、顔を俯かせた渋谷さんと常務の間を行ったり来たりしている。

「少し……少し、考えさせて下さい」

渋谷さんはまるで譲歩したかのような回答を返した。

「……ふむ。そうか。他の二人は」

常務の目がダフネとアナスタシアさんの方を向く。

「あたしも、少しでも考えられる時間が欲しい、です」

「……ダー。お願い出来ますか？」

……二人も、曖昧な回答を寄越すのみだった。

「いいだろう。今週末までに結論を出してくれ。だが、その間はクローネのレッスンにも顔を出す事。……君達も、それでいいな？」

常務の凍てつくような視線が、俺と武内さんの方を向く。

「私は……」

武内さんが最後まで抵抗の意志を見せる。——いや、もう打つ手がない。彼の反論に覆い被さるかのように、俺は常務に返答した。

「承知しました。今週末までに結論が出るよう、三人に促します。——勿論、彼女達の意志を考慮して」

……武内さんの絶望したような顔を、なるべく見ないように努力して。

目の前の今西部長が、「ふうむ」と大きくため息をつく。

「結局、三人に委ねた形になったんだね」

隣に座っている武内さんは「はい」と力なく返事をする、再び下を向いてしまった。

「あの場では——それ以上に言いようがありませんでした」

俺がそのように零すと、話を聞いていた千川さんが口を開き、何も言わずに閉じた。

「——複雑だね。彼女達は、君達が見つけたシンデレラなのに」

「全くです。こう、掠め取られたような気分ですよ」

武内さんは顔を上げ、憔悴しきったような表情を俺に向ける。

「申し訳ございません。先程は、私の方が取り乱してしまいました」

「いえ、取り乱してしまうのは仕方ない事です。自分も、思考が追いつかないうちに後手に回ってしまいましたから」

部長は顎に手を当てて何かを考え込むと、再び俺達に向かって口を開く。

「それで？ 仮に彼女達が話に乗った場合、どうするつもりだい？」

部長の目は、俺の方を向いている。……どうやら、俺から先に聞けらしい。

「それが彼女達の決断ならば、止める道理はないと思っています。彼女達にとっても、悪くはない話ですから」

「武内くんはどうだい？」

「……私も、そのように考えています。仮に参加する場合、こちらとしてもフォローは欠かさないつもりです」

「そうか」と部長は相槌を打つと、ソファの背もたれに体を預ける。

「ならば、見守つてやろうじゃないか。灰被りが女帝から貰った冠を被るのか、跳ね除けるのか」

——今西部長、常務のポエムが移っちゃってますよ。

メールで届いた資料をモニタ越しに眺め、武内はため息をついた。深夜のプロジェクタールームには人の気配がなく、掛け時計の針の音が静かに響くのみだ。彼の元に届いた資料は、シンデレラプロジェクトのものでも、「舞踏会」のものでもない。「プロジェクタ・クローネ」——常務の計画の一端についての資料だった。

資料には、今日付で更新された箇所がある。無論、呼び出して出てきた三人の処遇についてである。アナスタシアとグリーングラスの箇所には、「ソロで活動(検討段階)」と記されている。普段とは違う、おそらく常務が呼び込んだであろう作曲家と作詞家の名前が記載されていた。その筋では有名な、権威ある人物が行なうようである。一方、渋谷の箇所には「神谷奈緒・北条加蓮両名とユニット(仮名:トライアドプリムス)」と記されていた。

——どうやら、彼女に関して言えばほぼほぼ決定事項のようである。先の二人に付け加えられていた、検討段階の文言が見当たらない。

「新たな、可能性……」

武内は常務が言っていた言葉を反芻する。——その新たな可能性を見出すのは、自分だと思っていた。傍にいる自分ならば、彼女達の新たな可能性を——まだ見ぬ才能を、秘められた能力を引き出せると考えていた。いや、「高を括っていた」。今西部長の前で城戸が言っていたように、掠め取られたような喪失感が武内の胸中に渦巻いていた。

突如、社用携帯が鳴り響く。相手は、城戸のようである。

『武内さん。大丈夫ですか』

電話越しに聞こえる城戸の声は、何時もと何一つ変わらないように聞こえた。

「……はい。問題ありません。ご心配をお掛けして、申し訳ありません」

『いえ』と城戸は返す。

『まだ会社にいるんですよね？ 明日も仕事があるんですから、程々にしないと』

「……はい、すみません」

『いえいえ、謝らないでくださいよ』

電話の向こうで、城戸は大きいため息をついた。

『実は、渋谷さんから話は聞いていたんです。デュアルプリズム——いや、まあ、あの二人とレッスンをして、悪くないと思つたと』

武内にとつては、初耳だった。

「——そう、だったんですね」

その話が聞けなかったのは、武内自身のミスでも、城戸のミスでもない。たまたま、時間が合わなかっただけである。

『もしかしたら、常務もたまたまその場に居合わせたのではないかと考えられます。——あの人も、違う可能性を見出した』

「……それが、トライアドプリムスに検討段階がない理由、という事ですか?」

『……確証は持ってませんが』

再びモニタに映し出した資料を読む。……常務が何を見て、何を聞き、何を考えたのかは分からない。ただ、トライアドプリムスについて書き出された箇所からは、既に「決まっているもの」とでもいうような空気が伝わってきていた。

「……城戸さんは、どう考えていますか」

やや投げやり気味な武内の質問に、彼は『うーむ』と電話越しに悩む。

『……正直、期待はしているんですよ』

「期待……ですか?」

城戸が放った言葉に、武内は若干耳を疑った。

『はい。上手くは言えないんですけど——仮にクローネに参加したとしても、彼女達ならば今までの活動を、シンデレラプロジェクトやE・G・G・Sを大切にしてくれると思いますし』

電話越しに、城戸がにやりと八重歯を覗かせたような気がした。

『――常務が見つけた可能性を、俺も見てみたいですから』

「……常務が見つけた可能性、ですか」

それが誇りあるものなのか、埃を被ってしまうものなのか、武内には見当が付かなかった。

第44話 The Cinderellas meet

Krone prince

クローネはプロジェクトで一纏めになつて基礎レッスンを行なっているらしい。塩見周子や宮本フレデリカといった前々からアイドルとして活動している子達や、鷺沢さんやデュアルプリズムの二人のような経験の浅い子達も。一緒になつてレッスンを行なっているのはおそらく、パフォーマンスの水準を合わせていく為だろう。——現役組は兎も角、新人組も同じメニニューをこなすのは流石に無理があると思うのだが。

「まさか、城戸さんがついて来るなんて思つていなかったよ」

渋谷さんが意外そうな顔で言ってきた。

「まあ、色々と考えたけどな。向こうに知り合いもいるし、顔ぐらいは出してもいいかなと思つてな」

ちなみに、常務には話を通してある。「方針での確執や『舞踏会』とは関係なしに、クローネのレベルを知りたい」と申し出たところ、あっさりとは許可を貰った。おそらく、武内派の俺を通じてクローネの方針を知らしめる為だろう。

「武内プロデューサーがいらないのは心細いけど、プロデューサーさんがいるだけマシか

しらね」

「おいおいダフネ、まるで俺が頼りないって言ってるみたいだな」

突然イジメられるなんて事は絶対にないだろう。何せ向こうには、デュアルプリズムと鷺沢さんがいるんだから。

クローネは、ダンスレッスンの最中だった。……うーん、やつぱりレベルがまちまちだな。現役組は問題なくこなしているが、新人組、特に鷺沢さんや隣の女の子は息も絶え絶えになっている。

「……あ、凜！」

北条さんがこちらに気付き、レッスンの最中であるにも関わらずこちらに駆け寄ってきた。後に続いて、神谷さん達もこちらの方に向かってくる。

「来てくれたんだ」

「……ううん、まだ悩んでる。常務に、レッスンには顔を出させて言われたから」

渋谷さんは煮え切らない返事を返しながらも、二人に向かって微笑む。

「話を受けたのが昨日なの、カレンさん」

ダフネも渋谷さんに続けて言った。気まずい三人の雰囲気とは裏腹に、北条さんと神谷さんは「仕方がない」とでも言いたそうな顔で苦笑した。

「でも、来て貰えたら心強いと思う。——でしょ？ 城戸プロデューサー」

北条さんに話を振られた俺は、少しだけ頷く。

「まあ、そうかもな。ダンスレッスンを少しだけ見た感じだと、実力が二極化している。——そういうのだと悪目立ちしちゃうからな」

早い話、「上手い奴らに下手な奴らが混じってる」ような状態だ。少なくとも、新人組のレベルを今回の三人ぐらいにまで伸ばしたいのだろう。

「……つと、一応自己紹介しておこうか。城戸進ノ介、E・G・G・Sのプロデューサーをしている。よろしく」

警戒するような会釈を皆がする中、デュアルプリズムと鷺沢さんはにこにこ朗らかな笑顔を向けていた。

「敵情視察？」

「えっ!? そうなのか城戸さん!?!」

「馬鹿言わないでくれよ北条さん神谷さん、俺にそんなつもりはないって」

「敵情視察」という言葉が出た途端、鷺沢さんの隣の女の子がますます俺を睨み付けてこしょこしょと何かを鷺沢さんに耳打ちした。彼女は慌てて、何かを女の子に耳打ちしている。……敵対するつもりはないんだけどな。

「ダフネ・グリーングラスよ。ダフネでいいわ。さつきリンさんが言ったみたいに、あたし達は今回レッスンを顔を出しただけなの。もしかしたら参加するかもしれないから、

その時はよろしくね」

「アナスタシア、です」

ダフネとアナスタシアさんも挨拶を終えた。次は渋谷さんの番——と言ったところで、北条さんが口を開く。

「そして、この子が渋谷凜。私と奈緒でユニットを組む子よ」

渋谷さんが慌てた様子で付け加える。

「あくまで、予定だからな！ 加蓮、気が早いって！」

——うーん、やはり外堀を完全に埋められてんな。今更「嫌だ」とは言えない空気が漂っている。

「その……うん、よろしく」

渋谷さんも観念した様子だった。まあ、仕方がないか。

「……？ プロデューサーさん、ちよつと数が合わないわね」

「え？ そんな事——」

ひい、ふう、みい……確かに足りねえな二人。「ああ……」と塩見さんが苦笑する。

「志希ちゃんと奏ちゃんかな。ほら、あの子何処か行っちゃうし」

……あの子？ クローネの一同は「ああ……」と諦めたようなため息をついているが、

正直意味が分からない。その時、レッスンスルームのドアが開く。

「ううー、いないとダメ？」

「当たり前よ。レッスンもそうだけど、今日は大事な顔合わせも……ほら、来ているじゃない」

藍色のショートヘアの艶やかな女性が、栗色の髪の少女をたしなめる。不思議な雰囲気纏っている栗毛の少女はそのままふらふらと俺に近付くと——「すんすん」と突如鼻をひくつかせた。

「んなっ?! え? 俺、そんなクサイか?」

ちよつ、やめてくれよやめろ! 渋谷さん達の視線がすんげえ痛い!

「……んー? 変なの」

「人の匂いをいきなり嗅いで、『変なの』はないだろ『変なの』は……」

思わず、スーツの臭いを嗅ぐ。……特に変な臭いはしないよな、うん。

「……すみません、この子、ちよつと独特な子で」

藍色のショートヘアの子——速水奏が、申し訳なさそうに頭を下げる。

「ああ、いや、まあ、……びっくりしましたけど」

「したけど、何? 城戸さん」

渋谷さん、どうしてそこで突っかかるかなあ。

「何か、いい匂いがしたとかじゃないかしら。プロデューサーさんだから」

「ダフネ、そうなのですか？」

「昨日の夜何食べたのかしら、プロデューサーさん？」

「いや、それは関係ないと思うが……」

ブロック状の栄養補給食で臭いが残るとは思えないし。「うーん」と考え込んだ栗毛の少女——一ノ瀬志希は、まるでピッタリな表現を見つけたかのように手を打ち鳴らす。

「オジサン臭！ 見た目は若いのに、ほのかにオジサンっぽいなー」

「謝りなさい！ 志希、謝りなさい！」

速水さんは一ノ瀬さんの頭を無理やり下げると、自らも頭を下げた。

「本当にすみません、自由奔放な子で……」

「あ、ああ、いや、その……大丈夫だから」

——転生したら、加齢臭も出るのだろうか。

一通り挨拶を終え、ようやく全員揃ったクローネは再びダンスレッスンを行なう。……やはり、レベルが二極化している印象がある。基礎レッスンではあるのだが、体力が覚束無い新人組はついて行くのもやつとのような雰囲気だ。……女の子——橘ありすや鷺沢さんにばかり目が向いてしまっていたが、一ノ瀬さんも酷いなこりや。

「常務に選ばれた子達なのに、意外と個性派揃いね」

ダフネがぼつりと呟く。渋谷さんも「うん」と頷いた。

「てつきり、常務みたいにくールな人ばかりだと思つていたけど……そうでもないのかな」

彼女達の視線の先では、大槻唯と宮本フレデリカ金の金髪コンビがご機嫌な様子で振り付けを行なつていた。この二人はクローネの中でもダンスの筋が良いようだ。ボーカルはどうか知らんが。

「……どうも、常務はビジュアル面だけで決めたような節があるっぽいな」

それでもなければ、突然人の臭いを嗅ぐ変人がいる訳もなさそうだし。E. G. G. Sからダフネだけが選ばれた理由も、実はそれが決め手なのかもしれない。

「……どう、アナスタシアさん？ 仲良くやっていけそうか？」

俯いてだんまりを押し通しているアナスタシアさんに声をかける。彼女は顔を上げると、複雑そうな表情を向けた。

「……城戸プロデューサー。私、悩んでいます。参加すべきかそうでないか」

思えば、アナスタシアさんの隣にはいつも新田さんがいた。何か判断をする時に助け舟を出していたのは、あの人のなのだろう。日本語が出来るとはいえ、少々心もとない彼女にとってみれば新田さんはまさに、「東京の母」といった存在であると言つても間違いな

い。……あれ、でもこの子出身が北海道だったよね？ だったら、日本語がもつと上手い気が……いや、考えるのはよそう。それよりも。

「クローネの皆！ 少しだけ付き合ってくれないか」

俺がそう呼びかけると、レッスンをしていた一同はこちらに歩み寄ってくる。

「折角こうして顔合わせしたんだし、軽く会話でもしてみたら良いんじゃないか。積もる話もあるだろうし」

渋谷さんとデュアルプリズムの二人に目配せをする。ただレッスンを見学しているだけっていうのも味気ない。こうして話をするのもまた、相互理解に繋がるだろう。

「……城戸さん、でも私達がクローネに参加したら」

渋谷さんの言葉に、肩を竦めて応じる。

「それを決めるのは君達自身だ。——どちらにしても、俺と武内さんはサポートするよ」

三人はそれでも、不安そうな表情を崩さなかった。

「それで、ドーすんの？ 好きに喋っていいカンジ？」

大槻さんが訊いてくる。……金髪でギャルだと、何処と無く莉嘉と被るなあ。

「皆に任せるよ。俺は口出ししないから」

「えー」と彼女は口を尖らせる。

「ゆいはお兄さんと話がしたいなー」

「それはどういう……つてえ！ どうして叩くんだよ渋谷さん！」

「さあ？ じゃあ私は二人のところに行くから」

渋谷さんはつんとした態度を取ると、にやにやしているデュアルプリズムの二人の元に向かつていった。

「ふふつ。じゃああたしは、速水さんとお話ししてみるわね」

ダフネも話し相手を見つけられる中、アナスタシアさんは未だに視線を下げていた。

「——鷺沢さん、申し訳ないけどこの子の話を聞いてくれるかな？」

このまま孤立させてしまうのはちよつと不味いかもしいれない。取り敢えず、話を聞くのが上手そうな鷺沢さんに尋ねてみる。

「はい。……橘さんも、それでいいですか？」

橘さんもこくりと頷いた。髪型が似ていることも相まって、まるで親子みたいだ。

「じゃ、こつちこつち！」

「ちよつ、引つ張るなって大槻さん！」

ああもう、渋谷さんの視線が痛いから！

大槻さんは「はい」と言いながら、メッセージアプリのQRコードを突き出してきた。

「……え、俺と？」

「うん！ いーじゃん、友達登録、しよ？」

「——ああ、まあ……」

特に断る理由がないし、クローネ側から情報を収集出来るのは有難い。すぐに登録を済ませる。

「なんかシンデレラプロジェクトのプロデューサーって、コワイ人ってウワサを聞いて。お兄さんみたいな人で良かった！」

「いや、俺はシンデレラプロジェクトのプロデューサーじゃないからな……？」

武内さん、後で少しだけ慰めてあげようかな。

「へ？ そーなの？」

「ああ、まあ……。武内さん——シンデレラプロジェクトのプロデューサーは、見た目こそ怖いかもしれないが、いい人だからな。俺も頼りにしているし。大槻さんが思うような、本当に怖い人じゃないよ」

たはは、と大槻さんに向かって愛想笑いを向ける。

「ね、ゆいの事、『ゆい』って呼んでみて？」

「ん？ どうしたんだ藪から棒に」

脈絡のない要望に、少しばかり身構えてしまう。

「いーじゃん、ね？」

とは言え、大槻さんの表情からは悪意を感じられない。……常務がどう思っているのかは兎も角として、この子はプロジェクト関係なく親交を深めたいだけなのかもしれない。

「——分かったよ、唯」

俺が大槻さん——唯にそう言うと、途端に彼女はち切れんばかりの笑みを湛える。

「ヨロシク、お兄さん！」

……渋谷さんの視線が痛い、必死に堪える事にした。

第45話 Krones have their do

rama, too

城戸さんは、ああいうちよつと派手めの女の子が好みなのだろうか。思えば従妹はあの城ヶ崎姉妹だし、そういった方面の女子の扱いには手馴れているのかもしれない。でも、仕事とプライベートは分けていると思うし――。

「凜って、ああいう人が好みなの？」

加蓮が耳打ちして来た。

「……違う。頼りない近所のお兄さんが、女にだらしないなっていう感じ」

本当に、常務と対立してアイドルの為に奔走している人物の一人とは思えない。……

プロデューサーの話では、結構頑張ってるらしいけど。

「頼りないのか？ 最近、結構頑張ってるって話を良く聞くけど」

奈緒が、大槻さんにデレデレしている城戸さんを見ながら言う。

「仕事に一生懸命でイケメンのお兄さんなんて、優良物件よねー」

「加蓮、人を不動産みたいに言うなよ……」

加蓮の言う通り、今まで女つ気がないのが不思議なくらいだけど。

「……あれを見ておんなじ事が言える?」

二人は再び、大槻さんにデレデレしている城戸さんに目をこらす。すると、首を傾げながら私の方を向いた。

「普通じゃないか?」

「……うん。むしろ、城戸プロデューサーの方がたじたじになっているよね」

「……そう見えるの?」

私が探りを入れると、二人は各々頷いた。……ホントにそう見えるの? 私には、城戸さんが女の子にデレデレしているようにしか思えないんだけど。

「ま、まあまあ、あのプロデューサーの事はどうでも良くて!」

「ふうん? 奈緒も『ちよつと良いかもなー』って言っていたのに?」

「バツ、馬鹿! そういう意味じゃなくて、仕事を一緒にやる上でだよ!」

「……ふーん。後で城戸さんを叩いておこう。」

「とは言え、そうね。……凜。アタシ達、やっとデビューが出来そうなの」

加蓮はさつきまでの茶化すような表情をやめて、真剣な表情で私を見る。

「うん。知ってる」

トライアドプリムス——「三つの頂点」という意味らしい。前々からいるアイドル達を押しにかけて、私達が頂点っていうのもおかしな話かもしれないけど。

「デュアルプリズムの延期を決めたのも常務かもしれないけど、トライアドプリムスの話を持ってきたのも常務だったんだ。都合がいい話かもしれないけど——でも、あたし達はそれに賭けてみたいんだ」

奈緒も普段とは違い、真剣な様子で私に言った。この二人にとってみれば、まさに常務が言っていた通り「またとないチャンス」である事は何となく分かつていた。私自身も、この二人と組むことに新たな可能性を感じている。

でも——。でも、ニュージェネレーションズの二人の顔が浮かんだ。当初は現実とのギャップに打ちのめされながらも、リーダーとして引つ張ってきてくれた未央の朗らかな笑顔。そして——アイドルの道を私に指し示してくれた卯月の、大輪の花のような笑顔。——城戸さんが「裏切る事にはならない」と言っってはくれたけど、心の奥底ではやっぱり、「裏切る事になってしまいうんじゃないか」というような声が必要に私を押し止めていた。

「……武内プロデューサーは？」

加蓮が優しい声で訊いてくる。

「あの人は——あの人は、任せるって。自分で決めろ、だつてさ」

「行き当たりばったりだよな」と付け加えながら苦笑いした。

「そっか。凜次第って訳なんだな」

奈緒がため息をつく。——二人には悪いけど、やっぱりシンデレラプロジェクトを、ニュージエネレーションズを裏切るわけには——。

「アタシは、三人でやりたい」

「ちよつ、ちよつと加蓮？」と奈緒が必死に止めようとする。しかしそれでも、加蓮は止まることなく続けた。

「アタシは三人でボーカルレッスンをして、何か凄い事が出来るって確信したの。殆ど直感なんだけど、それでも、その直感を信じてみたい」

はあ、と奈緒は分かりやすく肩を竦めると、私に向かつて微笑む。

「実は、あたしも。一緒に歌ってて、こう、心がぐわーってなつたんだ」

「ちよつと奈緒、『ぐわー』って何よ『ぐわー』って」

「うぐぐ……別にいいだろー!」

二人がああのレッスンで感じた予感、私と同じだ。新たな可能性——ニュージエネレーションズでは掴めないような何か。

「私……」

「……今すぐ結論を出さなくてもいいの。でも、凛と組みたいって気持ちは、本物だから」

いつの間にか下げていた頭を上げると、加蓮と奈緒はにっこりと微笑んだ。

「あたし達、待つてるから」

奈緒の声は、期待で弾んでいた。

唯が、棒の付いたキャンディを差し出して来る。

「はい、お兄さん。飴ちゃんあげる」

「飴ちゃんって、また……」

大阪のおぼちゃんかよ、という失礼なツッコミを飲み込んで、手渡されたキャンディで口を塞ぐ。じんわりと、パイナップルの風味が口内に広がる。

「お兄さんって、どうしてプロデューサーになったの？」

「ん？ プロデューサーになった理由？」

話すと長くなるんだけどな。まあ、掻い摘んでしまえばいいか。

「……約束、かな」

……掻い摘みすぎた。やっべ、キザな事言っちゃまった。恥ずかしさで顔が赤くなる。

「……約束？」

「——ゴメン、今のなし。成り行き……そう、成り行きだ、うん！」

小つ恥ずかしい事言うのはこの口か!? クソ、飴で塞いでやる! あーもう、パインの飴オイシイナー。

「じゃあ、ゆいと同じだね!」

にかりと唯が笑う。天真爛漫な笑顔のお陰で、いくらか落ち着きを取り戻す事が出来た。

「……同じって事は、約束って所が?」

うん、と彼女は微笑みながら頷く。

「ゆいも、怖い女の人に『モデルとしてだけではなく、アイドルとして、トップを狙ってみないか?』って言われて。約束したんだ。トップアイドルにしてもらう代わりに、レッスンを頑張るって!」

「怖い女の人」とは、おそらく常務の事だろう。……既存のアイドルから余り協力を得られなかった分、スカウトに力を入れたのだろう。しかし、まさか本人が直接出向くとはな。……いや、あの人の事だ、「基準を満たす者は自分で見つける」と言っただけで聞かなかったのかもしれない。……ん? じゃあどうして一ノ瀬さんみたいな自由な子がいるんだ? 謎はますます深まるばかりである。

「……お兄さん、難しい顔してるよ?」

……つと、考え事はまた後々にしておこう。

「ああ。悪い悪い。そんな事もあるなって思っただけだから」

実際に小難しい事を考えていたとは言えないので、適当に笑って誤魔化す。……何だ

かご機嫌だが、どうしたのだろうか。

「ふへへへ、やつぱりお兄さんは笑っている方がいいよ！ ほら、スマイルスマイル」
「……お、おう、努力するよ」

最近は何もないような事態が続いちゃってるから、表情筋が凝り固まっていたのかも。唯の言う通り、大人の余裕を見せないと。

「じゃあ、女の子が凄く好きとかそういうのじゃないんだ」

「まあ、そうだなあ。特にそう言うのはなかったな」

皆娘か孫みたいなものだし。「英雄色を好む」とは言うが、俺は英雄でも何でもない、転生してしまった一般人だし。

「アハハ、真面目」

「真面目じゃないと、プロデューサーなんて出来ないっての」

……刺さる視線が一つから三つに増えた気がするが、気にしないでおう。

アナスタシアの両脇を固めるように、文香とありすは座っていた。文香は彼女に何かを話そうとするが、きつかけが掴めない。アナスタシアはぼんやりと、談笑しているダフネと奏、周子を眺めるのみだった。

「……挑戦、怖くない、ですか？」

まるで雪の妖精を思わせるような風貌から飛び出してきたのは、そのような弱音だった。

「挑戦、ですか？」

文香が恐る恐る訊くと、アナスタシアはこくりと頷いた。

「ダー。フミカは……怖くなかったですか？」

文香はこてんと首を傾げると、思い出したように静かに笑う。

「……怖い、と言いますか、私の場合、アイドルに興味がなかったものですから」

「アイドルに、興味がなかった？」

ありすは「確かに」と納得するように頷く。

「鷺沢さん、そんな感じがしますよね。……どうしてアイドルになったんですか？」

ありすの質問に、文香は柔らかい笑みを返す。

「実は、夏に城戸さんに名刺を渡されて。——自分で言ったことを思い出したんです。

『自分の世界が広がっていくのが好き』って言ったことを」

文香の、前髪に隠された瞳が輝いているような気がした。

「決心するのに時間は掛かりましたが……。それでも、新たなページを開こうと、そう思ったのです」

アナスタシアの脳裏に、美波の言葉が蘇る。いつ言われたのだろうか。正確な時期ま

では思い出せないが、確かに彼女は言っていた。

——私ね、このプロジェクトに参加するまで自分がアイドルになるなんて考えたことなかったの。本当に想定外で、私にとっては一つの冒険だった。

——冒険して、一步踏み出してみても、よかったって思えたから。

「楽しい、ですか？」

アナスタシアの口から、純粹な疑問が浮かび上がってくる。文香は、こくりと小さく頷き、落ち着いた笑みを見せた。

「はい。慣れない事ばかりで戸惑っています。……。読んだことのない本のページをめくるみたいに、ドキドキしていて。……だから、今回のプロジェクトも、新たなページを開くことが出来るんだと、そう信じています」

そこまで言った文香は、ありすの方を向く。

「橘さんは、どうですか？ アイドルになった理由」

ありすは「私、ですか」と小さく呟くと、手元のタブレット端末に視線を落とす。

「……私は、違うプロデューサーにスカウトされたんですけど、つい跳ね除けてしまつて。どうしようと思つてた矢先に、このプロジェクトの誘いを受けた訳です」

「だって酷いんですよ」とありすの語気が強まる。

「そのプロデューサー、帽子をカッコつけながら被つて、『どうだ？ アイドルになって、

「いっちょオレとてっぺんをみないか?』つて言ってきたんですから! 怪しい人にしか思えないじゃないですか!」

スカウトして来たプロデューサーの悪口をまくし立てているありすに、文香は苦笑いした。

「ふふっ、橘さんは相変わらずですね。アナスタシアさん、既にアイドルである貴女に言うのはおこがましいかもしれませんが、一緒に新たなページをめくってみませんか?」

「おこがましい……?」

「失礼かもしれないけど、という意味です」

首を傾げたアナスタシアに、ありますが説明する。……年齢が同じくらいだからだろうか、文香と美波が重なって見えた。

「……新しい、ページ」

心の奥底で、アイドルにスカウトされた時のような高揚感が再び蘇っているのに、アナスタシアは気付いた。

「明日の五時」

突然、加蓮が口を開いた。

「アタシ達、自主レッスンしてるから。凜も来て」

「——え？」

加蓮は詰め寄ってきた。

「もう一度、凜と一緒に歌ってみたい。……前みたいに『お願いシンデレラ』じゃなくて、次はトライアドプリムスの曲で」

加蓮の勢いに若干怖気付いた私は、奈緒の方を見る。私が見ていることに気付いた奈緒は、加蓮に賛成するように頷いた。

「あたしも、やってみたい。きつと、二人よりも三人の方がいいかもしれないからさ」

二人は真つ直ぐに私を見た。

「……直ぐには答えが出せない」

やつとの事で出た返答は、普段の私らしくない、弱々しいものだった。——それでも、二人は優しく微笑んだ。

「……まあ、凜には凜の事情がある事はあたし達も知ってるからさ」

「来てくれたら、嬉しいな。……それだけ」

加蓮が城戸さんの方を見る。……どうやら、休憩時間は終わったらしい。

第46話 The Cinderellas explore their way

ダフネは、意を決したように頷き、エバンスさんとハーミー、最後に俺を見た。

「——あたし、クローネに参加するわ」

水を張ったような静寂がプロジェクトルームを包んだ後、ハーミーがため息をついた。

「……察しはついていたわよ」

ありや、そうだったのか。俺とダフネは思わず、顔を見合わせる。互いに「情報を漏らしたのでは」と勘ぐってしまったようだが、ダフネの顔を見る限り、そうでもないらしい。

「……ハーミー、いつから気付いていたの？」

エバンスさんが訊いてくる。

「常務に呼ばれて、って所で。確信がなかったから口には出さなかったけど、やっぱりそういう事なのね」

でも、とハーミーが言葉を続ける。

「クローネに入れ込み過ぎて、E. G. G. Sとしての活動がおざなりになるっていうのは許さないんだから、ダフネ！」

重大な宣言を行なった割にはいつも通りな様子のハーミーに胸を撫で下ろしたダフネが、ハーミーに答える。

「もちろんよ。あたしにとつての一番は、E. G. G. Sなんだから」

——そうか。そうであつてくれるなら、プロデュースしている俺も嬉しい。はふう、と気の抜けたような声がエバンスさんから漏れた。

「良かった〜……。E. G. G. S解散、なんて事にならなくて」

「……言われてみれば、本当にそうね。E. G. G. S最大の危機だったんじゃないかしら」

「……それは俺が許さないからな。E. G. G. Sはまだまだ伸びしろがあるユニットだ。中途半端に終わらせるなんて、絶対にさせない」

そこでだ、と言葉を続けながら、三人にそれぞれ資料を渡す。

「……………これは？」

エバンスさんの質問に、俺は意気揚々と返す。

「新曲だ。『E. G. G. Sとしての』な」

今度は来たるべき時に——『舞踏会』に間に合うように調整した。むしろ、少し早かつ

たぐらいだ。

「E. G. G. Sとしてののつて事は、やっぱり!」

「——ああ。E. G. G. SはE. G. G. Sとして活動を続ける。ダフネにはクロネとしての活動もあるから、忙しくなるかもしれないが」

……まあ、顔を見れば一目瞭然か。

「プロデューサーさんもあたし達のプロデュースと『舞踏会』の準備で、二足の草鞋を履いているもの。あたしも頑張らなくちゃ、ね?」

ダフネの顔は、とってもいい笑顔をしていた。

「分かった。常務に報告しておくよ。俺もサポート出来るように尽力する。但し、言つたからには両方とも手を抜くなよ?」

「ええ、最初からそのつもりよ」

エバンスさんとハーミーの二人も、ダフネに続いて頷いた。

深夜のプロジェクトルームで武内さんは、俺の話を微動だにせず聞いていた。

「そう、ですか。グリーングラスさんも」

「はい」と頷きながら、話を続ける。

「きつと彼女なりに、悩み抜いた末での決意だと思っています」

何せ、決めるまで俺と相談しなかったのだから。常務の言い付け通り、ダフネは自分で決めた。……だったら、後は俺がしっかり支えてやらないとな。

「渋谷さんは、どうですか?」

何気なく話題を振る。アナスタシアさんは参加の意志を伝えたと、武内さんが言っていた。彼は、思い出すかのように天井を見上げた。

「……渋谷さんが、デュアルプリズムの二人とボーカルレッツンをしているのを見ました」

あの二人と、か。

「どうでした?」

俺が訊くと、武内さんはこくりと小さく頷いた。

「……常務の言っていた通り、新たな可能性を感じました。ニュージエネレーションズではなし得ないような、違う輝きを」

武内さんからしてみてもそうなのか。常務を振り向かせる程だったから、武内さんも無視できる訳がないのは予想がつく。

「現在、渋谷さんとアナスタシアさん、それにグリーンガラスさんも、新たな挑戦をしようとしています」

武内さんはそう言いながら顔を上げて、俺をじつと見る。

「シンデレラプロジェクトやE. G. G. Sも、挑戦すべき時なのかもしれません。彼女達が輝きを増すような、新たな挑戦を」

「新たな挑戦、ですか」

ダフネ達三人がクローネに参加するような、違う可能性を見つける試み——。

「実は先程、本田さんが私に相談してきました。渋谷さんが新しい何かに挑戦するならば、自分も挑戦しなきゃいけないのでは、と」

武内さんの話しぶりから、渋谷さんがニュージエネレーションズの仲間打ち明けたらしい事が察せた。そうでもなければ、そんな話になる事もないだろう。

「それは——」

「はい。それは自分で決めることだと、……突き放すような言い方になってしまいました。が、そう答えました」

「本田さんの様子は？」

「いい、笑顔でした。違う可能性があるなら、それを見つける手助けをして欲しいと。——

アイドルとして、ニュージエネレーションズのリーダーとして、成長したいと、そう言っていました」

「そう、なんですね」

密かに胸を撫で下ろす。言い方はかなり悪いのだが、本田さんには前科がある。これ

で再び辞める辞めないの騒動にならなくて良かった。

「新田さんもアナスタシアさんのクローネ参加を受けて、ソロでの活動を視野に入れています。私は、彼女達の挑戦を支えたいと思っています」

「……はい。それは、自分も同じです」

もし、渋谷さんがトライアドプリムスで見つけたような、「違う可能性」を皆が見つけたならば——『舞踏会』に持って行けるような、武器の一つになるだろう。あの三人に聞けば、常務に先手を越されてしまった。だが、他のアイドル達の分は俺達が見つけ出さないと。

「見つけましょう。彼女達の可能性を」

俺が伝えると、武内さんは「はい」と力強く頷いた。

「その為に、私達は為すべきことを行なっていきましょう」

「ええ」

時計の針は、静かに動いていた。

『舞踏会』についての打ち合わせを終えて、プロジェクトルームへ戻る途中。廊下の壁に寄りかかっている美嘉が視界の隅に入ってきた。

「………よっ」

俺は声をかけるが、美嘉は微動だにしない。その目は、真っ直ぐにクローネのポスターを向いていた。

「……進兄は聞いている？ 未央が、オーディションを受けるつもりだって事」

「オーディション？ 初耳だな」

殆ど今日に近い昨日、武内さんが言っていた事と何か関係があるのだろう。しかし、

昨日の今日だ。ヤケに話が早いな。

「何のオーディションだ？ ドラマ？」

「ちよつと近いかも。舞台だって」

「へえ、舞台」

前回とは違い、彼女なりに成長しようとしている訳か。うんうん、お兄さんは嬉しいぞ。

「……なんか嬉しそうだね、進兄」

俺の方を向き直った美嘉は、ぎろりと睨みつけてきた。

「まあ、本田さんが新しい事にチャレンジしたいみたいなのは聞いてたからな。多かれ少なかれ、あの子にとってはプラスになると思うぜ」

中でも、本田さんはシンデレラプロジェクトのムードメーカーみたいな所がある。シンデレラプロジェクトの全体的な動きの中心には、彼女が関わっている事も多いのだ。

もしそれが、シンデレラプロジェクトの歩き出す切っ掛けになるとすれば——本田さんのみならず、プロジェクト全体にとつてもプラスになるはずだ。

「……進兄はさ、不安にならない?」

「——何が?」

不安つて意味なら、正直いつクビになるか分からない怖さがあるけど。おそらく、そんな事じゃないのだろう。

「何が、つて……。このまま、皆がバラバラになっちゃう事」

クローネのポスターは、ダフネや渋谷さん達の分——正式に決定していない分は「coming soon:。」とぼかさされている。しかし、美嘉はそのポスターの中に、渋谷さん達が入っている所を想像してしまったのかもしれない。

「バラバラにはならない。ニュージエネレーションズはニュージエネレーションズのまだし、E. G. G. SはE. G. G. Sのままだ」

「でも……! このまま別の活動をしてしまったら……」

「——美嘉。あまりあの子達を舐めるな」

気付けば、声のトーンが少し低くなつてしまつていた。

「美嘉は、どういう風にその話を聞いたんだ? 面と向かつてか?」

「ううん。昨日の夜……未央からメッセージが来て」

……つまり、顔色や声の調子は知らないってことか。道理で、あらぬ心配をしている
と思った。

「進兄、アタシは舐めてる訳じゃないって。ただ、心配で——」

「ああ、心配しているのは分かっている。でも、バラバラにはならねえよ」

ダフネは言った。「自分にとつての一番は、E、G、G、Sだ」と。本田さんは笑顔で
言っていた。「ニュージエネレーションズのリーダーとして、成長したい」と。その気持
ちがある限り、彼女達は決してバラバラにはならない。なぜなら——。

「ここは、バラバラになってなんかいいんだよ」

左手の親指で、トントンと自分の心臓の辺りを軽く叩く。

「——心？」

確かめるように出て来た美嘉の言葉に、俺は頷く。

「ああ。心だ。皆、心で繋がってる。だから、バラバラにはならない」

だから、美嘉は舐めてしまっている。彼女達の決意を。彼女達の意志を。彼女達の——

——結束を。

「……そっか」

美嘉はふっと顔を下げると、すぐに頭を上げる。何処か吹っ切れたような、いい笑顔
だった。

「成長してんだね。あの子達も」

「ああ。俺が保証するぜ」

にいつと俺も微笑み返す。E・G・G・Sは勿論の事、何だかんだで、シンデレラプロジエクトに關しても色々世話を焼いた身だ。歩み始めた時と比べてしまえば、彼女達は着実に成長している。

「にしても……進兄も暑苦しくなったね」

美嘉が茶化すようににやにやと笑う。

「うっせ。自分でもクサイなと思つてたんだぞ」

あーもう、何が「心だ」だよ。少年漫画かつつの。こちとら累計年齢五〇超えだぞ。はあー、恥ずかしい恥ずかしい。

「ま、そんなこんなで。美嘉。——俺達も、サポートは行なうつもりだ。だが、至らない所もあるかもしれない。そんな時……起きない方が良いのは分かっているが……手助けして貰えるか？ 出来る限りでいいから」

美嘉はにやけるような笑いをやめて再び爽やかな笑顔に戻ると、力強く頷いた。

「もちろん。言われなくても、そうするつもりだったし」

「だったら助かる。それじゃあ、頼んだぜ」

「うん」

——ホント、柄にもなく熱くなっちゃったな。

ストリングスの音色に合わせ、煉瓦造りの廃墟が映し出される。セピア色のフィルムター越しにそびえ立つ廃墟は夕日を浴びたかのようで、廃墟は朽ち果てた城のようにも思えた。セピア調の落ち着いた画面の中、一際映えて見える深紅の林檎が持ち上げられる。

持ち上げられた真つ赤な林檎から飛び出してきたのは、まるで宵闇を連想させるような真つ青な羽の蝶だ。蝶はそのまま羽ばたいて行き、セピア色の画面から色彩を取り戻していく。——まるで、古ぼけた写真が再生していくかのように。

廃墟となり、崩れかかった建物も徐々にその姿を取り戻していく。青い蝶が、魔法で直していくかのようにだった。蝶は役目を終えたかのように、穏やかに高度を下げていく。——その蝶の一匹を指に乗せたのは、速水奏。横にはクロローネのメンバーが立っており、セピアから抜け出した星空を見上げていた——。

「……君は」

エントランスのモニタで流れているそのPVを見ていた今西は、ほとんど誰にも聞かえないような声で呟いた。

「君は346を、この会社をそのように思っているのかい？」

ほとんど聞こえないような小声である事に加え、周りに誰もいないので答える声はない。……それでも、彼は口に出して訊かずにはいられなかった。

物静かなエントランスでは、彼の質問に答えることもないモニタから、映像の音のみが響き渡っていた。

第47話 The Cinderellas walk

their way

プロジェクトルームは若干人数が減ったとは言え、大所帯のままであることには変わりなかった。

「さて、秋ライブは少し今までとは毛色が違う。そうだな、簡単に言えば、『舞踏会』に向けての中間試験だと思えばいい」

えー、と莉嘉が落胆するような声を出した。

「テストはやだなー……。進にーちゃん、どうにかならないの?」

中間試験、って言葉だけでそんな風に思われてもなあ……。エバンスさんも、そこでガタガタ震えるのは止してくれ。

「……常務は『舞踏会』についての承認を行ないましたが、撤回もまた有り得ます」
武内さんが俺の代わりに説明し始める。

「他の役員の方達は常務の方針に疑問は持つてこそいるものの……、私達のやり方にも首を縦に振り切っていないのが現状です」

簡単に言えば、「新しいイベントをしてまで反対することか?」となっている、という

訳である。今西部長が粘り強く交渉をしてくれていてお陰で、俺達に対しては強い反対が起きていない状態であるのだが。

「プレッシャーをかけるような言い方になってしまいが、『舞踏会』が十全に行なわれるかどうかは秋のライブに関わってくる。あー、そうだな……。ファンだけじゃなく、お偉いさんも見えていると思ってくれていい」

「偉い人……。みく達、偉い人に見られているにや!？」

前川さんが声を若干上ずらせながら、戦々恐々とした面持ちで訊いてくる。

「厳密には、収入だけみてるようなモンだけど……。まあ、そうだな」

「どの道、やる事は変わらないわ! 精一杯レッスンして、最高のライブにすればいいんだから!」

ハーミーが息巻く。その言葉に賛成するように、島村さんは力強く頷いた。

「はい! 島村卯月、頑張ります!」

部屋の中にいるアイドル達は、島村さんに続いて頷いた。

「もちろん、きらり達も頑張るにいい!」

「杏は明日から頑張るよ」

「で、出来れば……。今日から頑張った方がいいような気もするけど……」

「杏ちゃんはいいつも通りだね」

やいのやいの、と騒々しくなる。……やる気は充分と言ったところか。

「そこで、だ。シンデレラプロジェクトとE・G・G・Sは、なるべく合同でレッスンをしようかと思っているんだ」

「……合同、ですか？」

E・G・G・Sさんの言葉に「はい」と返しながら、武内さんが説明をする。

「現在、私と城戸さんの方で、シンデレラプロジェクトとE・G・G・Sの共同楽曲を企画しています。現在はまだ企画段階ですが、『舞踏会』に間に合うタイミングで本格的なレッスンに入れるよう、調整は行なっています」

アイドル達の顔が徐々に輝いていく。——これは、武内さんの方から出て来たアイディアだ。何かと親交の深い新人アイドル同士が、プロジェクトの垣根を超えて手を組み、新たな曲を披露する。元々大人数だったシンデレラプロジェクトにE・G・G・Sが加わるので、かなりの人数で合わせる事になってしまっただが、まさにこれは常務に對する「共同戦線」の表れのようなものである。乗らない理由がなかった。

「いつ曲が出来ても良いように、シンデレラプロジェクトのレッスンにE・G・G・Sもお邪魔する感じになる。……まあそうでなくとも、他のアイドルから見た指摘とかアドバイスとかも取り入れることが出来る、いい機会だと思っている」

特に人数が少ないE・G・G・Sに関して言えば、かなりいい刺激になる。自主レッ

スンで一緒になる事が時々あるとはいえ、最初からレッスンを本格的に合同でやるのは初めてだ。意識も違ってくるだろう。

逆に武内さん——シンデレラプロジェクトに関しては、ダンスのエバンスさん、ポーカーのハーミー、見せ方のダフネとより特化したアイドルからのアドバイスが期待できる。彼女達から吸収出来ることは多いはずだ。

本格的な共同戦線は秋ライブが終わってからになつてしまいが、その前から結束を強める事に損は無いし、互いのアドバイスは合同楽曲の前からも生きてくる。そこで、E・G・G・Sもシンデレラプロジェクトのレッスンに加わる事にしたのだ。

「ハリエツトちゃん、ハーミーちゃん！ アドバイス、期待しているにゃー！」

前川さんが前のめりになりながら、E・G・G・Sの二人に詰め寄るように言う。エバンスさんは苦笑いしながら、ハーミーはふんぞり返りながら各々答える。

「ちゃんとしたアドバイスが出来るか不安だけど……。頑張ってみるね」

「もちろん、わたしも全力を尽くすわ！」

「ダフネには先に話を通してある。そつちの分のスケジュールは俺の方が確保しているから、日程の調整を始めようか」

……やはり、シンデレラプロジェクトもE・G・G・Sも互いに忙しくなったため、なかなか全員が揃ってレッスンが出来る日がない。片手で数えられるくらいだ。とは

言え、E. G. G. Sの方は人数が少ない分若干フットワークが軽いため、シンデレラプロジェクトのメンバーのレッスンにちよくちよく顔を出せそうではある。——勿論、エバンズさんとハーミーに限った話になるが。ダフネも揃って、となると苦しい感じになる。

「ごめん、遅れた」

粛々とスケジュールが埋まっていく中、部屋に入ってきたのは渋谷さんだった。

「凜ちゃん!」

島村さんが跳ね上がるように立ち上がると、渋谷さんの方へ嬉しそうに駆け寄っていった。

「卯月……」

「今、皆で秋ライブに向けたスケジュールの調整をしていたんです!」

いつの間にかスケジュール調整を牛耳っていた前川さんが、腕を組んで島村さんの言葉に頷く。

「今回はなんと、E. G. G. Sと一緒にレッスンをする事になったにや! 他のアイドルが見ている分、レッスンの手は抜けないにや!」

「頑張ろうにい!」

明るく出迎えてくれたメンバーの声に渋谷さんは一瞬微笑むが、再び表情が暗く沈ん

だ。渋谷さんに釣られて静かに沈んだ空気を変えようとするかの如く、多田さんが新田さんに訊いた。

「……ラブライカも、この日、もちろん参加できるよね？」

新田さんが小さく頷いて答える。

「あ、うん。私はソロ曲のレッスンがあるけど、遅れて参加出来そう」

新田さんの口から出て来た「ソロ曲」と言う言葉に反応してか、再び部屋の中が静かになった。——各々の表情は困惑であったり、無表情であったり、引きつった笑顔であったりと様々だった。少し前にあった、本田さんのソロ活動宣言が脳裏に巡ったのだろう。ほとんど誰にも相談していなかったらしく、ハーミーに「どうして教えてくれなかったのよ！」と文句を言われたくらいだったからな。

「渋谷さん達は——ニュージェネレーションズは、秋ライブに出られるんですか？」

エバンスさんの質問にも、渋谷さんは押し黙ったままだった。視線が一斉に武内さんの方を向く。

「ニュージェネレーションズに関しては——調整中です」

シンデレラプロジェクトのアイドル達——特に島村さんが、がっかりしたように視線を下げる。

「……ごめん、みんな」

「り、凜ちゃんのをせいじゃ——」

「そうよ！ 渋谷さんは何も悪くなんかないんだから！」

島村さんとハーミーが慌てて取り繕うも、渋谷さんは顔を俯かせたままだった。

スケジュールの調整を何とか終えて、『舞踏会』の打ち合わせを終わらせた後。部屋の前のドアでは、武内さんがドアノブに手をかけたままの状態で動きを止めていた。ドア前のベンチには、美嘉の姿もある。

「——皆さんには、申し訳ない事を」

項垂れるような声で言う武内さんを、美嘉は笑い飛ばす。

「未央は自分で乗り越えるって言ってたんでしょ？ ……だったら、あの子達も、だよ。

今は、見守るしかないって」

「それに」と美嘉は続ける。

「……進兄が言ってた。例えばバラバラになっても、心は繋がってるって」

武内さんが美嘉の方を向く。

「だから、大丈夫だって。あの子達は進兄のお墨付きだから」

……言ってくれるな、美嘉のヤツも。この空気を壊すのは忍びないな。俺はゆっくりと階段を上がり、二人の近くから離れる事にした。

それは偶然だった。

「……あ」

「やつほ、はみはみ」

未央さんがエントランスにいた。いつもと変わらないような様子で。

「……その、舞台に出るって言ってたけど」

わたしがそう切り出すと、「待ってました」と言わんばかりに未央さんが笑った。

「そうー！ そうなんだよー！ いやー、中々奥深いよね、演技って」

楽しそうに話すその姿からは、デビューライブ直後のような、やけっぱちになったような雰囲気が見当たらない。

「未央さん、その——」

「あつ、そうだ！ しまむーとしぶりんは？ 元氣してる？」

言えるわけないわ。何だかぎこちない感じって言ったところで、未央さんを困らせるだけだもの。わたしが無言を貫き通していると、未央さんは苦笑した。

「……そつか。まあ、そうだろうね」

未央さんはスマホを取り出すと、素早く何かを打ち込んだ。——メッセージを送ったみたいね。

「じゃ、ちよつと用事が出来たから行くね！　また後で！」

「え、ええ——」

意気揚々と階段を駆け上がっていく未央さんに向かって、わたしは大声で言った。

「今度からは、わたしにも相談しなさい！」

ふと足を止めた未央さんは、くるとこちらの方を向く。特に神妙な顔つきをしているとかじゃなくて——困ったような笑顔だった。

「ごめんごめん！　次からは気を付けるよ！」

未央さんはそこから、更に続けて言った。

「しまむーとしぶりんにも言ったんだけどさ。——はみはみも、何かやりたい事があつたらチャレンジしてみなよ！」

言いたい事を言い切つたような顔で、未央さんはそのままスキップするように去つていった。

「どしたハーミー？　今から帰るのか？」

プロデューサーが今更やって来て、呑気に声を掛けてきて、少しむつとしてしまったわ。

「……どうして未央さんがソロ活動するって事、言つてくれなかつたの？」

この前にもぶつつけたわたしの疑問に、プロデューサーは「そうだなあ」と頭を搔く。

「俺も言おうと思っただが、止められたんだよ。本田さんに」
「未央さんに？」

ああ、と返事をする、プロデューサーはため息をついた。

「せめて、ハーミーくらいには言っておこうかと思つてた矢先にな。本田さんが自分で言う、つて言い出して。——まあ、まだ選考待ちだったからかもしれないけど。正式に決まったわけじゃないのにソロ宣言もダサイとか考えたんだらうな」

「そんなの——」

ぼつりと、言葉が漏れた。

「そんなの、身勝手過ぎるわよ。せめて、相談くらいして欲しかった」

頬をすつと、生暖かい雫が通った。普通に呼吸をしようとしたけど、しゃっくりみたいに息が詰まり、引いたような声が口から出てくる。

「……大丈夫だ、あの子はシンデレラプロジェクトを、ニュージエネレーションズを見限っていない」

プロデューサーはグレーと濃い緑の細かいチェックが入ったハンカチをわたしに渡す。

「ハーミーは何も悪くない。あの子にとってみたら、信頼出来る友人だと思うぜ」

「だってこう言つてたし」とプロデューサーは続ける。

「絶対にはみはみに言わないで、考えすぎちゃうから」ってな」

——確かに考え込んでしまったかもしれない。「常務が何か言ってきた」って思っ
ちやうかもしれない。もしかしたら——必死に引き留めようとしていたかもしれない。
未央さんが、本当にやりたいと言っていたとしても。

「……ほんつ、とーに、馬鹿なんだから！」

視界がかすみ、渡されたハンカチを顔に押し当てる。それでも、綺麗に畳まれたハン
カチの隙間から、泣き声が漏れ出てしまった。

「……あのさ、鼻づむのはやめてもらえねーかな？」

わたしも出したくて出してる訳じゃないわよ！

第48話 She decide her way

屋上の庭園では、未央が立っていた。いつもと変わらないような笑顔で。

「おつ、しまむーにしぶりん、来たねー！」

「……私達も、未央に話が——」

そこまで言った所で、未央は何かを私と卯月に渡す。

「ちよつと練習に付き合つてよ。これ、台本」

——メッセージアプリでは、「話があるから来て」とだけあった。これが、私達を呼んでまでしたかった事なのだろうか。

「未央、はぐらかさないでよ！」

思わず口調が強くなつてしまった。しかし、それでも、未央の表情は変わらない。

「はぐらかしてないよ」

今までに見たことがないような顔だった。自信を持っているわけでも、面白がついてるわけでもないような、落ち着いた表情。

「アンタみたいに勝手な人なんてもう知らないわ！」

「え……っ」

卯月が言葉に詰まっていると、未央は台本を見せつけるように掲げ、にこりと笑った。「ほら、セリフセリフ。台本四五ページ目。しまむーからどうぞー!」

卯月は台本をせっせと開くと中身を流し見て、「はい!」と頷いた。——やるんだ。「坊っちゃんま、落ち着いて」

慣れない様子で卯月がセリフを読むと、未央は私を見る。——どうやら、次の役は私ができるみたいだ。

「僕はもう生きられないんだ。ベッドから動けなくなつて……僕は、春がくる前に……」
「ああ、可哀想な坊っちゃんま」

「バカね! アンタはちつとも弱つてなんてないじゃない! アンタの病気の半分は、アンタ自身よ!」

「ずきり、と心に棘が刺さつたような感覚がした。しかしそれでも、未央は続ける。「自分に呪いをかけているんだわ!」

「まあメアリーさん、なんて事を」

卯月のセリフが終わり、また私のセリフだ。

「僕は君と違つて、身体も弱くて……本当に外に出られるの?」

「身体も弱くて」という一節で、脳裏に加蓮がよぎる。

「アタシだつてここに来た時は身体も弱くて、それに外だつて大嫌いだったわ。でも——

「マーサやディコンが教えてくれたの」

噴水の辺りをうろうろとしながら台本を読んでいた未央は、こちらに近付くと台本から視線を外した。爛々と輝く瞳が、こちらを見ていた。

「外は宝物でいっぱいだって！」

未央はそのまま、夕暮れの空を見上げる。私と卯月も、釣られて空を見上げた。

「そうよ！ 空は高く、ハリエニシダやヒースやバラが芽吹いているの！ 外の空気を、いっぱい吸って！」

今、目の前で台本を読んでいるのは一体誰なのだろうか。「未央だ」と言われてしまえばそれまでなのだが、それでも、私には別の人物のように思えた。

「僕も、いっぱい吸えるかな」

口調は自然に、未央に訊くようなものになっていた。

「そう、私には冒険だった」

未央もこの役——メアリーと同じように、冒険で何かを見つけたのだろうか。私達では見つけられなかった、外の宝物を。

「僕は、君の見ているものを見たかった」

もしかしたら、違うところから違うものを見るのかもしれない。それでも、——例えそうだとしても。

「コマドリが呼んでいるあの花園……!」

ページをめくる。卯月のセリフの後に歌が挿入されるらしいが、その後のセリフは私だった。

「なんて美しいんだろう……僕はもつと早くにここに来るべきだったのに」

「うん、ごめん。待たせて……」

未央のセリフを受けて、卯月は台本に目を通す。「あ、あれ？」と眩いた後、首を傾げた。

「どこ……?」

「えっ?」

私も急いで台本を確認する。——確かに、未央の役が謝罪するような事は書いていない。台本の中のメアリーは未だに、私がやっている役を叱責していた。

「大丈夫! これからだもの! 明日も明後日もここに来ましょう!」

未央はそう言うのと、私達に向かってにかりと笑った。

「そうさ、春の次は夏、その次の秋も、冬も……ずつとずつと……」

卯月の声は、徐々に小さくなっていった。

ほう、こりや驚いたな。演劇に関してはど素人だと聞いていたが、目の前の本田さん

は、大女優とはいかないまでも、光るものがあつた。

「未央さん……」

ハーミーが言葉にならないような感慨の声を上げる。

「確か、そんなに前じゃなかったよね？ みおちゃんかソロ宣言したの」

多田さんが驚いたような声を上げる。何かを決心したようなハーミーを追いかけた先には、シンデレラプロジェクトの皆とエバンスさんがいたのだ。

「すごい……。女優さんみたい……」

神崎さんが素の言葉で感激する。神崎さんの言う通り、今ニューヨークエネレーションズの二人と相對している本田さんはアイドルと言うよりもむしろ、女優のようだった。いや、女優というか——役のメアリーか。

「……未央ちゃんも、一生懸命頑張ってるんだ」

前川さんが呟く。

「そうですね。ぼく達も、頑張つていけないと」

エバンスさんが前川さんの言葉に頷く。

「ああ。秋ライブが一緒に出来なかったとしても、『舞踏会』がある」

島村さんのセリフのように、その次の秋も、冬も、ずっとずっと。時は進んでいくし、次がある。今回はたまたま、ちょっととした寄り道になるだけだ。

『恐れずに踏み出せば、花園は私たちを待っていてくれるわ!』

本田さんが屋上に響き渡るように言う。

『花園は生きざる輝き』

渋谷さんが嘸み締めるようにセリフを続ける。

『花園は……魔法の、場所』

一方の島村さんは、確かめるような口調で渋谷さんに続いた。

『花園は、魔法の場所』

堪えきれない、と言った様子で莉嘉が物陰から飛び出し、三人に駆け寄る。

「すーいー!」

ニユージエネレーシヨonzの三人は、突如現れた来訪者の登場に驚きを隠せないでいるようだ。——諸星さんを初めとした、他の面々も立ち上がって三人の元へと歩み寄る。まあ、このまま隠れているだけつてもアレだな。エバンスさんとハーミーが立ち上がった後に、俺もゆっくりと立ち上がる。

「とーつても綺麗だったよお!」

諸星さんがにこやかに話している所で近付いていくと、渋谷さんは若干顔をしかめる。

「げっ、城戸さんもいたんだ……!」

げつ、とはなんだげつ、とは。

「ま、流れでな。——本田さん、いい演技だったぜ」

「キラキラしてたー!」

みりあちゃんがこくこくと頷く。彼女の言う通り、言葉にするなら本田さんは「キラキラとしていた」。

「みく達もうかうかしてられないにや! キラキラするよ!」

「へへっ、そうだね!」

アスタリスクの二人は、互いに決心を固めたように顔を見合わせて頷く。

「——しぶりの気持ち、知りたいって思ったの。ちゃんと返事したかったから」

本田さんが渋谷さんに向かって、優しい笑みを向ける。

「どうなの? ちゃんとわかったのかしら未央さん?」

ハーミーが試すように訊くと、本田さんは「うん!」と力強く頷いた。

「ちよつとずつ分かってきた!」

「……未央」

渋谷さんは「仕方ないなあ」とでも言いそうな顔をしながら微笑んだ。

「プロデューサー、良かったですね」

エバンスさんが俺に向かってほつりと言う。

「そうだな」

バラバラなんかじゃない。一見違う道を歩いているようでも、彼女達は繋がっているんだから。

翌日、武内さんは俺に面と向かって言った。

「渋谷さんから回答がありました。——クローネに、トライアドプリムスに参加すると」「そうなんですな」

アナスタシアさん、ダフネに続いて遂に、か。常務にとってみれば、真打がやっと動くことになる。

「そこで、お願いがあるのですが」

断る理由はないな。武内さんが言い切るよりも先に、俺は返事をした。

「任せてください。秋ライブまでの彼女達のサポート、行ないます」

武内さんは驚いたように目を見開くと、静かに微笑んだ。予想は当たっていたようだ。

「お願い、出来ますか？」

「はい。『舞踏会』の準備は、しばらくの間武内さんと千川さんに一存する形になります」

「そこは他のプロデューサーの方々の助力もありますので、問題はありません」

だったら、大丈夫か。引き継ぎ用の資料もちよくちよく作っているし、スムーズに任せられるはずだ。

「特にE. G. G. Sに関して言えば、『舞踏会』に向けた新曲と、合同曲の事もあります。ただでさえ忙しくなる城戸さんに、全てを押し付ける事は出来ませんので」

まあ、そうだな。だからといって、反常務派筆頭の武内さんがヒョコヒョコとクローネのレッスンを見に行っても、常務にいい顔はされないだろうし。ここは実際にレッスンを見学した実績のある俺が、クローネの様子を、三人の様子を見る方が何かと良いだろう。

「有り得ないとは思っていますが、万が一、もし、何らかの良くない圧力を受けている場合——」

武内さんが声を潜める。

「はい——」

自然と、俺も声を潜める形となってしまう。「良くない圧力」とは、穏やかじゃない言葉が出てきたな。

「その場合、助け舟を出していただけませんか？　それが渋谷さん達のみならず、クローネの他のメンバーだったとしても」

基礎レッスンをしていた、クローネのメンバーが脳裏に浮かぶ。——今は彼女達も、アウエーの状態だ。常務の肝いりという事で掛けられるプレッシャーは、並大抵のものではないだろう。

「——ええ。そのつもりです。元から自分達の目標は、そこなんですから」

アイドル事業部全体を救う。——それは、仮に常務が選んだアイドルだったとしても、例外にならない。

「……お願いします」

「はい、任せました」

——秋ライブまで日がない。しっかりと様子を見てやらないと。

常務はいつもとあまり変わらない様子だったが、何処かご機嫌な空気が漂っていた。おそらく、渋谷さんのクローネ参加が決まったからだろう。

「まさか、引き留めるわけではあるまいな？」

とは言え、俺の訪問に若干警戒しているようだった。……まあ、武内さんと一緒に、方針に難色を示し続けたからな。仕方がないのだろう。

「いえ、彼女達が自ら選んだ道です。邪魔する資格も、引き留める権利もありません」
「ほう、ならばどうした？」

一呼吸置き、常務をじつと見る。

「クローネのレッスンに時折顔を出したいと思ひまして」

「と言うのは？」

無下に突つ撥ねるといふ事もなく、彼女は続きを言うように促す。

「グリーングラスについてですが、やはり彼女は私の担当アイドルです。そうなれば、彼女の成長が気掛かりになります」

「成長しないとでも？」

「全くの逆です。彼女の成長に合わせ、E. G. G. Sのレッスン内容も調整しないといけないと考えています。より高いレベルに」

ふむ、と納得したように常務は鼻を鳴らす。

「つまり、君が担当するユニットの躍進のため、レッスンをみたいと言うことだな？」

「はい。おっしゃる通りです」

さて、どうだろうか。これでも納得しないのであれば、まだまだ根拠は言える。「以前見学した」だの、「クローネ所属の数人とは顔見知り」だの、武内さんの名前を出さずに言える事はまだ沢山――。

「いいだろう。本業を疎かにせず、私の理想を邪魔しない範囲ならば、君がレッスンを見る事は咎めない」

意外とあっさり決まっちゃってしまい、ずっとこけそうになってしまった。……え？ そんな簡単に決めていいのか？

「彼女達も、誰かの目がある方がレッスンに身が入るだろう。重ねて言うが、邪魔はしないでくれるな？」

「——はい、勿論です」

なんと言っても、クローネは常務のみならず「所属しているアイドル達にとっても」起死回生のプロジェクトだ。元デュアルプリズムの二人にとつてみれば、正に言葉通り。

「……ふむ。午後四時から、丁度基礎レッスンがある。以前と同じ部屋だ。早速顔を出してみてもどうだ？」

「はい、承知しました」

常務に一礼して、そのまま部屋を出る。……すんなり決まりすぎて逆に怖いな。何か裏があるのだろうか。

第49話 He visits girls put
on the crown

予定よりも一〇分ほど早くレッスルームに入る。既に何人がおり、柔軟で身体をほぐしている最中だった。

「——え、城戸さん？」

真つ先に反応したのは神谷さんだった。その言葉に反応したらしい鷺沢さんと唯が俺の方を見て、駆け寄って来た。

「どしたの？ ゆいには会いたくなっちゃった？」

「お久しぶりです、城戸さん。この前はろくにお話も出来ず、すみません」

にかりと笑う唯と、ペこペここと頭を下げる鷺沢さん。——こうして見ると、なかなか対照的な二人だ。

「ああいや、俺の事は気にすんな。一人のプロデューサーとして、レッスンを見に来ただけだから」

部屋には——元デュアルプリズムと速水さん、それに鷺沢さんと唯、橘さんに宮本さんか。後一〇分もないはずなのだが、全然揃ってないな。特に、シンデレラプロジェクト

トの二人とダフネの姿がないのが気がかりだ。

「なあ、ダフネの姿が見当たらないんだが」

俺の質問に答えたのは速水さんだ。

「ああ、あの子ね。周子と一緒に、志希を探しに行ったはず」

「また一ノ瀬さんか……」

何だろうか。何となく双葉ちゃんを思い出すな。しかしまあ、ダフネは結構早い段階で打ち解けているらしい。そうでもなきや、何処かに行ったメンバーを探す事もないだろうし。

「連れて来たわよ、カナデさん……あら？ プロデューサーさん？」

噂をすれば、だな。失踪癖のある問題児は、塩見さんに羽交い締めにされてげんなりとしていた。

「よっ、ダフネ。俺はただの見学客だ」

「あら、いいのかしら？ あたしにばかり構って」

「そんぐれーで拗ねるような子達じゃないっての。……なんつーか、お疲れ様？」

「ホント、レッスン前から疲れたー」

塩見さんはそのまま一ノ瀬さんを部屋の中央まで引き摺ると、ぐったりと伏してしまった。当の一ノ瀬さんは悪びれもしてないような顔でにんまりと笑うと、俺をじつと

見る。

「……。——何かな？」

無言の圧力に堪えきれず、つい訊いてしまう。

「……やっぱりおっさん？」

「おっさん……」

転生している以上、強く言い返せないのがつらい。

「ちよつ、この人はまだ二〇代だろ！　なあ城戸さん！　……え、もしかして、アラサー？」

神谷さん、そういう事を訊かないでくれ。何だか虚しくなる。

「一応、二〇代、だぞ、うん、二〇代、だよな、うん」

「自分の年齢だろ！　自信持てって！」

「俺、そんなにオッサンぽいかな……」

「ううん全然！　ピチピチのお兄さんだよ！」

「はい、傍目には歳を重ねているようにはとても」

唯と鷺沢さんが必死にフオローしてくれた。……何だかちよつと情けないな、しつかりしないよ。

「……城戸さん」

続けざまに後ろから声を掛けられる。渋谷さんとアナスタシアさんだった。

「よつ、二人とも。見学に来たぜ」

浮かない顔の渋谷さんと、驚いた様子のアナスタシアさんに声をかける。アナスタシアさんはこくこくと頷き、微笑んだ。

「城戸プロデューサー、宜しくお願いします」

「俺はただ見学するだけだけど……まあいいか。宜しく」

一方の渋谷さんは、複雑そうな顔で渋谷さんと北条さんを見る。二人は渋谷さんに向かってにこりと微笑むと、一回だけ頷いた。

「どうして城戸さんが？ 敵情視察？」

「違う違う。本当に見学しに来ただけだよ」

そもそも、敵視してどうすんだって話なんだけど。

「ほら、俺の事はいいから。二人と話したらどうだ？」

レッスンの開始までもうすぐだが、少しぐらいは会話出来るだろう。渋谷さんもデュアルプリズムの二人を見て、小さく頷いた。

「うん。……私、頑張るから」

「当たり前だろ？ ——頑張れよ」

俺はいっちょ、見学と洒落込むか。

クローネの吸収力は、まるでスポンジと言ったところか。目に見えて、上達が早いような気がする。新人組の振付のキレも、この前より良くなった。ただ、拭えない問題はそこそこにあるようだ。

「はー、はー……。もう、一回、お願いします！」

特に、橘さん。アイドルとしての経験がないのもそうだが、一番年下という事もあり、体力面でついて行くのもやつとというような雰囲気だ。一方のダフネはある程度セーブしているようであり、息は上がっているものの、橘さんよりは疲労困憊しているようには見えなかった。

「んー？ しゅーこちゃんはちよつと休憩しようかなーって思ってるんだけど」

塩見さんが橘さんに向かって言う。それに反応したのは宮本さんだ。

「じゃーフレちゃんもきゅーけー」

……思っていた以上に自由だな、こども。とは言え、アイドルとしての活動が長い二人が休憩する事で、橘さんも休憩に――。

「秋ライブまで時間がないんですよ！ 二人が休憩に入るなら、私は私で動きを確認しますから！」

……いや、素直に休めよ。横の鷺沢さんも辛そうだし。

「橘、さん……。その……。少し、休んでは……」

ほら、鷺沢さんも音を上げちゃってるよ。

「いいえ！　ここが踏ん張り時です！」

鷺沢さんの忠告を無視して、橘さんは振付の確認を行なう。疲れが溜まっているらしく、フラフラとおぼつかない足取りだ。

「橘さん、焦るのは分かってているが、休憩を挟め。変な癖がついても知らんぞ」

流石に見えていられなくなり、橘さんに声を掛ける。彼女はキツと俺を睨みつけると、再びへろへろの身体で振付の確認に入った。——聞く耳持たずか。うーん、仕方がない。

「宮本さん、橘さんを止めてくれ」

俺が指示すると、宮本さんはキョトンとしたような表情を浮かべた後、にやりと笑って橘さんに飛びかかる。

「ほれほれー！　頑張るありすちゃんはどこかー？」

「下の名前で呼ばないでください！　抱きつかないでください！　邪魔しないでくださいー！」

ぎゃいぎゃい騒ぎ始めた二人に便乗してか、一ノ瀬さんも二人に飛びかかった。

「ん、二人ともいい匂い。ちよつと嗅がせて〜？」

「いいよー？」

「良くないです！ 重いです、離してください！」

……少し予想外の事態になったが、まあこれで橘さんは休憩せざるを得なくなっただろう。抗議の視線を送る橘さんを無視して、ため息をついた。

俺の元にやって来たのは、速水さんだった。タオルで汗を拭うと、「ふう」と一息つき、俺に向かってにこりと微笑んだ。

「ごめんなさい。あの子、やると言ったら聞かない子で」

ちらりと速水さんが橘さんの方を向く。橘さんはタブレット端末から目を離して俺を一瞥すると、再びタブレット端末を必死にいじり始めた。……何だか、相当嫌われたみたいだ。

「速水さんが気にする必要はないって。俺も見ていられなくなったただけだから」

実際、鷺沢さんと共に体力の限界になっていたのだ。ここでぶっ倒れてしまつては、後々のレッスンに支障が出る。一ノ瀬さんも普段と変わらない様子ではあるが、相当に消耗しているみたいだし。……三人の体力が割とネックになっている気がする。

「ふふっ。ダフネちゃんの言う通り、ちゃんと見ているのね」

「はは、どうだろうな」

あの二人は露骨にひどそうだったし、素人目にも分かりやすいと思うけどな。しかし、ダフネがそんな事を。感激しちゃうな。

「ダフネちゃん、結構城戸プロデューサーを褒めてたよね」

塩見さんが話に加わってきた。「うんうん」と頷きながら、速水さんは続ける。

「あの子、結構あなたの事を信頼しているみたい。……裏切らないでね?」

速水さんの試すような口ぶりに、笑って返した。

「当たり前だつての。俺はあいつのプロデューサーだからな」

なんとはなしにダフネを見る。アナスタシアさんと話していた彼女は俺と視線を合わせると、小さく微笑んで手を振った。いつもと変わらない様子の彼女に、俺も小さく手を振って返した。

「……何だかさ」

速水さんが声を潜め出した。ひそひそと宮本さんに耳打ちをするのが、内容までは聞き取れない。宮本さんは速水さんの話を聞いて目を輝かせると、俺の方を向いた。

「付き合ってるの!? ダフネちゃんと城戸プロデューサー!?!」

「わー! 直接訊くのはダメでしょ!?!」

——何の話だよ。どうしてそんな話になるんだよ。つーか、犯罪だろそれ。

「えー? お兄さん、カノジョいるの!?!」

ほらー、他の子も来ちゃったし。

「ないからな。俺はいない歴イコール年齢だからな」

……自分で言つて悲しくなってきた。前世からモテた試しがないからな俺。転生すればモテるなんて、ラノベやアニメだけの話だからな。モテない奴が転生した所でモテない。

「へー、ふーん、そう……」

「にやにやするの止めてくれないかな渋谷さん!？」

全然面白くない話なんだけどな俺からしてみたら！

「お兄さんならモテると思うんだけどなー。どうしていないの?」

唯が無邪気に訊いてくる。……そう言えば、考えた事なかったなそういうの。確かに、どうしてだろうか。「あ、あれじゃないかしら」と、ダフネが気付いたように手を打ち合わせる。……お前も聞いていたんかい。

「ほら、城ヶ崎美嘉と親戚だから」

「あー、なるほど」

美嘉はアイドルとして活動する前から、読モとしてもかなり人気があった。高校生の頃も、男子女子問わずしよっちゆう美嘉の事ばかり訊かれてたっけな。だとすると、「城ヶ崎美嘉の従兄」としてだけ見られてたって事か。……それ

はそれで虚しい。完全に付属品扱いじゃねえか。

「じよ、じよ、城ヶ崎、美嘉……!?!」

速水さんが目を見開き、口をぱくぱくさせる。同じように驚いた唯と顔を見合わせ、俺をまじまじと見る塩見さんの背中をばしばし叩く。

「従兄!?! ……えっ!?! 嘘!?!」

何だか久しぶりなりアクシジョンだな。

「マジだよ。……えっちよつと待て、他の皆が驚く分にはいいんだが、どうして二人も驚いてんだ」

あんぐりと口を開けて分かりやすく絶句している北条さんと神谷さんに訊く。君達、美嘉と部署同じだったよね確か? 少なくともちらつと耳にしたぐらいはあると思っただけだ。

「初耳なんだけど……ホントなの、凜?」

「美嘉さんも何も言っただけだ……!?!」

二人はしたり顔で頷く渋谷さんに詰め寄る。……まあ、面識があるって知らなかったら、特に言う必要もない情報かもしれないけどさあ。

「ホントみたいだよ。結構前、二人でデートしてたみたいだから」

「……あ、あれはデートじゃないって! たまたま呼び出されただけだっての!」

くそ、凸レーションのイベントの事を今更持ち出してくるなよ！ 思い出すのに時間がかかったじゃねえか！

「じゃあデートじゃん」

渋谷さん、何か不機嫌なんですかね？ レッスンの最中は割と楽しそうじゃありませんでしたか!?

「モテモテじゃん!」

唯が「嘘を言うな」とでも言いたげに睨み付ける。

「奏ちゃん奏ちゃん、どう思いますか？ しゅーこちゃんはモテてるに一票」

「……キツチリやる事はやってそうね」

「おつ、一〇〇票入った!」

「ないないない! マジでないって!」

「……うーん、ゼロ票」

「一票の格差!」

何をやるってんだ!?! あの後現地解散一人飯の男に向かって、何が「やる事やってる」だよ! アレか!?! 孤独のグルメごっこか!?

「あの、すみません」

鷺沢さんが恐る恐る手を上げる。一旦場が静まり返ったかと思うと、皆が彼女の方を

向く。

「どうかしたの？ 鷺沢さん」

速水さんが声をかけると、鷺沢さんはこてんと首を傾げ、不思議に思っているような口調で訊いてきた。

「その……城ヶ崎、美嘉、という方は、かなり有名なのでしょうか。私、聞いた事がなくて」

——えええ？ マジでか?!

「えっ、知らないの!？」

一斉にレッススルームがどよめく。その反応にむしろ動揺した鷺沢さんはびくりと肩を震わせ、申し訳なさそうに付け足した。

「ごめんなさい、私、こういう世界には疎くて……」

……マジすか。疎くても知ってるもんだとばかり思ってたんだけどな。

第50話 The Cinderella who

put on Krone

タブレット端末を操作し、画面を文香さんに見せた。

「はい、文香さん。この人です」

しきりに更新が行なわれているネット百科事典の記事を一読した文香さんは、「ほへえ」と言葉にならないようなため息をついた。

「凄いお方なんですね。城戸さんの従妹さんは」

「……正直、あの人が親戚って事は信じられませんけど」

今もこうして、女の子に囲まれてヘラヘラしてる。346プロダクションのプロデューサーだと言うのに、恥ずかしい人だ。

「何だか、信用できません。急にやって来て、急に休憩を挟んで。おまけに軽い人じゃないですか。信用しろっていう方が無理です」

私がきつぱりと言いつけると、文香さんは未だに女の子とじゃれ合っているダメ男を眺めて、小さく笑った。

「——私はそう思いません。城戸さんは、気さくで話しやすい方ですが、軽い人だとは思

えません」

「……気さく、ですか」

文香さんの言う通り、美城常務よりかは話しやすい印象はある。……でもそれは、ただ単に雰囲気怖くないってだけの話で、「信用出来るか出来ないか」と言つた事には結び付かない。

「はい。今日こうして来たのも、新しく入つた三人を心配しての事じゃないかと思つています。……ほら、渋谷さんを見てください。リラックスしてきますよ」

文香さんに促されて、今日から本格的にレッスンに入つた、綺麗な長い黒髪の人を見る。部屋に入つた時の沈んだ表情は消えていて、ダメ男の様子に顔色をコロコロと変えていた。

「あれは、リラックスしていると言えるんですか?」

私には、情けない兄貴分をたしなめる妹分にしか見えない。なんと言うか——比較的、むすりとしている表情の方が多いような気がする。

「ふふつ、リラックスしていると思えますよ」

文香さんが何を感じ取つたのかは分からない。ただ、私からして見れば、城戸進ノ介という人物は、結局女の子に囲まれて調子に乗つてるようにしか見えなかった。

速水さんが物凄い剣幕で、一ノ瀬さんに詰め寄る。

「さあ、どう？　どうなの志希!？」

一ノ瀬さんは俺の臭いをすんすんと嗅いだ後、「うくん」と考えるように唸った。

「……特に、美嘉ちゃんだっていうカンジの匂いはしないかな。特に、特定の女の子ってカンジでもないと思うけど……やっぱりオッサン？」

だからオッサン扱いはやめてくれよ。前世の享年も転生した後の今もピチピチの二〇代なんだから。

「……ホントだったんだ」

はああ、と脱力したような声を上げて、周りのアイドル達は脱力した。

「なあんだ。面白くない」

北条さんがぼつりと零す。唯はそれに「でもでも」と言葉を続ける。

「つまり、お兄さんはフリーって事じゃん!」

「うんうん、それでこそ城戸さんだよ」

「渋谷さん渋谷さん、その言葉の意味について詳しく聞き正したいんだけど」

「女の気配がないのはあたしが保証するわ。いつも仕事の話ばかりだから」

「もう少し早く保証して欲しかったなダフネ!」

そんな話をしている折、鋭く抗議するような視線を感じる。……橘さんか。彼女は俺

と視線が合うと、軽蔑したように鼻を鳴らし、再びタブレット端末に視線を落とした。
……なんつーか、やっぱり嫌われてんのかな、俺。

苦笑すると、唯が訊いてきた。

「どしたの、お兄さん？」

「ああ、いや、気にしないでくれ」

橘ありす。少し前に左さんが言っていた、「常務に先を越された子」だ。……あの子は俺や左さんよりかはむしろ、武内さんに信頼を寄せそうなタイプの子だな。ま、鷺沢さんもいるからフォロワーはしてくるだろうし、俺が気にする事でもないだろう。

「ほら、休憩は充分だろ？ そろそろレッスンに戻った方がいいと思うけどな」

話を切り上げようと言うと、一ノ瀬さんが「えー」と不満を露わにする。……まあ、あの二人に次いで体力がないらしいが、鷺沢さんと橘さんも体力は回復したみたいだし、一ノ瀬さんだけ回復してないなんて事ないだろう。

「……悪いが速水さんに塩見さん、頼めるか？」

「ええ、分かったわ」

「仕方ないかー」

床の上に寝そべった一ノ瀬さんを半ば引き摺るように引つ張り、速水さんと塩見さんは俺から離れる。

「それじゃ、唯も行ってこい」

「うん！ またお話しようね、お兄さん！」

唯はスキップするような足取りでレッスンに向かつていった。

「……それじゃ、三人も。次はボーカルレッスンだったな。しっかりとやって来い」

「ええ、そうするわ、プロデューサーさん」

「ダー。頑張ります」

ダフネとアナスタシアさんはそれぞれ離れていったが、渋谷さんはむすりとした顔で俺を睨み付けていた。

「……渋谷さん？」

睨み付けられている理由がよく分からず、探るように訊いてしまう。

「ほら、凜！ レッスンだから！」

神谷さんが声をかけてやっと、渋谷さんは渋谷々とレッスンに向かつていった。……依然として、俺を睨み付けたまま。

「何なんだよ一体……」

北条さんはにやにやししながら、俺と渋谷さんを交互に見ていた。

陽光が入りにくい事もあり、プロジェクトルームは薄暗かった。それでもカビやホコ

りの臭いがしないのは、前から使っていた城戸がこまめに掃除をしているからだろうか。

「……それでは、島村さん」

武内は目の前に座っている島村に向かい、シンデレラプロジェクトの他のメンバーにしたものと同じ質問を投げかける。

「今後、挑戦してみたい仕事はありますか？」

武内の目の前の島村は、目を泳がせながらも返事をした。

「今後やりたいお仕事ですか？ ステージもCDもラジオ出演もしましたし……」

指を折りながら今までの仕事を振り返った島村は「えっと……」と言葉に詰まる。

「……テレビも……出ましたから、このまま三人で頑張りたいですー」

三人、と言うのは補足するまでもなく、ニュージエネレーションズの事だろう。……

しかし、ニュージエネレーションズの他の二人は、既に他の仕事で手一杯になりつつある。本田は舞台の稽古、渋谷はプロジェクト・クローネで。

「島村さん個人としては、どうでしょうか」

だから武内は、こう言う他なかった。ニュージエネレーションズとして以外の仕事を、「ニュージエネレーションズの島村卯月」ではなく、「アイドルとしての島村卯月」として、どのような仕事をしたいのか。

「え？ わ、私……」

島村は再び、言葉に詰まってしまった。武内は、手元の資料を島村に手渡す。

「あくまで提案なのですが、小日向美穂さんとユニットを組んでみるのはどうでしょうか？」

この話は、小日向側のプロデューサーから提案されたものだった。『舞踏会』までという条件付きではあるが、同じく辛酸を舐めている小日向とユニットを実験的に組んでみたいといったものだ。白羽の矢は、島村に当たった。

「タイミング的にこの企画は、秋のライブ合わせとはいかないのですが……」

今から秋ライブに向けて合わせるには、時間がどうしても足りない。——これは他のメンバーに関しても同じことだった。しかし、秋ライブに間に合わないとしても、『舞踏会』には何とか間に合う。島村に提案されている企画もまた、その一つだった。

島村は資料を眺めながら、複雑そうな表情を浮かべていた。……きつぱりと拒否をする姿勢を見せないという事はつまり、「脈あり」の企画なのだろう。

「わ、私……」

「島村さんも、色々学べる事があるかと。なにか新しい事に挑戦して、ニュージエネレーションズを」

武内がそこまで言った時、島村は跳ね上がるように立ち上がった。

「やってみます！」

その勢いは、彼が想定しているものではなかった。多田や前川に関して言えば木村や安部の名前が出た途端に食いついたし、諸星や双葉はお互いに冷静なままだったが、それは武内の想定からは離れていなかった。——島村に関していえば、話を一通り終えても、渋谷のように逡巡してしまうものだと思っていたのだ。

「プロデューサー、是非、やらせてください！」

「……分かりました。向こうに伝えますので、明後日のレッスンから小日向さんとレッスンを行なってください」

とは言え、これでシンデレラプロジェクトの他のメンバーも新しい事を始められるようになった。武内はまず、その事に安堵のため息をついたのであった。

ボーカルは鷺沢さんと橘さんのポテンシャルが高い。常務もその事を分かっていたのだろう、二人の曲は激しい振付がなさそうな曲だし。……意外とあの人もやるな。

「ダフネ、うかうかしてられねーな？」

俺が茶化すように声を掛けると、彼女は「そうね」と笑いながら返した。

「でも、これからよ？ しっかり見てて頂戴ね？」

「ああ、期待しとくぜ」

ソロ曲でステージに立つともなれば、誤魔化しやフォローが効かない。しつかりとパフォーマンスしてもらいたいものだ。

「城戸プロデューサーは、これからもクロローネのレッスンを見るのですか？」
アナスタシアさんが訊いてくる。

「ああ、時間が許す限りは顔を出そうと思う。……つつつても、数えるぐらいかもしれないが」

正直な所、全体レッスンは秋ライブまでだと後一回か二回ぐらいしか見学出来ないかもな。まあ、少し時間を置いた方が上達した所も分かりやすいかもしれないし、大きな問題にはならない。

「ホント!? お兄さんとまた会える?」

唯がやけに食い付いてくるな。

「もしかしたらな。唯もちゃんとレッスン頑張れよ? 日々の努力が出てくるから」
「うん! 頑張る!」

天真爛漫な笑顔を見せる唯に、俺も微笑む。欲を言えば、俺がいるどうこう関係なしに頑張つて欲しいけど。それでも、モチベーションの一端を担えるならいいか。

「……ふーん」

何故か渋谷さんの視線が痛い。

「渋谷さんも、ちゃんと頑張ってくれよ？ トライアドプリムスは、合わせるにはギリギリな所があるから」

曲の方は問題ないとしても、振付の合わせはまだ万全じゃないはずだ。ボーカルの方もやりつつ、振付の確認も急がなければ秋ライブには間に合わないだろう。

「北条さん、神谷さん。武内さんに代わって言うけど、渋谷さんをよろしく頼む」

北条さんと神谷さんは顔を見合わせると、落胆したようにため息をついて頷いた。

「……分かった。任せてね、進ノ介さん」

「おう、武内さんにも伝えておくよ」

何だか北条さんの返事に違和感があったが、それがどのようなものかはよく分からなかった。

「それじゃ、俺は別の仕事に——つてえ!?!」

扉に向かう最中で、背中に鈍い痛みが走る。……この手の痛みは、彼女以外にないだろう。

「……渋谷さん？ どうかしました？ 俺に何か落ち度が——つたい！ 痛い、痛いって！」

渋谷さんは無表情で、俺の背中を淡々と叩き続ける。

「ちよっ——止め、誰か止めて！ 北条さん!?! 神谷さん!?!」

情けない声になってしまったが、にやにやと笑いながらこちらを見て二人に向かつて助けを求める。

「いやー……。気付かない城戸さんが悪いと言うかなんと言うか」

「奈緒にしては、珍しく意見があつたね」

「二人とも!? 助けて——痛い痛い痛い! 渋谷さんも早く止めてくれ! あつ、待て、

グーパーはなし! グーパーはなしだつて……やめ、やめろお!」

結局、渋谷さんは五分以上も俺の背中を叩いていた。

未だに痛みが残る背中をさすりながら、武内さんの話を聞く。

「そうなんです、皆が『舞踏会』に向けて」

武内さんは背中をさすり続けている俺を訝しむような目で眺めながらも、「ええ」と答えた。

「はい。そちらの方も、特に問題がないようで安心しました」

「はい。むしろ他の皆を引つ張つてくれていている印象でした。トライアドプリムスについてはギリギリになると思いますが、間に合わない事もないかと」

北条さんや神谷さんの二人もからつきしダメと言う訳では無いので、人前で見せられるぐらいにはなるだろう。

「しかし、急ですよね常務も。秋ライブに初ステージとは」

俺がそう切り出すと、武内さんは渋い顔になった。

「はい。——余計なプレッシャーがかからなければいいのですが」

E. G. G. S やラブリイカ、ニュージエネレーションズみたいにもう少し小さいところでデビューライブを行なうとかすればいいものを。——だが、常務には常務で、彼女なりの考えがあるのだろう。

「申し訳ありませんが、本番の時にも彼女達を気遣つてくれませんか？」

武内さんがそう訊いてきた。……E. G. G. S も気にはなるのだが、確かにクローネも気にはなる。

「分かりました。自分も気がかりでしたから」

薄暗い二人きりのプロジェクトルームで、武内さんは小さくこくりと頷いた。